

連載専門誌

対人援助学マガジン



Vol. 4 No. 3

第15号

December 2013

対人援助学会

NO. 1 5 M O K U J I

目次		002
執筆者@短信	執筆者全員	003-011
知的障害者の労働現場 015	千葉 晃央	012-015
臨床社会学の方法 (3)	中村 正	016-028
ケアマネだからできること	木村 晃子	029-032
街場の就活論 vol.15 「まだ、大丈夫」	団 遊	033-034
コミュニティを探して (5)	藤 信子	035-037
第15回 誌上ひとりワークショップ	岡田 隆介	038-040
映画の中の子どもたち 15 「もうひとりの息子」	川崎 二三彦	041-042
子どもと家族と学校と(開業カウンセラー日誌) 15	中島 弘美	043-046
蠅螂の斧 part 2 様々なシステムと私 第2回	団 士郎	047-054
学校臨床の新展開 15	浦田 雅夫	055-057
学びの森の住人たち (10)	北村 真也	058-062
幼稚園の現場から XV	鶴谷 圭一	063-069
福祉系対人援助職養成の現場から 15	西川 友理	070-074
先人と知恵から (3)	河岸 由里子	075-080
不妊治療現場の過去・現在・未来 最終章	荒木 晃子	081-096
対人援助学&心理学の縦横無尽 12	サトウ タツヤ	097-106
ドラマセラピーの手法(5)	尾上 明代	107-111
日本のジェノグラム (2)	早樫 一男	112-114
きもちは言葉をさがしている 第14話	水野 スウ	115-120
やくしまに暮らして 第十四章	大野 睦	121-124
お寺の社会性(十三) ~生臭坊主のつぶやき~	竹中 尚文	125-130
これからの男性援助を考える 第十三回	松本 健輔	131-135
ノーサイド 第11回 禍害と被害を超えた論理の構築	中村 周平	136-139
それでも「遍照金剛言う」ことにします(10)	三野 宏治	140-152
男は痛い! 第9回 「HK/変態仮面」	國友 万裕	153-160
援助職のリカバリー (8)	袴田 洋子	161-163
周旋家日記 (8)	乾 明紀	164-168
トランスジェンダーをいきる(7)	牛若 孝治	169-174
役場の対人援助論(7)	岡崎 正明	175-178
新版K式発達検査をめぐる(その6)	大谷 多加志	179-181
十代の母という生き方⑤	大川 聡子	182-192
電腦援助(5)	浅田 英輔	193-200
日曜寺子屋家族塾の取り組み 4	古川 秀明	201-208
Journey to my PhD @ York in イギリス/Vol 3	浅野 貴博	209-213
養育里親~もうひとつの家族~ 3	坂口 伊都	214-217
新連載 周辺からの記憶 1	村本 邦子	218-225
誌上再現企画 ワークショップ「対人援助マガジンを考える」	第五回大会企画	226-239
印刷製本版の作り方	団 士郎	240-241
編集後記	編集長&編集員	242-243



村本邦子 再登場新連載

砂時計がひっくり返されて残る時間を数えるようになった今、意識的に余分なものをそぎ落とし、もっと静かに落ち着いて暮らしたいと密かに思っている。そのために、これから少しずついろいろなものを手放していかなければならない。最後にはすっかり身軽になって飛び立たなければならぬのだから。

そんななかで、十年続けようと決めているのがこのプロジェクト。どんなところに行きつくのかはまだわからないけど、とにかく記録を残していきたい。新連載のスタートです。

國友 万裕

いよいよ来年の2月で、50代の大台に乗ります。次の援助マガジンは3月発行のはずなので、今回は40代最後の原稿になります。

それにしても40代は速く過ぎました。これは、皆、言っていることだけど、年をとるごとに月日のたつのは速く感じるんですね。ぼくの人生は、10代で心が壊れ、20代は引きこもりながらもどうにか頑張り、30代で多少は仕事や友人ができるようになり、40代は様々なよい人間関係に恵まれ、仕事にも恵まれ、著書も出版しました。尻上りの人生です。この調子で行けば、50代はもっといいはずで、楽しみでもあり

ます。

50近くにもなると、自分が生まれてきた理由がなんとなくわかってきます。ぼくは10代のときに不登校という重い十字架を背負われ、その後の人生を壊れた心の回復のために生きているようなもの。つらいことや悲しいことだらけでしたが、回復の途中で、様々なことを勉強することができたことも事実です。今にして思えば、不登校は神様がぼくに与えた宿題だったんですね。

その宿題が完全に終わったのか。まだ自信がありません。しかし、完全に終わってしまえば、ぼくが生きている意味はなくなってしまうのかもしれないですね。

今年は、若い男の友人と海に行き、川に行き、スポッチャに行き、温泉に行き、食事に行き、少年時代にできなかったことをたくさん取り戻しました。とはいうものの、女性とはまだまだ上手く付き合えない。でも、その理由はつかめてきたんです。結局、ぼくが女性を理解しようとするのが間違いなんですよ。最初から、わかり合えない関係なんだと割り切って、つきあうこと。そのほうが女性との付き合いを改善する早道のようにです。

さあ、50代は、女性とも実りある付き合いができるようになるかなあー。全ては神様におかませです。

岡田隆介

広島市内の三つの療育センターが合同で、毎年12月に「こどもの臨床研究会」を行っている(言い出しっぺは自分らしいが記憶にない)。置き土産～遺言～捨て台詞、どれになるかわからないけど演題を出したら二枚もくれた。そこで、①わたしの思うヒューマン・スペクトラム、②私の辿り着いたヒューマンサービスという2題断をやることにした。

それにしても、40年の集大成が凝りに凝った数枚のパワーポイント原稿におさまるなんて…。

北村真也 私塾「アウラ学びの森」

(<http://auranomori.com>)、フリースクール「アウラ学びの森 知誠館」

(<http://tiseikan.com>) 代表。

アウラの庭に「小さな森を作ろう」という森プロジェクトが立ち上がり、先月からその工事が具体的にスタートしました。不登校、引きこもりの経験を持つ若者たちと、これまでこだわりを持って生きてきた大人たちが、出会い、語り合う場、そのしつらえとしての小さな森は、年明けにお目見えすることになります。

古川秀明

対人援助マガジンの原稿を書きながら、新しい発見や、今までなんとなくもやもやしてまとまらなかった考えがすっきりとわかるようになってきました。

講演では短時間にいっぱい詰め込んで話してしまうので、どうしても消化不良になる時もあるのですが、文章にまとめると思う存分書けます。

しかもどんな書き方をしても、どんな内容でも編集長からダメ出しが出ることはありません。

読む人にとっても、書く者にとっても意味深い内容で、編集して下さっている方々のご苦勞にただ感謝です。

団士郎

年中だと言われれば、そうではないとも言いにくいですが、それにしても慌ただしい三ヶ月だった。とにかく出かけるところが多かった。

初めての所は少なく、多くは何度も出向いている場所だ。被災地の東北4県ツアーも三年目を迎えて、同じ所に行けると、いろんな出来事が重なってゆくのが良い。

初めての場所は戸惑いながらも、好奇心が満たされる。初お目見えの宮古市では、地元FM局で話したり、日本三景松島の復興ぶりは興味深かった。元の勤務地の近く、天橋立の観光地としてのものどかしさが自分の中でうずく。

それにしても三年近く経った大槌町の何もなさは、目に厳しい。かつて町のあったところはほぼ更地状態で風に吹かれている。一方、周辺高台の狭い土地には、仮設住宅がびっしりと並んでいた

りする。

時と共に新たな事件や災害が起こり、前の出来事は忘れられてゆくさだめを覚悟しながら、それでも「又、来年も来ます」と言うと、嬉しそうにしてくれる人たちに会うと、少しは何か役割が果たせているかと思う。

坂口 伊都

我が家には、小学6年生の娘がいるのですが、先日北海道から娘の友達がやってきました。初めてのご対面です。それまではラインや文通で交流を深めていました。ラインは近代的ですが、文通は昭和っぽいですね。ご対面の前日までは、娘は嬉しいけど不安という面持ちで仲良くなれるかなと言っていました。

空港に迎えに行き、照れくさそうな顔で向き合う2人が微笑ましい。仲良くなれるかなという不安は、すぐに吹き飛んで遊び始めています。私も子どもの時に同じようなことをしていたなあと思えました。小学生にして、北海道に友達がいるってすごいよねと娘と話しています。この2人の御嬢さんが、どんな女性になっていくか楽しみです。子どもは、家庭と学校という狭い世界の中で生きて、時に息苦しさを感じているので、こうして別の場所に友がいるっていいなと感じています。そして、私がおばあちゃんとして接する日がくるのを楽しみに見守っていきたいと思っています。

浅野 貴博

日本への一時帰国中、しばらく英語の環境から離れていたため、イギリスのヨークに戻ってきてから、英語の感覚が戻るのに思ったよりも時間がかかりました。ちょっとしたことでも英語で言おうと思っても、言葉が出てくるのに時間がかかったり、メールのやり取りにも時間がかかったりと、やはり言葉は日常的に使っていないと感覚や話すための筋肉が鈍るということを実感しました。一時帰国中に何度も言われましたが、英語圏の国に何年か住んでいれば、自然に英語が身に付いて'ペラペラ'になる(?)と思われがちですが、第二言語を習得するのはそんなに簡単なこ

とではありません。私は、今も自身の英語力不足を日常の様々な場面で感じており、常にimproveの必要性を痛感しています。英語の習得については、このレベルまできたから終わりというようなゴールがある'勉強'ではなく、長い旅のようなものではないかと理解しています。今日において英語は、いい悪いは別にして、英語を母国語としない人同士での communication の際の共通言語 (lingua franca) になっています。英語というツールを使って、一次・二次情報を含む多種多様な情報に間接的ではなく、直接接することで、日本語を通して見ていたそれまでの景色が、少しずつ違って見えてくるようになると思います。英語に関しては、自分自身の苦労や子ども達の習得の様子などから色々と思うことがあるので、今後の連載の中で取り上げる予定です。

尾籠な話して恐縮ですが、イギリスに戻ってきて最も恋しかった日本のものは、一時帰国中に欠かさず見ていた'八重の桜'でも、はたまた日本食でもなく、ウォシュレットでした。海外での生活を楽しむ上で大事だと思うことのひとつは、日本と比べて足りないものをリストアップしないことなのですが、事ウォシュレットに関しては例外としたいです。彼の貴公子ベッカムも、日韓W杯の際にウォシュレットを複数購入したとかいう話もありますが、日本のトイレ文化とでも言うべき、細やかな心配りの数々はなかなか真似できるものではないと思います。イギリスに暮らしていると、もう一手間、二手間かければもっと便利になるのにと思うことが多々あるのですが、ウォシュレットは考え得る限りの手間をかけた、まさに日本の'お・も・て・な・し'文化の代表だと思っています。

河岸 由里子

長年生きていると色々なことに出会う。今回は「これは犯罪では？」と思うことに巻き込まれそうになった。Facebook や Twitter など、SNS は怖いと感じた事件(?)である。

私は某 SNS に参加しているが、そこは様々な企業人や自営業などで頑張ってい

る人たちのネットワークである。アメリカの友人達とのネットワークとして繋がったのであるが、そのネットを通じて、イギリスの男性からメールが届いた。その人は Ph.D. であり、弁理士もされていて、ネットにホームページもあり、自分の身分証明書とパスポートのコピーも添付してきた。信用させるための物であろう。身分証明書等が本物かどうか私にはわからないが、とにかくメールで言ってきた内容と言うのが以下の通り。

私が Kawagishi という名前であることから、Kawagishi という苗字の男性の親戚ではないかと聞いてきたのが始まりで、「その男性はずっとイギリスで石油の事業をしており、彼の Funds を管理していたのだが、彼が東北に帰省中に、東日本大震災で行方不明になってしまった。家族を探しているが大使館でも見つけられないと言われた。このままだと彼の Funds (500 万ドル) が銀行に没収されてしまう。出来れば 300 万ドルを東日本大震災に寄付し、残りを手数料として自分とあなたで折半しようと思う。同じ姓なので、銀行に申し出れば Funds を受け取ることが可能だろう」と言うのだ。私としては、同じ苗字と言っても河岸と川岸でも違う、私の親戚にそのような名前の人はいないし、東北にも親戚はいない。他人様の財産を受け取るのは犯罪だと伝え、以来連絡を取ってはいない。もしかしたら日本にいる他の Kawagishi という人がこの話にのった可能性は否めない。この話を告発すべきなのかも知れないが、銀行名も何もわからないし、事実かどうかもわからないのでそのままになっている。何とも怖い話だった。くわばらくわばら。

臨床心理士 北海道

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

岡崎 正明

10月に家族旅行で沖縄へ行った。「子どもたちのために」・・・などというのは大人の言い訳で、数年経ったら覚えていないような年頃である。完全にこちらが行きたくての計画だ。

じつは当初そんなに乗り気ではなかった

のだが、私の背中を押したのが、以前友人に勧められて作った「宝地図」だった。やりたいことやいろんな夢を描いて飾るだけで、実現する。「そんなアホな」と思いながらも「2013年 家族で沖縄旅行へ」と書いたことが、あれよあれよと現実に。視覚支援ってすごい。明確なビジョンをイメージするって大事。そして我ながら、単純な自分に感心した（「宝地図」に興味がある方はインターネットで調べたらすぐ出てくる。よかったらお試しあれ）。

頭から晴れると決めつけた（これはP循環思考）おかげで、頻発する台風の際を付いた素晴らしい旅に。水族館も沖縄そばもよかったが、1番はきれいな海と広い空。それが見られただけで「来て良かった」と心から思えた。

ドライブの途中、初めて生で飛行するオスプレイを見て、有名人にあったようにどこかワクワクしている自分に気付く。他人事だよなあ。情けない。これが毎日近所でブンブンいってると真剣に想像してみる。どんな理屈を立てても、やはりよしとする気持ちにはなれない。交付金も就職口も大事だろうが、あの海と空は人間がどうがんばったって作れない。

今度は子ども達がもう少し大きくなってから来ようと思った。そのときは、平和記念公園に連れていこう。きっと平和をイメージする手助けをしてくれるだろうから。

三野 宏治

最近の日記（FBより 一部修正）

〇月〇日

昨日は教え子の結婚披露宴だった。良い披露宴だった。新郎新婦が喜んで幸せそうであったのは当然なんだが、それ以上に親御さんへの感謝が感じられる宴だった。披露宴で初めて泣いた。

〇月×日

深夜に洗濯をしている。息子の寝小便の後始末。彼は全く起きる気配も無く大物ぶりをいかに発揮している。私はこれからコインランドリーへ小走り気味にむかい、小物ぶりをいかに発揮する予定。

〇月△日

歯の詰め物が取れた。ここ半年で3回目

だ。食べ物ではミルクキーが天敵だったし、今もそうだろう。ただ、半年前はカールを食べている時にとれたし、前は麻婆豆腐をだっただ。思わぬ伏兵にしてやられた。しかし今日は話をしていたら取れた。敵は食品だけではないようだが、ここに至っては気を付けようもないのだった。

〇月〇日

息子が幼稚園で借りてきた本『しぜんーひつじー』。タイトルに迷いが無い。言い切っている。すごいと思う。憧れる。サウイフモノニ ワタシハナリタイ。

〇月▽日

息子たちの七五三用シャツを買った。大人のシャツ以上の値段で驚いたが、普段はワゴンセール品とかおさがりばかりなのでたまには「よそいき」の服も良いと思っている。最近「よそいき」などというのだろうか。

私が子供のころは「よそいき」の服が確かにあり、親戚のおばちゃんの家に行く時など「よそいき」が登場した。そして普段「よそいき」を着ようものなら「それはよそいきや！」と叱られた。「友達の家もよそやる。」などと口ごたえすると、間髪入れずに「それは近所や！」とやられる。圧倒的な言い様に納得していたし、今でもそう思っている。人が納得したりしなかったりするの、理屈ではないことを知った少年期の出来事だ。

×月〇日

『ダーティハリー』をみている。しかも吹き替えで。この映画とジャッキー・チェンのそれと『Mr.Boo!』は吹き替えでみたい。ルパン三世は栗田貫一にかわった。でも栗田貫一には「泣けるぜ」という台詞は言えないだろうし、似合いもしない。

こんな感じです。ただ「気楽なことばかりではない」ことを読み取っていただければ望外の幸せです。

鶴谷 圭一

子ども・子育て支援新制度のことを取り上げた。書き始めて幅広すぎるテーマにしてしまったと後悔した。幼稚園サイドからの言い分は山ほどあるし、保育園サイドからの言い分もある。では利用者の立場

で切り口を選んでみたが、書いているうちに、この制度は良いんじゃないかという気さえ起こってきて、いやいや、いかんいかん、最後は子育てとは親とは、という思い入れの強い文章になってしまった。この制度が立ち上がったときから、幼稚園団体が自分たちの利益を守るために異議を申し立てているような印象を持たれがちだが、子どもの立場を代弁しているのは我々だという自負もあり、そのことを訴えたかったのだ。

国もあつちの立場、こつちの立場を立てながらの調整は大変だと思うが、市の行政マンの言うことには、「地方主権と言っても、国はずるいんですよ、こうしろとは言わないけどこれに沿うように、という言い方で縛ってくるんですから、結局はそうなる」というようなことを言っていた。

「結局はそうなる」がイイ結果を招くように頑張ってもらいたい。

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール: osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター: haramachikinder

千葉 晃央

私がしている文章の書き方のミニ連載4回目です。

大きな六手順

- ①簡条書きでいいたいことをかく
- ②丁寧に膨らませて文章にする
- ③プリントアウトをして、前後の入れ替えを考える
- ④接続詞等、つながるように加筆
- ⑤「です」「ます」、「である」の判断
- ⑥音読で確認
- ⑦黙読でも確認

今回は④接続詞等、つながるように加筆③で前後入れ替えた印刷物を見ながら、ワード上でその順序で文章を入れ替えま

す。それを読み返しながら、文章の加筆、流れを修正します。接続詞を何でつなぐかということが具体的にすることの一つです。ここで大方の文字数、ページ数が明らかになってきます。（続く）

大川 聡子

子どもの影響で、テレビアニメに詳しくなりました。その中で気が付いたのが、多様な家族の描かれ方です。子どもたちがよく見ている「フィニアスとファーブ」では、フィニアスとファーブは義理の兄弟です。悪役のデューフェンシュマーツ博士は、後に市長となる弟にあからさまに差をつけられて育てられ、それが悪役となるきっかけのように描かれています。またデューフェンシュマーツ博士には離婚歴があり、妻が16歳の一人娘ヴァネッサを養育しており、月に一度面会している様子も描かれます。その他にも、妻が有能なセールスマン、夫が専業主夫(おかしなガムボール)や、母が海外を飛びまわる音楽家で、ほぼ父子家庭の主人公(スイートブリキユア)など、アニメの中にもさまざまな家族が登場します。4歳から急に、赤やピンクを「女の子の色だから」と身に着けなくなり、ブリキユアを見なくなった長男に、多様な家族のあり方をこうした形で見せるのもいいのかな、と思っています。

大谷 多加志

連載のテーマにしている「K 式発達検査」について、分担執筆した本が11月に発行されました。このマガジンに書き続けたものを下敷きに、出版の意図や読者層を考慮しながら整えていきました。率直に言って、マガジンの連載がなければ書き上げられなかっただろうと思います。継続していくことが与えてくれる力を実感しています。

また、校正作業の中で多くの方に原稿を見て頂き、コメントをもらうことができたのも、普段にはない貴重な機会でした。いつも様々なチャンスを与えてくれる多くの方々に、感謝です！

竹中 尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職。

もうすぐ大晦日だ。除夜の鐘だ。ふだんは、寺の梵鐘はノンビリとぶら下がっている。ノンビリと言うよりだらしなくぶら下がっている。「わしゃ、働かんもんね」という顔をしている。だから、鐘は鳴るのかと軽い疑念を持って眺める。お寺の鐘は鳴るの

か試してみたいが、勝手に入って打ち鳴らすなどできそうにもない。ところが大晦日は違う。梵鐘の出番だ。寺に行くと、鐘を打ち鳴らすこともできそうだ。

■そんな風に思うのかどうか分からないが、除夜の鐘を突きに人がやって来る。専光寺でも、深夜に200人はやって来る。除夜の鐘は百八と決まっている。到底足りない。煩惱の数だと言うなら少なすぎる。私は除夜の鐘の数を数えない。

■大晦日の夜には、ロウソクを境内に点すことにした。最初は暗い境内で足下の用心のために準備した。どうせならと、500個のロウソクを並べた。山門のところで、携帯を出して写真を撮っている人が増えた。私たちは気をよくして、ロウソク1000個にしようか、と言っている。大晦日だ、年越しだ、近所の寺を覗いてみよう、と思ってもらえると嬉しい。それぞれの寺で、その様子は異なっているのがいい。甘酒を出す寺がある。日本酒とおでんを用意している寺もある。それぞれの、小さな地域の風物詩である。それが暮らした。

川崎 二三彦

わかりやすさの問題

「むずかしいことをやさしく、
やさしいことをふかく、
ふかいことをおもしろく、
おもしろいことをまじめに、
まじめなことをゆかいに、
そしてゆかいなことはあくまでゆかいに」
というのは、今ではかなり有名になった井上ひさしの言葉だが、我が身を顧みると、どうやら1行目ならば、少しぐらいは近づいたかなと思っていたところ……。

*

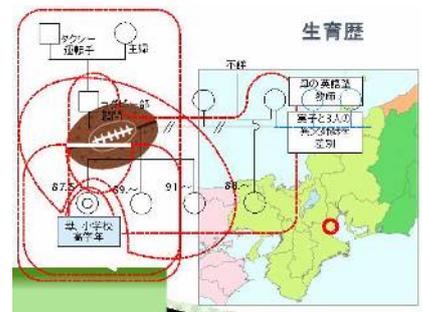
研修講師を依頼されることが多くなつて、軽蔑していたパワーポイントを使うようになったのはいつ頃のことだろうか。何しろ私の勤務する子どもの虹情報研修センターは、ほぼ隔週で3日間とか4日間の研修を企画・運営しているので、たくさんの講師がやって来る。今ではそんな講師の大半がパワーポイントを使うのだが、ある日のことだ。画面を見ていたら、縦に引かれた1本の線が、右から左へずうっと移動する

ではないか。いやはや驚いたのなんの。

“こんなことができるんや”

と思った瞬間から、俄然パワーポイントに興味が生じた。そのうち、サイズを決めることで正確な円や正方形を書き表せるようになり、アニメーションを活用して、まるでその場で線を引くようにしてジェノグラムを描きあげする方法も覚えてしまった。写真やイラストを使用することを思いついて多用、グラフだって自由自在、画面上にグラフの各要素を少しずつ表示していくことも朝飯前だ。消えたり現れたりもお茶の子さいさいで、画面はめまぐるしく動いてくれる。

こうなると、1枚のスライドの中に写真や文字、グラフなどが重なり合い、込み入ってしまうので、単純にスライドを印刷しても一見すると何のことかわからず、参加者に配付するわけにもいかない。そもそも私は世阿弥の「風姿花伝」に「秘すれば花」という一節を見つけてから、話す内容は、直前までなるべく伏せておこうと考えているので、研修参加者にあらかじめ資料なんか配りたくないのである。



そこで最近、レジメ(事前配布資料)に「使用するスライドは、都合により資料として配付いたしません」と断りを入れているのだが、中には是非ともスライド資料がほしいと希望する者も出てくる。基本的には応じていないものの、事情があつて配らざるを得ないことがあるので、その場合は「終了後配付資料」という形にしてスライドを配付用に修正、加筆等したものを用意するという大盤振る舞い。となると1回の講座で、スライド完成までにおそらく何百もの動作を一つずつ点検、確認しながら設定するという根気のいる作業に加え、「レジメ」「スライド(パワーポイント)」「終了後配付資料」と都合3種類の資料を作成すること

になり、準備作業には途方もない時間と労力をつき込むことになる。

*

それにしても、今年の秋はかなり追われた。頼まれるままにあれこれ引き受けていてふと手帳を見たら、9月上旬から年末まで、毎週どこかで必ずそんな仕事が入っているのである。

「ウウム、今年は結構忙しい。あちこち出かけねばならんぞ」

などと呟いていたら、

「あっ、私も付いて行く！」

という呑気な声があるではないか。

振り向くと、……まあ、誰であるかはお察しの通り。いくつかの候補の中で、島根大学医学部看護学科からの依頼が都合よく金曜日だったので、その後にオプションツアーを計画した。

のだが、その前々週、新潟での全国児相研セミナーからの帰途の新幹線のことだ。窓際に座ったおかげで風邪を引いてしまったのである。なおかつ、売薬に頼ったのが悪かったのか全然回復せず、次週の厚生労働省主催児童虐待防止推進月間シンポジウム(大分・別府)では、前後不覚の中で何とか役目を終えたものの、体力と気力は使い果たしてしまった。

幸い、島根大学で話している最中に、2週間近く悩まされた風邪はようやく終焉したが、遅れを取り戻す時間は「島根観光」で奪われ、後悔の旅となったのである。



ただし、せっかく島根までやって来たのであれば、京都までは伯備線岡山経由で帰ればよいのだから、途中には是非とも立ち寄りたところがある。松江から特急

やくもで新見駅に下車し、ちょうど一時間後の特急に間に合うよう、新見市本郷小学校まで足を伸ばすことにした。岡山県阿哲郡哲多町(現在の新見市)は、彼の山室軍平の生地なのである。

「あのう、山室軍平の……」

「ええっ? 個人名を言われても住所か何か教えてもらわないと……」

行き先を告げようとしたら、山室軍平なんて全く聞いたこともないという運転手がびっくり仰天した。慌てて哲多町の本郷小学校だと伝えて連れて行ってもらった。さて記念碑は、紅葉の下、日曜で生徒はおろか誰ひとりいない校庭の隅に、ひっそりと佇んでいたのであった。



というわけなので、もしかして偶然私のパワポに接した方が、スライドの中に山室軍平の胸像を発見したら、それはこのときの後悔旅行で撮影したものだと思って下さい。

*

それはさておき、研修会が終わると、ほとんどの場合、主催者から「わかりやすかったですね」と声をかけられる。苦心惨憺のパワポに感心してもらおうと、密かにほくそ笑んでしまうのだが、そんなことが続く中で、はたと気づいたことがある。

これって、わかりやすさにこだわる強迫的準備のなせるわざなのであって、実は「わかりきったことを、目先を変えてわかりやすく」説明しているだけではないのか、と。何を隠そう、パワポに凝る人がかつて軽蔑していたのは、まさにこの点だったのだ。

しかも、さらに思いがけない問題が発生した。あるとき、「スライドなんて使わなくていいですよ」と言われて了解したことがあった。会場に到着して「なるほど」と思っ

たのは、ステージのバックがすばらしく、そこに立つと、いかにも映えるのである。

「これはよいな」

と感心しながら喋ってみて狼狽した。すごく拙い喋りしかできないのである。おそらくは、日頃パワポに頼って話すことに慣れてしまったせいだろう、その分、素で喋る力が衰えている。嗚呼……。

(2013/11/28 記)

荒木 晃子

全15編という、長い連載にひとくぎりをつけ、実際に刊行した著書にはこの後も章が続くが、対マガの連載は完結とした。これまでご愛読いただいたみなさまありがとうございました。

とはいえ、不妊をテーマに研鑽を積む筆者の活動に終わりはまだこない。生殖医療技術が日々進化を続け、不妊問題の社会解決にますます課題が増え続けているからである。卵子の凍結、出生前診断、精子提供、卵子提供、代理出産、生殖医療の国内法整備などなど。これまで、不妊に関心を寄せなかった人々にも、日常見聞きする新聞紙面やマスコミから、生殖医療に関するこのような専門用語? が飛び込んでくる時代がやってきた。さらに、iPS細胞からは、すでにマウスの精子が作成されたという報道もある。実現してはいない(と思う)が、人工的にヒトの精子や卵子をつくることができる時代がやってきたのだ。さあ、人類よ、君たちは何をどう選択するのだ!? と、何処かから誰かの声が聞こえてきそうである。以上の理由(= 苦しい言い訳)から、次回より、新たな連載をもくろむことにした。まるで追い立てられるような以下の心境も、その動機の一つにある。

現在私は、2013年1月設立したNPO法人OD-NET(特定非営利活動法人 卵子提供登録支援団体)の理事・マッチング委員長をつとめている。昨年依頼を受けた際には悩み、相当考え抜いた結果、大役を引き受ける覚悟をした。2013年現在、卵子提供に関する国内法は、どこを探しても「良い」とも「悪い」との記述はない。ま

だ国内制度として確立されていないのである。我ながら、大胆な挑戦だったと、いまだに思う。

まさかの事態に備え、(ご迷惑をかけぬよう)ある職場を辞職し、これまでお世話になった諸先生方へその決断を伝える折には、「これで見切りをつけられるかもしれない」と、まるで清水の舞台から飛び降りるような覚悟をした。その時は、片道燃料を積み飛び立つ神風特攻隊のつもりだったのかもしれない。とにかく、家族以外のすべてを失う覚悟だった。

あれから一年。世間の逆風にさらされつつ、いまも前進する自分がある。次の連載では、そんなこんなを綴ってみたい。

尾上 明代

これを書いている今日(11月24日)、日本心理劇学会の大会があり、シンポジストとしてお話をして来ました。この学会には、ドラマ表現や役を演じることを通してグループへの働きかけをする様々な手法を使う実践家や研究者たちが集まっています。シンポジウムのテーマは、「専門職養成と資格化をめぐる」でした。集団精神療法と芸術(演劇・ドラマ)が交叉する分野として、この19年間、「緩やかな連合体」を基礎にしてきた集団ですが、今回は専門性についての議論が行われました。

この分野での専門性は、個人とグループを同時に扱いながら、身体性のある(心身に直接働きかける)ドラマやロールプレイ等を使って課題に取り組み、変容・回復・解決などに向けて良い結果を生み出す難しい仕事だということにあります。その特質上、参加者への負の影響の回避、内面の開示についての扱い、参加者の心身の安全、確実な終結などが、実践家の基準要件のいくつかとして挙げられ、それらに対処する意識と技法を身につけることは、当然必須です。そのような研修と、個々のメソッドの技術を一定水準で習得した人に資格を付与することができれば、社会的にも有意義でしょう。社会では、今までの枠組と構造を超えた支援が必要な人たち・状況がさまざまに発生しており、それらの多くが、個人と集団の関係、また

集団の変化・変容を必要としています。その対処・援助に効果的なのはホリスティックなアプローチであり、このような今こそ、芸術療法と集団精神療法双方の特徴を合わせ持つメソッドの出番だと思っています。そのために実践の信頼性を自他ともに引き上げること、これが専門性のポイントです。

ただ、そもそも資格を設置することが必要なのか、何のため、誰のために作るのか、そして、学会員が実践しているいろいろな手法を一つにまとめた「資格」はできるのか、などなど議論することは沢山あります。今日はこの問題をテーブルに載せて、さまざまなディスカッションをスタートさせたこと自体に意義があったと思います。

専門性・資格と聞いて真っ先に思い浮かべる職業の一つが医者です。偽物の医者が村人たちを助ける「ディアドクター」という映画を思い出しました。専門性も資格も、提供する側と受容する側との相互関係であることは当然であり、その意義や問題点など、しっかり深く考え議論していくことが重要です！

木村 晃子

去る11月9日10日に立命館大学で行われた対人援助学会の年次大会に参加しました。

本マガジンを執筆している方、読者の方との出会いの場もなった、「対人援助学マガジンを考える」ワークショップを担当し、そのまとめ作業をようやく終えました。改めて編集作業の面白さを発見しました。

思い返すと、記者になりたい、先生になりたい、作家になりたい、役者になりたい、料理人になりたい…子どもの頃に描いていた夢はたくさんありました。今は、プロではないけれど、毎日の生活に、それぞれ夢みていたような仕事を与えられています。本編では、初めての大学での授業について書いています。こちらは「先生」業です。

毎日をおもしろおかしく感じられるようになってきました。

北海道 当別町 管段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

藤 信子

コミュニティを作る、変えるなど考えているうちに、ぜひ変えてみたいところを思いついた、国会である。現在「特定秘密保護法案」に対する反対、危惧が多くてもそれが反映されていない、という不安が強くなる。国会議員は国民の代表として選ばれているのだから、意にも介さないと感ずるのはちょっとおかしいような気がする。私はあの国会議事堂なる建物が問題ではないかと持っている。入ったことがないからよくわからないけれど、TV で見る限りとても重厚なインテリアと家具などに囲まれているみたい。そういいところで議論していると、困っている国民のことなど考えられなくなるのではないだろうか、と心配している。国会の建物、インテリアなどそろそろ変えてもいいんじゃないだろうか、とぼんやり考えるこの頃である。

水野 スウ

14号の短信中でちょっとだけ予告編をだしていた、憲法13条のすばらしさを簡潔にひとに伝えるための私なりの手だて。それが、小さな読みものつき歌のCD、というかたちになって、11月のはじめにできあがってきました。13条をもとにつくった歌「ほかの誰とも」に、歌をつくろうと思ったわけや、13条をはじめ、9条、96条、12条、97条についてもふれた文章を添えています。

淡いピンク色のCDジャケットの、右ポケットには歌が、左ポケットには14ページの読みものがはいっています。真っ先に手にした人が、「憲法がこんなに優しくパッケージされたのって、これまで無かった。このCDブックは、憲法に馴染みの無かったひとに、憲法を我が身に引き寄せて考えるきっかけになると思う」と。

こんな感想が、私には一番うれしいです。だけでも、ああ、これをつくろうと思っていた夏からたった3ヶ月の間に、ものすごいスピードでもって、憲法の本質が大きく変えられようとしている。今が今、国会で審議されている特定秘密保護法案。何が秘密か、それこそが秘密、というあやういこ

の法案が通れば、私たちが知るべき大事な情報は、権力につごうよく隠されてしまう。これって、憲法の主権在民を根っこからひっくり返すようなものではないかと怖れます。

ふりかえってみれば、私たちの多くにとって憲法がこれまで身近でなかったことが、今のこういう事態を招いているのかもしれない。私たちの一人一人が、憲法を語る自分の言葉を持っていたなら、少なくとも今みたいな、憲法と法律の下克上状態は起きてなかったのじゃないか、と思うのです。

私自身、やっと憲法を語る、私なりの言葉を見つけつつあって、その言葉の一つが、「ほかの誰とも」の歌でもあるのでしょうか。今回の短信をよんで、もしも興味を持たれたら、どうぞ、sue-miz@nifty.comの私までご連絡ください。読みものつき CD、一枚 300 円＋送料 80 円でお届けしています。

自著紹介

『紅茶なきもちへコミュニケーションを巡る物語』著:水野スウ 発行:mai works 四六版 200P ¥1,200(税込)

一般書店の取り扱いはありません。送料一冊160円。お問い合わせはこちらまで。
sue-miz@nifty.com

早樫 一男

前回(第14号)の短信では、「海外旅行に行く予定です」としていたところですが、9月下旬、無事、3週間余りの日程を終え帰国しました。

大きな体調の変化や崩れがなく過ごせたことは驚きであり、ありがたいことだと思っています。食べ物については、嫌いなものが結構ある(多くは食べず嫌いですが)ので、どうなるかと思っていましたが、幸いなことに、食べ物で困るということは殆どありませんでした。アルコールならなんでもOKというのが、良かったのかもしれない。

ロンドンで出会った人とは、会話の中で登場した家族を「ジェノグラム」に書くことで、ずいぶん話題が広がったという経験をしました。ジェノグラムはどこでも使えると

いうのが改めての実感です。「genealogy」(系譜学 or 系図学)という話題も広がりました。

ところで、パリには約2週間滞在しました。パリを始め、訪れた国が BS 放送などで放映されたら、まず録画。そして、時間があるときに、見直しながら海外旅行を思い出しているというのが密かなマイブームとなっています。

西川 友里

いくつかの学校で福祉系対人援助職養成をしています。

最近、金曜日の夜はテレビの前に張り付いています。

まずは22時55分からNHKでやっている『ドキュメント 72 時間』という番組。

毎週、カメラを1か所においてそこに来る人たちを72時間撮影しインタビューする、というだけの番組です。

カメラを設置する場所は様々です。24時間ファミレス、健康ランド、西成の貸しロッカー屋、鳥取砂丘、普通のコインランドリー、新大久保の青果店、大きなゲームセンター…。

沢山の人の人生のはじっこがちらっと見えます。何気ない、普通に見える人たちが、それぞれオリジナルの人生を歩んでいる、ということを感じます。どれがよい生き方で悪い生き方で珍しい生き方でよくある生き方か、という意見・批判・批評なく、それを見てどう感じるかはこちらに委ねられているのが、この番組の心地よさだと思っています。

で、この番組が終わるのが23時20分。チャンネルをテレビ朝日に変えると、かの有名な「探偵！ナイトスクープ」のオープニングです。この番組は…まあ、皆さん大体ご存知ですね。

うん、やっぱり、普通の人が一番面白いです。

中島 弘美

「理事に選出されましたことをご通知申し上げます」と、対人援助学会から手紙が届きました。「???」です。事情がのみこめないまま、理事会に出席しました。どん

な流れで物事が決まっていくのか、初心者マークをつけての見学？いや参加です。何をすべきかもタモタモしていると、このマガジン編集委員の千葉さんが声をかけて下さり、研究会にかかわることになりました。

これまでの報告ブログに目を通して研究会の過去をざっくりと把握しました。特徴は、会場に行けば誰でも学ぶことができ、参加者同士の交流ができることだと受けとめました。発表者の話を聞くだけで終わらず、援助職のつながりをつくる場にもなっています。

さらに運営についての説明をうかがうと、さまざまな条件のもとで研究会が成り立ってことがわかりました。かなりの部分がボランティアで、皆さん自発的に活動されていることが伝わってきました。

浦田雅夫

障がいのある人たちの芸術活動を広げていこうという動きがあり、芸大にいて福祉にかかわる小職もそのような活動にかかわる機会があります。障がいがある人が描いたからすごいのではなく、障がいがあってもなかって表現力のある人はすごいのです訴える力が。つまり、障がいがある人がみな作家ではないのです。ただ、障がいがあることによって表現や参加する機会を奪われている人たちが大勢いることも事実で、その機会を保障しなければなりません。「エイブルアート近畿 2013 ひと・アートまち京都」を終えて。

坊 隆史

健康の話で盛り上げることができるようになる若者ではなくオジサンだという話を聞いた。思い返すと同年代との会話で「人間ドッグで～」、「コレステロールが～」といった健康会話で盛り上がるが増えている。ライフサイクルは次のステージに移行しつつあるとひしひしと感じた。嬉しくもあり寂しくもあり複雑な気持ちである。

松本 健輔

カウンセリングルーム HummingBird 主宰
<http://www.hummingbird-cr.com>

最近子どもの保育園の父親と初めてのパパ会に参加しました。夕方みんなで子どもを連れて少しお酒を飲んで親睦を深めようという趣旨の会です。初めてのことでどんな風になるか分からなかったが意外と面白い会でした。子どもと遊びながら、子どもの話をして、情報を交換し、そしてお酒を少し飲む。男性の育児参加がないと叫ばれて久しいが、なかなか進展していません。でも、こういう繋がりが育児をする父親に大切なかもとふと考えた会でした。

牛若 孝治

私はメンズファッションに拘っている。特にスーツとネクタイは大好きだ。「目の見えないあなたがどうやって服を選ぶのか?」。こういう質問はよく受ける。その度に私はこう答える。「そりゃあ、触った感覚で、これは俺に似合うかどうかを判断するのさ。もちろん、店員に色彩を見てもらいながら」。どうやら視覚に障碍のない人たちからすれば、私の衣服の選び方が気になるようだ。それも、コーディネート仕方が。10年前、仕事の休みごとに、紳士服売り場に駆け込むようにして、バーゲンセール服をあれこれ買っていたあのこと。「俺にも似合うメンズの服があるんだ」と分かったときのなんととも言えない興奮した気分。今や当たり前のようにメンズの服を買っているのだが、これは決して当たり前ではない。やはり、視覚に障碍のある私とて、自分にどんな服が似合うのかぐらいは分かっているんだぜ。

袴田 洋子

鎧が脱げた気がします。「クライアントに畏怖の念を持つ」も体感できているかもしれません。自分がどんなに出来ない実践者だったのかも、大学院に行って、しっかりわかりました。高い授業料払って行った甲斐がありました。「なんとかなるさ」という意識も持てるようになってきつつあります。私個人が抱える「課題」を「乗り越えたい?」とスーパーバイザーから問われて、「どうでもいい」と即答した時から、何

かが変わり始めました。システム論を体感中かもしれません。

団 遊

www.danasobu.com

僕が代表をつとめるアソブロックは、社員が全員自分で自分の年俵を決めるルールになっています。自分の仕事の値段を自分で決めるということです。会社のミッションは「事業を題材に人材を育成する」とことと定めているのですが、自分の給与を自分で決めることも、育成手段の一環です。その施策が面白いということで、先日取材を受けました。結構話題になっているらしく、よかったです。ご一読ください。

<http://w-kawara.jp/originality/how-much-your-work/>

乾 明紀

今回は、対人援助学会第5回年次大会の企画ワークショップの内容を報告することにしました。経緯は、ワークショップの参加者から「大変面白い内容だった。でも、参加者が少ないのが残念。対人援助にも重要な情報があったので、マガジンで公開したらどうか?」という声があったからです。この声に後押しされ、ワークショップの前半部分(話題提供者2名分の報告)をまとめました。次号では、後半部分(話題提供者1名分の報告とディスカッション)を報告する予定です。

サトウタツヤ

★立命館大学と福島県が協定を結ぶことになりました。大学と県の協定というのは「カテゴリーミスイク」なのではないか?という気もしますが、福島県の情報に関西で発信するために頑張っていきます。

『福島民報』のサイトをご覧ください。

(福島)県と立命館大復興へ連携 年内にも協定を締結

<https://www.minpo.jp/news/detail/2013111412121>

『産経新聞』

<http://photo.sankei.jp.msn.com/highlight/data/2013/11/13/31fukushima/>

12月20日、協定締結の予定です。

★本学会会員の安田裕子さん(衣笠総合研究機構専門研究員)が、日本学術振興会の審査員表彰<特別研究員等審査会専門委員(書面担当)>を受賞しました。

http://www.ritsumei.jp/news/detail_j/topics/12214/year/2013/publish/1

すごいです!!

★時々、趣味は何ですか?と聞かれることがあります。実際、あまりないなあと思うのですが、一つ、替え歌作りは趣味になるかもしれません。

以下は、とある楽曲にあわせると面白いかも、というものです。ただし以下の歌詞(のようなもの自体)は、現在存在する歌とは全く無関係です。

論文投稿したいのに

統計まるで分かってない

何度目かのリジェクトの準備

周りをみれば大勢の学術雑誌あるけれど
質的データ 載せてはくれない

エクセルに打ち込むデータ ぼんやり眺めてたら

知らぬ間に仮説にあわせ 統計ソフト動き出す

止められない 統計検定 カモン波紋鬼門苦悶 検定

有意差無い!

どうする統計検定

仮説はそんな悪くないよ

P P P 有意差よぶには人数増やすこと
どうする統計検定 水準今日より低くしよう。

P P P P P P

データは捨てたもんじゃないよね

あっと驚く有意差がでる

論文どこかで採択出る 予感。

★誠信書房から出ている『TEMで始める質的研究(2009)』『TEMでわかる人生の径路(2012)』、2冊とも増刷となりました。TEMのアイデアを得て、論文などを書き始めたのが、2004年ですから、今年(2013)はちょうど10年目の節目でした。2014年もますます頑張っていきたいと思

います。『ワードマップ TEM』など何冊か出していききたいと思います。

参考:TEMのサイト

<http://www.k2.dion.ne.jp/~kokoro/TEM/watistem.html>

大野 睦

大きな節目を迎えた今年。香港での発表の機会などもあり、様々な視点からその転機を見つめるときとなりました。屋久島では今年、例年より早く初雪が降りました。

ネイチャーガイド 有限会社ネイティブビジョン 代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長 BLOG やくしまに暮らして <http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

中村 周平

私事で大変恐縮ですが、今年8月に祖父と犬が亡くなりました。自身の事故後、介護が中心となってしまった家族の負担を少しでも減らせるよう、大阪の自宅を出てずっと支えてくれていた祖父。小学6年の時に我が家に来て以来、自由奔放な行動で家族に癒やしをくれていた犬。この数年は、祖父と犬と自身、「二人と一匹」という生活を送っていました。不思議な構成でしたが、紛れもなく大切な私の家族でした。

そんな大切な家族が突然いなくなってしまったことに、アタマではわかっていても、気持ちがなかなかついていけないのが正直なところ。祖父と犬が支えてくれた想いと時間を大切に前に進むことが一番の弔いになる…そのような形で今を受け入れていく自分がいます。

浅田 英輔

ただいま11月ですが、青森では初雪がありました。これから雪の季節です。我が家は、都会ではありませんが住宅街の中にあります。隣まで5キロとか、買い物するのに車で30分とかいう意味の田舎に住んでいる人のことを聞くと「引越せばいいのに」などと勝手に思いますが、南国の

人からすると、「そんなに大雪なところに住み続けるのが理解できない」となるでしょう。都会の人達が、2,3センチの降雪で交通マヒなどと聞くと「危機管理が足りん！」などと思いますが、1メートルの積雪がある地に住み続けるほうが危機管理が足りないのかもしれませんが、相談に来る問題行動のある子たちのほめるポイントには「雪かきだけはきっちりやるんですよ」といったものがあつたりもするので侮れない、雪。

脇野千恵

◆色々考えるところがあり、今回の号の原稿が間に合いませんでした。残念…。

私事ですが、ついこの間還暦を迎えました。学校現場では一番年上となり、さて来年4月からどんな働き方をしようか悩む毎日です。

結婚を機に退職し、子育ても楽になったところ臨時講師として復帰しましたが、とうとう再任用の道は開かれず、退職金もなく引退することとなります。たくさん子どもたちと過ごした思い出は、私の唯一の宝物です。

最近、大人になり、家族をつくり、親になっていく教え子と出会う機会が増えました。ちょっと話をすると、昔のなつかしい出来事に花が咲きます。思春期でぐちゃぐちゃだった子ども達は、皆ちゃんとした大人になっていく。そのことが嬉しく、これからは、うまくやっていってほしいなと願うばかりです。

中村 正

離婚・再婚が多い社会では子どもの成長に誰がどんな責任をもつべきなのか、社会はどんな用意をすべきなのかなど悩みは大きい。離婚・再婚の増加は個人主義の拡大というよりは男女というか性というか、対関係をもとめる自由と欲望そのものの結果であるのだろう。高尚な社会制度の話ではない。もっと下世話な欲望の話である。翻弄されるのは子どもである。子どもが欲しいという欲望(不妊治療ニーズ、医療技術開発の欲望、医療市場の原理、養子縁組制度、財産相続や家系継承

などが錯綜する)も含めて、全体として俯瞰してみればアノミー(無規範状態)がすすみ、その後、何らかの整序過程がはじまり、生きにくいルールができあがる。それでもきちんと整理されるべき課題は子どもの権利だという点は無視できないので大学の仕事の合間をぬって11月の半ば、カナダのトロントに調査にでかけた。離婚後の子どもの親との面会や交流の制度が精緻にできているからである。日本でもそろそろ大きな問題となるのだろうし、参考になることは多々あったので、いずれ本マガジンで紹介していきたいと思うが、少しばかりやるせない気持ちにもなった。それらを新しい家族法、ジェンダーの平等、家族支援、心理臨床の話として語り出したとたんに、面会交渉権、共同親権、片親引き離し症候群、愛着障害などとやたら理論的な事項になっていく。しかし実際は、欲望そのものに忠実な性のリアルがあるだけだ。生と性の現実と、社会と人間を語る知識のあいだの「落差」を感じつつ、いったい私は何をしているだろうかと思いつつ、しかしそれでもよりましな生のゆくえを言葉にすることしかできないのかと思いつつ、調査だった。そうはいっても雪が舞い、寒風吹くトロントは美しい街だった。時間をみつけて Art Gallery of ONTARIO (オンタリオ州立現代アート美術館)に出かけた。妖艶な「デビット・ボウイ展」を開催していた。日本の方ですかと声をかけられた。トランスジェンダーあるいはトランスベスタイト(異性装者)あるいはトランスセクシャルとおぼしきこれまた妖艶な日本人だった。この特別展のためにトロントまで来た楽しそうに語ってくれた。大きなポスターの前で一緒に写真をとって欲しいという。彼/彼女もまた欲望に忠実に生きている。人々の欲望にあわせて社会と文化が歩むことの光と影の双方をみながら何かを表現できていけばいいのかと思いつつながらのトロントの街は印象深く残る街のひとつになるのだろう。

1 工程@1円～知的障害者の労働現場

15： 情報の格差

トラブルの多くは情報の格差から

ドンッ！ ドンッ！ …

私の担当している作業場の入り口の目の前に隣の作業場の製品がどんどん置かれていく。(連絡会でいったよなあ、今日は私の担当している業者も出荷で出来上がった製品を廊下に置いたり、部屋から運び出さないといけないのに…) と思いながら、さらに隣の部屋の職員から「いそがしいから、誰か助けてくれへん？」と言われる。「…」ここまで来て、事業所全体での今日の作業の優先順位を職員間で共有できていないことに気がつく。こちらは(言ったのに…)と思う。しかし、このように理解されていないのだから、伝達の不足があったのは事実ということになる。

トラブルの多くは情報の格差から、起こると考えている。福祉を学び、福祉の現場に就職し、そこで一定の期間働く援助職の集団は、共通した傾向を持つ側面も多い。そんななかで、起こる葛藤、意見の相違、食い違い…などのトラブルは「情報量の差」であることも結構多いように思う。同じ情

報を同じだけ持っていれば、方向性はそこまで大きくは変わらないのではないかと感じてきた。今振り返るとなぜもっと細部を確認して話しをしなかったのだろうと後悔する経験も実際に私自身多い。

家族と施設

「ええ！そんなことがあるんですか？」という反応が家から帰って来ることがある。また、「そんな話ばかりきいていたら、わたしが疲れてしまいます…」という反応が家族から返ってくる時もある。

一番よくないのは、何かトラブルがあった時に、これまでも兆候があったことも伝えるとおうちの方が「そんなこと知りませんでした。言ってくれていたらよかったのに！」という反応が起こることである。職員、家族が一定の共通した情報を持ち、ご本人に関する「像」を共有して支援を進めたい。これを実現するために職員にも、事業所にも、家族にも「現実」を扱う覚悟が必要となってくる。介護保険領域でよく言われる「ケアマネジャーが御用聞きになってはいけない」という言葉にも表れてい

る。

私たちのような現場でよく使われているのは連絡ノートである。その日の様子、連絡事項など、家族と職員がノートに交互に記入する。家族によっては、ほとんど書いてこないところもある。また毎日丁寧に書いてくださるところもある。お仕事等が忙しくて、家族がみていない様子が感じられることもある。それら先方の様子を踏まえて、連絡ノートは用いている。とはいえ、ノートに頼り過ぎず、電話、家庭訪問なども組み合わせていくことが当たり前ながら大事であるのは言うまでもない。

先にも述べたように、大事な目的の一つは、利用者に関してご家族と支援者の双方が持つ利用者情報の共有化と言える。学園での様子、家での様子、お互いの情報を交換し、今のご本人の様子、ニーズ、状態、体調…に関する情報を同じように持ちたい。

「保護者とうまくいく方法」原坂一郎（ひかりのくに 2008）という本がある。保育現場向けの本ではあるが参考に読んだ。そこにはこういった連絡ノートに「マイナス面を書くと保護者は気分を害し、トラブルが起こりやすくなる」というのが書いてある。これでは施設での様子のなかで、友達とのいさかい、ご本人がしてしまったいわゆる望ましくないことをどう扱うかというところをどう扱うかが課題になってくる。ご家族によっては望ましくないニュースが続くと疲れてしまうご家族には職員が「望ましくないニュース」を伝えなくなるという場面も時折みられる。重ね重ねになるが、これが一番の情報の格差を引き起こす原因である。

いわゆる望ましくないことが多くおこる

背景には、重大なことが潜んでいる可能性もある。職員の関わり方はどうなのか？利用者集団のなかでの様子はどうなのか？身体的、精神的状態はどうなのか？そしてご本人のニーズに対応できる施設なのか？…そのような現在の生活の根本を揺るがしかねないものが含まれている可能性があるからである。

また、連絡ノートを本人が読むことがあるということも前提としてある。表現方法や扱う内容にはそれも踏まえておかななくてはならない。「なんで、そんなこと書くんや！」と本人が家族に知られたくないことをノートに書かれて、立腹する。そして、そのページを破るようなことも時折みえてきた。そのあたり、電話、面接、家庭訪問などを組み合わせていくことがやはり重要となる。

時には現場の職員や担当の職員ではなく、責任者から伝えた方がよい事案もある。そういった組織全体を生かした職員の役割分担も必要になってくる。



現場とトップ

上司から「きいてないよ！勝手なことしてないか？」という発言も聞くことがあった。

上司が部下に「現場の職員が勝手に行った」というようなセリフはニュースでもよく聞かれる。反対に部下が上司に「上司の判断は間違っている！」という意見を持つことも、どこにでも起こる。こうした意見に基づいた人間関係が蔓延すると、仕事への意欲がそがれることも多い。そうならないためにも、インフォーマルなコミュニケーションも行動様式に持っておくとよい。何気ない会話にも入れるのである。「全然関係ないかもしれませんが、こんなことありました…」のような話である。

無論、フォーマルなコミュニケーションにおいて、当然現場スタッフと上司との情報の共有は常に行われていなくてはならない。具体的には業務開始時、終了時の連絡会、報告会、引き継ぎで行われる。…ただこの時点でそういうレベルのことが行われていない事業所にも出会ったことがある。まずはそこから！と動いたことも私自身にもある。

職員と職員

「知らなかった」「いや、言ったよね」のやり取りもある。偏った情報、一部の情報で動くことが一番の行き違いのもとと言える。とはいえ、組織のなかに役割はある。

肩書や役割担当による情報の格差はある。それ以外はできる限りなくすことが重要と言える。

自分が培ったものを他者に伝えないタイプの仕事の仕方の人もある。これが一番厄介である。その培ったものを自分が失えば、自分の存在価値がない、実績を失い、自分の今の立場の維持や出世ができないと思っていることも多い。

このような人がひとたび異動や急病等でいなくなると現場はたちまちピンチになる。そうなっては経験の積み重ねが職場全体の仕事の向上につながらない。自分の手柄を意識し、他者に自分の経験からうまくいくコツ、方法を伝えないという仕事の仕方は採用すべきではない。そういう仕事のやり方をする人のそばには、そういう人に依存をする職員を生みかねない。ノウハウを共有する、一般化をしなくてはならない。そもそも、その人が自分一人で培ったものではない。チームの協力があってできたのである。

自分が培ったものを他者に伝えない

職員集団の責任者やベテランはどういった仕事の姿勢、仕事のやり方がいいのかを示さなくてはならない。自らの仕事のやり方で日常的に提示もしていかなければならない。この共有化する姿勢に反する動きがあればその動きを採用せず、そういった行動を修正するよう働きかけなくてはならない。利用者の利益が目的である。そのためにはチームの集団規範において、どんなものを採用するのか、意識的に動かなくては



(写真: 橋本総子)

BACK ISSUES

20年前のノートから 14

2013年9月

そうじのねらい 13

2013年6月

個別化の暗部 12

2013年3月

グループワークの視点 11

2012年12月

実習生がやってきた! 10

2012年9月

月曜日のせいやな 9

2012年6月

所得を決める福祉職? 8

2012年3月

世界とつながる社会福祉現場 7

2011年12月

この現場へのたどり着き方 6

障害を持つ友達と過ごすとは? 巻末座談会

2011年9月

旅行がない! 5

2011年6月

職員の脳内回路 4

2011年3月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010年12月

利用者が仕事上の戦友 2

2010年9月

障害者自立支援法で不景気に! ? 1

2010年6月

いけない。

現場では情報量を同じにする工夫をいろいろと行っている。各作業場の状況を確認する生産会議（忙しいのか？他部署に協力ができるのか？等の共有）も重要な役割を担っている。作業中にのんびりしているところと、ものすごく忙しいところがあるというのは協力関係の不足であり、全体として非能率的であり、もったいない。また、独りよがりの仕事のやり方と言える。「手が空いたけどやることある？」「忙しいから誰か手伝えたりしない？」この会話ができ、その推奨を職場全体でしていかななくてはならない。

関心を持つ人であること

ここまで来て、結局は「相手に興味を持つこと」と言える。結果を出している仕事に興味を持つ、利用者の生活全般やこれまでの歩みに興味を持つ、責任者はどう考えているのかに興味を持つ、隣の職員は何をしているのかに興味を持つ…。対人援助職というぐらいであるから、目の前の人や起こっていることに興味がないと始まらない。対人援助の仕事は対象に関心を持つかどうか大きなテーマであるように思う。

臨床社会学の方法

(3) 動機の語彙

中村 正

1. 正義の暴力—「アンパンマンをみたくない！」という息子

母子でシェルターに避難したことがあるという若い母親のDV被害体験を聞いた。心を痛めたのはアンパンマンをみたくないという5歳の息子の話だった。アンパンチというシーンが夫の暴力場面と重なるのだという。子どもたちが好きなアニメをみることができない程に面前で暴力を振るっていたのかと思うと聞いているだけで辛くなった。

さらに妻にはその文脈も辛いのではないかと心の中で思ったが質問はできなかった。アンパンマンの暴力は、暴力が行使される際の常として、バイキンマンという悪をやっつける「正義のための暴力」として使われる。暴力を振るう夫も同じような言い方をする。「殴らせるお前が悪い」と。それがバタラー（慢性的に家族に暴力を振るう人のこと batterer) の常であるからだ。連載の第1回目に紹介した「暗黙理論」はこうして暴力を正当化するように機能している。男性の暴力を支える信念が垣間見える（アンパンマンの名誉のため

に一言。アンパンマンは自己犠牲的でもある。少々複雑なつくりになっているが殴る人は都合のよいところだけを真似る)。

この正義の暴力という意味づけは、社会のなかではよくある記号（勸善懲悪物語、テロ対策、暴力で強くなるなど）として流通し、個々人の動機として汲み上げられる。暴力、いじめ、ハラスメント、虐待、体罰などの対人暴力を正当化する説明として作用する動機の語彙となっている。もちろんそれは加害者にとっての正義なので身勝手な正義である。

特に男性の暴力加害者によくみられる語彙である。彼らは「糺すこと」が好きである。その基準は自らが設定する。警察になりたがるとでもいえようか。コントロール感が満たせるからだろう。他者非難も好む。怒りの火種を至る所からみつけてくる。怒りは自らを活性化させるてっとり早い感情だからである。

正義の暴力という意味づけは、国際社会においてテロ戦争が昂じていく過程から、離婚問題で男女間の葛藤がピークに達していく過程、そしてけんかで互いのあら探しが進んでいく過程にいたるまで、実に多様で身近に

ある。自らの主張が正しいと思ひ込み、互いに譲らない。しつけのためと称して虐待をくわえる親も子どもをきちんとさせるためにと、いう正義の動機を語る。それほどに正義と暴力は近い領域にある語群だ。

2. 動機を語る言葉＝語彙

ライト・ミルズというアメリカの社会学者に「状況化された行為と動機の語彙」という論文がある(ライト・ミルズ、I・L.ホロビッツ編、青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』、みすず書房、1971年)。人々が自己や他者の行為を解釈し説明するために用いる「類型的な語彙」について指摘した論文である。

動機とは「行為や言語を個人に内在する主観的で深層に横たわる諸要素の、外的表現と解するよりもむしろ、社会的に状況づけられた動機の布置と規範的な行為とから成る、いくつもの類型的な枠」だという。動機は社会のなかにあるということだ。

対人暴力問題について行為者は自らの暴力行為を正当化し、心の声としてつぶやきながら実行している節がある。対人暴力の動機を理解するに際しては、社会のなかにある類型化された枠のなかにある語彙をもとに、一種の内言のようにして暴力をふるう理由として選び、取り入れ、編成し、実行へと至る過程があり、そこで動機として構成されていくこととなる。

動機は予め自らの内部にあり、何らかの行動へと駆り立てる要因のようなものとして考

えるのではなく、社会のなかに用意された暴力肯定要因や他者非難の種をもとに動機が構成されるということを主張するのが「動機の語彙論」である。

だから動機は事後的かつ外在的であるために言葉を必要とする。そこで用いられる語彙は行為者の内側からでてくるのではなくて、周囲の環境から取捨選択される。その人が生きてきた過程で有意味だと思った意味づけ、シンボル・記号、理由などから、理解可能で説明できるようにその人らしく調達され、構成される。純粹に内的な動機、つまり「本当の動機」が行為を導くのではなく、既存の意味の体系をもとにしてその個人によってブレンドされて動機は「構成される」と考える。

言葉と現実の関係についてミルズはいう。「動機は行為者の語彙によって限界づけられている」と。状況に適した動機の語彙を学び、行動の要素とし、「言語的に表現された動機は、個人に内在する何ものかの指標として用いられるのではなく、状況に拘束された行為に対する動機の語彙のタイプを推論するための基盤として用いられる。」

社会のなかには類型的な動機の構造が用意されている。「動機は個人の内部に固着した要素ではなく、社会的行為者によるその行動の解釈をおしすすめる条件」として作用しており、「言語行動にアプローチするばあいに、それを諸個人の個人的な状態に帰属させるのではなく、いろいろに分化した行為を統一あるものに整合するというその社会的機能を観察するべき」だという。

対人暴力にかかわる動機の語彙は社会の側にある暴力性や攻撃性、ジェンダー意識、親密な関係性についての観念、男性の人権意識あるいは正義の観念などにかかわる領域において類型化されている。

対人暴力などの逸脱行動は、行動化が先にあるので本来は言語化しにくい人々が選択する「からだのことば」であることは以前にも指摘した。行動化が優位な人たちの逸脱行動、対人暴力なので、社会に漂う動機の語彙を説明のために用いるという場合、既成品で安直な語彙あるいは理解を超える語彙が選ばれることになる。

それら逸脱行動や対人暴力という行為の動機を理解することは当人にとっても難しい。言葉が精緻ではないので行動化の過程に入り込み、語彙の貧しさという迷宮に迷い込んでいるからである。どうしてそんなことをするのかという問いに、たいていは他者非難がでてくるだけである。感情を語る語彙も少なく、「むしゃくしゃしていたから」としか語らない。

だから警察の取り調べでクリアにされたとされる動機は立証しやすいように構成されていくことになる。少年が非行に走る動機としてよく取りざたされるものに「授業がわからない」とか「学校がおもしろくない」というのがある。「教師が悪い」「学校が悪い」といい、他罰的となる。あげくのはてには「うざい！」とあって終わる。

こうした動機の語彙は問い詰めれば問い詰めるほど貧しくなり、開き直るか、投げやりになることを誘発する。反省はうわべだけの

ものになる。貧しい語彙しかもたないから行動化するのだから当然である。

動機の語彙の選択や構成の仕方が貧しいのだから、脱暴力への動機を形成する取り組みにも工夫が要る。無理強いされたようになる加害への直面化や更生にむかう矯正教育は表面的な反省や懺悔を帰結させるだけであり、ときには動機のねつ造のような事態にもなり、あまり効果はない。

もちろんなかには狡猾に動機の語彙を操るタイプもある。言語化優位であるために感情が伴わず、饒舌さが狡猾さと同居する。

行動化するタイプの語彙の貧困さから、言語化するタイプの語彙の過剰さに至るまでの幅があるといえる。

動機として用いられる語彙は社会に存在している意味の貯水池から汲み上げられる。また、自分の行為を弁明したり正当化したりするときに、それら既成の語彙群のなかから咄嗟に選んだようにみえるが、それは内言のようにしていつも反芻したり、言い聞かせたりして、正当化されているからこそ即座に選択されるので、そこには日常的な思考と認知の枠があることになる。

動機の語彙論を今回取り上げたのは筆者が脱暴力支援のための社会臨床と個人に対応する加害者臨床を共にすすめたいと考えているからである。社会の宿す暴力性や攻撃性は「正義の暴力」という認知の類型に根ざして存在している。個々の暴力行為者は動機の語彙としてそこから選択する。個々の加害者臨床で見えてきたことを社会の物語のもつ暴力性や攻撃性、つまり暴力加担性と重ねて指摘し、

それを社会の脱暴力化へと反映させるのが加害者に対応するもののアドボケイト（代弁）であるし、男性性ジェンダー問題に敏感であるべき臨床実践者の役割だと考えるからである。

こうして加害者臨床と社会臨床を重ねるといふ関心を持つ「援助者の動機の語彙」もまた社会の側に蓄積させていきたいと考えてきた。

3. 取捨選択する能動性

もう少し暴力理論にそくして考えてみたい。暴力を振るう人のパーソナリティ研究と社会構造の関係について心理学的研究をすすめるドナルド・ダットンの問題意識を紹介しておきたい。彼の主著を翻訳してきた経過もあり、概要だけになるが紹介しておきたい（『夫はどうして愛する妻を殴るのか』作品社、『虐待的パーソナリティ』明石書店）。

彼の提起している論点は三つある。①DV理論は、どうして妻だけに暴力がむかうのかについて説明をしなければならないこと、さらに、②男性性と暴力は不可分だがある特定の男性が暴力を振るうことの説明をしなければならないこと、そして、③同性同士の関係でも生起することや女性が加害者となることを説明すべきことである。

説明は次回以降とするが、①から③を解くのに、「虐待的パーソナリティ論」と「親密な関係性における暴力」というアプローチをすべきことを提案している。

対人暴力は個々人の行為である。確かに男性性との関係は深く、ジェンダー問題があり、総称すれば社会問題として位置づけることができるが、対人暴力を振るう諸個人のパーソナリティ特性もあり、社会のロジックだけでは漠然としすぎていて臨床的でなくなる。とはいえ、暴力を振るう個人の特性だけに還元すると正義の暴力など「動機の語彙論」がというような社会的行為という面が後退する。したがって、社会モデルでもなく個人モデルでもない理論を展開すべきだという。

そこで、特性としての虐待性や攻撃性をもとにして、ある一定の傾向をもったパーソナリティが編み上げられ、成人期における家族関係や愛着関係をとおして虐待性向や暴力傾向をもつパーソナリティが形成されることを指摘している。それを構成する相互作用として「親密な関係性」の特徴を把握すべきだという。とくに男性にとっての親密な関係性の分析は重要で、虐待的パーソナリティと親密な関係性論は男性の対人関係分析には有効である。

このアプローチは動機の語彙論と近似している。動機の語彙論は、動機や意味が主観的にではなく社会的に構築されるということを強調しているが、その過程には、当該の意味や記号が選択されているという能動性がある。その限りでの個体差が生まれる。正義の暴力という動機を選択せずに、対話をとおして問題解決を選択する男性もいるので、バタラーはそうした動機の語彙を取捨選択しているという点において能動性があることになる。

主流となっている男性性のなかにあって暴力なしで生きる選択をするにはまた異なる力がある。これは「レジスタンス desistance」と呼ばれている。離脱する、遠ざけておく、そうならないようにするという意味であり、その社会にあって支配的かつ主流となっている、また期待される男性性とは異なる方へと、流れにあらがっていくことそれ自体の研究である。別の機会にこの言葉を紹介したい。ここではそれとは異なる虐待的パーソナリティ論と親密な関係性論があることの紹介だけにしておきたい。

男性性が暴力や虐待へと傾斜しやすい特性をもっていること、そして正義の暴力を肯定する社会の側にも共犯性があり、さらに男性性についての主流の物語性があり、そうではない選択をめざして生きることには能力が要る。そして暴力や虐待を選択しない責任があるともいえる。加害者臨床と社会臨床の重なりはこの点を強調する。

こうした文脈で「男らしさの鎧」のひとつとして暴力があり、それを脱ぎ捨てるべきことを男性との面談で指摘すると、「それでは丸裸になってしまい、男性としてこの厳しい社会を生きていけなくなると思う。捨て去ることを考えただけでも不安になる。しかし暴力がいいとは思わない。いったいどうしたらいいのだろうか。」と語る男性は多い。

あるいは、暴力回避のための技術としてタイムアウト法（暴力が昂じていく自分を覚知し、咄嗟の回避としてその場を離れ、クールダウンして相手との関係を再構成するための怒りマネジメント技法）を伝えた際に、「でも

それは逃げているだけで、卑怯な気がする。暴力は行使すべきではないが、その場でとことん議論をして決着をつけるべきだと思うがどうか。」と語る男性も多い。ここには既存の男性性の物語が強く入り込んでいる。

4. 暴力を肯定する動機の語彙と文脈をもつ物語性への注目

物語性とはつまり、語彙だけではなく男性性のもつ文脈ということになる。その文脈とは何か。この点に関して参考になる研究を紹介しておきたい。暴力シーンが多いビデオゲームの分析をおこなった調査である。

暴力シーンが多いビデオゲームの多用は実際の暴力を助長するか、暴力の学習として機能しているのかどうかについては意見が分かれる。ゲームを使う個人のパーソナリティ、性、年齢も関係している。そこで暴力シーンだけではなくそれがどんな背景や文脈において存在しているのかについて調べたのがこの調査である。2001年から2002年にかけて実施された。子どもらに好きなゲームを三つあげてもらった。10歳と11歳対象で900人の子どもからデータを得た。日本の8小学校で都市と農村地域からランダムサンプル化した。合計41個のビデオゲームが選択された。そのうち85%にあたる35ゲームに暴力シーンが一つ以上あった。

ゲームの主人公であるヒーロー（暴力行為者）は魅力的につくられている。しかも若い（20歳以下）。外見もパーソナリティもかっこいい。

ゲームでは、その暴力は正当化されている。その理由は、他者や社会を守るため、自らの命を守るため、暴力なしにはゲームが前にすすまないため、報復のためなどがある。暴力を使うことのできない場合がある。相手がイノセントな対象（非戦闘員や市民）である。

さらにナイフや剣などの伝統的な武器が使用されているゲームは51%。そしてリアリティのある暴力かどうかとも調べている。すぐにまねができる状況設定となっているとその暴力はリアリティがあると評価する。43%のゲームはそうした設定で暴力が振るわれていた。日常で想定できる場所と状況で暴力がでてくるのだ。

そして大切な変数としての報酬と処罰の体系を指摘している。94%のゲームに暴力の報酬が認められた。暴力の報酬とはそれまでの得点からさらに強い暴力を用いてゲームをすすめることができるというものである。処罰は逆にすすめることができないというもの。後者は17%しかない。

94%のゲームで暴力の結果の苦痛や被害が発生している。マイルドなユーモアは43%にみられ（勝った瞬間に発せられる罵倒的な言葉）、敵意のあるユーモアは66%。闘いの過程では競争も多く用いられている（49%）。ともに協働して敵を倒すゲームは29%。

まとめると、暴力による攻撃性が昂進していく事例として、①魅力的な加害者が存在していること54%、②伝統的な武器使用であること66%、③暴力が報酬をともなう57%、④ユーモアが含まれている60%、⑤暴力は競争的に用いられる49%などが指摘されている。

もちろん暴力だけが模倣されるのではない。子どもは新しい言葉、挑戦、コミュニケーション、問題解決法を学ぶので、そう単純に暴力ものがだめだというのではない。

この調査をもとにして著者たちはゲームに暴力を用いる場合、次のようなことを提案している。①あまり暴力シーンを描かない、②暴力を振るうことを正当化しない、③報酬を与えずに処罰を多くする、④競争的に暴力を用いない、⑤あまり魅力的な加害者像を設定しないなどである。できればより非暴力的な選択肢を推奨する、暴力を正当化せず、報酬をあたえない行動を組み込む、ゲームが暴力とは異なるおもしろみのあるものとして作成されるべきことも提案されている。

(*Gaming, Simulations, and Society* by R. Shiratori, K. Arai, F. Kato eds Springer, *The Quantity and Context of Video Game Violence in Japan: Toward Creating and Ethical Standard* Akiko Shibuya and Akira Sakamoto) .

ここで紹介したのは単に暴力シーンが模倣されるのではなく、暴力はそれが効果を発揮する一定の文脈をもつこと、つまり物語性があることを理解したかったからである。言い換えれば対人暴力を振るう人にとって語彙は単語としてではなく「文章」として存在しているといえる。学習される暴力があるとする単発の行為というよりもこの物語性に根ざすことになる。

物語性という点では男性との面談で、暴力は正当防衛の場合もあり、完全な非暴力は難しいといわれる。「正当防衛も否定できるのか」

と。他にも、「どうしても躰をしなければならぬ危険な場合はどうするのか」、「怒りが昂じて相互のバトルになった場合に止めに入る時の暴力はどうなのか」、「暴力はコミュニケーションの一つの方法で喧嘩のあとには友情や愛情が深まる場合もある」などの物語性についての疑問や意見が脱暴力支援においてよく登場する。個々の行為としての暴力だけに焦点を当てた言い訳論から脱出するためにも、語彙、文脈、状況や枠組（フレーム、モードやスキーマ）という言語行動やそれを支える認知と意味づけのコミュニケーションの成り立ちと感情の処理に関わる過程全体を視野に入れる必要がある。

5. 親密な関係性、私的領域・感情における責任や公共性-社会臨床への課題

脱暴力支援が物語性に根ざすべきだとはどういう意味だろうか。動機の語彙をとりまく文脈、枠組（フレーム、モード、スキーマ）などに着目することだと考える。暴力的ではないそれらが暴力を振るう人の内部に構成されることをめざす。

フレーム、モード、スキーマは、親密な関係性が私的な関係・領域と観念されてきたことともかかわる。公的な介入は親密な関係性や私的な領域を避けてきた。もちろん、親子、夫婦、男女の関係に、とくにコミュニケーションの暴力をも対象にして介入していく根拠をつくることには慎重であるべきだ。

しかし、親密な関係性に宿る暴力こそを排除する仕組みが求められている。私的關係や

コミュニケーションと感情のもつ公的性格、言葉や感情表出についての公共性のあり方問題である。

これまで人権という意味では「個人の尊厳」という言い方で根拠づけられてきた。さらに親密な関係性や私的な領域において個人の尊厳をいかにして守りうるのかという課題がここで扱う対人暴力問題である。そのために暴力概念の拡張をおこなってきた。DV防止法では言葉や感情面の暴力も視野に入れた。しかしそれだけでは保護命令が出しにくいとしている。

さらに子ども虐待との関係では子どもの面前で夫婦が暴力を振ることを虐待として位置づけてきた。ストーキング行為では異常な恋愛行動を対象にしている。

くわえて無視するというネグレクト行為を子どもや高齢者虐待では把握してきた。保護責任を問うている。ここで焦点にされているのは、心理的、言語的、感情的な暴力のことであり、ネグレクトのことである。これらは個人の尊厳を傷つけるようにした卑下、降格、侮蔑、罵倒、無視、つまりコミュニケーションの暴力としてある。人の尊厳を傷つけるような儀式のようにして機能するいじめ、罵り、辱め行為がある。

親密な関係性における暴力や虐待、言葉によるコミュニケーションの暴力についてこうした把握をとおしてそれらは決して法外の領域ではないと位置づけられてきた。

暴力や虐待として位置づけ、それを排除するために保護、分離措置や退去命令そして接近禁止命令を発することとしたが、その後の

脱暴力化には極めて難渋している。法外として位置づけなかったことはよいのだが、処罰を中心とした刑事司法制度では対応しにくい領域へと踏み込んでいるからである。

しかし司法の領域における心理臨床は未成熟である。認知行動療法として応用展開されつつあるが、なお創意工夫の要る分野となっている。何よりも矯正されることに対してはより敏感に拒否反応を示すのが対人暴力加害者だからである。

そして先述してきたように、語彙と文脈や枠組（フレーム、モード、スキーマ）が社会のなかの正義のロジックをとおして暴力を振るうことを肯定し、ささえているのだから、脱暴力のための社会臨床も同時にすすめないと、社会のなかの暴力肯定要素を動機の語彙として取捨選択し、正当化するという負の内面化ループから抜け出せない。

さらに暴力が生成する状況では感情的なものが優位になっている。とくに憎悪関係は、親密な関係性という表出の形式をとおして発現しやすい。他には、人種・民族、障がい理解などにかかわるステレオタイプもある。憎悪や悪感情、偏見と差別、福祉ニーズ蔑視、歪んだ愛着関係による憎しみと愛情などが親子、夫婦、男女、老若、異文化同士（民族間格差）など、「非対称な関係性」において生起する。

とくに親密な関係性にある非対称性はケアという相互行為を成り立たせる関係性でもあり、そのケアは他者への配慮や関与が不可欠であり、境界としては相互に越境するからこそ親密な関係性となる。陰性感情も陽性感情

もこうしたなかで濃淡をもって生成する。愛着関係も同じように親密な関係性を母体に構成される。その歪みが暴力の关系的な要因となる。家族の相互作用はそうした関係性が反復される過程である。ここでみてきた親密な関係性、私的な領域、感情表出が家族とはいえ対他関係のなかで表現されるので、そこには公共性が認められるべきである。

こうして家族の外部から、主には法化作用によって、男女間の異常な恋愛、夫婦間の愛憎、親子の監護行為などに内在する暴力性への介入を試みてきた。別言すると「定義」の変更である。「夫婦喧嘩ではなくDVである」、「しつけではなくて虐待である」、「放任ではなくネグレクトである」、「熱情的な恋愛ではなくストーキングである」、「小言や叱責ではなくモラルハラスメントである」などと別様なかたちでの意味づけがなされていく。さらに残る課題は脱暴力の方策の組み込みである一般的に言えば、親密な関係性や具体的な対人関係にかかわる「公共的なものの拡大」あるいは「親密な関係性の構造変化」というテーマとなる（なお、この点にかかわり末尾に参考として引用したインタビュー記事がある。これは相互に敬意を払う関係性尊重規範をリスペクトの必要性としてわかりやすく具体化すればどうなるかという提案をおこなったものであり、脱暴力的な関係性をつくる第一歩の提言である）。

6. 虐待された子どもからの手紙への応答 -異なる動機と文脈を協働してつくること

では、そうしたコミュニケーションの暴力につながるような動機の話彙をめぐる文脈、枠組、つまり物語を書き換えていくにはどうすればよいのだろうか。憎悪表現などの言葉による暴力にはもちろん排除命令などの法的規制が可能である。くわえて親密な関係性にそくしていえば、その動機の話彙と文脈や枠を書き直すためのさらに独自の支援が求められる。つまり、社会の側に、親密な関係性に介入しはじめた以上、その対人関係の次元から積極的に脱暴力を企てる責務があるということになる。しかも刑罰だけではない脱暴力の工夫をとおしてである。加害者臨床はその格好の実践だと考えている。そのなかからある家族の実例を紹介したい。

児童相談所での家族再統合事業に関わっているが、そのプロセスは慎重であり、ゆっくりとしたものとなる。家族毎に異なるが、コミュニケーションの回復も段階をおってすすむ。

父親の虐待で5年間子どもが保護されていた家族である。父親は男親塾という教室に、母親はマザーズグループに参加し、家族のやり直しを準備していた。二人の子どもを養育する児童養護施設の職員も協力してくれた。一緒に取り組んだ児童相談所の担当ワーカーはアイデア豊かな人だった。プリクラの交換からはじめた。

しかし最近のプリクラは多機能であり、夫婦は美颜モードでとってきた。40歳にはとて

もみえない美しすぎる両親となった。これを見た子どもは絶句した。5年も離れていた両親。「これは誰だ」となったのだ。普通のデジカメで写真を撮り直してもらった。

その後、手紙のやりとり、ボイスメール、ビデオレターへとコミュニケーションの濃度を高めていくこととした。手紙の交換の段階で小学6年になった息子から問いかけがあった。「おとんはどうしてあんな暴力をふるったのか」と。体を強くするために相当な回数のスクワットをさせ、へこたれたり、いうことを聞かないときはすりこぎでなぐったりした、罰として冷蔵庫にあるタバスコを飲ませたなどが次々とでてくる。

男親塾で手紙にどんな返事を書こうかと話をした。みんなはとりあえずいったん自分でよかれと思う内容で返事をまとめてみたらということになった。いきなりグループのみんなにまとめてみせるのは難儀だということで下書きするから私にみて欲しいということになり、3枚の便せんに書いてきた。いきなり私がコメントして添削するよりも、みんなの前で読んで感想をもらったかどうかと勧めた。

次回の男親塾で別の父親にゆっくりと大きな声で返信の原案を読んでもらった。みんな子どもになったつもりで聞いて欲しいと指示をした。その下書きは虐待をした理由を書いたものだった。冷蔵庫のタバスコを飲ませた理由はこう書かれていた。「冷蔵庫のなかには薬や酒もあり子どもが飲むとよくないものがあるのだということをつからせたかったから」と。スクワットは強い男の子になって欲しいからだ。

これを聞いた男性たちの感想は一樣に、「なんだか悪いのは自分みたいに聞こえる」だった。虐待した理由の説明は子どもを責める内容になっているのだ。子どもをしつけるためにということらしいのだが他に方法はなかったのかと思う。結局は言い訳にしかならない。説明すればするほどこうなる。暴力や不適切な手段を用いていうことをきかせ、親の思うようにさせようとするのだから、説明する語彙は貧しいし、そしてなによりも文脈が間違っている。ではどうすればいいのだろうか。語彙と文脈を変えない限り親子のコミュニケーションは再開できない。男親塾で考えた。

最後はこうなった。「すまん。恥ずかしいけど間違っただけをしていた。だからおとんは男親塾というところで親をやり直す勉強をしているんや。おかんにも迷惑かけていた。」という短い返信となった。

手紙のやりとりをすることさえできずにいた親子のコミュニケーションの再開はこうしてはじまった。ボイスレターもやった。そして考案したのがビデオレターだ。

親が並んでビデオに向かって元気かと呼びかけるのは不自然きわまりない。担当ワーカーが考えた。私がインタビューを両親にするというものだった。大阪城公園でロケをした。撮影日や場所、インタビュアーの氏名や男親塾長という肩書きも字幕にして入れてもらった。

「お父さん、最近、親のための塾に通っているそうですね。それはどんなところですか。勉強になっていますか。」と私が質問した。少々ぎこちなく彼が答えた。「そうですね。私

は親としては失格でした。いまから思うと間違っただけの子育てでした。児童相談所によって二人を保護された後に、お母さんと考えました。これからどうしようかと。こんな塾があるけど行ってみないかと提案されて通い始めたんです。いろんなことが勉強になりました。親としては5歳くらいの段階だったのかなと思います。子どもためにというのは言い訳で自分がむしゃくしゃしていたから虐待をしていたんだと気がつきました。」と話をしてくれた。

お母さんにも聞いた。「塾に通い始めたお父さんはどうですか。」と。「そうですね。塾のあった日は必ずこんな話をしたとかこんなことに気づいたとか話が弾みます。」と答えてくれた。トータルで15分くらいに編集した。自然なかたちの会話になったと思う。

次にそれを子どもたちにワーカーがもっていった。そこでさらに工夫した。施設の食堂でビデオレターを観ている二人の様子をビデオに撮ってもらったのだ。小学6年の息子と5年の娘が真剣に見つめている様子が映っている。それを両親にみてもらった。

両親が努力する様子のビデオレターをみて、「おとんの目がたれている。やさしそうな顔つきだった。」という感想を息子はもらしてくれた。その直前に届けた写真は施設の部屋のなかに貼ってあった。

7. 脱暴力への動機の語彙を社会のなかに蓄積していくために男性性の物語を書き換える

から選択されるのであれば、社会の側はそれを書き換える用意をしておくべきだろう。

想像することができる。家族のやり直し計画をたて、ゆっくりとコミュニケーションを回復させていくこの過程で用いられている語彙、文脈、コミュニケーションモード、もの見方としてのスキーマが変容していく様を。正義の暴力は協働で書き換えられつつある。男親塾に通いだして2年が経っていた。その後も協働した変容の取り組みは今も続いている。息子は現在、中学2年になっている。

月に一度、この夫婦と面談を継続している。どこの家庭にもある家族の日常の何気ない会話ができるようになった話でいつも時間はあっという間におわる。今月は息子の中間試験の結果と塾通いの話だった。いろいろ課題はあるがそんな話題に終始するほどに家族を営んでいる様子が嬉しく思えた。暴力と虐待があった時とはまったく異なる語彙が増え、文脈も変わり、コミュニケーションモードが葛藤解決志向となっている。子どもたちをみるスキーマも変わり、自立ということがもの見方の根幹にすわりはじめたことがわかる。

夫婦の関係性の取り方もわかる。夫は妻のことを「あなた」と私の前で呼びかける。以前は「お前」とか「こいつ」だった。そのことを面談で指摘したらはにかんでいった。「世話になっているから」と。

動機の語彙は家族の営みにそくして協働で書き換えることができる。動機が社会のなか

(2013年11月30日受理)

参考:『京都イクメン図鑑』Vol.2 (編集・発行 おふいすパワーアップ、2012年) より

イクメン考

立命館大学教授 中村 正 先生

妻を支える ホットなサポーターになろう!



臨床社会学などを研究されている立命館大学教授の中村正先生。教師として活躍する妻の海外赴任時には、娘との父子生活の経験もある元イクメンです。

現在、大阪府内の児童相談所において、虐待する父親向けの「男親塾」を主宰するなど、学外でも積極的に活動しています。そんな中村先生に男親の役割について聞きました。

男親の役割とは?

大阪の家族再統合支援事業の一環として虐待する父親を対象にした「男親塾」。参加者同士が自分の体験を話し、傾聴し合う中で気づきを促すグループワークです。中村先生は参加者から「塾頭と呼ばれていますよ」と笑います。

参加する父親の多くは、しっつけだと考え、暴力をふるっていました。

児童相談所の介入によって子どもは保護され、家族はバラバラになっています。まずは「あなたの役割は脱暴力。育児や家事をしようと思わなくてもいい」と伝えているという中村先生。少しずつ参加者の意識を変え、家族が再び一緒に暮らせるよう、家族再統合へと導きます。

「子育ては妻の役割で、自分は関係ない」と思うこと、それは「冷たな傍観者」の意識です。いじめの場合を考えるとわかりやすいのですが、その意識自体が虐待につながるリスクがあると気づいてほしい」と話します。(下図参照)

印象的なエピソードがあります。「週末だけ子どもと過ごせるようになった父親が、小学校高学年になった息子と、公園で自転車に乗る練習をした体験を話しました。養護施設には自転車がなく、その子はうまく乗れません。大きな子が補助輪を付けた練習なので、周囲の目が気になるつつ、でもうれしくもあったという話に、ほかの参加者は、父親の役割ってこういうことかとわかったようでした。」

傷ついた家族のやり直しには長い時間がかかります。このような取り

冷淡な傍観者からホットなサポーターへ

【冷淡な傍観者】

- ・いじめ：いじめの現場を見て見ぬふりをする。
- ・子育て：子育ては妻の役割なので、関わらない。

【ホットな傍観者】

- ・いじめ：誰が誰にいじめられているかを先生などに知らせる。
- ・子育て：何かあったときに、行動する。

【ホットなサポーター】

- ・いじめ：自らいじめを止めようと動く。
- ・子育て：妻が子育てしやすいように支える。

組みを行う自治体は多くありません。関係機関と連携しながら、息の長い支援を行っています。

小さなステップから始める

困難な問題を抱える家族を見てきた先生は、普通の家庭生活を営んでいる父親は全員イクメンに思えるそう。「仕事も家事も育児も平等にやるという、スウェーデン型の男女平等モデルが強くなり過ぎてる気がします。イクメンへの道も一歩ずつ、小さなステップでいくことです。今は稼ぐだけでも大変。仕事で家がないということも家族の生活を支えているのですから、亭主元気で留守

がいいというジョークはやめるべきでしょう」。

夫婦間でリスベクト関係を築く

そのために夫婦がお互いにリスベクト(尊敬)し合う関係を築くことが大切で、子どもはそれを察することのこと。「リスベクトを破るのが暴力なんです」。

例えば、妻が「同窓会へ行く」というのを「行くな」と言わない。暴力ではなくても、行動制限をするということ、精神的支配を意味します。「妻がしたいことを自由にできるようにサポートする。そうすることでリスベクト関係が高まります。安心して子育てできる一歩になるはずです」。男親塾では、リスベクト関係を表現するステップリストを作っています。(例参照)

「妻をリスベクトし支えることは積極的に父親も育児をするということではないんですが、家族のまとまりを良くするために夫ができることです。イクメンの大きなテーマだと思います」。

社会規範を育てるには

先生によると、日常的な善悪は母

親から教わり、仕事を通じた責任や規範を父親から教わったという大学生が多いようです。

社会規範やしつけに関しては、「するべからず」という他人からの禁止の規範ではなく、自分で自分を律する規範が身についているかどうかを考えたほうがいいと言います。

ある父親は「嘘をつくな」としつけていました。すると子どもは、叱られないために「嘘をついていない」という嘘を重ねるようになりま

す。全く嘘をつかずに生きていくのは無理なこと。大きな犯罪的嘘にならないよう、適度な罪悪感を育むことが大切だと先生。

叱るときには「嘘をつくとは何事だ」という。あなたメッセージで「冷淡な傍観者ではなく、妻を支えるホットなサポーターになろう」と先生は呼びかけます。夫婦関係やコミュニケーションを再確認し、小さな一歩から始めてみませんか。

また、社会的な環境も必要だと思います。「親の価値観に閉じ込めないために、親子で地域や園、学校の行事やクラブに参加して、共同体験を重ねるのが良いですよ」。

★ステップリスト★

【例】妻が体調を崩しているとき

- STEP1
・「夕飯を作れ」と言わない。
- STEP2
・自分の夕飯を自分で買ってくる。
・外食などで済ませてくる。
- STEP3
・妻におかゆなどを作る。
・子どもの夕飯を準備する。
- STEP4
・会社を休んで(休めなくても)、看病と家事を行う。

中村 正(なかむら ただし) 先生
立命館大学大学院応用人間科学研究科・産業社会学部教授。専門は臨床社会学、社会臨床学、社会病理学。カリフォルニア大学バークレー校、シドニー大学で客員研究員を経験し、家庭内暴力対策を研究。児童相談所、刑務所などにおいて、DV、虐待、性犯罪などを対象にした男性向けの加害者臨床を実践している。著書：『男らしさからの自由—模索する男たちのアメリカ』(かもがわ出版)、『家族のゆくえ—新しい家族社会学』(人文書院)など多数。

お父さんのための絵本教室

中村先生が感情を言葉にして語りかける練習にと、取り組んでいるのが「お父さんのための絵本教室」。父親が気持ちを込めて絵本を読む練習をし、その後、子どもに読み聞かせを行うというワークショップ。今年も、青森県でボランティア活動として継続しています。

「お父さんが読むのに適した絵本がたくさんある」という、中村先生おススメの絵本をあげました。ご家庭でもぜひ読み聞かせをしてみてください。

★「お父さんはウルトラマン」 宮西 達也 著(学研)



★ 宮西 達也 著のティランソウル スシリーズもおススメ。

★「パパ、お月さまとってー」

エリック カール 著(偕成社)
「100万回生きた猫」 佐野 洋子 著(講談社)

★「じごくのそとへえ」

田島 征彦 著(童心社) など

ケアマネだから できること

～学びへの関わり～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

ケアマネ 時々 講師のしごと

私の本業はケアマネです。高齢者支援の場で日々実践を展開しています。そんな私が、時々「講師」という仕事を引き受けることがあります。連載12でお伝えした認知症サポーター養成講座では、地域のあらゆる世代を対象にした、「認知症を理解し、認知症の人に手助けできるサポーターを養成する講座」です。年に数回、仲間と一緒に小学生や一般住民を対象に講座を行っています。この講座には、所定のテキストがあり、内容の雛形はだいたい決まっています。ただし、小学生を対象にした授業などでは、寸劇を入れるなどの工夫をしながら、小学生でも飽きずに授業に参加できるように工夫をしています。

その他には、前号（連載14）でお伝えした、「家族を理解し支援する」という内容での学習会、研修会での講師を担当しています。これは主にワークショップ形式です。面接や事例検討など、演習中心のスタイルです。このトレーニングは、年に2回、団士郎先生の家族理解ワークショップを受けている私が、先生の技を盗みながら、地域の仲間と行っていることです。

このように、純粋なケアマネ業務の他に、高齢

者支援の現場から、あるいは家族を支援するという切り口での「講師」という仕事も時々担っています。今回の連載では、先日初めて引き受けた、大学生への「地域福祉論」の授業の様子をお伝えしたいと思います。

興味がないだろう、という層へ教える

大学生への授業は私の人生では初めてのことでした。私の学歴は高卒ですから、もちろん大学の授業というのは想像もつきません。しかも、看護や福祉という、自分の経験にある学部ではありません。そこでの地域福祉の授業。特に私に任せられたのは、高齢者支援の現場から、認知症高齢者の一般的理解と専門職としての理解、というのが学習の狙いでした。

最初に、大学での授業経験のある先輩へ、大学の授業とはどのようなものか情報収集を行いました。それによると、いわゆるテレビでみるような階段式の教室で、けっこうな人数の生徒がいるけれど、必ずしもこちらの話を聞いているとは限らない、ということでした。講義をしながら、話を聞いてもらえ時に、「心が折れそうになる。」とは講師の正直な気持ちでしょう。そのような事前情

報を元に、自分は与えられた役割をどのように果たそうかを考えました。私は、学生に何を伝えたら良いのだろうか。認知症のことを伝えるのか、高齢者の日常生活を伝えるのか。学生はそこに興味を持つのだろうか。あれこれ考えながら、そもそも地域福祉を学ぶ意味は何なのだろうか、などと私の頭の中では、授業の具体的内容ではなく、「学ぶとは」ということを考えていました。

私自身も日々研鑽のために、研修に参加することはあります。学びの多い研修というのは、その場で教わる新たな用語や新しい概念ではなく、聞いたことに興味をもて、研修が終わった後に、更に自ら知を深めるためたくなるものだと感じております。つまり、自分の知らなかったことが、自分の日々の暮らしと関係していることがわかった時です。一見、自分とは関係ないと思っていたことが、角度を変えてつながっていたり、関係していたり、それがわかると日常の見え方が変化します。見え方が変わることで行動の変化も起きます。良い研修、学びの豊かな研修と感ずるのは、その場の時間が終わったあとに何が起こるか、だと思っています。

人生は学びの連続であり、情報や知識を得ることだけが学びではないのです。という理屈を頭の中に成立させた時に、看護や福祉系ではない大学生に、私は何を伝えることができるのか。彼らの日常と高齢者や認知症や、地域福祉ということがどう関連して見えてくるだろうか、私に課せられたものは大きく感じました。そして、できることなら、授業を受けている学生が、興味なく内職しているのではなく、一つでも二つでも自分の今とこれからに関心を持つことができるといいなと思いました。

大学3年生の今と未来！

大学3年生と言ったら何に興味があるのだろうか？ 21歳前後の若者。私の狭い人生経験から真っ先に浮かぶのは、「恋愛」、というのは乏しい発

想かもしれません。でも、やはり、21歳の頃はよく遊び、恋をしていたのです。私の今の夫（今の、と言っても昔の夫がいるわけではなく、今も昔も夫は一人です。）との出会いも21歳の頃でした。たぶん、全員ではないにしても、多くの学生に「恋愛話」は通じるのではなかろうか、と考えました。高齢者や認知症への興味や理解の第一歩は「恋愛」という入口にしよう決めました。

授業は、薬学部の学生に80分を2回に分けて行うものです。1回目の授業では、高齢社会と認知症についての、一般レベルでの理解を目指しました。2回目は、薬学部として彼らが学んでいる今と将来に向けて、高齢者支援や地域福祉、薬剤師としてできることを学べるように考えました。その入口が「恋愛」です。これをどのように繋げていこうかと考えていました。その時に頭に浮かんだのが、当マガジンの執筆者でもある川崎二三彦先生の連載でした。川崎先生は、「映画の中の子どもたち」と題して、映画というツールを通して考える機会を発信されています。私はここにヒントを得、自分の授業でも映画というツールを使ってみようと思いました。

1回目の授業当日です。150名の学生が着席している教室は大きな教室でした。こちら側から、学生一人一人の様子がよく見えます。これは、なかなか厳しいなと感じます。学生の表情が見えるということは、もしも授業に興味を示してくれなければ、80分という時間、私のモチベーションが維持できないような気がしたからです。何とか、興味をもってもらわなければ、私自身が授業に集中できません。

最初に使った動画は、「ばあちゃんの世界」という動画です。これは、小野薬品工業（製薬会社）が制作した認知症のドラマです。（*youtubeで観ることができます。）8分程度の動画で、認知症の初期の様子や家族の揺れ動く気持ちなどが表されています。動画を流すと、学生の顔は一斉に画面の方を向いています。この日の授業後のアンケート

トでは、この動画により、認知症に対する理解が、本人の苦しみだけでなく、介護者家族の苦悩についても感じとることができたという記載がありました。百聞は一見にしかず、という諺がありますが、まさにそれです。認知症が起こる機序については、既に薬学部の授業で学んでいたようです。病態機序は理解していても、その病態がその人の生活や、周囲の人との関係にどのように影響していくのか、までは授業では触れていなかったとのことでしたので、この動画を利用したことは、認知症の人と介護する家族の人への現実的な理解につながったことと思っています。授業の間はずっと動画でというわけにもいかないのです。認知症についての一般的理解については、「認知症を理解するための8の法則と1原則」について伝えました。動画、そして知識としての学び。次につなげたいのは、21歳前後の学生の「今」です。ここで、登場するテーマが「恋愛」です。

「皆さんには、好きな人がいますか。大切に想う人がいますか。もしも、その大好きな、大切な人との今が、その人と自分の思い出にならなかつたら、どうしましょう？」下を向いていた学生の顔がこちらに向きます。この時に用意しておいたのは、次の動画でした。

- ・私の頭の中の消しゴム
- ・君に読む物語
- ・明日の記憶

本当は、映画を一本鑑賞して感想をディスカッションできるといいのですが、なかなかそこまでの時間がないために、この場合には、それぞれの映画の予告動画を流しました。それぞれ、2、3分の映画紹介です。これもまた、食い入るように学生の視線が映像に向けられます。

このようにして、1回目の授業80分は流れ、学生たちに何がどのように伝わったのか授業後アンケートを記入してもらい回収しました。アンケートには、幾人かの学生が自分の祖父母に認知症の人がいることを明かしていました。そして、今

までの対応にまずい点があったという振り返りをしていたようです。また、認知症の人と身近に接したことの無い学生は、授業で紹介した映画を早速観てみたいと記入してありました。また、認知症を取り上げた映画がこんなにもあることを始めて知った、という感想もありました。学ぶことで見え方が変わるひとつの成果だと思っています。認知症についての発生メカニズムを知ることも大切ではありますが、自分たちの普段選ばない映画の題材になっていることを知り、今まで選ばなかったものに興味を示し、それを手に取る、ここに行動変容があります。学びの成果だと感じます。その映画をじっくり鑑賞することで、私が80分では伝えられなかったことを、学生自身が自分の興味に向く方向へと知識と理解を広げていくと思います。

さて、2回目の授業です。2回目は、大学卒業後に薬剤師になる彼らに向けた、高齢者支援や地域福祉、薬剤師としての専門職としての役割理解につなげたいところでした。2回目の授業では私の普段の実践から具体的な地域の事例を伝えることにしました。「認知症フォーラムドットコム」というHPの動画の中に、「巡る季節～秋から冬～」という動画が公開されています。この動画は、2012年の夏の終わりから初冬にかけての約半年間、私が地域の高齢者の支援について取材を受けた動画です。認知症の高齢者が介護サービスを利用するだけではなく、長年続けてきた農作業を自宅ではなく、コミュニティ農園で行うという試みでした。農園では、介護サービスを受ける利用者ではなく、畑仕事を担う地域住民というスタンスです。この方の作った野菜が、地域レストランのメニューとして使われ、お客で来店した地域住民が食します。高齢期における喪失体験の連続の中、やや気持ちが沈みかけていた毎日に得意の畑仕事が再び生きがいとなり元気が取り戻せた実践です。18分ほどの動画ですが、学生は真剣に目を向けていました。動画の中で、どんどん表情が豊かに

なっていく高齢者の表情を逃さずに捉えていたことは、授業後のアンケートによく記載されていました。

そして認知症高齢者に限らずに、高齢者を支援しながら感じている現実を伝えました。例えば、高齢者と薬です。私はケアマネとして、30人前後の高齢者の担当をしていますが、その中で投薬を受けていない人は一人か二人です。あとは、定期的に受診し、なんらかの薬の処方されている方ばかりです。では、その処方された薬が指示とおりに服薬できているのか、ということを考えてみます。家族と同居をしていて、家族が薬をしっかり管理している人や、自身の健康管理に注意を払っている人は、服薬順守ができています。けれども、なかなか服薬が指示とおりにできていない人もいます。単に物忘れなどで薬の自己管理ができていないという問題ではなく、「飲まなくても大丈夫だから。」という理由の人もいるのです。処方された薬を飲まなくても本当に元気に暮らしている高齢者もいます。けれども、そのような方の多くは薬を服用していない事実を主治医に伝えることはしていません。その理由が「先生に悪いから。」ということも珍しくありません。医者がよかれと思って出してくれる薬を断るのは申し訳ないという理由です。医療は、命を守ろうとします。もちろんそれを望むからこそ、人は健康に不安があると医療機関へ足を運ぶのでしょう。けれども、命だけが優先されては、守られた命がどのように活かされるのか置き去りにになってしまう場合があります。医療的な処置を受けることで、単に命が守られるだけでなく、その人にとっての暮らしの豊かさにどう反映させることができるのでしょうか。それを考えるにはどうすれば良いのでしょうか。そこが、医療の専門職や介護・福祉の専門職、そして専門家だけではなく、地域の生活者との手の取り合いが必要になってくるのです。

最後のまとめに使った動画は、映画「毎日がアルツハイマー」です。

この映画は、認知症の母を映画監督である関口氏が長編動画として記録したものでした。映画が出来る前に、youtubeで公開されていた短編がたくさんあったので、その中からいくつかの動画を紹介しました。認知症の介護をとってもコミカルに描いたものです。介護する人が、関口監督のように、日常に起こるへんてこな事柄を笑い飛ばしながら介護していく、ということが出来るわけではありません。現実には、もっと壮絶な家族間の葛藤があることも多いでしょう。けれども、どんな状況の中にも、希望が見いだせるということを知っておくことも、生活者として或いは支援に携わる専門職としては大切だということをお伝えしました。

多くを語りすぎずに、高齢者実践の実際の動画と、認知症を取り上げた映画を使いながらの2回の授業は無事に終了しました。

2回目の授業後アンケートでは、認知症についてや、認知症の人、介護者の気持ちへの理解が進んだことがたくさん記入されていました。また、医療だけで、人を支えることはできないこと、薬剤師の関わり方の工夫や、医師と患者の橋渡しができる立場であること、地域住民の力を借りることの必要性も感想に書かれていました。

映画を使った授業が良かったという率直な感想や、離れた祖父母の顔を見に帰ろうと思いました、など学生の「今」と「これから」に、自分たちができることが十分に理解できていたことがわかりました。

「学ぶ」ということ。見え方が変わること。行動が変わること。「地域福祉論」という授業を受けた学生たちの行動が少し変化したことが伝わってきました。初めての大学での授業でしたが、情報の伝達で終わらずに行うことができたと思っています。

高齢者支援の現場にいるケアマネとして、できることが、また一つ増えました。

街場の就活論 vol.15

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん あそぶ
団 遊

親の力か、子の力か ～夏のインターンシップを終えて思うこと～

僕が講師を務める APU (立命館アジア太平洋大学) では、今年も多くの学生が夏休みにインターンシップに行き、様々な手ごたえや悔しさを抱えて帰ってきた。

僕も担当教員として学生がお世話になっている企業を訪問し、ヒアリングをすることがあるのだが、多くの企業の人事担当者は日本人学生のひ弱さ(草食系)を嘆く。APU は全校生徒の半数が留学生という特長を持った大学のため、話題も自然とそういう話になることが多い。

授業をしても、アグレッシブさという面では留学生のほうが高いと確かに思う。しかし、果たしてそれは本当に学生の資質によるものなのか?とも感じている。

授業では、キャリアインタビューというワークを重視している。これは、様々な社会人の働き方や考え方のバリエーションを知ること、自分のそれを見つけていく助けにすることを目的としたワークだ。手始めに必ず両親へのインタビューをさせている。

年表式に相手の経歴をまとめ、キャリア感に影

響を与えた出来事や、キャリアチェンジの理由などを聞いていく。そして、それを A3 の指定用紙にまとめ、相手の許可を得て持ち帰る。全学生が行うので、かなりの数のキャリアシートが集まる。

学生はそれを相互に見せ合いながら、様々な人生のバリエーションを知っていく。その中で、憧れや反面教師を探し、自分なりのプランを考えていく。

* * *

手元に、あるベトナム人留学生が両親に対して行ったインタビューシートがある。この学生は、インターンシップ先から非常に評判が良かった。

「本人が希望すれば採用させていただきたい」と担当者からコメントが寄せられるくらいだった。その理由は、「日本人学生にはない食欲さと、主体性、オリジナリティあふれる考え方がある」というものだった。

インタビューシートによると、彼女の父は、学卒後、軍隊に入隊している。そこで挫折をし、大学院に再入学、苦勞して卒業後、外資系の企業で働き、実績を残しそれなりのポジションに上り詰め、

今に至っている。

母は政治家になりたかったようだ。しかし様々な事情がそれを許さず、学卒後、それならばと教師になった。今も教師を続けており、その理由を「国を支えるため」「自分で国を変えられないのなら国を変えられる人を育てたい」と言っている。

その両親から生まれた子が、「日本人学生にはない食欲さと、主体性、オリジナリティあふれる考え方がある」と称されている。

果たしてこれは、本当に学生の資質によるものなのだろうか？ もちろん本人の努力もある、しかし特に学齢期までは環境要因で育まれる部分も大きい。

一方で日本人学生が行った両親へのインタビューシートを見てみると、総じて、そのシートから夢を感じることはない。

少し厳しい言い方になるが、部分最適を積み重ねて今に至っている印象が強い。景気もまだ良かった時代に、とりあえず就活をして、社内でそれなりに奮闘し、それなりに上手くやって、もちろん個人的に大変なこともあったけれど、ソツなくこなして今に至る。

その両親に育てられた子が、「草食系」だ「夢がない」だ「受身」だと社会から非難されている。果たしてこれは、本当に学生の資質によるものなのか？ もちろん中には「とんびが鷹を生む」ことはある。しかし、そのような言葉が生まれる背景には、普通「とんびは鷹を生まない」という事実があるからだ。

私にも子どもが二人いる。別に鷹になって欲しいわけではないが、まずは自分が誇れる仕事と生

き方をしていかないと、子どもがそのような生き方をする可能性は低いと見ている。「草食系で夢がなく受身」だといわれる学生は、それを生んだ世代の生き写しであるという面もあるのではないか？

様々な国籍の学生が提出するインタビューシートを眺めながら、ふとそんなことを思った。

文/だん・あそぶ

立命館アジア太平洋大学非常勤講師

「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸(実習)にした授業を展開している。代表をつとめるアソブロック株式会社では、幼保の環境づくり支援事業を行っている。ほかに出版社、はちみつ屋、アパレルブランド、島興し、地域活性など、多数のプロジェクトに取り組んでいる。

コミュニティを探して

(5)

藤 信子

山崎亮という「コミュニティデザイナー」の「まちの幸福論」を読んだ。コミュニティを探し回っている私としては、この肩書きと本のタイトルを見るとやはり読んでみたくなる。注文していた本が届いてページを開くと、なんとなく読みづらいような違和感を持った。ページが薄いグレイの方眼紙のデザインになっているので、普通は白かアイボリーのページの色に慣れている身としては、活字とのコントラストの差が小さく読みづらく感じるようだ。読み進めいくうちに慣れてくるので、

まあそういうデザインです、ということなのだろうけれど、手に取ってもういいや、と思う人がいるかもしれない。装丁をした人の意図は何なのだろう。この感じは目の悪い私だから思うのかもしれない、読者はもっと若い世代を想定しているからかもしれない、と読後ちょっと考えた。

著者が「日本でただひとりコミュニティデザイナー」と紹介されたことがある、と書いているように、この仕事を知らないのは私だけではないようだ。「地域の課題を、地域の人

たちが解決するための場を作るデザイナー」と言われても、すぐにはわかりにくい。それは私の中にあるデザイナーという言葉に対するイメージが、服、車などの物を作るというところにあるのかもしれない。「場を作る」ということばが、この本を読み進んでいくうちに少し理解できるような気がしてくる。この本の著者は正確には、山崎亮+NHK「東北発☆未来塾」政策班（+から後ろは活字が小さい）となっている。それは「第3章 10年後の被災地の未来を考える ドキュメント東北発☆未来塾」が、NHK 番組制作班が2012年1月に始まった山崎亮が講師を務め、東日本大震災を経験した17名の大学生行った、10年後の東北を考える1ヶ月半にわたるワークショップのまとめを担当しているからだろう。この章で、コミュニティデザイナーとしての「場を作るデザイナー」の一端を、具体的にイメージしやすくなるように、この章を置いたのだろう。

このワークショップの始まりのアイスブレイクの手法やブレインストーミングなどは、研修会やプロジェクト型の授業のアクション志向で考えていくやり方と似ている。「エネルギー」「農業」「コミュニティ」と3チームに分かれた学生たちは、東北の10年後をこんなふうにしたと考え、アイデアを練り上げるため現地調査を行い、提案をまとめ上げていく。エネルギーチームの公園はグローブジャングルの回転を電気に変換することなどで、

発電の仕組みを遊びながら学ぶ「発電公園」などを提案している。コミュニティチームからは、シャッター商店街の活性化と若者と高齢者の交流の場としてのシェアハウス商店街等の提案。農業チームは「小学校×農」というテーマで、小学校の場に「農」を取り入れるという提案。校舎などのハードの面から、授業で例えば算数では育てる野菜の成長を計りグラフ化するなどして、数値や数量を「農」という経験から導くという提案などがされている。このような提案が、これからの東北の未来に実を結ぶことを祈りたい。

ところで、この3章はワークショップのイメージとしてはよくわかる例であるけれど、「地域の人たちが解決するための」場を作るということでは、もどかしい例だと思う。ここに集まった17名の学生たちは、多分とても熱心に問題について考えている学生なのだろうと思う。ところが、コミュニティの課題と言っても、皆で共有できる場を持つことは簡単にはできにくいだろう。第5章に、世代の異なる人は、多くの場合両者の意識がかなり隔たりがあるので、つながりをつける難しさがあると述べている。話し合いを呼び掛けると、高齢者は抵抗なく会場に来てくれるが、アイデアを実行に移すとなると、難しく若者の実行力が必要になる。しかし、ワークショップを呼び掛けてもなかなか関心を示さない。何度もお願いしてワークショップに来てもらうことも多いという。それでもワークショ

ップに参加した若者は興味を持ち始めるようだ。「まちの未来を考えていくことは、自分自身の生活に直結した問題でもある」からだという記述に接して、やっとコミュニティデザイナーが、普通の研修会などのワークショップと違うところが見えてきたような気がする。東北未来塾のワークショップの始まりの手法やブレインストーミングが似ていると思ったけれど、一般的に私たちが経験している研修会などで参加者の緊張を解きほぐすやり方は、人工的な場を作って体験することなので、私にとってはなんとなく嘘っぽいというか、恥ずかしいことも多く、私自身研修会の講師をする場合は、ほとんど行わない。その目的のために来たのだからすぐ入りましょう、と思っている。でも著者は、コミュニティの問題を、その人たちと考えなければならない。時間のある人だけとか世代の偏りなどは避けなければならないだろう。そのためには嫌々来てもらうことも日常茶飯事だという。そのためのいかにその場に引き付けるかの技法が大事になってくるのであり、この著者の人と出会うことが好きなことが発揮されているのだろうと思った。考え方として、どんな未来に生きてみたいのか、ゴールを設定し実現するために今できることを考える「バックキャストリングの思考法」も面白い、前例主義の発想の人たちにも参考にしてほしいとふと思った。

文献

山崎 亮 +NHK[東北☆未来塾]制作班(2012)まちの幸福論 コミュニティデザインから考える
NHK 出版

第15回

誌上ひとりワークショップ

シリーズ2

～その5 家族との交流パターンを変える～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

14. 交流パターンを変えるロールプレイ（“普通”を中心に）

「こういった“変える面接”は、どうしても提案型になります。提案は、一步間違うと押しつけがましさがにじみ出ます。ですから、これまで以上に受容や共感を大切にしてくださいね。では、対策の二番目、増やすコミュニケーションを念頭においてロールプレイをやりましょう。途中でストップをかけてもいいですから。どなたか？」

「(F) やります。Gさんがお母さんをやってくださるので」

「では、お願いします」

「(T役) 最近は、どんなことにお困りですか？」

「(M役) あいかわらずのダラダラ生活で、こっちはイライラしっぱなしです」

「(T役) なるほど。にもかかわらずパトカーが来る回数が減っているのは、どういうことでしょうか？」

「(M役) 深く接しないようになったからかもしれません」

「(T役) サラッと接しているってことですか？」

「(M役) 諦めですかね、それで衝突は減りました。でも、生活は全く変わってません」

「(T役) 衝突も減ったのなら、それはそれでいいことだと思います」

「(M役) ダラダラ生活が急に変わることはないのはよくわかっていますし、大きな衝突がないこともうれしいです。ただ・・・。スレ違い親子というか、言葉を交わす機会が減っていることが・・・」

「(T役) 本気でぶつかっていた頃が懐かしい？」

「(M役) ええ、正直いって」

「(T役) なるほど。お二人のストレスを減らすという意味で、サラッとした関係をつくったのはいいことだったと思います。その一方で、もう少しコミュニケーションを増やしていきたいというお気持ちもよく分かります。」

「(M役) 無理なことなのかもしれませんが」

「(T役) 今までのコミュニケーションのネタ、どんなことが話題でしたか？」

「(M役) はい。ほとんどは私が注意すると子どもが反発する、というやりとりでした。ほめたほうがいいくらいはわかっています。できるならそうしたいけど、そんなの無いですから」

「(T役) いいところを見つけてほめようなんてことじゃなくて、普通のことをやってるときに一声かけるんです。難しいですか？」

「(M役) 普通ってなんですか？トイレに行くとか（笑）」

「(T役) そうそう、ご飯を食べる、着替える、パソコンの前以外でボーとしている、等々です。つまり、困りごと以外の行為全般です。そのタイミングで声をかけるとしたら、どう言いますか？たとえば、トイレに行こうとしていたら」

「(M役) 無理ですよ、そのタイミングで声をかけたことなんか無いし」

「(T役) “トイレに花をかざってあったのに気付いた？あれ、隣のおばちゃんにもらったの” どうでしょうか？」

「(M役) はっはっはっ、上品でびっくりすると思いますよ」

「(T役) それです、ねらいは」

「(M役) はっ？驚かすってことですか？」

「(T役) きっと小言だろうと身構えていたら、まさかのタイミングでまさかの上品な声かけ、それで怒りがわくことはあり得ないでしょ」

「(M役) トイレには花も花瓶もありませんけど、驚ろかすのはおもしろいですね」

「(T役) ついでに、食事中、おやつでもいいですよ、どうですか？」

「(M役) おやつだったら、“どう、それカルビーの新製品だけど”」

「(T役) 最高です！食事なら？」

「(M役) そうですね、思いっきり自慢してみましようか」

「(T役) お母さん、センスがいいです。お子さんは目が点ですよ」

「(M役) 確かにこれだと、しゃべるたびにストレスが増すってことはないでしょうね。ただ、それでこの子がちゃんとした生活を始めるんですか？」

「(T役) いいえ、ねらいはそこではありません。顔を合わせるたびにお互いがストレスをためる生活、まずそこを抜け出そうと。そうなると、腹いせや当てつけみたいにエネルギーが無駄に使われることがなくなり、前に進むために使用されるでしょう。これから育ち盛りという年頃ですから」

(拍手)

「はい、ありがとうございました。おもしろかった、ほんとに。こんなふうに展開していくと、面接が楽しくって仕方が無いでしょうね」

「(F) おっしゃるとおりです。途中から楽しかったです」

「(G) 私もです。息子を驚かすなんて」

「みなさんの感想を聞いてみましょう」

「(J) 私も同じです、とにかく無理がないのがとてもよかったです。理想の面接はその日が楽しみになることですね」

「(C) どうしたらいいでしょうと聞かれたとき、“お母さんは答えを求めておられるんですね”とか、“それをいまから一緒に考え生きましょう”みたいな予想通りの返答をしなかったのがよかったです」

「(E) にもかかわらずパトカーの回数が減っているのはどうしてでしょう？の質問、“深く接しない”を“サラッとした関係”への言い換え、受け答え場がとてもよかったです」

「(H) コミュニケーションのネタみたいな言葉のチョイスがよかったです。全体の雰囲気明るくしていると感じました」

「(I) そうそう、“パソコンの前以外でボーとしてるとき”もそうです。一步間違えたら失礼な単語が、母親との距離を縮めていると感じました」

「(E) 普通の場合という提案を少し揶揄する感じでトイレを持ち出されたのに対し、さらっと“トイレに花をかざってあったのが付いた？あれ、隣のおばちゃんにもらったの”と返したでしょ。あれで完全にまいりましたって感じになりました。どうしてあんなこと、思いつくのですか？」

「(A) そうそう、そのノリだから、“どう、それカルビーの新製品だけど”がでたわけですよ」

「(B) さっきのHさんに追加ですが、“まさかのタイミングにまさかの上品さ。絶対に怒りは帰ってこないでしょ？”も言葉がいいですね。センスですかね」

「どうです？Fさん」

「(F) ほんとにうれしいです。そんなふうに見てくださって。この場の雰囲気のにせられた結果だと思えます。また同じことをって言われても無理です」

「(G) 私もです。面接が楽しかったのは、ここの雰囲気に乗せられたからだと思えます」

「この雰囲気では、もうおしまいって言えないですね。もうひとつやってみましょうか、いかがです？」

「(全員、拍手)」

「最後の最後は、解決志向的なものをやってみましょう。どなたか？」

「(D) 解決志向って言葉は知ってますけど、ハイってできるものじゃないから・・・」

「だから、的なものです」

「(D) 的なものならできるかな。Eさん、お母さんをお願いしてもいいですか？」

「(E) はい」

「では、どうぞ」



の中の

子どもたち

第15回 もうひとりの息子

—錯綜する家族、ならば親子とは—

川崎 二三彦

手術

鼠径ヘルニアと診断されて入院し、簡単な手術をしたことがあった。驚かされたのは、「あなたは川崎二三彦さんですね」と、わかりきっているのに繰り返し尋ね、タグを付け、さらには手の甲にも直接マジックで名前を書き込んで何重にも間違いを避けようとしていたことだ。念には念を入れるというのはこういうことを指すのだろうか、本人確認の仰々しさには嘖ってしまった。それでも今夏、某大学医学部附属病院では、患者を取り違えて別人の手術を行い、肺の一部を切除したというのだから、笑い話ではない。

そして、父になる

さて、この秋は、産院で子どもを取り違えるというエピソードをもとにした映画が立て続けに2本上映された。“そんな馬鹿な”と思えるような話だが、特に自宅出産から病院での分娩が主流になった昭和40年代頃から、何十件もの取り違い事件があったというから、決して絵空事ではないのである。



それはさておき、そのうちの1本は、6歳で取り違いが発覚した「[そして父になる](#)」。カンヌ国際映画祭で審査員賞を受賞した話題作だというので、私

も早々と映画館に足を運んだ。ただし、今号で取り上げるのは別作品「もうひとりの息子」だ。こちらは子どもが18歳になってから初めて取り違えに気づくという設定だけれど、2作品を並べてみて改めて考えたのは、「そして父となる」というタイトルについてだ。なぜと言って、赤ちゃん取り違いというのであれば、これは家族の、また夫婦の問題であって、わざわざ「父」をタイトルにする必要はないではないか。

だが、こうした問題が起こると真っ先に立ち現れるのが、「疑う者」としての父と、「疑われる存在」としての母だろう。ところが、2つの映画に出てくる4人の母は、誰もがとまどい、苦悩し、あるいは自責の念に捕らわれながらも、母であるという一点に限れば揺らぐなどということはありません。一方、父の動揺は根源的な不安と繋がっている。言うなれば、赤ちゃん取り違いの事実が明らかになった途端、4人の母は瞬時にして、育てた子と産んだ子の2人の母になり、父は2人の子いずれに対しても父たり得なくなってしまったのである。だからこそ、映画は物語の展開過程を「そして」で示唆し、希望を暗示し、物語の帰結を指し示す「父になる」をタイトルに選んだのではないだろうか。

パレスチナ問題と家族

閑話休題。本作では、取り違えられた2組の家族が、対立関係にあるユダヤ人とパレスチナ人であったこと、子ども時代の全てと言っていい18年間を、実の親子としてそれぞれの文化の中で暮らしてきたことが重大問題となる。

かつて私は、連載第6回で、「[いの](#)

「ちの子ども」を取り上げたが、それは、余命を宣告されたパレスチナ人の子どもを救うために、1人のイスラエル人医師が立ち上がるというドキュメンタリーだった。「幼い子どもの命を前にすると、二千年の対立も何もかもが消し飛ぶ」というのが私の感想だったが、今度ばかりはそう簡単にはいかない。

拒絶した者

興味深かったのは、彼らの18年間の“育ち”を否定したのが、パレスチナの家族にあっては彼の兄であり、イスラエルではユダヤ教であった点だ。

「実母がユダヤ人ではないヨセフは、もはやユダヤ人ではない」

ユダヤ教の宗教指導者は、相談に来た彼に対し、静かに、しかし妥協の余地なくそう告げる。他方、18年間ずっと兄弟として暮らしてきたはずの兄は、イスラエルとの闘いこそが全てに優先するのであろう、ヤシンがまるでスパイでもあったかの如く、「おまえはユダヤ人だ」「向こうで暮らせ」と、激しくかつ反射的に彼を拒絶するのであった。

「なるほどな」

と、私は思う。兄と宗教指導者、まさに彼らこそ、社会の主要なイデオロギーを代表し、「血は守らなければならない」と主張するのである。

ここへきて物語の構図は明瞭になった。取り違えが発覚して、2人が生きる社会は、彼らをその血ゆえに拒絶し、父は激しく動揺する。他方、母は手塩にかけて育てた子に加え、「もうひとりの息子」をも発見したのであり、2人の息子は、このような中で自らの道を模索するのである。

運命

「知った時、どんな気分だった？」

「たぶん、君と同じさ」

それまで思い描いていた未来について否応なく変更を強いられた彼らは、しかし健気に、また懸命にその運命を受け入れようとする。2人で度々出会って話し、ともに行動する姿は、まるでそれぞれの人生を交換し、合体させ



るかのように、私には感じられた。

むろん、「そして父となる」の小さな主人公たちも、同じ事態に直面させられ、親と子という根本問題についての不条理に、必死になって抵抗する。

「これからはおじさんをパパと呼ぶ」

「なんで？ おじさん、パパちゃんやん」

「これからはおじさんがパパなんだ」

「なんで？」

「なんででも」

「なんで？」

琉晴は執拗に問いかけることで、降りかかる運命と闘おうとするのだし、慶多だって、家族を交換することが「ミッション」だと言われて従順に従うように見えて、その実、久方ぶりにやって来た“父”を精一杯拒絶する。

とすると、彼は一体“誰の”父になったのだろうか……。

2つの作品の2つの物語は、それぞれ余韻を残してエンディングを迎えるのであった。

* 2012 / フランス

* 鑑賞データ 2013/10/28 シネスイッチ銀座

* 公式 HP <http://www.moviola.jp/son/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/35237>

第1回	プレジャス	* 題名を click すると本文へ移 動します。
第2回	クロッシング	
第3回	冬の小鳥	
第4回	その街の子ども	
第5回	八目目の蟬	
第6回	いのちの子ども	
第7回	ラビット・ホール	
第8回	サラの鍵	
第9回	少年と自転車	
第10回	オレンジと太陽	
第11回	孤独なツバメたち	
第12回	明日の空の向こうに	
第13回	旅立ちの島唄	
第14回	くちづけ	

子どもと家族と学校と

⑮

『開業カウンセラー学校へ行く』

CON（こん）カウンセリングオフィス中島

中島 弘美

当オフィスは家族の心理支援をする個人開業の相談機関で 1995 年にスタートした。

独立をする前の私は、家族療法を専門とするクリニックに心理カウンセラーとして勤務し、不登校や対人恐怖症、摂食障害のカウンセリングをしていた。その頃、まだ数少ない民間の心理療法施設は、オーナーが精神科医であったため医療機関のような雰囲気があり、カウンセリングをするときは白衣を着ていた。

個人開業をしてからは、白衣の代わりにジャケットを着て面接をするようになった。個人で相談を受けるようになると、自分の流儀とはどうあるべきか、服装に限らず、何かと意識をした。

そのひとつに『歩くカウンセラー』でありたいということがあった。

歩くカウンセラー

相談に来られる家族を面接室で待っているだけでなく、できるだけ自分自身の目で見えて聴いて感じたいと思っていた。フィールドワークを視野に入れて支援をしたいとの思いから実践したことが、カウンセラーの学校訪問だった。

「担任の先生のところうかがって、学校での生徒さんの様子をお聞きしたい、面接室でのやりとりで子どもさんのこと

をわかった気になってはいけないし、ご家族からの話しただと一面的になってしまう、できれば多方面から理解したい」と思っていた。

学校訪問

学校訪問までの流れは、こんな感じだ。不登校など支援が必要な状態にある生徒さんとそのご家族が相談を希望されると、まずは電話で簡単に様子をおききする。→カウンセリングの進め方について納得していただくと、面接予約日時を決める。→当日約 90 分の初回面接をする。そのなかで今後の方針を話し合い、ご家族の希望を確かめる。→ご本人が通っている学校に出向き、学校の先生方とお会いするというプロセスだ。

日々、子どもの生活に関係している人々が協力して問題解決をするという支援方法はごく自然なことだと考えていたが、中には、「民間のカウンセラーによく学校の先生が会ってくれるね」と感想をもらうこともある。

学校訪問を申し出ると、対応批判をするためにカウンセラーが学校に来るのではないかの懸念からか、しぶしぶ応じていただく場合もある。学校にクレームをつけに行く気は全くないが、部外者であることは確かなので、事前に家族から担

任教員に、「カウンセラーが学校に行きたいと話している」と伝えてもらっている。すると、誤解は生じにくい。

最近でこそ連携が当たり前になっているものの、子どもの問題解決のために協力的な学校と消極的な学校があるが、三者が協力をしてバランス良く関わりながら、子どもの問題解決へつながることを目的として、学校訪問をしている。

学校訪問 1

学校での子どもの様子を知る

学校関係者と連携するために学校訪問するポイントは3つあると考える。

第一は、不登校など問題を抱えている状態にある児童や生徒さんの情報を共有すること。

担任や教科担任、学年の教員、部活顧問、前年度の担任、養護教諭など、学校で子どもにかかわっている人にお会いし、それぞれの立場からみた子どもさんの様子を教えていただく。すると面接室では語られなかった話題や、両親も耳にしたことのないエピソードが浮き彫りになることもある。たとえば、

「音楽の時間に、楽器の演奏ができなく体が硬直して、ほろりと涙を流していたことがあった」

そのように、学校の先生方からとても貴重なできごとを知らせていただけるので、いろいろな情報を得る中で、家族からの話と学校関係者との話を合わせて理解を深めていく。

学校訪問 2 学校のルールを知る

子どもが困難な状態になり、学校の先生方がサポートするときの方法は、私立公立校に限らずそれぞれに特徴がある。学校によっては、専任のスクールカウンセラーや学校ソーシャルワーカー、別室登校対応の支援員が常駐していて専門的な対応をしているところがある。また、教育相談や生徒指導担当の教員が決まっています。不登校生徒のための特別委員会で対応を決めているところもあり、さまざまだ。

担任の意見重視や学年全教員の判断が重視されるなど、進級留年判定等のプロセスなどは、学校のルールを把握する必要がある。

一度きりの訪問ですべて学校の情報を提示されることはまずないが、明記されている文書はすぐに内容を確認しつつ、家族面接の様子を随時学校側に報告するやりとりのなかで関係を作りながら、徐々に学校の動き方や、決定過程を知り、把握していく。

私がこれまでかかわってきた学校は、CONに意見書や報告書の提出を求められることがたびたびあった。カウンセリングに通っていることは、回復の努力をしているとみなされて、通った日にちについては公欠扱いになった。個人開業の相談機関が学校に信頼されていることに大きな意味があると思う。そうすると子どもや家族は安心をしてカウンセリングに通うことができるようになる。

学校訪問 3

再登校に役立つヒントを探る

これは、子どもが再登校の準備を考え

られるほど落ち着いてきたら、学校の敷居を低く感じるために、何か行動に移せることはないか、そのヒント集めをすることだ。

たとえば、学校が認める登校スタイルを教えてもらう。図書室登校、進路指導室、保健室など教室ではなく別室に行くことで出席になるのか。また、職員室へあいさつに行くだけや部活だけの参加も出席として認められるのかなどを確認する。

時間的に、午後からの登校や、一時間だけの授業出席は可能か。さらに長期休みに登校練習をしても良いのかなど、出席条件や学校側の受け入れ体制を知ること、大きな収穫になる。

学校の設備のなかに、他の生徒とは全く顔を合わせないで通うことができるスペースが存在していると、そこだったらチャレンジできそうという気になることがある。

また、修学旅行や研修、遠足や芸術鑑賞会など学外での行事や、本人が関心を示すイベントなど、参加しやすいものはないかなどたずね、再登校のきっかけのヒントを探る。

参加できるかどうかは別にして、授業以外の行事だったら行ってみたいと思う場合もあり、長期に学校を休んでいる生活でも、所属している学校行事の話題や、季節の出来事を知ることが、子どもと家族とともに負担にならない程度に把握しておくべきことだと考える。

さらに、協力的な学校の場合は、学校側から他の不登校の生徒への対応例などを知らせていただくことがあり、特別な配慮の例や学校側の柔軟な対応例を確認

することもでき、大きな手助けとなる。

通学路を歩いてみる

予想しない副産物があったりするのが学校訪問の魅力でもある。それは、実際に歩いてみて感じる地域や学校の様子だ。

「あの坂がいやだー」

と、顔をゆがめて話す新中学一年生の男子。大きめの制服が目立つほど、身体が小さく、声も子どもっぽい。

「朝、学校に行くとき、学校の最寄り駅から校門までが急な坂道なので通学がづらいと話しています」

母親が説明する。登校のつらさすべてが不登校とつながっているわけではないが、登下校の負担があるようだ。試験に合格して私立学校の一年生になり、何もかも初めての新しい生活が始まって戸惑うことが多い中、大きく違いを感じるもののひとつに通学があった。

学校訪問をするときに、彼が話していた同じ通学路を歩いてみた。

確かに中学一年生の小さな身体で教科書や体操服の入った重たいカバンを持ち、慣れない革靴でこの坂道を登るのは、いやなのだろうとわかる。

山の上にある学校の環境はとても良いが、あの坂は急でつらいため保護者会るとき親たちはタクシーを使うという。卒業までかなり体力がつかますよという学校側の解説は、こういう意味も含まれているのだとしっかりわかる。

通学路を歩いてみたあとの面接では、

「あの坂道だったら、車で送り迎えしてほしいって言っていたけれど、わかるわ～」と実感を込めて話しながら、相互理解

が深まり家族とのカウンセリングができる。

学校や地域の雰囲気に触れる

初めて学校を訪れて、校内に入っていくと、ごくありふれた日常の雰囲気からおのずと伝わってくるものがある。

ある学校は、出会う生徒さんたちから訪問者に対して「こんにちは」とさわやかなあいさつ！しかも、ひとりだけでなく、出会うひとすべてなので驚く。

ある学校は出入り口に警備員がいて、名前を告げて訪問の趣旨を伝えると、お待ちしていましたとあいさつされ応接室に通される。連絡が行き届いていることに感心する。

放課後クラブ活動をしている子どもたちが熱心に練習していたり、ジュースを飲んでのんびり笑いあっていたり、下校途中の会話が耳に入ると、どんな話題で盛り上がっているのか、思わず注意を向けようとして、ふと発見する。

「この男子生徒の髪型はアイドル系だ！さらさらの髪が肩まである！だから、あの髪型なのか」

と面接室での様子を思い浮かべて妙に納得する。謎が解けていく感じだ。

そして、学校がどのような地域の中にあるのか歩いてみると、一戸建て庭付き分譲の新興住宅地が多く目についたり、学校の近くに越境入学反対の看板があったりする。大きな商店街があり商売をしている家が多いところ、駅前に学習塾があちこちにある地域など、行ってみでの発見があり、その地域の特性をさらりと感じる。こういうところで暮らしている

のだと、環境も含めて子どもたちの理解が深まっていく。

独立相談機関

だからこそできる役割

子どもと家族と学校の理解をしつつ、支援をしたいと考えるCONの特徴は、どこかの付属機関ではなく、独立した立場で家族の相談を受けられることにある。つまり、来られている家族の意向に忠実に沿うことができると考えている。

詳しく記してみると、学校内のスクールカウンセラーに相談を持ちかける場合は、中立な立場ではあるとはいっても、学校の関係者であるため、できるだけ在籍している学校に再登校することや留年してでも良いから学校に戻りましょうという対応に流れる可能性があるかもしれない。

今後の進路を考えると、在籍する学校のカウンセラーに転校したいとは言い出しづらくなってしまいうだろう。その点、独立した相談機関の場合は、転校することを視野に入れた話しあいも自由にでき、本人と家族の意向に沿った支援が実現する。

さらに転校後も変わらずカウンセリングを継続できるし、卒業してからのサポートやフォローも可能というのも大きな利点だ。家族はときに学校側には伝えたくない事情などがあり、さまざまなことをオープンできないこともある。完全に家族のプライバシーを守ることができライフステージが次の段階に移っても、家族の応援団として長期支援の役割ができる。

蠅螂の斧

(とうろう の おの)

様々なシステムと私

第二回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

前回、前々回と書くことが変わった。そしてこういう書き方もあるなあと思った。その時、書きたいものが書けるように、連載の幅を広めに設定しておくのだ。

この範囲で書かねばならないという制約を窮屈に感じるか、制約を設けるからこそ描けるのかは昔、「漫画家」として同人誌発行計画の中で何度も話し合ったテーマだ。締め切りの問題も同様で、作品が出来たときに出すのが自費出版の同人誌のあり方で、締め切りに終わって描くのは作品じゃない、仕事だと言ったメンバーがあった。

もっとも、これはべつに大した話ではなく、そういうことが何にもあるなあという程度の思い出話だ。

四方田犬彦著「アジア全方位」は、たまたま書店で手に取った本だった。氏の本はいくつか読んでいた。様々なジャンルに発信している人なので、全てに興味を持てるわけではないが、日誌風の読み物の中から見て取れるライフスタイルは良い感じだ。中でも旅日記が私には最も好ましく感じられるので、この本も気に入った。長短併せて、旅に関するここ十年ほどに書かれた文章が集められている。そして、こういう書き方もしてみたいなあと思った。

今、目の前にあるものが、私の中で何と繋がり、どんな連想を呼び覚ましているのか。同じ時刻に同じ場所で、同じものを見ていても、人それぞれが受け取っているものの違いはここから生まれる。これはまさしく、個人の内的記憶・無意識と外界に存在するものとの間に構築される個別のネットワーク世界だ。

必ずこれとこれが繋がるなんて保証はない。そこに合理的根拠を求めすぎると世界がつまらない。びっくりする楽しみは、生きている楽しみだ。「そうか、そうだったのか……」と感嘆の声を上げる権利は失いたくない。そして出来ることなら、誰かにそう言わせたい

私が世界のあちこちの場所が好きなのは、日常とかけ離れた場所に自分が身を置くと、日常とは少し異なった自分が作動し始めるような気がするからだ。旅好きなのに世界遺産を巡ったり、駆け足名所ツアーにあまり参加しない理由はこれだ。逆に、近くまで出かけておいて、そこには行かないなんてことは意識的にも、余り意識せず結果的にであってもする。

だからといって日常が離れたくて仕方ないものかという全くそんなことはない。日常をどう充実させるかは、海外旅行やイベントよりもずっと楽しい。日常を平板にしないために、いろんなアイデアを求めて外の世界を旅しているのかもしれない。だから、そんなところは日本人観光客は行かないと言われても、足を伸ばすこともあるのだが決して冒険家ではない。その結果、一見、手間と暇がかかって収穫は少ないように見える。しかしその体験は私の中では面白く積み重なる。

留学をしたことがないので、日本以外の場所で長期間の生活経験がない。もう一度、生きることがあれば、今度は留学というか、遊学してみるのも良いなあと思う。しかし、実感的には私の今の暮らし方は、かなり遊学的である。この連載が لندن、そんな匂いのもになってゆくと良いと思っている。

(2013/11/25)

なんで、イスタンブール？

【日誌】2001/08/25（12年前）

国内線が多いが関西空港の利用頻度も増えて、だんだん慣れてきた。

7月1日から日本の出入国カード記入が不要になったので手間が省けた。今から乗るのは、イスタンブール直行便（トルコ航空・JALの共同運行）。どんなルートを飛んでゆくのかと思っていたら、機内誌掲載の飛行ルートでわかった。

「関西空港」－「北京上空」－「ウズベキスタン・タシケント北部上空」－「アラル海上空」－「カスピ海上空」－「アゼルバイジャン・バクー油田上空」そして「黒海沿岸トルコ上空」－「イスタンブール」到着。

飛んだことのないルートだった。昔、ヨーロッパ線は南回り、北回りと言った。北回りはアラスカ・アンカレッジで給油してヨーロッパに入った。地球頭越しである。とにかくヨーロッパに着きたい一心で機中を我慢する。アンカレッジは夜行バスのトイレ休憩のイメージだった。

そして選択肢の一つとして初めて南回りのシンガポール航空機を選んだのは、35年以上も前のことだ。四方田は著書の中で、「ヨーロッパに行くのに、北回りを選んでいような人に作家の資格はない」と開高健が書いていると書いていた。確かに、あちらは何も起きないルートなのだ。シンガポール、コロombo、テヘラン、ドバイ、パリ、アムステルダムと、各駅停車状態の長時間飛行。シンガポールーコロombo間だけで乗降する客など、バス乗り場状態。立席の人はいないからかろうじて飛行機なんだけど。当時はまだソ連や中国の上空など飛べなかった時代だから起きた選択だった。

それが「関西空港」－「北京上空」－「ウズベキスタン・タシケント北部上空」－「アラル海上空」－「カスピ海上空」－「アゼルバイジャン・バクー油田上空」そして「黒海沿岸トルコ上空」－「イスタンブール」着である。丸ごと中国、旧ソ連上空である。なんだかワクワクしてしまう。

北京は然るべき時期が来たらと思っているうち、だんだん訪れにくくなった。PM2.5は相当に酷

そうだし、日中関係も、まともな市民レベルには影響はないと思うものの、気はそがれる。

CHINAエリアは香港もマカオも上海も杭州も成都も、九寨溝・黄龍なんて僻地にも、台北にも出かけたが、北京は残ってしまった。

ウズベキスタンはソ連時代、ウズベク共和国と言って首都はタシケント。周辺にシルクロードの街々、サマルカンド、ブハラ等がある。

40年前、初めての海外旅行がここだった。ソビエト連邦は共産主義の国。出入国にも持ち物やカメラ撮影場所などには、気をつけて日ソツーリストビューローのツアーに参加していた。そんな私には、サマルカンドの道ばたで平日昼間からチャイや水タバコを吹かすおじさん達の群れは違和感があった。

「真っ昼間から何してんだ。働かないのか！」と思ったのだ。その頃からウズベキスタンはロシアとは別の国だったのだ。

更に国営航空会社アエロフロートの勝手な事情で、前日、モスクワ経由という考えられない迂回をさせられた旅行者にとって、首都の人々とウズベクの人々の、何もかも違う有り様は、とうてい一つの国とは思えなかった。そしてその後、ソヴィエト連邦は沢山の国に分かれていった。

アラル海と聞くと思い出すドキュメンタリー映像がある。砂漠の中に取り残された船である。かつてそこはアラル海の港だった。ちいさな湖ではない。とても大きな内陸部の塩湖である。これがソ連の計画経済政策による水資源利用によって、流入する川の水量が大幅に低下して、湖は大規模縮小をきたし、元のアラル海は見る影もない大環境破壊事態を作り出した。



大アラル海と呼ばれていたところは2010年代には完全に姿を消して砂漠になるだろうと言われている。

想像力を働かせてみよう。その湖岸で生計を営む家族にとって、縮小する湖は文字通り自然破壊と生活破壊である。にもかかわらず、ジワジワ進行する被害にはおそらく保障など用意されなかったのではないか。

小アラル海の復旧計画もあるらしいが、今ではそれぞれ別の国になった沿岸諸国の様々な利害関係もあって、文字通り覆水盆にかえらずを見せている場所である。

その先のカスピ海沿岸、アゼルバイジャン、バクー油田は、意味なくいつか行ってみたい場所の一つである。しかし1991年のソ連崩壊後の独立に伴って抱えた国内紛争は治まっていないらしい。

こんな上空を飛び越えてトルコ領内に入った飛行機はイスタンブールに到着する。



十二時間余りでイスタンブール・アタチュルク空港に到着。見知らぬ国の空港に着くといつも、ちょっと不安がよぎる。理解できない世界がここを出ると広がっている。

私は全く知らなかったのだがこの時、後日判明した驚くような事実が発生していた。

というのも、この同じ便に、青森県弘前で継続開催しているワークショップの参加メンバーが、新婚旅行で乗っていたというのだ。

彼女は直ぐに私に気が付いたそうだが、女性がご一緒だったので、声を掛けませんでしたという。「奥さんだっちゅーのに！」

しかし、この対応は「エチケット」という英国紳士のたしなみに照らすと、正しい対応であるらしい。こういうシチュエーションでの対応が「エチケット」では定められている。

曰く、先方が気づいて、こちらに挨拶があったとき、初めて気づいたように挨拶を返す。これが「エチケット」だそうだ。ああ、面倒くさい。

とりあえずガイドブックは有り難い。手荷物を取る前に書かれているように、空港内で素早くトルコリラに両替。100ドルが14400000TLになる。訳が分からない。一億四千四百万トルコリラ。

あちこち旅をしてきたが、こんなにゼロの数の増えた両替は初めてだった。そして後にもない。経済に疎いのでよくは分かっていないが、何だか気の毒感の伴う両替だった。

日本の旅行社HISで三泊だけ予約済みのホテル（後の4泊は、現地で街をうろろしながら探そうと考えていた。）がどんな場所にあるのか。アクサライという地名を頼りに、空港ビルを出たところが乗り場の空港バスに乗車。

タクシーで行ってもいいのだが、最初にそれやると、何でもタクシーになってしまう気がして。それに、いきなり運賃をぼられたりすると、あとあと印象の悪い後遺症が残る。

空港は空いていて、出国手続きも簡単に出国にも書類はなし。パスポートチェックだけで、手荷物検査もなしである。

夕方から夜になりかけた街を疾走するバスでアクサライにむかう。といっても、アクサライ行きではないので、乗るときに何度か「アクサライ？アクサライ？」と連呼しておいた。

すると近づいたときには、乗務員や客が「ここだここだ！」とみんな教えてくれる。こんな事一つで、良い国だなあと思ったりする。アクサライは地元の乗客もたくさん下車する旧市街中心の一つだった。このバスはこの先、新市街タクシム広場まで行く。

アクサライは雑然とした街、ガイドブックの地図上にイメージしていたのとは大きく違った。ホテル

の客引きに声をかけられ、逆に予約したホテルを尋ねるとすぐ教えてくれた。

このホテルに決まったのは偶然にすぎないが、この時間に、ここから路面電車で観光の中心スルタンアフメット近くのホテルを目指す人は、ちょっと心細かっただろう。

典子は早くも、「機内で眠れなかった、バスに酔ったみたいだ」と不調を訴える。チェックインしても何も食べたくないというので、私一人でホテルのまわりを探検散策に出る。

21時過ぎ。裏通りの八百屋でぶどう、モモ、りんごを買うことにしたが、ゼロが無茶苦茶ついている金の単位がわかりにくい。適当に出したら、何十円の買い物を千円札でしたような具合で釣り銭がまた一杯。

表通りの店ではビン入りのりんごジュース、そしてレストランのテイクアウトでドネル・ケバブ（あぶった薄切り肉のバゲットサンド）を買ったら更に残金が増えているような気がした。ホテルに帰ると、典子もそこそこ食べた。

個人別 出版事情

【日誌】2013/10/30（今です）

多忙なポンコツ気分を立て直してくれる良いことがあった。「家族理解入門—家族の構造理論を活かす—」中央法規出版2013、7月発売が二刷になったと編集者から知らせがあった。とても嬉しい。読んでくださった人たちに認められた気がする。昨日も読書会のテキストとして良いと褒めてもらったところだった。

本を出すと売れ行きは気になる。印税が気になるのではなく、出したものが世の中にどう受け入れられるかが気になるのだ。

増刷は一つの承認の表れだ。多く売れる本が良い本だと思っているわけではない。同時に、良いものはなかなか一般人には分からないから、認められないなんて傲慢な気持ちもない。

出来れば多くの方達に認められて、長く愛して貰いたいと思う。その現れの一つがロングセラー、増刷だと思う。

以前、文春新書で二冊出して貰った。一つ目は「不登校の解法」、これはとても良く受け入れられたのだろう5刷になって、今も書店の棚にある。

ミネルヴァ書房刊 季刊「発達」の連載をまとめたものだった。気をよくして、二冊目を考え、継続していた連載のその後の分を一冊にして出した。



内容は前作とほとんど変わっていない。連載中のものの続編だった。タイトルは「家族力×相談力」にした。「**力」が流行していたのを少々意識していた。

これが見事にこけた。増刷はかからず、早々に出版社から絶版にするので、残部廃棄になるが、希望があれば差し上げると言われた。そして新書300冊余りを無料で貰った。

きっと「不登校の解法 2」にすれば良かったのだろう。そうすれば読んで貰えた人はもっとあったに違いない。新書の**カブームに惑わされてしまった。

だから「家族理解入門」の二刷りが嬉しかった。そんな話をしていたら、「家族の練習問題 第一巻」がそろそろ3刷になると聞いた。そして「第二巻」も二刷だとか。

本を作るのはとても多くの人たちの手を煩わせる。そしてやっと出来上がっても、思いのほか伝搬力は小さい。文春新書の初刷は1万2000部だったと思う。これはとても大きな数だ。2, 3000部の増刷をかけて6刷なら、二万部を超えている事になる。

専門書の単行本は、多いものでも3000部から

なんて世界だ。1000部スタートのものだって沢山ある。出版界はなかなか厳しい。

そう言えば、川崎二三彦君は岩波新書「児童虐待」が10刷になったとツイッターに書いていた。

それでも、みんなが軽く口にするような印税生活なんて、とてもではない。今となっては、夢の印税生活という夢そのものが絶滅危惧種扱いにならざるを得ないだろう。

そして私は、このような、原稿料も印税も無関係なWebマガジンの編集長をしている。

読みたいと思ったときに、バックナンバーを素早く手にしてもらえることが誇りだ。支払いも手間も求めない。何かの会員であることも要求しない。「関心がある」、このモチベーションだけがドアを開く鍵になる。

音響担当

【日誌】2013/10/30

米原市で講演とQ&A対談。彦根児相長のS野君と。参加者も様子のわかった人達で話の流れも順調なはずだったのだが・・・。

マイク不具合頻発にチョイイラ。ハプニングで自分のモチベーションが揺れるのが鬱陶しい。出来るだけ冷静なコントロールをと思いつつ、準備した中味がグチャグチャになるのが許せなくて(^_-)・・・。

講演会場のマイク調整が出来ていなかった。そのために、話の腰が何度も折られた。聞いている人たちには、講演の中で起きている私の側に属する不備だから、心優しく待っていてはくれる。しかし私にすれば、この状況はまったく理不尽な災難である。

こんな事は今年初めに、大津プリンスホテルの大宴会場で800人近い人の集まった講演でも起きた。演者はどうしようもなく、修復を待つしかないのだが考えてみて欲しい。

舞台のクライマックス直前に音声が中断し、しばらくお待ち下さいとスタッフが入ってきて、修理後、引き続き盛り上がってください！はないだろう。

こういうハプニングまで、演者の対応力にゆだねられるのは我慢ならない。演者は、その会場に来てくれた人に、満足して帰って貰う責任を負っている。

そのために、この催しに適切な内容を直前まで準備してここにやって来ている。

会場準備をする側は、私の接待をするよりも、場内の音、光、使用機器のコンディション調整が優先作業である。無論、会場の世話役がプロではない場合も多い。だからこそだが、慎重でなければならない。

近年ますます、主催者は事前に何度も、打ち合わせをしたがる。様々な問い合わせもしてくる。メール時代になって簡単に送受信ができるようになったせいで、安易な問い合わせや確認も多い。

依頼文書を郵送していた時代なら、連日のそんな通信はおかしいと思われるだろうから、自粛するのにはである。

そして当日、会場にやってきたら後はよろしくというつもりなのだろうが緩くなる。その結果、何度も何度も、マイクロフォンの不調でドタバタを演じなければならないことになった。

客席からはコミカルに見えるかも知れないが、それを見せに来ているのではないので、内心イライラする。それが講演の展開に影響する。前夜、最後の詰めをした周到さは消されてしまい、同じ所を何度も繰り返し話したりすることになる。

こういう準備はプロではないから仕方ないではなく、プロではないからこそ慎重でなければならない。臨床ってそういうことを言うのだと思う。本番で、緊張して失敗してしまいましたというのは仕事としては通用しない。近年、こういう事の重要性をひしひしと感ずるので、準備の出来るところ、慣れたところにしか出かせないようにしはじめている。

負担が大きく、結果の手に入らないミスに、自分が巻き込まれるのは、ほどほどにしておかないと、自分が消耗してしまう。

編集長作業ミス

【日誌】2013/10/29

学会誌ニュースレター用に戴いた原稿の掲載漏れという事態を起こしてしまった。

メールアドレスを2つ持って連動させてiPhoneとデスクトップの併用をしていると、何かの拍子に

確認が甘くなる。せつかく書いて頂いたのに申し訳ない。仕事が多すぎるとこういう所でミスが出る。



中益さんの思い出

平木 典子

中益さんのお慶びを受けてきました。お祈りの方、「よく学生さんが来られますよ」とおっしゃって、案内していただきました。9月28日、亡くなってもう1年が過ぎました。

この1年、直接指導を受けていた学生さんたちは言うまでもなく、「中益さんがいたら」と思いながら過ごした人々は多かったのではないのでしょうか。その存在の重さは、いらっしやらなくなっからの方がいっそう感じられ、残念さもつります。

9月の下旬は、中益さんにとって気持ちが急がせられる時期だったことを思い出します。IPIの帰り道に報告の音が落ち始め、それを見ながら、毎年のように「もう秋がきちゃった」とつぶやいていました。

昨年の今ごろ、中益さんはどんな思いでこの時期を過ごしていたのだろう。「もう秋が来ちゃった」という言葉もさけないままの別れになってしまいました。

一方、日頃の中益さんはそんなことをつぶやくとは思えないほど、多くの仕事を着々と成し遂げて私たちに発進してくださりました。冷静な人柄は、誰にも公平であることでやさしさと厳しさにも包まれていました。その見識と専門性は日本にとってもかけがえのない力となったに違いないことを思うこともしばしばです。

私たち身近な者にとってほほえましい思い出は、中益さんはときどきドジをしてくれることでした。二人で箱根のホテルの会合に夕方遅く、遅刻して出席しようとしていた時のこと。駅からタクシーに乗って、中益さんが乗ることなく「〇〇ホテルに行ってください」と告げましたが、ホテルに着いてみると、そこは会場ではありませんでした。私たちはしばしその場に立ち尽くし、おもむろに案内状を見直して、再びタクシーに乗ったのでした。私はホテルの名をうろ覚えで、あまりにも袋々で行き先を告げた中益さん任せで、車中でも別の紙に花を乗せていたのです。仲間内では、そんな出来事もよく話しては、笑い合ったこともありました。

そんな中益さんを私たちはとても大切に思っていました。

前項、音響問題では文句をたれたが、だからといって私が、用意周到で失敗はしない男であるなんて言いたいわけではない。

家族心理学会のNL編集をしている。毎回原稿を募って、再度お願いし、それをレイアウトして24~32頁の冊子に仕上げている。

この作業中のあつてはならないミスの話である。十年近く編集をしてきて初めてのことだった。戴いていた原稿を掲載から落としてしまったのだ。

要因はいろいろあり、振り返ってみるとそこが落とし穴なのは理解できた。執筆者にはお詫びして、次号での登場をお願いしたが、原稿そのものは今のものなので使えない事になった。

なかなか原稿をいただけず、ページ割りが確定しない中での出来事だから、自分的にも残念で仕方がない。あの原稿があったら、4の倍数の28頁立てに完成させられたのだ。

私は今、この対人援助学マガジン約200頁を年間4冊と上記の家族心理学会ニュースレター約30頁

を年二回、合計6冊の発行物の編集長をしている。二ヶ月に一度、発行日が来る計算だ。

当然、編集長として精読して校正して等と考えていたら、自分の時間はなくなってしまふ。だから、マガジンの方は信頼できる実績の人の原稿はフリーパス。必要なレイアウトをするだけである。それも自分でしたい人にはレイアウトもお願いして、PDFで届けて貰う。そうすれば作業はページナンバーを確定することだけになる。

マガジンの方は全記事連載だから、「締め切り日の告知」だけしておけば、後は個々人の自覚のみ。ほぼ皆さん届けてくれる。

一方、30頁ほどだが「家族心理学会ニュースレター」はそれと比べると手間が要る。執筆依頼が必要だからである。しかも、みんなが書きたいというわけではない。打診して断られ、予定変更で無理だと告げられ、続けて書いてくれる人頼みにしていると、執筆者が偏って固定化することになる。

私は原稿集めに苦勞していない方だとは思いますが、それでもなかなか大変だ。そんな中でやっているのだから・・・と言いたい気持ちもありそうだが、それは言いたくない。基本的にやりたいからやっているのだから、やる限りは周到に完成させた。

失敗は取り戻せない。繰り返されないように自戒するほかない。次々に担当者が変わり、前にもあった失敗が繰り返される世の中は、その当事者だけの責任ではない。社会構造上の弱点、欠点である。

それを個人の力量如何のように語るのには、システムの発想を知らないと言うことである。

スケジュール管理

【日誌】2013/10/27

金、土、日の出張を繰り返していると1週間が恐ろしく短い。月、火、大学院での仕事をして、水曜に地域でのあれこれ仕事、木曜午前の相談室対応をしていると、本当にあつという間の週末だ。

漫画の新作ペン入れは月末の水曜の夜から夜中に泊まり込みでということになる。これが好きなのだから仕方がないが、困ったものだ。

九月、十月、十一月、十二月の第一週末は、2011年秋以来、10年間、ずっと東北巡業にスケジュールされている。

被災地復興のためにマンガ展など何になるのかとか、いつまで続けるのかといった議論を排除してしまうために、長期プランを最初に確定してしました。同僚のMさん、Nさんと三者合意の10年間ある。

すると急に、秋が窮屈になった。秋には札幌、前、東京、埼玉、金沢、松江、広島、の週末WSプログラムが例年計画されている。そのほかに学会、演や一日WSを、名古屋、山口、京都、大阪等で行っていて、ここに大学院の授業とゼミが入る。木日の定例相談室仕事もあって、めまぐるしい。ここに月刊連載二本と季刊などの連載三本が入る。

だからマネージメント出来ないといんでもないことになる。そうならない為には、自分で着々と付けていくしかないのである。

列記すると大変そうだが、順番に片付けると確実に減っていく。そのうち新しいものが追加されるのだが、スケジュールを見てため息をついても、何も起きない。

台風と飛行機

【日誌】2013/10/25

遠くでヤキモキしていても意味がないので、伊丹空港で様子を見ようと、大幅に早目に空港バスに乗った。その車中のスマホ情報で、前の便が出発してから、機体整備のための引き返したことを知る。台風のこと書かれていない。よく分からん情報だ。15時50分の便は飛ぶのか？飛ばないのか？を今からカウンターで確かめる。

空港内アナウンスに、「目的地の天候不良のため、引き返す事があります。ご承知おき下さい・・・」というのが増えてきた。青森行きもそう言っている。そして伊丹の天候も、悪くなってきている。

もし青森が天候不良で大阪に引き返したら、伊丹は今より天気は更に悪いだろう。台風はいよいよ接近してきている。

しかし空港ロビーの全フライト表示を見ると、ほとんど欠航便はない。台風は風より雨や高波の警戒が主なようだ。

しばらく空港内で食事をし、お茶を飲みながら原稿を書く。その間に状況が激変したりしないことを祈る。前便は機体整備不良で引き返したのだった。

【日誌】2013/10/26

昨日は一日、無事青森につけることを願って待機をしたり、早目に対応したりばかり。その間に、なんとなく読みそびれていたこの本を手にした。その結果、400ページ読了。面白い、これも半沢直樹じゃないか。やられたらやり返す。



久しぶりにエンタメ系の次々手を出させる作家と遭遇した。どれも同じじゃないかという自分の中の声を無視して、同型の繰り返し娯楽を楽しむ。TVドラマ放映後直ぐ、「ロスジェネの逆襲」を読み、その後、「空とぶタイヤ」「果つる底なき」とまだ飽きていない。

飛んで、イスタンブール

【日誌】2001/08/27(12年前)

映画007の映画「ロシアより愛をこめて」だったかで印象に残っている地下宮殿貯水池に行く。ここは是非来てみたかったところ。こんな広大なモノが都市の地下に昔に作られていた事実に驚く。

そこのカフェテラスでお茶。地下にあるので涼しい。でも、プールのカフェみたいな感じでもあり、ツアー観光客はとっとと通り過ぎてゆくから、店でゆっくりする人などいない。ここで1時間ばかりくつろぐ。

時代を問わず、人々が集う街が形成されると、そこには自ずと必然となる機能が生じる。

道路や水道、下水処理、やがて電気、ガスということになるのだが、その片鱗を目にすると、人間の知恵に感動を覚える。特に生命には不可欠の水がどのようにもたらされたのかの物語は面白い。

東京江戸博物館の展示とビジュアルデータのところで、江戸の町の水利（玉川上水）を見たことがあるが、大したものだと感嘆した記憶がある。

世界のあちこちに水道橋や通潤橋がある。長い運河を整備した場所も沢山ある。そんなものを感じながら見ているのが好きだ。。



今泊まっているロイヤルホテルは何の特徴もないツーリストホテルだが、悪くもないので連泊を打診する。しかし、週末は団体が入っているのか、明日一泊だけ延泊可能になった。しかも、日本で予約した値段より十ドル高い、六十ドルである。

そこで明後日からの宿の確保に街に出る。ガイドブックのトップに登場するフォーシーズンホテル。

（世界展開する有名な高級ホテルだ）イスタンブールのは昔は監獄だった建物をリノベーションしたとある。ぜひ泊まりたいと思ったので、訪れてフロントで尋ねたら空いていた。一泊320ドルの高級

ホテルを旅の最終日二泊することに。

その後、地下貯水池近くのプチホテルに部屋を見にいった。こじんまりした綺麗なところだったので一泊70ドルで2泊予約。近所にはランプで有名なプチホテルもあった。

街のホテルはどこも、けっこう空いている。観光シーズンといってもこのくらいなのだ。日本のあれこれの予約状況を考えると不思議。

先ず大前提に日本の人口密度の問題があるとは思う。しかし予約の問題は国によって随分状況が違う。

ヨーロッパで移動手段に列車を使った経験はかなりある。駅で特急列車の座席を求めて列にいたことも少なくない。イタリアでは自動販売機で座席指定の購入もした。連番の座席を買ったのに、乗ってみたら変な並びの席だったのはご愛敬だ。シートのナンバリングがいまだに謎だ。それに走り出してしまえば、空いている席には指定客でなくても座って構わないのは合理的だ。

でもとにかく、当日でチケットはある。基本はこれだ。ホテルだってツーリストインフォメーションであたれば、希望のグレードのホテルを大抵紹介してくれた。

ところが日本で移動するのに、当日チケットやホテル探しをしたら、えらくストレスフルだった。その日の気分で行き先を変更などしたら、宿や列車のチケット確保に大変なことになる。だから旅の自由さが確保できない。

学校臨床の新展開

— ⑮ ケースの発見 —

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

小学5年の女儿。勉強はよくでき、将来は保育士になりたいといっています。

○ある学校での一場面

学校事務：「そういえば、あその家庭、諸費の滞納があるけれど・・・」

担任：「そうですか、個人懇談などもお父さんが出てしっかりとやっておられますので、またお父さんに伝えておきます。」

学年主任：「お母さんは？」

担任：「体調が悪いみたいです。寝ておられるとか。」

学年主任：「本人は元気？」

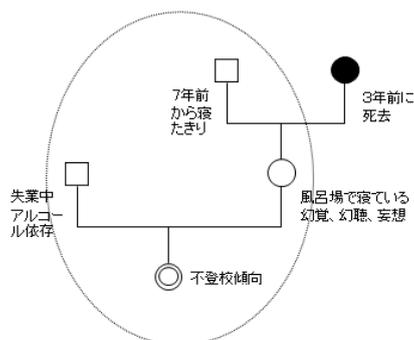
担任：「ときどき学校を休むことがあるんですが、部活の大会でもいい成績を残していますし、勉強もよくできますね。」

しかし、念のためと担任が個人懇談の時間をとりました。そこで、何と何日も前から家の電気やガスが止まっていることがわかってきました。夜はどうしているのか。とても心配になりましたが、若い担任の先生は、どこに相談したらよいかわからない状態でした。担任の先生が学年主任の先生に相談すると、「そういえば先日、虐待の研修を受けたけど、それはネグレクトやね。児童相談所へ通告しないといけないね。」と言いました。校長とも相談し、学年主任が児童相談所へ連絡をしました。すると、電

話を受けた児童相談所の職員から、「市役所へ連絡しましたか？」と言われました。「虐待の通告は児童相談所では？」と問うと、「まずは、市のヨウタイキョウ」に連絡してくださいと言われたそうです。「なんか最

近、児童相談所がつめたくなりましたね。昔はもっと聞いてくれたのに・・・。」

実はこの家庭、本児の父が失業してから経済状況が厳しいことは、祖父の訪問介護を行っているヘルパーが知っており、生活保護の案内をすでに何度もしていたようです。しかし、父は「他人の世話にはなりたくない」と援助を拒んでいたのです。その後、経済状況がさらに悪化し、父はようやく生活保護の申請を行ったようです。生活保護のワーカーが家庭訪問で見た光景は、散らかった室内に、胃ろうを行っている祖父の栄養補給剤と父が飲んだビールの空き缶が散乱している状況です。その奥に寝たきりの祖父。ワーカーが父から話を聞くと母は風呂場で寝ていることがわかりました。激しい幻聴や幻覚があり自宅のなかでもトイレの次に狭い風呂場に布団を敷き寝込んでいたのです。ということは風呂場が風呂場としての機能を失い寝室となっている、つまり家族は風呂に入れないということです。小学5年の女兒が何日も風呂に入れない状況にワーカーは愕然とします。



生活保護のワーカーが父から聞き取ったり、家庭訪問をしたりして得た情報によると、7年前に祖父が脳梗塞をおこし要介護に。3年前に祖母が死去。それまでは、母も家事や介護をしていたのですが、祖母の死去を機に調子が悪くなったとのこと。幻聴、幻覚、妄想がありますが医療は受けていません。父は先ごろ失業し生活に困窮。アルコール依存の状況になったのです。

小学5年の女兒。この環境で、勉強をよく頑張っています。落ち着きがなかったり、問題行動があつたりしたら、学校ももっと早くに何らかの異変に気づくかことができたかもしれませんが、いわゆる「普通の子ども」はなかなか学校では目立たないのですね。また、教師が家庭訪問をしてもなかなか家のなかの状況まではわからないこともあります。勉強やクラブは頑張っているけれども不登校傾向だった本児。大人でも子どもでも今日一日を頑張り、明日また一日頑張る力の源は家庭にあります。しかし、この家庭では残念ながらその役割を果たすことが難しい状況です。では、だれが悪いのでしょうか。アルコール依存になっている父が悪いのでしょうか。しかし、なんとなく、アルコールに依存せざるを得ない父の気持ちも理解できなくはありません。ただ、やはり小学5年の子どもが生活してゆく環境としてはよくないですね。親子関係が逆転してしまっていますね。

山科醍醐子どものひろば ビジュアルノベル「貧困を背負って生きる子どもたち 仁の物語」のなかには、厳しい家庭状況の中で不登校に陥る子どもたちの叫びが代弁

されています。

「学校に行っていないんじゃない」
「学校に行ってる場合じゃないんや」

不登校事例のなかには、さまざまな背景のケースがあります。

さて、本事例にもどりますと、このような状況では「何とか施設に入れる方法はありませんか。このままあそこの家にいたらおかしくなりますよ」という学校の先生の声が聞こえてきそうです。

先生のお気持ちもわかりますが、しかし、親子分離の視点だけで考えるのは危険ですね。子どもたちは親と分離されない権利も持っています。現行の日本の児童保護システムでは家庭での生活が困難な子どもは、家庭や地域から離れ、そのほとんどが施設への入所となっていますが、住み慣れた地を離れ、転校せざるを得ない子どもたちは辛い思いをします。それを超えてでも子どもの権利侵害が生じているのかどうか、家庭での生活が難しいのか、アセスメントを行っていかねばなりません。

児童虐待など児童相談の第一義的な窓口が市町村へ移行してからあと少しで10年が経とうとしています。児童相談所では措置にかかわるような困難な事例を多く抱えるとともに、市町村のバックアップが中心になってきましたので、学校から児童相談所へ相談したときに、上述のような話もちらほら聞かれるようになりました。児童相談所がつめたくなっただけではなく相談システムが変わってきたのです。(しかし、児童相談所は通告先でもあり、通告は受けなけ

ればなりません。)

学校だけでは閉じられた家庭のケースの発見にいたらないこと。学校だけでは対応できないこと。学校がしなければならぬこと。してはいけないこと。そこには教育の視点に加えソーシャルワークやカウンセリングの視点、知識、技法、倫理が求められます。

この事例はNHK「ハートネットTV シリーズ貧困拡大社会(3)生活保護世帯の子どもたち」のなかで放映されていた事例をもとに一部筆者が脚色したフィクションです。

参考)

山科醍醐こどものひろば

<http://www.kodohiro.com/modules/org1/index.php?id=14%22%22>

II. 学びの森の風景

学びの森の住人たち (10)

—学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—

アウラ学びの森 北村真也



9-1. キャリアの中の物語

不登校の子どもたちが、アウラの森を巣立った後、果たしてどういった人生を辿っていくのか？ その過程で彼らのキャリアはどう形成されていくのか？ ここでは、そのことに触れてみたいと思います。

中学で不登校になった子どもたちが、その後、高校でも不登校になっていくというケースは珍しくありません。精神科医の斉藤環さんも言うておられますが、社会的ひきこもりにある方の多くが、不登校経験者であることもよく知られた事実なのです。つまり、「不登校は繰り返される」のです。

不登校という事実を一つの社会現象としてとらえると、不登校という事実に表現されていく「何か」があることが見えてきます。それは、子どもの発達の問題やパーソナリティの問題、あるいは精神の問題という個人に還元されるものだけではありません。家族の問題や学校の問題、地域の問題といった現代社会が抱える問題までもが、そこに表現されているように思います。し

かもそれは、あまり単純な構造にはなっておらず、それらの複数が階層的に関連し合った構造になっているのです。だから私たちは、それらにいくつものフレームを設定することで、一つ一つを紐解くように整理し、そこに表現されている意味を読み解き、それを違った形の表現へと転換させているのかもしれない。

だから不登校という現象を、出席の問題、あるいは学習の問題に限定してとらえてしまうことは、問題の本質を見落とすことにつながるように思います。彼らを別室に登校させ、最低限の進路保証に相当する学習評価を与え、高校へと送り込んだとしても、そこに表現された問題の本質が解決されない限り、不登校は繰り返されるのです。私たちは、そんなケースをいやというほど見てきたのです。

アウラの森では、子どもたちは自分自身に向き合います。学びという活動を通して自分自身に向き合うのです。それは学びと

いう活動そのものが、本来、自分自身に向き合うことを要求するからであり、そのベクトルを持っているからです。本質的な学びの過程は、未知のモノに向き合いながら、それを自己の既存概念と統合していく過程であり、そこには自ずと「自己変容」が起こるのです。

そして、自己変容を遂げた子どもたちは、そこからさらに彼らのペースで変容を続けます。ここでは、この変容そのものが、学習の過程と重なるからです。私たちの教育は、「学習リテラシー」という概念を持っています。学習リテラシーというのは、自律的な学びの型のようなもので、DeSeCo プロジェクトのキーコンピテンシーと共通するものだと思っています。あるいはそれは、自分自身との向き合い方、未知のモノと自分自身との統合のさせ方と言ってもいいかもしれません。そして、このリテラシーをアウラの森の共同的な世界の中で手に入れられた子どもたちは、自らの未来を自らのペースで切り拓いていけるようになっていくのだと思います。

「キャリア形成」というコトバがあります。不登校の子どもたちが、その後どのように進学し、どのように仕事を見つけ、どのように自律した生活を構築していくのか？ それは、親たちにとっても、教師たちにとっても、あるいは若者支援にかかわる行政のものたちにとっても大きな関心ごとです。しかし、この「キャリア形成」というコトバも、気をつけないとすぐに「就労」というコトバと等価なものとして捉えられてしまいます。確かに就労という過程

は、キャリア形成において大変重要なステップなのですが、このステップも実は個人の物語のある段階にすぎないように思うのです。だから彼らのキャリア形成を見つめるということは、具体的な進路や就労の状況だけでなく、その個人の物語を見つめるということであり、その物語を彼ら彼女らがどのように描いていこうとしているかを読み取ることに他ならないように思います。

ここで紹介するのは、現在 24 歳になる大手の自動車ディーラーでサービスを担当するヒロシ。彼は、小中学校あわせて 2 年間しか、学校に通っておらず、長期にわたる不登校の状態を経て中 2 の時にアウラの森へとやってきます。その後高校で野球部に属し、やがて専門学校を卒業して整備士の国家資格を手に入れ、正社員としてディーラーで働き始めました。ここでは、そんなヒロシへのインタビューを通して、彼自身の物語をそのキャリア形成の過程を通して読み取っていきたいと思います。



1. 小3からの不登校

「ヒロシは、小学校の 2 年までは別に普

通に学校に行っていた？」

「まあ普通は普通やけど、ちょっと休みがちな子やったんで。それは幼稚園にいる頃からずっと…」

「あ、そうなんや」

「もともと人見知りか子どもの頃から激しくて、あんまり人としゃべるのとか関わり作るのが下手くそ、苦手で。それが一気にきたのが多分3年生ぐらい」

「なんで3年生なん？なんかあったわけ、3年って？」

「いや、特別何かがあったわけでは、ないんやけど、なんかわからんけど…」

「学校へ行くのがいややった？」

「そうなって行って…」

「それって3年のいつ頃なの？」

「それは、もう全然覚えてないけど…1学期の頃は行っていたから、多分2学期ぐらい」

「それからはもう全く行かへんようになったの？」

「全く」

「親は、行けとかなんとか、そんな話にならなかったの？」

「いや、まあそんな話というか、学校の先生が…」

「毎日迎えに来たわけや？」

「なんで来ないのや、そういういじめがあるのか、とかそういう話はあったけど、別にそういうわけでもないし…。自分でもそんなに学校自体が嫌というわけでもなく、ただその雰囲気か嫌というか…。絶対的に嫌というわけではないけど、なんか…行きづらいな、っていう感じ」

ヒロシは、小3から5年間も学校へ行っ

ていませんでした。小中あわせて2年間しか学校へ行っていない生徒は、私は未だ彼以外に見たことがありません。

「それで、なんかまあ行きづらくなっていう状態で、ずっと家にいたわけなんや。それで家では何やっていたの？小学校のそんな頃って、いったい何やって過ごしていた？」

「寝ているか、ご飯食べているか、あとテレビ見ているか…」

「そんな生活が小学校3年から始まり、中学までずっと？」

「ずっと。一応はでも一回、4年生ぐらいに一瞬学校の方に顔出そうかな、と頑張っていた時もあったけど…」

「まあでも、それは…」

「それも一瞬で終わって…」

「勉強も当然できなかったやろ？」

「できひん」

「勉強は一切やってないの、家で？」

「やってない、やってない」

「ゼロ？」

「ゼロ」

「そしたら家ではとりあえず寝て、食べて、あとはテレビ？」

「テレビ」

「もうそれだけ？」

「それだけ」

「親…、お母さんも途中から何も言わへんようになったわけ？」

「うーん。まあまあ、途中からは。最初の頃は“なんで行かへんの？”とかあったけど、途中からはもう、諦めじゃないけど…言ってもどうしようもないやろな、とかいう感じになって…」

「お父さんは、何も最初から？」
「最初から」
「…そうか。あとお姉ちゃんいたよな？」
「うん」
「お姉ちゃんって、普通に学校は行って
いた？」
「お姉ちゃんは、まあまあ普通に…」
「学校行って？」
「お姉ちゃんもちょっと休みがちな人間
やったけど、別にそんな同じような感じじ
ゃなくて。ただ単に…体調的などころで休
みがちなだけ。人間関係がどうかってい
うわけではなかったし…」
「ヒロシも別に人間関係が、とかじゃな
かったんやろ？人間関係も嫌やったん？」
「いや、関係というよりか…上手いこと
コミュニケーションがとれへんっていう
…」
「ああ、コミュニケーションが下手やっ
た？」
「下手やった」
「そうか。それで学校の先生は家庭訪問
に来るようになった？」
「うん」
「で、ヒロシは、先生と会ってしゃべっ
てたん？」
「いや、来やはって、まあ会う時もある
けど、嫌で居留守みたいな…」
「まあそんな感じか。小学校3年の時の
担任の先生は、最初ヒロシが学校へ行って
いた時の様子を知ったはるわけやけど…」
「うん」
「でもそれは学年が変わったりしたら新
しい先生になるやん」
「うん」
「で、その先生のことをヒロシは全然知

らんわけや？」
「まあそうです」
「で、それが来やはったりするわけや？」
「また、はい」
「でもそれは会ったり、会わなかつた
り？」
「それも会ったり会わなかつたり」
「うんまあ…会ったらなんで来ないの、
って話になるから、そればかりもう
嫌やし…」
「ああ。もう同じ話になるわけや？おい
で、とか」
「その人が嫌とか、そういうのではない
けど、そういう…学校の先生と生徒の立場
としてのやり取りというか。それ自体が嫌
やった。しんどいというか」
「ああ、嫌やったわけや」
「あと…家にずっといると、いること自
体が嫌にならなかった、小学校の頃？」
「嫌になる。しんどくてしかたなくなっ
て…」
「家にいるのがしんどい？」
「しんどい。たまにだから、無性に体動
かしたくなってランニングに行ったりとか
…」
「小学校の時？」
「小学校の時、小5か小6くらい。あと、
その時の友達とキャッチボールとかよく
…」
「友達はいたわけや？」
「その時、一人だけ友達でいてくれる子
がいて」
「へえ」
「その子とよくキャッチボールとかして、
公園で」
「へえー、ということは、家にずっとい

るのは嫌やったんや？嫌やけど学校は行きたくないし…」

「行きたくない」

「ほかに行く場所がない、みたいな状態で悶々としていた、小学校の時？」

「そう。だからおかんが買い物行くって言ったら自分もついて行って、絶対外に出ようと。おばあちゃん家行くって言ったらそれもついて行って」

「でも一人では出れへんかったんや、基本は？」

「まあ行くあてがないから、出ても」

「で、お父さんはずっと黙ったまま？」

「まあ何も」

「…で、そこぐらいから中学になるわけ？」

「小学校も行ったり行かなかったりする時期があったけど…。その時、小学校5年くらいに少年野球もやっていた、一瞬やけど」

「あ、そうなんや」

「うん。頑張っている途中でたまたま友達で少年野球をやるっていう子がいて、それに便乗して自分もちょっと行ってみたい、って自分から言って…、けどそれも結局、夏頃に行くのが嫌になって…」

「それはなんで続かなかったの？」

「まあ一番は、コミュニケーションがとるのが苦手っていうのがあって。休んで、またがんばろうかと思ってまた行くんやけど、やっぱりしんどい」

ヒロシの話の中から、お父さんとお母さんの対話がほとんどない家庭だったことがわかります。特にお父さんは、ヒロシに対してはほとんど口をきくこと、あるいは関

わりさえもなかったようです。でも、無言のまま家族は一緒に食卓を囲み、一緒に生活を送っていたのです。ここにヒロシの育った家庭の独特な事情がありました。両親が決してコトバを交わすことがないけれど、一緒にいるという状況。それはどこかベイトソンのダブルバインドを思い出させる状況であり、両親の仲がいいのか、悪いのか？あるいはそこに関係が成立しているのか、していないのか？ それらがきわめて判断しづらい状況にあったわけです。ヒロシはそんな家庭環境の中で、コミュニケーションに混乱をきたしていったのかもしれませんが。ヒロシは、次第に自分自身が他人とうまくコミュニケーションが取れないということを意識するようになっていったのです。



『幼稚園の現場から』

15・「子ども子育て支援新制度を考える」

原町幼稚園（静岡県沼津市） 園長 鶴谷圭一

マガジン11号からは、原町幼稚園の具体的な実践活動を書いているという計画でしたが、今回は脱線します。巷では特定秘密保護法の複雑さ、曖昧さを残したままの強行採決が問題になっていますが、いまどきの私どもの業界ではそれに匹敵するぐらいの変革、今後の幼児教育の行方を左右する一大事が進められようとしているからです、そのことをお伝えしようと思います。

マガジン第3号（2010年12月号）で幼保一体化の問題が勃発したことを書いていますが、その流れが民主党政権から自民政権に変わって紆余曲折を経て、消費税が8%に上がることで決定されたことを受け、現実味を持って動き出しています。

この3年間に現場もかなり変わってきました。ごく僅かだった「認定こども園」数も増え、現在準備を進めている園も目に見えて増えてきています。

子ども子育て支援新制度は、子ども・子育て関連3法という3つの法律に基づき

- ① 幼稚園、保育園への補助金の出し方を共通の給付に一本化する
- ② 幼保の機能を併せ持つ認定こども園制度を整備
- ③ 地域の実情に応じた子育て支援の充実を目指す。という内容で構成されています。しかし戦後ずっと縦割り行政のもとで幼稚園は幼児教育、保育園は養護養育を目的としてやってきた二つを一緒にしようということですから一筋縄ではいきません。

それはさておき、たとえば、あなたが専業主婦で2013年のいま、1歳のお子さんを子育て中だとしたら・・・2年後の2015年4月には3歳になって幼稚園入園の時期になりますね、利用者の立場からこのシステムを見てみましょう。

今までは、働いていたら保育園、働いてなければ幼稚園、というシンプルな選び方が前提にあったわけですが、2015年からは保護者の就労状況により、まずこどもの認定を受け、保育園も入れて合計5タイプから選ぶこととなります。（お住まいの地域に全タイプあるとは限りません）以下の表をご覧ください。

■こどもの認定

新制度になると入園前に市町村の窓口で、保護者の就労状況によって勤務証明書などを提出して事務手続きをしなければなりません。子どもは表のように「認定」されます。

（1号は園で簡易的に認定できる可能性有り）

認定区分	区分の内容	想定する保護者層
1号認定の子ども	満3歳～5歳児で「教育時間認定」を受けた子ども	専業主婦家庭
2号認定の子ども	上記に加えて「保育認定」を受けた子ども 就業時間で短時間と長時間に分けられる見込み	パート・フルタイム就業者
3号認定の子ども	0～3歳児未満で「保育認定」を受けた子ども	同上

■施設のタイプ

現在の国の認可施設は、幼稚園、認定こども園、保育園の3タイプ。

2015年からは認可施設が5つのタイプに分かれます。(まだ審議中のものもあり、今後変わる可能性もあります)

タイプ	入園対象児	開園時間	かかる費用	施設の特徴
1 現行の 幼稚園	3歳～5歳 1号認定	4時間以上 預かり有り 長期休み有り	園で決めた納付金 - 就園奨励費 幼児教育無償化案 も進行中	学校教育法に基づき教育を提供する施設。国の政策誘導で今後減少していくのでは？という見方もあるが未定 ◇お弁当&給食
2 施設給付 を受ける 幼稚園	3歳～5歳 1号認定	4時間以上 預かり有り 長期休み有り	所得に応じて行政 で決めた保育料(公 定価格) +園独自の費用	特段の申し出がなければ現在の私立幼稚園はこのタイプになる 1号認定者には幼稚園と違いは無いが 2号短時間の方は公的補助を満額受けられない可能性も・・・ ◇お弁当&給食
3 幼稚園型 認定こども園	0歳～5歳 1号認定 2号認定	11時間以上 日祝以外開園	所得に応じて行政 で決めた保育料(公 定価格) +園独自の費用	開園時間は長いですが、乳児を預かる設備がないため、給食も外部搬入で対応 長時間に対応する保育士が勤務 ◇基本的に給食(調理室不要)
4 幼保連携型 認定こども園	0歳～5歳 1号認定 2号認定 3号認定	11時間以上 日祝以外開園	所得に応じて行政 で決めた保育料(公 定価格) +園独自の費用	全てのケースの保育時間、年齢に対応できるが幼保両方の設備を備えなければならないので、数は少ない見込み ◇完全給食
5 現行の 保育園	0歳～5歳 2号認定 3号認定	11時間以上 日祝以外開園	所得に応じて行政 で決めた保育料	ほとんどの保育園は現行のまま残る見込み。現行の規則では保育要件を満たさない場合は退園 ◇完全給食
備考	途中で認定が変わっても保育園以外は退園しなくて良い	都道府県により開園時間には差がある	いずれも制服や道具、行事費などは実費	この他に、施設設備が基準に達していない無認可施設もあるが、そちらは地域の子育て支援という形で補助の対象になるかも
国の目標	全ての子どもに平等な教育と保育を提供!	認定こども園の促進により待機児童解消!	消費税により確保できた財源を子育て分野へ投入予定だが消費税10%UP実現迄は財源不足	幼稚園は文部科学省、保育園は厚生労働省の管轄という縦割り行政を解消するために内閣府で給付を一本化しようとしたが、調整過程で逆に施設が多様化してしまった。

※預かり保育とは、現行幼稚園で概ね保育日の保育後18時前後まで保護者のニーズに合わせて子どもを預かるシステムで、費用は園独自に設定、夏休み等の長期休業日にも実施する園も増えてきている。

●入園を目的に、もっとわかりやすく表にしてみました

	1号認定	2号認定	3号認定	
1 現行の幼稚園	○	原則×	×	専業主婦家庭専用の園になるイメージ
2 施設給付を受ける幼稚園	○	原則×	×	1とは納付金等の扱いが異なる
3 幼稚園型認定こども園	○	○	×	長時間預かれる幼稚園のイメージ
4 幼保連携型こども園	○	○	○	時間年齢にかかわらず全ての子どもに対応
5 現行の保育園	×	長○短×	○	専業主婦家庭と短時間勤務は不可

●利用者の立場から見ると

▲現状のデメリット

例1：幼稚園にお子さんが在園中にフルタイムの仕事をはじめた場合、祖父母などのサポートがない家庭は保育園に転園しなければならないでしょう。

例2：保育園では長子が在園中に第二子が生まれて育児休業をとった場合、保育に欠ける要件がなくなり、長子は退園しなければならないケースもあります。仕事を辞めた場合も同様に子どもも退園しなければならないになります。

▲こども園で解決！

こども園ならどちらの場合でも、こどもの認定を1号から2号、あるいは2号から1号に変更し保育時間を変更するだけで退園や転園の必要はありません。子どもにとっても園を変わらなくて良いので、気持ちも安定し、継続して教育・保育を受けられるというメリットがあります。更に、急用の場合に未就園児を預かる一時保育（園が設けるオプション）にも対応できるので、[子どもを預ける]というシステムだけ見ると、こども園が便利といえます。

▲制度全体のメリット

公的補助の平等化

現行の利用者負担（保育料等の納付金）をみると、保育園は所得により負担額が決められ、子どもの年齢によっても額が変わるので比較しにくいのですが、地方の一般的な幼稚園の保育料と同額程度で長時間の預かりと、給食、そして土曜休みや長期休みも無く子どもを預かってくれます。第二子は保育料半額、第三子は無料、入園料もありません。親の負担が軽減される代わりに公費が保育園に投入されているわけです。

同様に公立幼稚園は保育料を安く抑えています。沼津市の例（保育料）を挙げますと、私立平均約17,535円に対し公立は6,300円で、私立では約30,000円かかる入園料もタダです。逆に教員の初任給を見ますと、4大卒の差額は24,876円公立のほうが上回っています。そのぶん公費が投入されているのです。

「私立は個人が選択して入園させているからいいんだ」というのが建前でしたが、少子化対策の狙いもあって、この格差を是正しようという考えです。同時に幼児教育無償化の動きもあり、目が離せない状況です。この不平等が今回の制度で上手に調整されることを願っていますが、現状を見る限りでは難しそうです。

▲教育的なメリット！になるか？

今まで子どもを一定時間安全に預かっておけばいいんだ、という意識の園があったとすると、今後は子どもの発達のためにどんな活動を計画し、どう実施していくか真剣に取り組まなければなりません。その取り組みは「教育内容」として利用者に評価され、質の高い教育・保育を行う園が選ばれていくことになると思うのです。

新制度本来のねらいはここあると思うのですが、利用者の側に「質の高い教育・保育」とはどんなものか？ 選び取る目が必要になり、方向がずれてしまうと目先のサービス合戦や、PRのうまい園、資力のある園に人が吸い込まれ、地味でも子どもの発達に大切な教育を行っている園が潰されてしまうという懸念が残ります。

幼児教育のあり方は多様なので、どんな教育が質が高く良い教育なのかは、判断が難しいところですが、これからお子さんを入園させる皆さんは是非とも、目先のことに惑わされず、保育方針に共感できる園、園児がイキイキと活動し、保護者や保育者の関係が良い雰囲気の園を選んで頂きたいと思いま

す。その選択が今後の幼児教育界をレベルアップさせてくれると信じます。

事務屋ですから

余談ですが、新制度のことを市の子育て支援課と相談したときに「保育の質を確保できるような制度にしないと…」という話をしました。その返事をきいてがっかりしました。「私らは事務屋ですから、それは無理です。粛々とニーズ調査をして需給調整をして、国で決まったことをやっていくだけです。理念や教育のことは教育委員会で話してください」と突き放されたのです。

新制度は市町村がその実施主体となるのですが、幼稚園からこども園に移行し、この課が担当になるのかと思ったら、幼児教育の意味、ましてや質の良い保育・教育とは何かわかってくれるのだろうか？不安が募りました。

●リミットは来年夏！

端から見るとたいして変わりが無いように見える幼稚園と保育園。しかし長年縦割り行政下で監査を受け、それぞれ別のやり方で運営してきた両者は、職員の勤務態勢や会計基準から園舎の設置基準（たとえば階段の高さ）まで異なり、経営体質は似て非なるものと言えます。それを同じ土俵に上げようというのですから、非常に難しいものがあります。調整しなければならない課題は山積みで、現在も担当者の会議、そして省庁間、幼稚園、保育園各団体との折衝が進行中です。

新体制に移行しての経営計画を描くための具体的な公定価格（経営の基本となる保育料）の額が出るのが来年4月といわれていますが、施行が再来年の2015年と決まっているために、園児募集を始める来年の夏までには幼稚園として4つの選択肢の中

から1つを選ばなければならないのです。4月に数字が出て、約3ヶ月で決めて準備をして、保護者や入園希望の保護者の皆さんにお知らせして、募集要項を作り…私たちも市町村の担当者も恐らくきりきり舞いの大忙しでしょう。（内輪の話でした）

ふとした疑問

そんなにたくさん長時間の保育を利用する子どもっているのでしょうか？

沼津市には待機児童はいませんし、年度当初には定員割れしている保育園もあちこちに見受けられたのです。都市部はニーズがあるにしても、ニーズが無いところにまで同じ制度を導入する必要があるのか？多くの市町村で子どもの認定をはじめ、事務量も増えますので増員や係の新設も行われ、経費もかかるんですが…。



押してあげるね（写真と本文は関係ありません）

●気になっていること

現代の風潮では、働く親を支えることが育児支援の最前線になっています。

少子化を抑え、家庭にこもっている女性も外に出して労働者を増やし税収アップも狙う。

国の発展としては大切なことでしょう。

反面「三つ子の魂百まで」という言葉が薄れ、3歳までは親が育てることが大切だという概念に科学的根拠が無い時代遅れの考えという声が大きく

なり、育児のアウトソーシングを正当化し、「仕方なく長く預ける」感覚から、「預けるのが当然」という感覚にシフトしていく。

そういう時代だからと慣れれば良いのでしょうが、“慣れる”ということはそれまで気になっていたことが気にならなくなるということですね。そうなる前に、気になることをここで書いておこうと思います。

次の文章を読んでみて下さい。

保育園の先生が「現代子育て事情」というテーマで、ある会報に書かれたものです。

■エピソード1

現代子育て事情

『ネットの出会い系サイトで結婚相手を探して結婚し、赤ちゃんが生まれたら、スマホでゲームをしながら授乳。赤ちゃんはつぶらな瞳でお母さんを見つめているけれどお母さんの目も心もゲームに夢中！赤ちゃんがむずかかったら、スマホのアプリであやす。外に出るときは、ファッショナブルなスリングで前抱っこ（対面抱き）するので、赤ちゃんは視線をさえぎられてお母さんの胸元しか見えず、外界に目を向けることはできません。赤ちゃんが泣くとヘッドホンで音楽を聴き、泣き声をシャットアウトして過ごすお母さんもいるそうです。』

少し大きくなった子どもが言うことを聞かなくなったらスマホに鬼を呼び出して震え上がらせるといった子育てが実際にあります。親子ともども、生身の人間に関わることなく日々が過ぎていっているのです。

保育園に迎えに来ると、すぐバッグからゲーム機を出して子どもに与えるお母さんの姿も見受けられます子どもに声をかけることも、抱き上げることもありません。こうした保護者に、子どもにとっ

て大切なことを伝えようとしてもなかなか聞いて頂けません。そして画像に囲まれて過ごしている子どもは、人とスムーズに応答できない場合が多くなっているように思います。

今、保育は、子どもたちときちんと向き合い、しっかり応答してくれる人間のモデルとしての役割が大きく求められると考えます。子どもたちが、将来人と人との温かな関わりが持てる大人に育つために、保育園では親育がとても重要な課題になっていると思う昨今です。』

現場の先生が書かれたものですが、決して大げさな話でもなく、逆に多くの保護者に当てはまることでもありません。一部の人はここまで来てしまっているということで、徐々にその数は増えているよ、という事実だと思います。

もう少し現場の様子をあげてみましょう。

■エピソード2

私の園では月に2回、未就園児を対象に「ばあばとあそぼうDay」を設けて自由に遊びに来てもらっています。保育園を定年で引退したおばあちゃん先生と一緒にあそびながら育児のアドバイスをすることがねらいです。

「オムツはそろそろとったほうがいいかしら？」以前なら自分の親に聞いていたことをばあば先生に話してくれます。逆にネットで調べすぎて混乱してしまったり、原因不明の湿疹ができたので皮膚科に駆け込んだら汗疹だったという事例もあがってきます。

そのおばあちゃん先生が「最近のお母さんは、子どもと話をしないね～、砂場で遊んでいてもスマホを見ていてさ・・・」と話してくれました。子どもが砂で何かご馳走を作っても、「できたの？」ぐらいで「わー、おいしそう！」とかりアクションがない

ばかりか、一緒に砂を触らないお母さんが目立つというのです。

■エピソード3

残念ながらこの現象はお母さんだけではありません。先日私の妻（保育園副園長）がブツブツ言っていたことは「若い先生ったら、乳児に給食を食べさせるときに黙って口に運んでいるんだよ…」とカッカしていました。

若い保育士は若いお母さんとほぼ同世代、考え事でもしていたのでしょうか？乳児の口に黙々とスプーンで離乳食を運んでいたというのです。「お口あーん、おいしいね〜」など常に声をかけながら援助するように！と具体的に指導したそうです。妻いわく「こんなことまで指導しなくちゃならないんじゃない、手がいくらあっても足りないわ！」

子どもが好きで、保育士を仕事に選んだ人でさえこんな感覚で子どもと接しているのですから、スマホでゲームをしながら授乳も“ふつう”？

「だって赤ちゃん話できないじゃん、おっぱい飲んでるし」で済んじゃうかもしれませんね。

育児、保育力の低下は全国的なレベルでじわじわと進行しているように思います。

■最後にもう一つ、最近のエピソード4。

近隣の幼稚園園長に聞いた話です。園児の間で鬼の躰アプリが話題になり「わるいことしてるとオニがくるよー」という話を聞いた、少し過敏な子どもがパニックを起こして、こわいこわいと机の下に隠れて出てこなくなった笑えない話。

私の園では「このようなアプリは使わないように！」と園便りで警告を出しました。

便利さの陰で

私たちは気づいているはずですが、「子どもはそれなりに育つ」という漠然とした思いは、基本的な育児力が親をはじめ周囲の大人に備わってはいじめて成り立つ話であって、それが通用しなくなってきた「親」が増えつつあることに目を向けなければなりません。

親もしかり、自然に親になれるのではなく子育ての苦勞や喜びを時間をかけて体験しながら親として成長していけるものだと思います。

保育士も同様です、3年前に同じように黙々と乳児の相手をしてきた先輩保育士は、今は自然体で、にこやかにおしゃべりしながら0歳の乳児と“会話”できるようになっているのですから。

保育士も教員も資格や免許を持っているだけでは、ほんとうの保育者になれない。子どもとの時間が育ててくれるものなのです。

そこにきて保育時間の量的拡大を目標に、「どんどん預かろう！」「子育ては社会全体で！」という新制度が立ち上がるわけです。制度ができてしまうと、免罪符をもらったかのように預けることに何の抵抗感も感じない親が増えるのを懸念しています。親の変化は、子どもの育ちにダイレクトに影響することは私たち現場の人間がいちばんよく感じていることです。

子どもを産むだけで親になれるのか？

子どもを社会の一員として育てる責任感を持てるの？

母性本能を呼び覚ます装置は封印？

そして預かる側の仕事量は増大する見込み。

現場は対応できるのか？

保育士や教員の確保はできるのか？

これで少子化に歯止めがかかるのか？

親子関係が希薄になり、幼児教育が混乱すれば、学校教育の混乱は必至！

疑問満載で2015年に開始！

…気になることだらけです。



わあ～！！（写真と本文は関係ありません）

●良い方向へ！

子ども子育て関連3法案の理念は

「保護者が子育てについての第一義的責任を有するという基本的認識の下に、質の高い幼児期の学校教育と保育の総合的な提供、地域の子ども・子育て支援を総合的に推進する」という素晴らしいものです。

残念ながら、大多数の親が持っている願い

「子どもが小さいうちは自分で育てたい」を実現するものではありません。これを子ども目線で言い換えると「子どもは、小さいうちは自分の親にしっかりと関わって育ててほしいと願っている」それは幼稚園でも、保育園でも子どもたちを見ていると本当にそう感じますし、しっかりと関わってもらっている子どもは精神的に安定しています。

無い物ねだりをしては仕方ありませんが、全国一律で制度で決めてしまうより、それぞれの園と保護者が折り合いを付けながらきめ細かに対応できて、

そこに公的資金が投入されるしくみができないものかと考えてしまいます。

私立幼稚園団体も保育園団体も、教育・保育の質の向上を国に申し入れています。

どちらも、新しいシステム案に戸惑いを感じていることも一因ですが、保育を量的に拡大しようという流れの中で、現場で働く保育者の質の向上、モチベーションをどう保っているのか、そのための経営基盤がしっかり確保されるのか、そのことについて気をもんでいるのです。

制度が決まったら、その中でやっていくのが私たちの仕事ですが、「育児の外注」的意識が保護者にも保育者にも、経営者にも生まれないように注意していくことと、間違っても教育がサービス事業化しないように、理念を支えるシステムを構築させていかななくてはなりません。

私たち幼稚園関係者は、今後各市町村で細かい制度を決めていく「地方版子ども子育て会議」において、しっかり良い方向へ進んでいくように関わっていくつもりです。

これを読んで下さった皆さんも、子どもたちの親子関係、未来について「何が必要なことなのか」興味を持っていただき、行政のパブリックコメントなどで意見を述べて頂けることを願っています。



ツルヤシュイチ

(幼稚園勤務32年/うち園長11年)

<http://www.haramachi-ki.jp>

mail : osakana@haramachi-ki.jp

福祉系 対人援助職養成の 現場から^⑮

西川 友理

「将来、自分がやりたいことの勉強になると思うから」と、どちらかというコミュニケーションが苦手な学生が、学校が主催した、1年間（20回）のボランティアプログラムに参加しました。

果たして1年間のプログラムにこの学生が耐えられるのかと当初は不安でしたが、ボランティア先の職員の方々と充分に話し合い、フォロー体制をしっかりとった上で実施することにしました。

1年間、色々考えたり、話をしたり、時には泣いて帰ってきたり、といったこともありました。何とかプログラムも終了。終わった頃にその学生が、言いました。

「1年やってみて、ちょっとあれっ？と思ったことがあります。」

「何ですか？」

「えっと…その…。親と、普通に喋れるようになって、家に居やすくなりました。」

「…へえ、そっか。」

「いや、このプログラムのせいかどうかはわからないけど、…でも、このプログラムのせいっていう気がします。」

「ふうん。」

「このプログラムのせい、って言うか、このプログラムのおかげ、ですね。」

「あー。うん、『おかげ』のほうが嬉しいです（笑）」

自分で自分の目的を決める

以前、対人援助マガジンの10号に「教えると言うより、気付きを待つ」ということを書きました。学生が気付きを得られるように、多種多様な見方、考え方、知識に触れることが出来る環境を整えることが大切、という内容でした。

その後、「気付きを得やすい学生には、共通点がある」ようだと感じるようになりました。その全員がそうだとは言えませんが、彼らは大体、何らかの目的が定まっているように思います。

人間関係や家庭環境、経済的状況がどうかといったことは、学生の生活にももちろん大きな影響があるのですが、そういった事とはあまり関係なく、目的が定まっている学生には、気づきが起こりやすいように思うのです。

足元の状況がどうであれ、見定める先が明確だから、視界が開けている、という感じでしょうか。

進んだ先に何があるのかを展望できる人と、展望できない人の違いは大きいです。とりあえずここにいる学生と、この先を見定めて学んでいる学生の違いは明らかです。

目的がないから自分が何者かわからなくて不安。自分が何者がわからないから、目的を定められない。

そういう学生には、いきなり明確な目的を設定することではなく、まずは小さな目標を設定することを指導します。

例えば時々、授業で提出物を課す時に、提出期限を学生本人達に決めさせます。

「〇日には書類がないといけない。それに私が提出物をチェックするのに2日間は必要。ただし、早めに提出してくれたほうが、当然丁寧な指導は出来る。こういう条件で、いつ提出するか、自由に提出日時を決めて下さい。昼休みまでにいつ提出するか言いにくること。」

学生は当初、好きな時に提出していいと聞いて喜びます。

「あせらんでええやん！」

「バイトとかの予定もあるしな！これ助かるわ。」

この方法を数回繰り返します。

「先生、俺今回は提出めっちゃ早いでしょ！内容も頑張りましたよ！」

「ああ、提出期限守れなかった…私なんです〇日って言うてんやろ…。」

やがて学生は言います。

「先生、自由に提出日を決められるって事は、その分の責任が全部自分にかかってくるって、めっちゃ実感する。」

「自分で決めるって結構しんどいねなあ。」

「でも、自分で決めたほうが、自分で守ろうって思うな、なんか。」

「達成できたら、やったった！って気分になるしな。」

そのほかにも「今学期、2つの科目の成績を上げる」「来週は遅刻ゼロ」などの目標を考えさせる事等があります。時には「明日の特別授業に絶対遅刻しないために、今晚、絶対に11時に布団に入る。そのために、他の用事を10時半までには済ませる」という目標を設定することもあります。

とりあえずはそれを実行するために動く。

もちろん、上記の例のようにすべて上手くいくわけではありません。けれど、「自分で設定した目標を自分で達成するために頑張って、達成する」といった成功体験を繰り返すことで、

「目標があると、結構頑張れる。」

「しかもそれが自分で決めた目標で達成できると、結構気持ちいい。」

という事を学び、習慣化していくように感じます。

そしてやがて、おぼろげながらも目的を見出し、それらにむかっていくつかの

目標を自分で設定し、どんな手段をとるべきか、ということを実感として学んでいくようになります。

目的を設定する難しさ

メジャーリーガーのイチローが大記録を達成したり、不調のどん底にいたりすると、マスコミはそれらを書きたて、大騒ぎします。しかし当の本人は、どんな記録を出しても、どんなに不調でも、表立ってそれほど興奮したり動揺したりしているように見受けられません。これは、イチローが自分の中の目的を見定めているからではないかと思うのです。

もちろん、学生達にも、今までの人生で目的を持つ事は沢山あったと思います。定期テストや発表会でよりよい成績をあげることや、高校・大学などの受験、あるいは誰かの誕生日に相手を喜ばせる事などです。

でもそれらは、「何がどうなれば達成」ということが明確な事柄が多かったのではないのでしょうか。

ですが、自分の将来については「何がどうなれば達成」という決まった形がありません。目的も、達成のあり方も、自分で決めないといけません。特に、何が常識なのか、何が正しいのか、複雑になった現代社会において、明確な目的を持つことは、とても難しいことです。しかし、それはその人の成長や生き方において、とても大きな意味を持つのです。

再び、 教えると言うより、気付くのを待つ

対人援助マガジン 10号には、「親に言われて来ただけやもん。」と言って、退学した数年後、結局対人援助職に就いた学生の話を書きました。今思えば彼女は、将来なりたい姿やしたい事という“目的”がなかったから、在学中、あんなにやる気がなさそうだったのだと思います。退学後、どこかで“目的”を見つけたのでしょうか。

雑多な環境の中から自分で見つけ出していく時、様々な不安があるかと思えます。しかし不安は常に可能性を秘めています。

教員はその可能性を信じて、教えると言うより、気付くのを待つ。

その気付きへ至るヒントとして、“目的を定め、目標を設定し、手段を考える”の流れを伝え、習慣付けを促すことは、必要だと思うのです。

話は変わりますが…

ところで、私は業務上、上記の「待つ」とは全く逆のことをしなければなりません。

それは、教員として学生を定期的に評価することです。

今年8月に開催された、日本社会福祉教育学会の第8回大会の際、その開会式で会長の川延宗之先生から、「評価方法が変わると、授業内容が変わります。」という発言がありました

最近私は「学生を評価する」とは一体どういうことなのかについて、気になります。

高等教育機関では、それぞれの科目の

評価方法や達成目標は、年度初めに渡される、授業概要とか、履修案内とか、授業シラバスといった名前の“授業の内容を案内する冊子”に書かれています。学生はこれを読んで、その科目を履修するかどうかを決めます。中にはそれを全く見ずに履修を決める学生もいますが、少なくとも、それらは学生に提示されます。

ここに書かれている評価方法や達成目標は、学生が自ら設定するものではなく、教育者側が、「これをここまでクリアしなさい」と与えるものなのです。

教育の違い 評価の違い

教育の定義にも色々ありますが、今回は「ある人間を望ましい姿に変化させるために、身心両面にわたって、意図的、計画的に働きかけること(デジタル大辞泉より)」とします。

仮に、わが国にある、家庭と地域以外で行われる教育、いわゆる「教室」と呼ばれる場所で行われる教育について、3つの型に分けて考えます。1つは“義務遂行型教育”、1つは“資格取得型教育”、1つは“学習支援型教育”です。

1つ目の“義務遂行型教育”は、教育を受ける権利を保障するために、国民に義務として課されている教育、いわゆる義務教育を指します。教育は国民の義務を遂行するために実施します。

2つ目の“資格取得型教育”は、学生に「専門士」「短期大学士」「学士」など何らかの学位、あるいは「保育士」「調理師」「薬剤師」など何らかの資格を与えるために実施します。

3つ目の“学習支援型教育”は、例えば市民向けの絵画教室や法律講座、勉強会や趣味の教室のようなものです。教育は、学習者が自分の能力を伸ばしたい、興味を満たしたい、知識を得たいという学びへの願いを満たすために実施します。

次に、それぞれの教育における評価について考えます。ここでは、教育者側が学習者側に対して行う評価を検討してみます。

“義務遂行型教育”における評価については、平成22年の『小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について』という厚生労働省の通知があります。

これを見ると、学習評価の基本的な考え方は、きめ細かな指導の充実をはかったり、学習指導要綱に示す目標に照らした実施状況を把握したりする等のために評価する、といったようなことが書かれています。

つまり、それまでの教えてきた事が「生徒達にどう伝わっているか」という教育効果を、教育者が振り返るための評価であり、その評価データをもとに、「今後どのように教育をしていくべきか」を考えるために行われるもののように見受けられます。

学習者がどう修得したかというよりも、教育者がどう教えたかをはかる自己評価と言えます。

そもそも小中学校においては、通知表を作成することについて、実は何の法的根拠もなく、作成するかどうかという事

も学校の任意であるとの事です。ですから、まれに通知表がない学校もあるそうです。

とはいえ文部科学省によると、現状としては多くの学校で、「保護者に対して子どもの学習指導の状況を連絡し、家庭の理解や協力を求める目的」で実施されています。

“資格取得型教育”については、習得しなければならない単位や受講時間数、あるいは資格試験などが、明示され、これに基づいて評価されます。このシステムにおいては、課程として設定されている一つ一つの科目について、それぞれ「この学生は充分習熟できており、修了条件を満たしている」という証明をするための評価をしなければなりません。資格取得型教育に関する通知表の作成や、評価の公表について書かれているこれといった文書は今回見つけられなかったのですが、「資格取得までには、後これだけ必要」と学習者に習熟度を示す事は必要かと推察されます。

教育者がどう教えたかというよりも、学習者がどこまで修了条件を満たしているのかをはかる評価とも言えるかと思えます。

“学習支援型”については、学習者の満足が得られれば良いのですから、教育者からの評価は不要です。学習指導要綱のような明確な評価基準ももちろんありません。

学習者への評価の在り方

1981年、中央教育審議会は『生涯教

育について』という答申の中で、わが国で行われているあらゆる教育の基盤となる理念として「人々が自己の充実・啓発や生活の向上のために、自発的意思に基づいて行うことを基本とし、必要に応じて自己に適した手段・方法を自ら選んで、生涯を通じて行う学習」、いわゆる生涯学習を規定しています。生涯学習のための教育が生涯教育です。ですから、上記の分類は、生涯教育を3分類したにすぎません。

生涯教育の定義を見ると、生涯教育は本来評価する事にそぐわないものであるという気がします。

しかし、私のような福祉系対人援助職養成校の教員は、“資格取得教育”を実施するため、評価をする事が必須となります。

学習者達は、めでたく資格を取得したあかつきには、専門性を向上させるために自己研鑽を続け、それを支援するための“学習支援型教育”が必要となります。

このように、評価が必ず必要な教育を行う中で、その後、他者評価が存在しない教育につなげるということが、果たしてどれほどまで可能なのか、という点も考えさせられます。

“評価方法が変わると、授業内容が変わります”と言われたように、日々の授業内容さえ左右してしまう評価。これについてどう考えたらいいのか、今後さらに考察を深め、またいずれかの機会に文章にしたいと思えます。

先人の知恵から

3

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

今回で3回目になる。先人の知恵を子育てに活かせればと始めたが、中々あ行が終わらない。それだけ多くの諺があり、それぞれに使われ続けてきただけの重みや、納得がある。

言葉を省略し、外来語も日本語もごちゃ混ぜになっている若者言葉。それはそれで、新しい文化だとは思ふ。でも今少し昔ながらの言葉を大事にしてみよう。スマホやパソコンでも諺は調べられる。時にはそんな諺に触れてみて欲しい。

今回は次の7つ。

- 能^{あた}わざるに非^{あら}ず、為^{あた}さざるなり
- 有^あっても苦^く勞^{らう}、無^なくても苦^く勞^{らう}
- 虻^{あぶ}蜂^{はち}取^とらず
- 雨^{あめ}だれ石^{いし}を穿^{うが}つ
- 余^まり円^まきは、まろび易^{やす}し
- 飴^{あめ}と鞭^{むち}
- 雨^{あめ}降^ふって地^ち固^かまる

<能わざるに非ず、為さざるなり>

物事を実現できないのは、それが不可能だからではなく、やろうとしないからである。能力があっても実行力や意思が足りないことをいったもの。「能^{あた}う」はできるという意。出典は「孟子」(王の王たらざるは為^{あた}さざるなり、能^{あた}わざるに非^{あら}ざるなり。)より。

現代社会では、何事も簡単に諦^{あきら}めてしまう風潮が強いように思う。正規に就職して直ぐ転職したり、フリーターになってしまう若者も多い。自分の頑張^{がん}りが必ずしも報われるわけではないし、例え頑張^{がん}って起業した所で成功するのはごく一部と分かっている。大企業があっけなく潰^{つぶ}れるなど、何を信じればよいのか分からないし、やる気を失わせるような事柄も多いため、「やってみよう」という冒険

心からは遠ざかりがちである。

特に家庭を持ってしまえば、チャレンジしようという気持ちは半減するだろう。何とか無難に定年までと思ったとしても責められない。大人にそういう気持ちがあるのは理解できる。

しかし、子どもたちは、もっともっと冒険心を持って良いのではないか。どうも大人の気持ちが子どもたちにも伝染しているように感じる。

失敗を恐れるあまりか、受験でも、程々にしかチャレンジしない。学校でも失敗しないように、確実な進路を指導する。

学校カウンセリングをしていると、自分の能力に限界を引いてしまっている生徒によく会う。しかも、中学1年の段階で、もう諦めている。まだまだ、どこまで伸びるか未知なのに。

大学受験も同じである。一浪しても、行きたい大学に行くという強い気持ちを持って受験する子が少なくなっている。一浪は親に反対されているからとか、親にこれ以上迷惑を掛けられないからとか、一浪すること自体がとても悪い事のように認識されているようだ。確かに金銭面では負担を掛けるだろう。しかし、一浪することで、大きく力を付ける子どもも多い。

自分の力を早くから見限っているようでは、夢も希望もない。自分の夢を叶えようという気持ちをしっかり持って、失敗前提でチャレンジしてみてもどうか。そうすれば、おのずと道は開かれると思う。自分の力・能力と言うのは、自分が気付かないところにあたりもする。父母にも子どもたちにも、そこに気付いて

ほしい。

また「面倒くさい」と言っただけは、浮草のごとく漂って、流され放題の子どもたちも度々見かける。こうした子どもたちに、「やってみなきゃわからない！」と言うことを分からせるのはとても難しい。小さい時に持っていた夢のかけらでもあれば、コーチング手法で引出し、前向きにさせて行くことも出来よう。何とか、やる前に諦めてしまう子や、初めから「為さざる」子どもたちを減らしたいものだ。

＜有っても苦勞、無くても苦勞＞

財産と子どもは、あればあるでそれ相應の苦勞があるし、なければないで苦勞するということ。

お金があって困るなどと思わないのは、大してお金を持っていない我々の話で、お金持ちの人は何かと大変らしい。土地をたくさん持っているのに現金が無い家もある。年収何億もあるような人は、税金も多額になるだろう。豪邸に住み、スーパーカーに乗って、ブランド物の服飾で固めていても、必ずしも満たされているとは限らない。お金目当てで寄ってくる人も多いだろうし、その中から友や信頼できる人を見分けるのも大変そうだ。

お金が無くて困るという人のことは良く理解できる。生活保護を受けている人は確実な収入があるので生活に困る事は無いが、低所得世帯では、生きること、食べることそのものに支障がある。電気やガスを止め

られ、学校給食が唯一の食事という子どもたちも未だに見かける。

前述のとおり、財産の有無は必ずしも人の幸不幸に比例しない。「貧しいながらも楽しい我が家」は未だに健在だし、財産があっても不幸な家はある。

一方子どもの有る無しも、様々な影響を人に与える。

結婚しても子どもが中々出来ないと、両親・親戚・友人から「まだ出来ないの?」「もうそろそろ・・・。」などとプレッシャーを掛けられる。不妊治療に走る夫婦も多くなった。しかも治療に向かう時期が結婚後2年などと早い人もいる。高齢の場合とはかく、まだ待ってもよさそうな時期から受診する。そんなこともあるからできちゃった婚（授かり婚）が良しとされるのかもしれない。実際できちゃった婚や入籍前に妊娠しているケースは5割にもなる。

子どもがどうしてもできない場合で子どもが欲しいとなれば養子をとることも可能である。子どもがいて初めて家族としての形態が整うと言えばそうかもしれないが、夫婦だけでずっと仲良くやって居る家族もあるので、子どもがいなければいけないという考え方も堅すぎるだろう。

最近の平均的な子どもの数は2名弱だが、多産の家もある。テレビでは子どもが15人の家族の話を放送していた。子ども手当や児童手当がかなりの額になるとはいえ、一人一人にかかるお金を考えたら、それは大変だろう。食費や教育費だけでも莫大になる。

では子どもが一人か二人なら問題ないのかと言えばそうとも言えない。何人であっても、子育てと言うのは苦勞の多いもので

ある。一人の子育てで手一杯になっている母親も多々いるのだから、子どもがいるだけで苦勞ということになる。

有っても無くても苦勞なら、どっちが良いか?

要は考え方だろう。「若い時の苦勞は買ってでもせよ」とも言う。特に子育ての苦勞は、実りあるものだから、惜しまないでほしいと思う。

＜虻蜂取らず＞

欲張って二つのものを同時に手に入れようとしたために、結局はどちらも得られず失敗すること。

「二兎を追う者は一兎をもえず」も同じ意。

母親たちに「どんな子に育ててほしいか?」と尋ねると「優しい子になって欲しい」と答える方が多い。意地悪な子になって欲しくないのは当然だから、そういう気持ちは分かる。しかし少し大きくなると、自分の考えや意見を押し通せない「優しい子」の様子に、母親は「大丈夫だろうか?」と心配になる。

母親の思い通りの子になろうと、「大人しくて、優しくて、言う事を聞く子」になってきたのに、大きくなったら、「積極的で、自分の意見を言える子」を望む。子どもはどのような子になればよいのか見失うだろう。

優しい子? しっかりした子? 大人しくて親の言う事をよく聞く子? 元気な子? はきはきした子?

相反する性格を一度に持つことはできないし、親がいくら望んだとしてもその通りになるとは限らない。大人しい系になるか、元気系になるか、二つに一つ。自然に任せ、押し付けないことが大事。

英語では・・・

Between two stool the tail goes to ground. (二つの腰掛けの間で尻餅をつく)

If you run after two hares, you will catch neither. (二兎を追う者は一兎をも得ず)

<雨垂れ石を穿つ>

どんなに小さな力でも、根気よく続けていればいつか成果が得られるということのたとえ。「石の上にも三年」も同意。

この諺は比較的よく知られており、努力を継続することの大切さを言っている。

時代が早さを求めるようになってからと言うもの、会社などでは「即戦力」が新人に求められるようになった。しかし、一つ一つの事に時間が必要な人もいるし、時間をかける必要があるものも多い。子育ては正に時間を掛けなければならない代表であろう。

日々の小さな努力が、何年も何年もかけて、卵から赤ちゃんへ、そして子どもから大人へと人を育てて行く。

子育ては失敗の連続かも知れない。絵に描いたような大きな愛で包み込んであげられるほど、親に余裕がある筈もない。子育ての成果は自立して初めてわかるようなも

ので、それまではどうなるのか分からない。母親たちが不安になるのももっともな話だ。

本当に小さな愛でも、続けて与えて行けるなら、子どもはまっすぐ育ってくれるだろう。

根気よく続けることが苦手に思える多くの子どもたちのために、大人が見本を示して行かねばならない。

英語では・・・

Constant dripping wears away the stone. (たえず垂れ落ちる滴は石にさえ穴をあける)

<余り円きはまろび易し>

人間はあまり温和すぎてもいけない。どこかぎりとした所があったほうが良い。

「円き」は、円満、温和、やさしいの意。「まろび(まろぶ)」は、ころぶ、ひっくりかえる、倒れるの意。少しぐらい角がないとおもしろみにも欠けるし、人につけ込まれやすいということのたとえ。

「まろくとも一角あれや人心、余り円きはまろび易きぞ」からとられた。

子どもたちを優しい子、大人しい子に育てる保護者が多いためか、或いは保護者の目が行き届きすぎるためか、子どもたちが本当に大人しいというか覇気が無いというか……。父母に対して、心配を掛けたくないからと気を遣い、一人で悩んでいる子がいる。子ども同士でも揉め事を嫌い、相手にひたすら合わせている子がいる。そんなことを続けた子どもが、思春期後期になって急に学校不適應や

抑うつ状態などで、カウンセリングに来る。

特に思春期の反抗は、無いと困る。親に向かって「ウザイ」と言えないようでは、親を超えることはできない。親もそれに対し、「来た来た！」と受け止めること、同レベルで戦わない事が大切だ。子どもの反発を押さえつける力関係のままであれば、子どもは再び従順な状態になってしまう。そのまま大人になってしまったら、社会に出ても強いものに服従するようになるかもしれない。その強いものが良い方向に導いてくれるならまだしも、大抵服従するだけの人間はスケープゴートにされるなど、余り良い思いをしないのではないかと思う。

親や上司に対してであっても、友人に対してであっても、言うべきことは言える子に育てることが大事である。

< 飴と鞭 >

しつけなどをする場合に、甘やかす面と厳しくする面との両方を兼ね備えていることのたとえ。また、一面では人をおだてたり利益で誘ったりし、一面では力で脅したりして人を支配することにも言う。

昔は、子育てや教育の場面でこの言葉を良く聞いたものだ。しかし最近では余り聞かなくなった。「鞭」に虐待の様な嫌な印象があるからかもしれないし、「鞭」そのものになじみが無くなったせいもあるだろう。

虐待について世間で大きく報道されるようになり、子どもを叩くことは「虐待」であると思われるようで、母親が「叩いちゃ

いけないと分かっているのに叩いてしまう。もう虐待ですよ。」と語る。

叩く親はすべて虐待なのだろうか？親だって人間であり、理性や道德だけでは制御できない時がある生き物でもある。感情に任せて怒鳴ってしまったり、何度繰り返しても言う事を聞いてくれない時に、手が出てしまったりしても責められない。一生懸命子育てをすればするほど追いつめられ、苦しくなってしまうのだ。

子育ての相談では、「殴ってはいけない」とは言うが、「絶対に叩くな」とは言わない。叩いている親に叩かないで済む方法を考えてもらう事と、何故感情的になってしまうか、子どもにイライラするのかを考えてもらう方が大切だ。そして、叩くという『鞭』の対極にある「褒めること」「認めること」「抱きしめること」等の『飴』を如何に増やすかを考えてもらっている。

また、最近の教育現場や家庭では、「飴」ばかりで「鞭」に当たるものが見られないか、体罰や虐待などの間違った「鞭」ばかりが見られることがある。

「褒める・認める」という「飴」と、「叱る・注意する」という「鞭」の量と質が問題である。バランスよく、良質なものを、適度に与えられれば、子どもは上手に躰けられるだろう。

学校でも家庭でも今一度「飴と鞭」の「量と質」を検討してもらえればと思う。

< 雨降って地固まる >

人は雨を嫌がるものだが、雨が降ったあ

とは、かえって土地が固く締まり、よい状態になる意味から、揉め事の後、かえって良い結果や安定した状態を保てるようになることなどのたとえ。

以前よりも丈夫になる)

子育て中「雨が降る」ことは多々あるだろう。「雨」と言っても「揉め事やトラブル」などの事である。ママ友関係でも、最近ではスマホのラインでやり取りをするようで、その結果関係性がこじれることがある。高校生や中学生の問題と同じことがママ友関係でも起こっている。

高校生向けの講演で、人間関係は修復できることを度々伝えている。というのも、子どもたちが、ちょっとしたすれ違いだけで友人関係を完全に切ってしまうのを見てきたからである。

喧嘩をし、意見をぶつけ合った後、仲直りした関係は、喧嘩をする前よりずっと強くなっている。

人間は「謝ること」と「許すこと」が出来る生き物である。それが又人らしさでもある。他の動物では、勝ち負けの結果として服従か勝った方のテリトリーから去ると言う形をとるしかない。唯一人間だけが、「謝ること」「許すこと」が出来るのである。

雨はどこにでも降る。関係性がどんなにこじれたとしても、又日がさすとき、仲直りできる日は来る。「謝り」「許す」ことでより良い、より強い、そして対等な関係性を築いて欲しい。

英語では・・・

After a storm comes a calm. (嵐のあとに凪が来る)

A broken bone is the stronger when it is well set. (うまくつながれば折れた骨は

不妊治療現場の過去・現在・未来

<最終章>

家族の変遷と無限性

荒木晃子

第12章 あの日

「ありがとう」

ぼろぼろと、ことばが、彼女のくちからこぼれおちた。

「うまくいえないけれど、ほんとうに、ありがとう」

はにかんだ笑みを浮かべ、涙がひとすじ頬をつたう。

「よかった・・ほんとうに、あなたに読んでもらって、よかった・・」

自分に言い聞かせるように、安堵の表情でそうつぶやいた彼女を確認し、ほっとする。共に泣き・笑う、互いの顔がおかしくて、おもわず同時に声を出し「フッフ」と笑みをかわした。

「これで、やっと“私のお話”ができる」

B子さんは、そう明るく言い放ち、間髪をいれず語り始めた。

「1.17」のつめあと

「あなたが指摘した、裁判の“初め”と“終わり”に、私が書いた文章のことだけど」

これまでに、耳にしたことの無いB子さんの声色だ。事務的で、ある意味、厳しい口調にも聞こえる。おもわず身が引き締まる思いがした。

「おそらく、そのことについて話すことが、“あなたに聴いてほしかったこと”につな

がるような気がする。きっと、それが、“私が言いたいこと”なのかもしれない、とも思う。勿論、話してみないとわからないけれど」

聴きながら、顔がこわばり、緊張しているのが自分でも分かる。私の様子を察してか、B子さんは、少しだけ笑顔を見せた。

「あの裁判が終わるまでは、確かに、私には家族があったの。いま思えば、夫がいて妻がいる、みたいな典型家族。義理の関係だけれども、それでも家族で。そこには嫁姑の確執や、小姑と呼ばれる義理の姉妹もいたわね。たまに、実家に里帰りすると、羽を伸ばして両親に甘えることもできたし・・良いことも、そうでないことも、ぜんぶまとめて、カ・ゾ・ク、みたいな、典型的な家族だったと思う」

ここまで話すと、彼女は一旦話を切った。次に、神妙な顔つきで、ゆるりと椅子を引き寄せ、持参したペットボトルで喉を潤す。

「あの裁判の最中に阪神淡路大震災が起きた。今から17年前に起きた大地震よ。知ってるでしょう？あの日、1月17日の早朝、自宅で休んでいた時のことだった。カレと二人で、散乱した部屋からおもわず外へ飛び出すと、道路が盛り上がり通行不能になっていて、部屋に戻った。自宅マンションにも亀裂が走り、水道・電気・ガスすべての生活機能がストップしたわ。幸い建物の

倒壊は免れそうだったので、余震の中、携帯で互いの家族の無事を確かめた。忘れてはいけないし、忘れられないほど恐ろしい思いをしたわね、あの時は。みんなそうだったと思う。震災を経験した人たちが、みんなそうであったように、私たち家族も全員、震災の被災者だった。たくさんの方々が犠牲になった中で、命が助かっただけでもよかったね、って、直後は家族で喜びあってたんだけどね。・・実は、本当に大きく揺れたのは、そのもっとあと。ずいぶん時間がたってからだったのよ」

何も言わずに首をかしげ、瞬きを繰り返す私の目は、彼女を食い入るように見つめたままだ。

「あ、揺れといってもね、地震の揺れじゃないのよ！もちろん、家業や他にも、それぞれに地震の膨大な影響も受けてみんな大変だったし、実際に、その後の余震もずいぶん長い間続いていたんだけど、その揺れじゃあなくて・・そうね・・強いて言うならば、“私に起きた二次災害”、とでもいうのかしら？ “その揺れ”が原因で、家族に亀裂が走ったの」何か質問はない？とでも言いたそうな、確認する視線を感じた私は、急いで首を横に振る。いまは話を遮りたくない。

「あの頃は、みんなほんとうに大変だった・・家族を失った友人や、住む家を失った知人などに、できる人が、できるだけ支援を心がけていたわね。私もカレも、同じ思いだったと思う。一時期などは、もう、裁判どころじゃない、って感じ。そんな時・・」

ことばが詰まり、一瞬すべての動きが止まったかに思えた。息をすることさえも忘

れた瞬間だった。B子さんの目が、私からそれた。

「私」に起きたこと

「震災後、復興に皆があくせくしていた時、ひとりの女性が、カレに助けを求めたの。カレが時折、夜の接待で利用していた飲食店で働いていた女性だったと、あとから聞いた。被災地の中心部で一人暮らしをしていたらしく、その近辺の取引先に支援物資を届けに行くついでに、何かと援助していたらしい。その辺りの話までは、元々何でも話す夫婦だったし、男性・女性関係なしに互いの交友関係はオープンだったので、情報として知っていた。“こんなときだから、助け合わなきゃね”、って話もしていた。でもね、その後・・といっても、まだ半年もたたない時期のことなんだけど・・実は、カレがその女性と関係をもち妊娠したことを、カレから打ち明けられたの」、おもわず全身が硬直した。握りしめた両手のこぶしに汗がにじみ、爪が手のひらに食い込み痛い。同時に、ひやりとした感覚が額に走る。それらは、いま、私が冷静さを保つために必要でもあった。自分でも気づかぬうちに結んだ唇をかみしめていた私は、微動だにせず、彼女の次のことばを待った。

「ショック・・だけでは済まされない、もう、言葉にはできないほどの衝撃だった。一瞬、目の前のカレが“何を言っているのか”分からなかったし、それが“どういうことなのか”も全く理解できなかったと思う。ほら、よく言うでしょう？ “一瞬、アタマノナカガ真っ白ニナル”って。そんな感覚だったわね～」

凍りついたまま、一言も発することができ

ない。奇しくも、聴き手の私自身、何も反応できない状態にあったと思う。

「ごめんなさいね、こんな、ドロドロした話で・・・」

そらした目線は、いつのまにかこちらへ向かい、様子をうかがっているようだ。フィードバックもなく、見るからに緊張した様子の聴き手を気遣い、反応を確認しているのだ。咄嗟に、アイコンタクトで了解のメッセージを送り、あらためて気を取り直し、姿勢を正す。せめて、「大丈夫です。安心してお話してください」のひとことを伝えたい。しかし、気持ちとは裏腹に、その時私にできたことは、ぎこちない笑顔で、まるで子どもがイヤイヤするように首を左右に振るのが精一杯だった。

「ありがと・・・じゃあ、話を続けるわね？」あわてて、左右に振っていた首を縦に振る。すでに、話の主導権は話し手にあった。

「そう、少なくとも、私にとっては、単なる“夫の浮気話”や、“夫が家庭の外に子どもをつくった話”では済まなかった。場所は、時折ふたりで宿泊するお気に入りの常宿だったんだけど、話を聞いた後は、息苦しいというか、息ができなくなって・・・もう何も考えられなくなってしまい、それ以上話すこともできず、夜中なのに部屋を飛び出し、車を運転しひとりで自宅へ戻ったの。その夜の記憶は定かではないわ。いったい、どの道を通して、どんな格好で帰宅したのかもよく覚えてないの。よく無事に帰れたなあって思うほどよ。ね、変な話でしょ？ただ一つ覚えているのは、身体の震えが止まらなかった、ってことだけ。ハンドルをもつ両手が震えて、身体中から汗が噴き出して・・・さむくて、さむくて、初

夏だというのに、歯がガチガチ音を立てて震えていたのを覚えてる。そうね・・・大震災に遭遇した時よりも、震えていたわね。

そう、こんな風に」

彼女は両手を差し出し、広げた手のひらを、でんでん太鼓を振るように振って見せた。それから、じっとみつめる私の目線を捉え、笑いかける。

「ね？すごいでしょ？でも、決して、大袈裟じゃあないのよ。本当に、こんな感じで、身体中が震えていたの。それがしばらく続いたかなあ・・・まあ、それから10日間ほどは、私にとって地獄の日々だった。少しオーバーに聞こえるかもしれないけど、その時の私にとっては、そうとしか思えなかったのよね。まあ、あれ以上に辛かったことはない、今でもいえるほどだから、余程だったと思う」

話し始めた頃は、開いた口から洩れることばは重く、静かだった。しかし話が進むごとに、徐々に、普段のB子さんの軽快な口調が戻り、表情も豊かになりつつあった。逆に、私にとって、彼女の話はあまりにも衝撃的で、返すことばも、どう反応してよいかもわからない状態が続いていた。私は、自身の五感にたより、その反射に身を任せることにした。

「ホント言うとね・・・その10日の間に、私はもう“いない人間”なんだ、って考え始めてた。子どもも産めないカラダでは、生きている資格がないんだって。その女性がカレの子どもを産んだら、私はきっと邪魔になる。自分は死んだ方が、みんなの為だって。いま考えると、自分でも怖いくらいの発想なんだけど、でも、その頃の私には、そうとしか思えなかったの。“産めない

子宮”が自分の身体の中にまだ残されていることさえ、耐えられなかった。自分ひとりでは昇華しきれない悲しみや怒り、そして孤独感にとらわれていたから。でも、今ならわかる気がする。自分が自分でなくなるとか、自分を見失うという感覚が。例えば、不妊治療の結果、医療事故に遭い、裁判の公判中であっても、大震災で大変なことになっていても、カレと二人なら頑張れたし、どんなことがあっても平気だと思っていた。子どもがいなくても、私は“ひとりの女性として”充分幸せだったし、不妊治療していることで、まわりみんなが私の努力を認め、不妊であることを許してくれていたような気がしていたのね。そのことを知るまでは。その女性の存在を・・・ん？ちょっと違うな・・・ああ！そうだ！他の女性が“カレの子どもを産む”と知るまでは、よ！だって、それは、ずっと私が“自分の命をかけて願い続けていた”ことだったんだもの。それが、一番つらかったのよね・・・きっと。そこから自分を取り戻すまでは、容易ではなかった。特に、それを知った直後はね。しばらくは、そうねえ・・・少なくとも、その地獄の日々？の間、昼も夜も、ずっと泣き続けていたくらいだから。そう、まったく眠ることができなかったの。きっとその時に、もう、一生分の涙を流したかもしれないわね～。食事ものどに通らず、一睡もできなかった。一切何も手につかず、ただ泣いてばかり・・・今でも、思い出すと、ちょっと辛いかもしれないわね。というか、その頃の自分を“かわいそうだったな”って、最近、やっと思えるようになってきたかな？う～ん・・・ちょっと違うかもしれないなあ。ああ！そうよ！たった今、話しな

がら、既にそう思えるようになっていたんだって、わかった気がした」。

それまでに、彼女のことばは何度か途切れていた。なのに、やはり何も返せてはいなかった。話の途中、「そんな・・・」とか、「えっ?!」といった、相槌とはいえないほどの感嘆句をはさむだけが精いっぱいだったのだ。考えが脳裏に浮かぶ間にも、沈黙の時間が流れる。「えっと・・・でも、どうやって・・・」、しどろもどろに発した私のことばを、まるで何も聞こえなかったかのようになり、彼女が勢いよく遮った。

関係性に見る本質

<友>

「その話を聴く前、もちろん震災の後だけど、私は積極的に避難場所になっていた母校の体育館に支援物資を運んだり、仲の良い近所の友人たちと共に支援活動に精を出していたの。それが、ある日を境に、突然連絡を絶ったもんだから・・・特に仲が良かった友人たちが心配して、私の安否を確認し始めた。玄関のドアをたたいたり、留守電にメッセージを入れたりしてね。それでも何も反応がないので、終日カーテンを閉じたマンションの自宅へ、ベランダを乗り越えて訪ねてきてくれたり・・・ほんとに、ありがたかった！実はね・・・さっき話したと思うけれど、その頃、これ以上生きていくのが辛すぎて、どうやって死のうかと考えていた時期が、一瞬だけあったの。ある日、自分の下腹部を刺すつもりで包丁を握っていたら、突然友人が訪ねてきて・・・もし、あの時彼女が訪ねてこなかったら、今の私はなかったと思う。悲しみを誰にも言えず一人で抱えていたし、自分の身体を

恨んでもいた。苦しくて、生きていることを忘れたかのように、ただ泣き続けていた私は、彼女たちに救われたようなもの。医師をしている友人女性は、触診で“不整脈が出ているから”と、即刻入院の手続きをしてくれた。一番親しい友人は、毎日、一日に何度も電話をくれたり、顔を見るために連日訪ねてくれたり・・入院して分かったことなんだけど、飲まず食わずで10日も過ごしたので、脱水症状と不整脈を起こしていたらしい。診断は、『心因性のショック状態』だったと聞いた。ほ〜んと、ひどい話よね。もう二度とあんな思いはしたくない！というか、この歳ではしたくてもできないけどね！でも、友達って、本当にありがたいと思った。日常の中で築いた人間関係だけど、何かが起きた時には、生活する周辺の間人間関係がとても大事だということ。震災の時もしかり、私に起きた一大事のときも、みんなに助けってもらった。彼女たちには、今でも感謝を忘れてはいないのよ」

ここまで話すと、B子さんは椅子の背に身体をゆだねた。肩を落とし、身体力が抜けたようにゆるやかに微笑んでいる。その様子が少し満足げに映るのは、気のせいではないだろう。身体の緊張が多少解けたせいか、二人とも、ぼろぼろと涙が止まらなくなっていた。しかし、互いの顔には、どこかほっとした様子が浮かんでいる。

「少し休みませんか？」

そう声をかけたのは、B子さんだった。

<夫婦>

時間を決めていたわけではない。部屋に戻ると、陽だまりの中で、机に投げ出した

両腕に額を寄せ、彼女が気持ちよさそうに目を閉じている。その表情からは、誰も、先ほど語った人生をうかがい知ることはできないだろう。私には、彼女にたずねたいことがさらに増えていた。しかし、それが彼女の語りたことと一致しないのならば、いたしかたのないことだ。この空間は、彼女がつくり上げるものなのだから。そんなことを考えていた私の視線に気がついたのか、B子さんは、おもむろに起き上がり、壁にかかる鏡の前に立つ。少し乱れた髪を両手で整え、鏡越しに映る私を横目でチラとみた。振り返った彼女の顔には、いつもの笑顔が戻り、その目は、「さあ、仕切り直しよ」と私を誘っていた。

「えっと、さっきはどのあたりまで話したかしら？」

先ほどの話を、時系列に沿って整理しながら、かいつまんで要約する。途中からは、彼女も思い出しかけたのか、そうだったわね〜、と相槌が入った。要約の最後には、「B子さんがご友人に支えられて、最も辛い10日間を過ごしていた時、ご主人はどうされていたのですか？」と尋ねてみた。

「そうだったわね。カレのことはまだ話していなかったっけ。そう・・その夜、カレが私に言ったのは、『君と離婚する気はない。でも、その女性は子どもを産むと言っている』という内容だった。それを聴いて、動揺してしまったの。婚姻関係が何も変わらないのであれば、それはそれとして、割り切るというか、ある意味、開き直ることもできたと思う。私がショックを受けたのは、その女性はいつでもよくて、カレの子どもが産まれる、という事実だったの。もちろんその時は、まだ産まれてなか

ったけれど、私にとって、産むのはアカノ他人であっても、産まれてくる子どもは、夫の子どもでしょう？そこが苦しきの原点だったの。だから話を聞いた次の日から、互いを拒否することはしなかった。普通のサラリーマンではないので、夜は遅かったけれど、いつものように仕事を終えて毎日帰宅していた。でも、自宅では連日、私が一睡もできない状態で泣いてばかりいて、いつものような会話ができなかった。今から思えば、多分、とりつくしまがなかったと思う。二人の関係はぎくしゃくするし、私の友人や、カレの友人たちでさえ、私の味方をしてきていたのだから、カレの身の置き場もなかった。弁護士からは、次回公判日の連絡も入ってくるしね。当然のように、日常生活を普通に維持することが難しくなっていた。それからしばらくして・・・え～っと、2、3カ月後位かな。信頼する友人から、『その女性と一度直接話したほうがいい』とアドバイスをもらった。もちろん、カレにも話したわよ。そして、その友人同伴で、その女性に会いに行ったの」

確か、私は、ご主人のことを尋ねたはずだった。夫婦として、どういった関係性の変化があったか、が気になっていたのだ。しかしB子さんの意識では、“夫婦関係に起きた問題”とは捉えてはいなかったのかもしれない。彼女は時すでに、“子どもの存在ありき”の解決に向かっていているように思える。私は、そのまま聴き続けることにした。

<第三者の介入と策略>

「その女性（Mさん）の住まいは、ある人

が私に教えてくれた。そのひとは、共通の知人で、カレの身近にいた人だった。もっとも、私が知りたくて得た情報ではなかったけれどね。親切心からか、同情心からか、今となってはどちらでもいいけれど、とにかく、よかれと思って教えてくれたことは間違いない。丁度その頃、苦しむ私を、みるに見かねた友人が、『思い切ってその女性と会い、今後の身の振り方を決めようがいい』とすすめてくれたの。Mさんに会うことは、私にとってとても勇気があることだったのよ」

ここまで話し、ちょっとタイムね！と声をかけ、大きく背伸びをしながら深呼吸をしたのち、彼女は再び話し始めた。

「先に、その時の状況を説明するわね。Mさんが住んでいたのは、カレの実家のすぐ近くの賃貸マンションだった。短い時間だったけど、友人と私、そしてMさんの3人で話をした。初めて会うMさんは、大きなお腹を抱えていた。辛かったなあ・・・不妊治療をしているとね、妊婦さんや赤ちゃんをみるのも辛くなる時があるのよ。おそらく、出産日が近かったんだと思う。ねえ、目の前の女性のお腹のなかに、自分の夫の子どもがいるなんて・・・想像できる？私は今でも、“きっとあれは悪い夢をみたに違いない”って思うのよ。それくらい、非現実的だった。現実には小説より奇なり、とかいうけれど、本当にそうね！まあ、あれから年月がたち、今だから、過ぎたこととして、こうして思い出すことができるようになったからいいものの・・・こうやって、話ができるようになるまでには、ずいぶん時間がかかったわね～」

この時、私の脳裏に浮かんでいたのは、2011

年インド在住の女性が、妻の同意なしに、夫である日本人男性の子どもを代理出産で出生し、子どもが一時的に無国籍状態にあったケースだった。

「私は、最初に友人と打ち合わせをしたとおり、できるだけ感情的にならず、最低限必要な話だけをした。その会話のなかで、一番印象に残った M さんのコトバがあるの。それはね、『あの震災があり、ひとりはいやだと思った。奥さんは、病気で子どもが産めないと聞いていたから、ワタシが子どもを産んであげることにした。子どもを産んだら、カレも結婚してくれるだろうから』といったこと。話し始めた最初の頃だったんだけど、なんというか、あまりにも自分勝手に、母親になろうとする女性のことばとは思えなかった。反対に、それを聞いた友人のほうが、おもわず“なんてことをいうの！！”って、声を荒げたかな。それまで、自分でも思った以上に冷静でいられた私も、さすがにそのことばには傷ついたわね。なんだか、宇宙人と話しをしている感覚というか……。ああ、この人には、ことばが通じないんだな、常識を踏まえた大人同士の話ができないんだな、って感じたかな。そんな風に考えだしたら、『そうか、カレは、この女性でいいんだ。子どもさえ生んでくれたらいいんだ』と思えてきて、なんだか、憑き物が落ちたようにスーッと楽になったの。怒りや悲しみ、それと、悔しさに加えて、当然のように、嫉妬もあったはずなのに、なんだか、胸のなかのスーツとして、『あ！もういいや！』って気分になったのよね～不思議だった。そういえば、去年東北で起きた震災の後、独身者の結婚願望が高くなったとか、家族の絆の大切

さが強調されていたけれど、それを聞いたときは、“どうか私と同じような目にあう人がいませんように”って祈った。でね、そのあと、聞きたいことがまだ残っていたので聞いてみた。“産まれた子どもに父親がなくてもいいですか？”って。なんだか、変な質問よね？でも、その時はまだ、私たちに離婚の話なんて出ていなかったし、カレも離婚する気はない、って言っていたから。ただ、私は、産まれてくる子どものことが気がかりでならなかったの。でも、M さんはちがった。『ワタシがカレの子どもを産むのは自由だ。奥さんには関係のない話。カレの親からも、ムスコの子どもを産んでくれ、っていわれた。だから、ワタシの勝手にさせてもらう』と、そこまで聞いて、私は自分の耳を疑ったわ」

それを聞いた私までも、自分の耳を疑った。

義家族の規格

「もう予想は付いていると思うけれど、M さんが住んでいるマンションはカレの実家のすぐそば、つまり、私たちの住まいより（カレの）実家に近い距離にあったの。もちろん、M さんは元々被災地の中心部にいたらしいから、引っ越してきたわけよね。その引っ越しから、マンションの資金や生活費など、M さんがカレの子どもを産むと決まってからは、義父母が面倒を見ていたらしい。おおよそは、私に M さんの情報を教えてくれた知り合いから聞いてはいたけれど、まさか、義父母から直接『ムスコの子どもを産んでほしい』と言われたことは知らなかった。その後、カレに確かめると、『妊娠のことを、最初におやじに相談したのが間違いだった』と言っていた。義母に

も話を聞いたんだけど、『本人が“産む”というのだから、しょうがない。私たちにとっては、内孫には違いないから』という返事だった。結婚して15年ほど経っていたかしら、その間、義理でも、お母さん、お父さんと呼んでいた人たちからの言葉よ。不妊治療しているときは、応援してくれていたし、その後、スティーブンス・ジョンソン症候群になり、その後遺症を生涯抱えて生きていかなければいけないことや、その裁判もまだ終結していないことも知っていたはずなのに……。もう、私は、この家族の一員であることはできない。ううん、それ以上に、家族でいたくない、って真剣に考えるようになった。ああ、これが義理の家族というものなのか、と失望したの。その時の私は、まるで、ギリシャ神話の『プロクルステスの寝台』で休む旅人の気分だったわね。その家族にとって、規格外の人間だったんだから。そう、その家族の規格に該当したのは、Mさんだったのかもしれないわね。あら？ごめんなさいね！ちょっと発言が過激だったかしら？」聴き手としては、共感を超え、同調の域に入っていたのかもしれない。皮肉たっぷりに言ったつもりの「たとえ話」も、そう過激にはきこえなかった。B子さんは自分を旅人に例えたのであって、決して誰かをプロクルステスに例えたのではなかったからだ。しかし、この例え話には一理ある。B子さんの当時の義家族は、ギリシャ神話ほどではないにしろ、随分古い時代の家族形態を重んじる個人の集合体であったことは明確である。

受け継がれた家族概念

「連載9 不妊と家族の相関関係」で示唆

したように、家族の最高権力者として、その社主である義父は最も大きなパワーを保持していた。その結果、後継者である長男夫婦に跡取りが産まれない現実と、(偶然か否かは定かではないが)長男の子ども(=跡取り)を産もうとする女性が現れたという規制事実を踏まえ、「B子さんの同意なく、内孫を産むMさんを家族として迎え入れる」という、義父の決定が下されたのだろう。「B子さん夫婦の子どもの問題」に対する決定権は、やはり、家長である義父にあったのだ。本文では割愛するが、Mさんという女性が現れる以前にも、義父からB子さん夫婦に「子どもをもつことへの要請」が幾度もあったという。なかには、具体的な案件として、「海外から若い女性を呼び寄せ、B子さん夫婦と同居したうえで、その女性に跡取りを産んでもらう。その後は、その女性を乳母として雇用し、生活の面倒をみること」への打診も含まれている。世のフェミニストにとっては、聞き捨てならない話に違いない。

しかし、本エピソードの問題の本質は別にある。世代間に受け継がれた家族観や家族概念は、次世代のカップルに深刻な影響を与える、という点である。

例えば、本ケースの場合、B子さん夫婦が決断した不妊問題解決への選択肢は、「不妊を治療すること」、つまり、不妊の医学的解決にあった。当時、通院する彼女には、過干渉とも思えるほどに義家族からの応援があったという。昭和ひとけた生まれの親世代からみると、次世代夫婦の選択を尊重し推奨していたことになる。ここまでは、B子さんの原家族、義家族共に、同じ方向にベクトルが向いていたに違いない。しかし、

夫婦の選択肢は、当初の目的を果たすことなく、かわりに、医学的リスクを負う結果に終わる。しかも、後遺症という身体的リスクをB子さん個人が負う結末を迎えた。

この時点で、少なくともB子さんの夫と義家族とは、ある方向へベクトルを変えた可能性がある。それが、義家族の親世代から次世代へと受け継がれた家族観であり、血族の継承を最も重要とする家族概念であった。一方で、B子さんの原家族は、後遺症を負った娘の身体を案じ、「夫婦仲良く」というメッセージを親世代から次世代へ送り続けていた。(これは、後に記述するB子さんの両親の語りで紹介する。)いずれの親世代も次世代へと、彼らが構築する新しい家族に大きな影響を与えていることが分かる。この場合、B子さんの夫が原家族から受け継いだ家族概念は、「子どもは血族を継承する象徴」であり、そのためには、夫の血を受け継ぐことが絶対条件であったのだ。対するB子さんには、「夫婦共に健康で仲が良い」とする家族観と、子どもはいないよりいたほうがいい、といった家族概念があったという。その前提で、不妊に悩む娘が不妊治療することを応援していた。それぞれの親世代から受け継いだ家族観と家族概念は、次世代夫婦の不妊問題に亀裂をもたらす形で表出したともいえる。本ケースにみる、世代間境界破りが一因となった次世代夫婦関係の崩壊は、不妊問題だけにとどまることなく、次世代を担うカップルの大きな課題でもある。

次に、先述したB子さんの元義家族のエピソードは、不妊女性の人権を大きく侵害するケースか否かを考察する。

B子さん夫婦に介入したMさんの出産は、

夫婦の婚姻関係が破たんすることを前提としたものであり、結果として、義家族はそこに加担していたことになる。しかし、ここでは、あえて誰が侵害したかを問うことは避けたい。結果として、誰の不妊問題が解決したのか、誰が利益を得たのか、は容易に推測するところであるが、最も重要なのは、そこに誕生した子どもの利益は守られたのか、という点には疑問が残る。仮に、本エピソードに、第三者の関わる生殖医療技術が解決手段として選択された場合を考えてみよう。Mさんという女性の存在を、代理出産、もしくは代理母に置き換えると、一見、B子さんのいう“ドロドロとした愛憎劇”とは違ったものに見える。しかしながら、B子さんの同意なく、Mさんの出産があるとすれば、背景に国内外の違いこそあれ、それは、前述した「インドで代理出産を依頼した日本人男性のケース」と同様のケースとなる。もちろん、男性不妊問題を解決する際にも、同様の事態が発生する可能性がある。後日談として、インドで出生し一時無国籍となった子どもに終始付き添い日本へ連れ帰ったのは、その男性の妻ではなく、男性の実母であった。

かつて、生殖医療が現在ほど進化していない時代にも、精子・卵子提供や代理出産とは違った形で、第三者の介入を得た「不妊問題の解決手段」は、確かに存在した。しかし、本稿にある、過去の不妊にまつわるいずれのエピソードも、当事者の痛みを緩和し、家族の問題を解決する手段とは程遠いといえるであろう。特に、第三者の介入した不妊問題の解決手段には、当事者夫婦と、そこに介入する第三者、そして家族を含む社会の、それぞれの合意を得たうえ

で実行されることがその前提となる。これは、生殖医療が社会的選択肢の一つと社会認知されるうえでの必須条件でもあり、加えて、男性および女性不妊当事者の利益を損ない、家族の危機を誘発する形で第三者が介入することを許さない社会に、必要最低限の制約であると考える。

以上のように、不妊問題は、最先端科学といわれる高度生殖技術をもってしても、十分な解決手段にかわるものではないことは明らかである。また、諸所の先行研究にあるように、「生殖医療の是非」に限定した論旨により当事者家族の不妊問題が解決されることはありえない。不妊現象のような、社会が解決手段をもたない問題には、当事者とその家族に対して、より多くの選択肢を明確化するなど、その社会的解決基準を早急に提示すべきであると同時に、現在、不妊を家族の問題として、秘密裏に解決される際に発生する様々な人的リスクに対応する、援助手段の構築を忘れてはならない。

原家族同盟

「本当にいろいろあったけど・・・私にとって、唯一の救いは、早い時期に、“このまま、ここにいちゃいけない” って気がついたことかな。だから、自分の意思で“家族をやめよう”って決めることができた。私には、身近に大切な友人がいて、遠くには長年の親友や、実の妹のように可愛い従妹たちもいた。そして、誰よりも私を愛し、強い人間に育ててくれた両親の存在があった。そのことに、あるとき、ふと気がついたの。ずっと変わらずあった存在なのに、不妊で悩んでいた頃には、あまり深く考えずにいた。周りが見えなくなっていたのかもしれないわね。

私を大切に思う人たちがこんなに大勢いたのに、私が目を向けていたのは、“子どもができないことについて、何かをいう人たち”ばかりで・・・気にしていることを指摘されると、その部分ばかりクローズアップされ余計気になる、その繰り返し。だから、気がついたというより、目覚めたという表現のほうがふさわしいかもしれない。ああ、私は、自分自身を誰よりも粗末にしてきたんじゃないか、って思った。ここから反省したの。そのきっかけとなったのは、Mさんに会った後、実家の両親に一連の出来事を打ち明けたとき。実は、それまで、両親には何も言えずにいたの」

先ほどとはうって変わった表情を見せ、時折胸に手を当てながら、まるで、許しを乞うような仕草で静かに語った。

「あの事故の後、いつも私の体調を心配する母と、顔をみるたび“仲良くやってるか？ 幸せに暮らしているか？”と、冷やかすように質問する父だった。ある日、久しぶりに実家に帰り、親子の挨拶が済んだあと、両親に話をしたの」

この後に続く語りは、B子さんと彼女の両親とのあいだに口頭で交わされた、実際のやり取りを本人が再現したものである。以下にその要約を、可能な限りB子さんの語りのままに記す。

<父>

父:「何ということをして！ゆるさん！お父さんは、Kくん(B子さんの夫)を絶対に許さん！そんな・・・そんなことがあっていいものか！人として、男として、していいことと悪いことがある。そんなこともわからない奴じゃないはずだ！確かに、お父さんはB子が

可愛い。でも、Kくんも本当の息子のよう
に、可愛く思ってきたんだ。一体、何があ
ったんだ？お前たちに何かあったのか？い
つも、あんなに仲がよかったじゃないか」

「私たちに問題があるんじゃないの。私た
ち二人の問題じゃなくなったから、こうな
ってしまったの」

父：「その女の人はどういう人なんだ？」

（友人と3人で話をした経緯を説明）

父：「そういう女性は世の中にたくさんいる。
問題は、そういったことにどう対応するか
で決まる。向こうの親御さん（義両親）は
何も言ってこないが、どういった了見をも
っているか知っているのか？」

（Mさんへの、義両親の対応を話す）

父：「何ということだ・・・ひとの娘を・・・ひ
との娘をなんと思っているんだ！！ひとの
親ならできることじゃない。向こうにも娘
がいるじゃないか。自分の娘が同じことを
されて平気なはずはない。Kくんも悪いが、
向こうの両親は、もっと悪い。子をもつ親
のすることじゃない。まともな親なら、ま
ず、B子に謝罪を入れ、次に、その女性に
それなりのけじめをつけさせるべきだ。そ
れを・・・自分の息子の不始末を棚に上げ、
B子の知らないうちに、その女性の面倒を
親がみるなんて、聞いたことがない。でき
た子どもはしようがない。その責任は、当
然とらなきゃならない。しかし、なぜ、B
子に何もしようとししないんだ。こんなこ
とになって、親として、責任をもって、こ
ちらに報告すべきではないか。なんという常
識の無い！無責任にもほどがある。お父さ
んたちは（それでも）構わない。でも、B
子には、義理の親としてなすべきことがあ
るんじゃないのか。まがりなりにも、家族

になって、もう何年になる？たったひとり
の娘に、こんなことをされて・・・こんな屈
辱はうまれて初めてだ。そんなところ、い
つまでもいなくていい。早く帰ってきなさい。
それより、まず、Kくんをここへ呼ん
できなさい！」

「話せばこうなることは分かっていた。だ
から、ぎりぎりまで、実家に報告するこ
とは避けていた。起きたことの重大さを知
っていたから。言えば、（夫婦の関係は）終わ
りだと思っていたの。結局、私はカレを実
家に呼ぶことはしなかった。父の意向は伝
えたんだけど、どう考えても修羅場になる
のは目に見えていたから・・・それに、私の
なかでは、徐々に見切りをつけ始めていた
の。もう、どうがんばっても、関係は元
には戻らないだろうって。それに、子ども
もじき産まれてくるころだったしね。なんか、
これ以上“事を荒立てたくなかった”って
いうか。一つだけ、心残りなのは、しばら
く、いや、もっとかもしれないけど、父の
気持ちはおさまらなかつただろう、とい
うこと。それだけが心残り。昔から、晩酌程
度のお酒は夕食の際にたしなんでいたけれ
ど、「最近お酒の量が増えた」と言って、母
が心配していた時期があったの。そうい
えば、母は、私が父と話しているあいだ、終
始うつむき、そっと鼻をすすっていたな・・・
父にも母にも辛い思いをさせた。申し訳な
いことしたなあって・・・つくづく親不幸な
娘だったなあって、今でも思ってる」

<母>

母：「一緒になって50年は経つけど、お父
さんがあんなに怒るのを初めてみた。同じ
男性として、お父さんは厳しいことを言う

けれど、今回ばかりは仕方がないわね。向こうのみなさんは、それだけのことをしたんだから。Kくんも、もう後には引けないでしょう。気持ちの優しい人だから、自分で何とかしないとイケないと思ってるんじゃないの？今はまだ、子どもが産まれてないから離婚したくないと言っているけれど、子どもが産まれたらそうはいかない。その時はKくんも、もう、B子をあきらめるしかないでしょうよ。お父さんも、お母さんも、B子が可愛いだけに、Kくんの“自分の子がほしい”気持ちは理解できる。でもねえ・・もっと、別の方法があったんじゃないかしら。自分の奥さんをこんなに悲しませて・・B子もつらいだろうけど、一番つらいのは、Kくんかもしれないね」

「母は、わりと寡黙な人で、陽気で話好きな父と会話しながら、いつも笑顔で隣に座っていた。それでも、肝心な時には、常に冷静で客観的な意見を言ってくれる、私のよきアドバイザーだった。その時も、激怒する父とは対照的に、私に起きたことを静かに悲しんでいた。私に、というより、起きた出来事そのものを、悲しんでいたのかもしれない。“誰が・何が悪い”ではなく、“どうすればいいか”をいつも一緒に考えしてくれる母だったから。でも、さすがにあの頃は、母も疲れ切っていたようだった。毎日父をなだめながら、私の相談に乗ってくれていたので、大変だったと思う。母は、多くを語らないけれど、とても胸を痛めていたはず。母にも苦勞かけた。あ、そういえば、もしかすると、あのときいた“母のひとこと”が、その後の私の人生の決定打となったかもしれない。母はね、こうだったの」

母：「すべて、B子次第よ。たとえ他の女性に子どもができて、B子がKくんの奥さんであることに変わりはない。B子がそれでいいなら、離婚しなければいい。お父さんもお母さんも、一緒に向こうの家に行き、Kくんのご両親に話をつけてあげる。でも、それでB子は幸せなの？お母さんは、B子が幸せになれるのなら、どんなことでもする。これは、お父さんも同じ。親というのはね、わが子の為なら、自分たちがどんな目にあっても構わないと思っているものなのよ。だから、自分で決めなさい。お父さんとお母さんは、B子のしたいように、させてあげたいと思っている」

「母のことばがあったから、私は自分で決めることができた。あの家から出ていこう。家族の元へ戻ろう、って」

最後にひとこと、「以上で、私の話は終わり」と結び、その日の話は一旦終結した。

第13章 リセット

記録は語る

最後にB子さんと会ってから、ずいぶん時がたつ。その間、私は彼女の語りを記録することに専念していた。

これまでに記述したB子さんの語りは、彼女の結婚後、不妊に悩みはじめた頃にはじまり、その婚姻関係が終わるまでの「家族の物語」であり、同時に、互いの関係を深め、B子さんの経験を共有した記録でもある。振り返れば、彼女は実に、情感を込めて私に語りかけていたと思う。悲しい体験を悲しく、苦しかったころの出来事を苦しそうに再現した。目前に展開する物語は、ときに時空を超え、あたかも聴き手である

私が、いま体験しているかのような錯覚を覚えることもあった。途中、時折見せる満面の笑みに現在の彼女をみることで、かろうじて現実に戻り、その役目を全うすることができたのではないだろうか。その関係に、同じ不妊当事者体験をもつ“ピアであることのリスク”が生じていたことは否定できない。ときに、「傾聴と共感」は同調にかわり、さらに、自身が経験したことの無い「話し手の体験」を聴くことで、新たな痛み・苦しみを追体験するという、同質の体験をもつピアならではの危険性をはらむ面接であった。私にとって、それほど疲労感を覚える話し手であったことが、今は理解できる。同時に、面接を振り返る作業が、いかに大切かを実感している。

日頃、対人援助職者として、自身の持つ専門性とその力量を自覚し、心身の安定に留意しつつその役割を果たすことをこころがけている。しかし、時として、自身の専門性から外れ、思いがけない方向へ展開する語りに戸惑うことがある。今回のB子さんのケースがそれに相当する。当初、「不妊体験を聴く」ことにその目的があったB子さんの語りは、「不妊を経験した家族の物語」として結末を迎えた。そこには、不妊現象が巻き起こした様々な問題を提起していたように思う。

書きつづった記録を読み返し、さらに、尋ねたいことや確認したいことがあった。彼女はなぜ、いま、私に、それを語ったのだろう。そして、語り終えたいま、彼女は何を思うのであろうか。記録をたどりつつ、脳裏から払拭できないそれらの疑念を、先日のお礼に添えて、B子さんに問うてみた。

最後の願い

あまり日を開けず、B子さんから手紙が届く。そこには、先日送った質問に対して、丁寧に回答する彼女の文面がつづられていた。本稿では、B子さんの意志により、以下に原文のまま転記することとした。

「拝啓、先日は長時間にわたり、私事の浮かぬ話に耳を傾けていただき、誠にありがとうございました。当初は思いも及ばなかったことですが、その後、実にすっきりとした気持ちで日々過ごしております。あらためて申し上げますが、これまでにお話した内容は、私の結婚生活の一部分にしかすぎません。もちろん、長い年月不妊に苦しんだことも事実ですが、結婚生活の大半を、元夫と仲良く楽しく、幸せな時間を過ごしたことを言い忘れておりました。また、その昔、私の義家族だった方々も、皆心優しい勤勉な方々であったことをお伝えしたく思います。また、そんなつもりはなかったのですが、不妊の話をするときは、辛い・苦しい思いばかりが先にたち、悲劇のヒロインになった気分で話す癖があるように思います。あれから既に15年がたつというのに、今回あなたに話すことで、あらためて気づきました。

実は、先日届いたあなたの質問の答えを探しているときに、とても大事なことを伝え忘れていたことを思い出しました。それは、5年前に亡くなった父の遺言です。父は生前、こんなことを私に言い残していました。

「お父さんは、生きていうちに自分の孫をみることはできなかったけれど、B子という宝を授かったんだから幸せものだ。自分の娘は本当に可

愛い。可愛いだけに、そのおもいをB子にも経験させてやりたかった。そう思うと、B子が不憫でならない。お前には兄弟姉妹もない。だから、お前が再婚しない限り、お父さんとお母さんが死んだ後、天涯孤独の身になることは覚悟しておきなさい。そして、次に結婚するならば、B子に子どもができなくてもいい、という人と一緒にになりなさい。お前を可愛く思う男性は、世の中にたくさんいるはずだ。そんな男性と一緒になればいい。もう、済んだことだが、Kくんのしたことは許せないことだ。しかし、同じ男性として、彼の気持ちもわからないでもない。自分の子どもはみてみたいからな。Kくんの失敗は、ただ一つ。B子を手放した事。そこで、男としての人生は、終わったことだろう。まあ、彼の子どもが無事育っているのなら、それでいい。父親として元気で暮らしているのなら、それはそれでいいことだ。お父さんは、いまB子が元気に頑張っている姿をみているだけで安心だからな。B子は、いつか自分の経験を誰かの役に立てたいと考えているようだが、それをお父さんは心配に思う。世のなかには、いろいろな人がいるからな。でも、B子は何も悪くない。人に後ろ指さされることは、何一つしていないんだから、自分の言いたいことを言えばいいんだ。お父さんたちが、いつも応援していることを忘れるなよ。

ただ一つ、願いがある。遺言だと思って聞いてくれ。今後、もし、この話を誰かにすることがあるならば、それはお父さんが死んだあとにしてくれ。B子の経験が誰かの為に役に立つのかどうか、お父さんにはよくわからない。しかし、B子と同じように、たくさんの不妊に悩む人たちが、今のお前をみたならば、それは励みになるだろう。お父さんは、お前に十分なことをしてやれなかったかもしれないけれど、お父さんがお前に話したことや、お前をどんなに可愛く思っているのか

を話してくれたらうれしい。でも、それは、お父さんが死んだあとでいいだろう。B子は、お父さんたちも経験したことのないことを経験した強い子だ。お父さんは、自分の娘を誇りに思う。恥ずかしくて他人には言えないがね。お前ならきっと、思うように生きていけるだろう。お父さんが死んだあとも、お前の人生は続く。できれば、お前を本当に大切にしてくれる男性が現れてくれると、なお嬉しいんだが・まあ、お前の人生だ。お前の好きに生きればいい。お父さんは、お前がさびしくなければ、それでいい。そのことを忘れないでくれ」

以上が、父が残した事ばです。もう、お分かりいただけたでしょうか？私が、「なぜ、いま、あなたに」話したのかを。父が亡くなって5年が過ぎ、あなたに“それを話すこと”で、父の願いをかなえる私になれたのです。娘として、「父の最後の願い」にこたえる為にできた事なのかもしれません。

遺言にもあるように、私がおあなたにお話しした理由は、「私の経験を活かしていただきたい」とのおもいからです。以前にも申し上げた記憶があるのですが、私の体験を誰かの為に役立てるには、「たくさんの個人の体験」が必要な事、そして、いまこの瞬間も不妊に悩む人がいて、次々に同じ悩みを抱える人たちが増えていく現状を、あなたから知りました。だからこそ、いま、伝えたいと思ったのです。私と同じおもいをする人が現れないように、二度とこのようなことが無いようにとの思いから、あなたと一緒に声をあげたかったのです。

私の願いは、①不妊問題の解決に、情報提供や家族に起きる様々な問題に対応する相談業務などの人的支援を、②実子を望め

ない当事者カップルに、子どもを育てるチャンスや、社会に導線として準備してほしいという2点です。私は、その導線に敷き詰める小石のひとつになりたいのです。先日、一緒に参加したシンポジウムの登壇しておられた当事者の方々も、おそらく同じ思いなのでは、と考えます。先人の知恵、とは言い過ぎかもしれませんが、「過去の経験」が役立つとすれば、例えそれが成功であれ失敗であれ、資源のひとつになると考えます。

私の場合、両親やみんなの支援を受けて、より幸福な人生への距離が縮まりました。その支援無しには、いまの私は存在しなかったのです。でも、これまでの人生は、不妊がそうであったように、決して自ら選んだものではありません。幸せになりたくて結婚したのですから、離婚もしかり。そう考える事ができるようになったのは、ごく最近のことです。でも唯一、いまだに不妊だけは、どう考えても理不尽で、つじつまが合わないまま。私は、今も時々、“神さま。なぜ、私に不妊という試練をお与えになったのですか？”と問うことがあります。そう問いかけながら、これからの人生を、自分でつくっていかうと思っています。

パートナーと共に送る人生に起こる様々な出来事へは、二人にとって最善の選択肢を見つけ力を合わせて乗り越えて欲しい。いま、不妊に悩むご夫婦に、私はそう伝えたい。最近、かつて一度は家族となった人たちにも感謝できるようになりました。その方たちと共に、家族として過ごした15年は、「家族と子ども」について真剣に考える好機だったと思えるようになったのです。また、現在までの、その後の15年間は、そ

の時産まれた(カレの)子どもを受け入れ、その成長を願う親性が育つ期間だったのかもしれない。そして、「経験を伝える自分」に成長するため、同時に、亡き父の願いをかなえるために必要な時間だったと考えています。その間、どんな時も、何が起きても変わらないのは、いつも私を見守り続けてくれた人々でした。私を導いてくださった先生方をはじめ、身近な友や遠くの仲間たち、さらに、日々声を掛け合う隣人など、今ではみんなが、私にとっての家族です。

実は、あなたにお話した内容は、“私が墓場まで持っていこう”と密かに思っていた出来事でした。誰にも話せない、と勝手に思い込んでいたのは、自分自身だったのです。自分で自分を縛っていたことに気がきました。これからも、何か思うことがあれば、あなたに聴いてもらいたいと思います。そして、私にできる事があれば、いつでも声をかけてください。一緒に声をあげていきたいと思っています。今日は随分長くなりましたね。それでは、この辺で失礼します」

B 子さんから届いた手紙の其処此処に、私のおもいがつづられていた。手紙にある彼女の願いは確かに、現在、社会に潜在する「不妊当事者家族の課題」とも重なる。それらを形にし、社会システムとして確立することが、私に課せられた次の使命であり、それが、彼女の願いでもある。この日から、私たちは、共に生きる運命共同体となった。

<終わり>

あわりに

本連載は今回で完結します。登場した人々は、皆それぞれの立場で不妊を語り、家族を語る、実在の/実在した人物です。彼らはインタビューの中で、“その時「家族」に何が起きたか”を語ってくれました。

第1章に登場するA子さんは、筆者が取材する過程で出会った素敵な女性です。彼女はかつて、生殖医療技術のない時代に不妊を体験し、その時代を生き抜いた女性のひとりでもあります。現在、とかく不妊は、生命科学技術や生殖医療の問題として取り上げられがちですが、A子さんにとっては、“それ以前の問題”だったのです。

本書の大半は、「不妊」に人生を翻弄された当事者女性B子さんの物語です。その語りには、B子さんとパートナー、また、家族として“わが子の不妊”を経験したおふたりのご両親など、実際の家族の他に、姉妹・友人などが登場します。なかには、この世に誕生した新しい命のエピソードもありました。彼らもまた、かつて不妊を経験した家族でした。

本連載の中核をなしたのは、B子さんと、B子さんを取材する過程で筆者が出会った人々が語る「不妊と家族の物語」です。彼女は、共に暮らした家族の思い出を記憶のかなたに消し去ることもかなわず、これまで、それを語る機会すらなかったといいます。

現在、「当事者の6組にひと組が通院する」不妊治療を経験したB子さんの、かつて生活を共にした家族を襲った不妊問題。その事実の語りには、血の継承問題、女性の性役割、家長制度の負の遺産、利己的な

利益に出産を利用する女性、親のエゴなど、さまざまな人間の欲望が潜在し渦巻いていました。

筆者は、B子さんの語りを通して、不妊を経験した家族の足跡を共にたどり、彼女の家族と、その人生を翻弄した不妊の実態をみなさんに知っていただきたいと思います。本連載を読み終えた今、あなたが「不妊は他人事ではない」と実感してくださることを、筆者は切に願います。不妊はあなた自身に、また、あなたの子どもや身近な大切な人に、いつか起こり得る出来事なのです。

“それ”は誰にでも起こり得ること。

何故か、“その時”が来るまで、誰も何も伝えることをせず、知る必要を感じることもなく、「治療すれば大丈夫」と間違っと思いつ込んでいること。誰もが「自分に・家族に起きるはずはない」と思っている・思いたい・思っていたこと。これまでに**“起きた事実”**はすべて沈黙の闇に葬り去り、過ぎ去った過去として人々の記憶から抹消し、語り継がれることのなかった家族の問題。

—それが、筆者の知る「不妊」です。

【謝辞】

本連載は、2012年10月「A子と不妊治療—日本初の不妊治療医療過誤訴訟を経て—」（晃陽書房）に書き下ろし、一冊の著書として刊行させていただきました。刊行にあたり、沢山の皆様にお力添えをいただきました。この場をお借りしてあらためて感謝申し上げます。

完

対人援助学 & 心理学の縦横無尽 1 2



サトウタツヤ @立命館大学文学部心理学専攻

構想：新書版「心理学入門」

★プロローグ

本稿は、特に出版するアテもなく、心理学とは何か、ということを書き綴ったものである。『LIFE（生命・生活・人生）の心理学；あるいは心理学の未来』というタイトルを仮につけている。

出版社から依頼があったり、自分で計画して出版社に持ち込んだ計画の原稿が多数残っているのに、何やってんの？というご批判は受け付けられません（笑）。

LIFE（生命・生活・人生）の心理学；あるいは心理学の未来

はじめに あなたと心理学の関係；ヒト・ひと・人としてのあなたと心理学

この本を手にとって読んでくれている皆さん、ありがとうございます。この本は心理学についての本ですが、もう一人の主役はこの本を読んでいる読者の皆さんです。

あなたが、今、あなたがいるその場所で、この本を読んでいる。このことについて考えて見ましょう。なぜ、このようなことが起きているのでしょうか？とはいえ、なぜ（WHY）を考えるのは難しいので、どのように（HOW）の形にして考えてみましょう。

あなたの読書行動＝生物としてのあなたの力×社会的な条件整備×個人的な事情・展望

f (Action) = Biological faculty × Social condition × Idiographical affair

f （行為）＝生物学的な力×社会的条件×個別的事情

あなたがこの本を読んでいるのは、目が見えて、日本語を読むことができ、宿題の課題図書に指定されているから、というような分析ができると思います。

人によっては、目が見えないけれど、誰かが読んでくれているので、心理学を学びたい

という気持ちから、この本を聞いている、という人もいるかもしれません。

目は見えるけれど、韓国に生まれて母語はハングルだけど、日本語はよくわからないけど、日本の大学に行きたいのでこの本を読んでいる、という方もいるかもしれません。

実はこうした考え方は、人間が、生物としてのヒト、社会的存在としてのヒト、個人的人生を展望する存在としてのヒト、というように、3つの異なる層から成っていることを前提にした考え方です。また、等式の左側の f は関数を意味しています。右側がかけ算になっているのは、一つでもゼロであれば、あなたの読書は行われまいだろう、ということを暗示しています。

行為の内容に、自分で空を飛んで旅行に行く、ということを入れたらどうでしょうか？ 飛ぶ力は人間の場合ゼロです。他の社会的条件や個別的事情がどうあろうと、飛んで行くことはできない、ということはこの関数式は示しているのです。その一方で、乗り物にのって空を飛んでいく、ということを行為として置けば、それは可能です。飛行機その他の手段があるからです。

さて、この関数式で読書について考える時には、等式の左辺は読書ではなく「読書行為」になります。

読書を読書「行為」というように「行為」という接尾辞をつけて呼んだり考えたりするのは、心理学の特徴です。私たちが日常で気持ちとか感情とか悩みと言っていることを、心理学は行為として考えることが多いのです。行為に置き換えることによって、自分や他人が見る（観察する）ことができるし、もしかしたらそれをコントロールできる、ということを目指しているのです。授業中にどうしてもスマホをいじっちゃうんだよね～とか、どうしても朝起きられないんだよね～とか、どうしても好きな異性（同性でもいいですが）のことがアタマに思い浮かぶんだよね～、とかいう悩み事も、心理学では行為として捉えます。授業中にスマホをいじっちゃう行為、起きる時間がきても寝続ける行為、常に好きな子のことをあれこれ考える行為、というように、行為をつけて考えるのです。そして、行為であると考えればコントロールして克服する可能性が出てくるのです。

普通の感覚では行為ではないようなことも、行為として考えるのが心理学のやり方です。たとえば、緊張状態をどのように克服するか、ということについても、「緊張＝緊張する行為」と置き換えることによって、緊張行為のコントロールを可能にしようと試みるのです。

誰かを好きな気持ちも、会社に行きたくない気持ちも、もちろん、会社をさぼることも、人をいじめることも、全て「行為」と置き換えることによって、行為がなされたり、なされなかったり、維持されたりする法則を見いだそうとするのが心理学の特徴です。

あなたの読書は、あなただけでなく、あなた以外の人間にも適用できる法則で記述できるかもしれない、というのが、普遍志向の心理学の考え方です。このように言われると「私がこの本を読んでいるのは、他ならぬ私のことなのだから、他の人と全て同じということはない」と反発する人も出てくることでしょう。

他の誰でもない私が、他の時ではない今、他のものではないこの本を読んでいる、とい

うこの事実を重視する考え方もありうるでしょう。これは、実存志向の心理学の考え方です。実存というのは難しい言葉ですが *existence* の訳です。受験英語だと「存在」です（実際の存在、を実存と訳したのは九鬼周造という哲学者です。日本の哲学者は言葉を難しくするのが仕事ですから仕方のないことだと哲学者の悪口を言うことはおいてくことにします）。他のことに回収されない実存（実際の存在）を記述する志向は心理学の中に確かに存在します。

私たちの一人一人のあり方をひととして重視すれば実存志向となり、私たちがヒトという種の一員だというあり方を重視すれば、本質志向になります。本質は *Essence* の訳です。何かを読むということの本質は何か、ということを考えることは可能です。ただし、心理学的に考えるということは、この両者について考える、ということに他なりません。また、その中間に社会的存在としての私たちという言い方も可能です。本を読む行為ということにしても、本を書いた人、出版した人、売っている人、多くの人のネットワークの結果として成り立っているのです。

さらに、今、地球上に60億を超える人たちが住んでいますが、そこで生きる人たちの行動・習慣・将来への見通しは、全て同じではないと思います。自分が生まれ落ちた社会に何らかの制約を受けているのだと思います。そして、その制約を打ち破る人が現れた時、新しい可能性が生まれるのです。

かつて、私が福島大学教員として教育心理学の授業で「青年期の悩み」という内容を扱っていた時のことです。経済学部のある学生が感想を書いてくれました。青年期において進路を決めることは大変だ、というような内容の話をしていました。その学生さんは「私と同じような悩みを持っている人がいるとは驚いた。さらに、そこに法則を見いだそうとしている学問があることにもっと驚いた」と書いてくれました。この学生さんがその時に実際に抱えていた悩みは、固有名をもったある個人が卒業後に何をしようか、というようなことであり、その意味でその彼／女の実存的な悩みごと（実際に存在する悩み）だったのだと思います。しかし、こうした悩みを青年期に持つ、というレベルで捉えたなら、それには本質的な側面もあったのです。しかし、こうした悩みは社会によっても規定されており、近代を生きる青年が共通に持つ悩みにすぎないという言い方も可能です。

気持ちや悩みは、実存的な経験であり、それを**行動と置き換えることで普遍的な法則に近づくことができる。そして、その中間には個人を導く社会の存在も重要です。実存的であるとはいえ、社会抜きでは何もできず、とはいえ生物としての法則に従うのが人間です。生物としての「ヒト」、社会的存在としての「人」、私の人生を生きる「ひと」、私たち人間は多様な衣を着ているのかもしれない。

そして、心理学は人間の LIFE(生命・生活・人生)を総合的に扱う学問です。本書では、人間の様々な側面を様々なアプローチから研究・実践する心理学の世界をこれから紹介していきます。

第1章 心理学の概要

第1節 心理学への期待と失望

心理学が人気です。私が務める立命館大学は関西圏にあるのですが、少子化で大学に行きたい人は減っているのに、関西全体で見ると、心理学を希望して大学を受験する人の総数は毎年増えていっています。高校までの科目には無い科目なので、未知の科目に対するあこがれや期待のようなものがあるのかもしれません。

ところが、心理学は最も失望的な学問だ、というような状態は、私がアエラムック『心理学がわかる』を裏方として編集していた20年前とあまり変わっていないようです。そこには心理学とは「学ぶ前には期待を与え、学んだ後には失望を与える学問」だと書かれていました。心理学への期待は、臨床心理学のような実践的な心理学が中心のようです。これは今の高校生でも同じで、「将来はカウンセラーになりたい!」というような希望をもって大学に入学してくる人が増えているという現状があります。大学院までいって臨床心理士になりたい!と思うその気持ちは大事です。ところが、大学の心理学はカウンセラーのことばかりをやっているわけではありません。そこにズレが生まれるわけです。

高校までには心理学という科目が存在しないので、心理学の全体像が見えにくいのは仕方のないことかもしれません。しかし、期待と現実にズレがあるのは問題ではないでしょうか。

カウンセリングはもちろん、心理学の一部です。そのカウンセリングがどのような意味で心理学なのか、そもそも心理学とは何なのか、ということを考えていきたいと思うのです。そこで、本書では、心理学という学問について、なるべく平易に面白く、しかし基本的な軸はぶれないような形で説明していきたいと思います。

第2節 心理学の体系

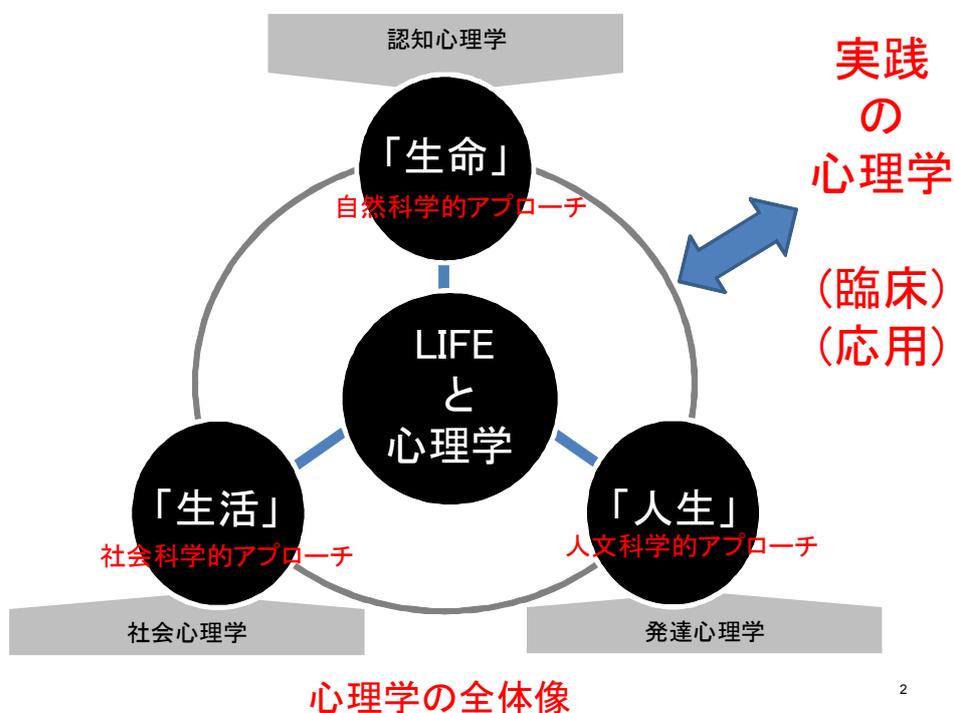


図 1
LIFE; 心理学
の全体像

心理学がどのような学問であるかの体系の見せ方はいくつもありますが、ここでは、本書「はじめに」でも書いたように、英語の LIFE という語から考えて見ることにします。英語の LIFE という単語の訳語を、みなさんはどのように覚えてますか？ 生命？ 生活？ 人生？ そのいずれもが正解です。ライフ・サイエンスという時のライフは「生命」と訳されます。生物としてのヒトの生命現象を理解しようとする領域です。どこかの宣伝ではありませんが、「ビューティフル・ヒューマン・ライフ」といったときのライフは、これもまた宣伝文句の「おいしい生活」に対応するようなもので、ライフは日常生活という意味での「生活」を意味していると思われまふ。そして、ライフコースなどという時のライフは、人間の一生の径路・行程を視野にいれたものであり「人生」を意味すると考えるべきでしょう。

LIFE を生命として考えるなら、それは生命体としてのヒトを扱う心理学になります。ここでは簡単にするため認知心理学と一言で呼んでおきますが、この領域の特徴は自然科学的なアプローチを用いることになります。実験を用いることが多いのが自然科学的なアプローチの特徴です。実験というと理科（物理や化学）を思い出す人が多いでしょう。その手法を心理学にも適用するのが認知心理学の特徴です。ヒト以外の動物との比較を通じてヒトの特徴を考えたり、ネズミやハトやサルとヒトとの共通点を探ることでヒトの特徴を考えることもあります。

実は心理学においては、この認知心理学が中心になっています。何故かという、歴史的な経緯が関係しています。およそあらゆる学問は哲学から生まれたと言えますが、モノをどう見るか、感じるか、というのは哲学から心理学に受け渡された重要なテーマの一つなのです。そして、心理学が哲学から独立した学問になった時には、実験という手法でデータをとることが、哲学との差異を強調するのに役立つからなのです。このことは歴史を扱う第4章で詳しく見ていくことになるので、ここではこれ以上触れないことにします。

LIFE を生活として考えるなら、それは生活を営む人を扱う心理学になります。ここでは簡単にするため社会心理学と一言で呼んでおきますが、この領域の特徴は社会科学的なアプローチを用いることになります。アンケート調査などを行うこともあります。人は一人で生きていくことはできず、社会生活の中で生きています。そうした社会の中の心理学を追究するのが社会心理学の特徴です。対人関係や集団における心理、あるいは、様々な文化における心理の差異と共通性を理解しようとするのが社会心理学です。

LIFE を人生として考えるなら、それは生まれてから死ぬまでの人生を生き抜くひとを扱う心理学になります。ここでは簡単にするため発達心理学と一言で呼んでおきますが、この領域の特徴は人文科学的なアプローチを用いることにあります。聞き取り調査などを行うことがあります。ひとは時間の中を生きる存在であり、一時とも同じ状態で生きていることはありません。もちろん、比較的安定している時はあるかもしれませんが、赤ちゃん→子ども→青年→大人→老人という時間と共に変化していく存在です。また、時に悩み矛盾を抱えながら生きている存在です。口に出せないようなことを想像することさえあるのがひとというものです。赤ちゃんの時の自分と青年の時の自分とでは、差異も共通性もあるでしょう。そうしたことを通じて、心理の発達を考えていくのが発達心理学です。

表1 心理学の領域とその特徴

名称	着眼点	アプローチ	手法	差異と共通性の検討の素材
認知心理学	生命主体としてのヒト	自然科学	実験	他の動物
社会心理学	生活主体としての人	社会科学	アンケート	他の文化・集団
発達心理学	人生主体としてのひと	人文科学	聞き取り	人生の各時期

第3節 臨床心理学を含む実践心理学の多様性

ここまでの心理学の説明には臨床心理学やカウンセリングという言葉が出てきませんでした。奇異に感じた人がいたかもしれません。しかし、あわててはいけません。世の中は、よく目に付くことばかりで成り立っているわけではありません。影の主演というのものは必ずです。たとえば、飛行機や列車という移動サービスを考えてみましょう。新幹線というのはよく目にするので、有名であり、誰もが知っているものだと思います。誰でも新幹線の車体を思い浮かべることができますし、小さい子どものあこがれは運転士さんです。しかし、新幹線を支えているのは運転士とボディ（車体）だけではありません。車輪、椅子のバネ、その他、色々なものが集まって新幹線を作っているのです。安く早く安全に、そして可能なら快適に、というのが移動サービスの根幹ですが、こうしたサービスを提供するためには非常にたくさんの目に見えない領域が隠れていることに皆さんも気づいてくれるでしょう。駅員の存在も、安く早く安全で快適な移動には重要であることは論を俟ちません。

臨床心理学やカウンセリングというのは、移動サービスにおける新幹線の運転士のような存在です。よく人目につくので、誰もが知っていて憧れです。男の子の多くは運転士になりたい！と思います。しかし、運転士だけでは新幹線は動かせません。多くの人が支えています。それと同様に、臨床心理学やカウンセリングにも影の主演というのがあるわけです。そして、それが、前項で説明した心理学の体系なのです。心理学の様々な領域があるからこそ、臨床心理学やカウンセリングの輝きが増すのだと考えてください。

新幹線が乗り物の一種であるのと同じように、臨床心理学やカウンセリングは「実践心理学」の一種です。そして、実践心理学には（乗り物がたくさんあるのと同じように）たくさん領域があります。一番身近な実践心理学の一つは教育心理学です。皆さんがこれまで習ってきた内容は、実は、発達心理学と密接な関係を持っているのです。簡単な漢字から複雑な漢字の順番で習うのは、子どもたちの発達の程度にあわせて教育の方が効率的だということが分かっているからです。実践心理学には法心理学という領域もあります。日本では裁判員裁判が始まりました。職業裁判官だけではなく、私たち市民が裁判を行う制度です。イヤだなあと思う人もいたかもしれませんが、最高裁判所が行った平成24年度「裁判員等経験者に対するアンケート調査」の結果報告書によれば（N=8,331）、「非常によい経験と感じた」人が54.9%、「よい経験と感じた」人が40.3%でした。裁判員裁判においては、被告人が本当に犯人なのか（つまり何が本当のことなのか）を判断する必要があり、また、もしも被告人が犯人だとしたらどれくらいの量刑が必要なのか、を判断する必要があります。そして、この「何かを判断する」過程は心理のプロセスそのものです。

したがって心理学の実践領域でもあるのです。教育心理学、法心理学のほかにも交通心理学、環境心理学など様々な実践領域もありますが、この話は後に回すとして、実践心理学の花形である臨床心理学に話を戻しましょう。

実践心理学のスターが臨床心理学であることは疑いありません。カウンセリングはそのスターの中のスターということになります。現在の日本の臨床心理学ではどのような問題が関心をもたれているのでしょうか。

まず第一が、スクールカウンセラーの活動です。つまり、学校において子どもたちの相談にのったりする活動です。いじめ問題の予防や解決など、学校の先生たちだけでは解決が難しい問題に臨床心理士が関わっているのです。

第二に、東日本大震災への対応です。PTSD という語を聞いたことがありますか？ Post Traumatic Stress Disorder の頭文字をとって PTSD と呼ばれます。トラウマになるような大きなストレスを経験した後で精神に変調をきたすことです。大人も子どもも震災後の精神状態は不安定です。特に子どもたちに対して臨床心理士がかかわっています。

第三が、認知行動療法です。抑うつ状態や不安や心配を心理的に改善する心理療法です。

ここでスクールカウンセラー、東日本大震災と PTSD、認知行動療法、この3つについて、先の心理学の全体図（図1や表1）と関連づけて考えてみましょう。

表2 実践心理学のスターとしての臨床心理学は Life とどのように向き合うか。

臨床心理学の中の役割	対象	手法	モデル
スクールカウンセラー	人生主体としてのひと	人文科学的	物語りモデル
災害後の PTSD 支援	生活主体としての人	社会科学的	生活移行モデル
鬱病の認知行動療法	生命主体としてのヒト	自然科学的	医学的治療モデル

もちろん、これほど簡単には割り切れませんが、臨床心理学が、心理学のあり方を基礎にしていること、様々な側面から様々な手法を用いることができること、が分かってもらえると思います。

なお、心理学の周辺には、社会学、教育学、医学などがありますから、そうした学範（ディシプリン）と重なる部分があることは言うまでもありません。

第4節 研究としての心理学の可能性

臨床心理学に興味をもち、カウンセラーになりたい、という思いを胸に心理学に興味をもった皆さん。ぜひ、心理学の全体像に関心をもってください。心理学の対象はもちろん「人間の心理」なのですが、LIFE が対象だということもできます。そして LIFE を生命・生活・人生という3つの側面から考えることで、心理学の多様性が理解できたと思います。どのような方法で研究するのか、ということはここまであまり述べませんでした。研究によって新しい知識を作っていくことは極めて重要なことです。学問の目的は新しい知識を作って社会に有用な知見を生み出すことにあるからです。

心理学の研究対象は、データです。本を読んで考えるだけではなく、何らかのデータを用いて研究するところに心理学の特徴があります。心理学の研究方法は、何らかのデータをとるための方法、ということも可能です。そのアプローチには多様なものがあり、実験などの自然科学的アプローチ、アンケートなどの社会科学的アプローチ、聞き取りなどの人文科学的アプローチがあります。ここで実験とは、観察という方法の一種です。自然場面での観察ではなく、条件を整えて観察することが実験ということになります。心理学においてはそれぞれの目的や対象によって自由に選択することができます。心理学は、柔軟な研究方法によって新しい知識を生産してきたと言えるのです。そして、その知識を用いることで、様々な領域においてより良い実践が可能になるのです。

ここでは一つだけ、認知心理学に関連する領域の動物を被験体にした研究方法を紹介しましょう。少し残酷ではありますが、おつきあいください。記憶は脳のどこが支配しているのでしょうか？もしそれが分かれば、記憶障害で苦しんでいる人の治療が可能になるかもしれません。では、記憶障害の人の脳を調べれば良いのでしょうか？どうやって調べれば良いのでしょうか？逆に、脳の一部を破壊してその部位の働きを調べる方法があります。人間のことは人間でやらなければ分からない、という主張が正しければ、人間の脳の一部を破壊して、その機能を調べるしかありません。しかし、ネズミを用いることで、代替できるということが心理学の常識になっています。ネズミからすれば「そんな身勝手な！」ということになりますが、そういう手法があります。その時に問題になるのは、記憶と忘却の定義なのです。ネズミに「何か覚えてますか？」と聞いても「ちゅー」としか答えてくれません。記憶を行動的に定義する必要がでてくるのです。

どのようにするのでしょうか？

すごく簡略に述べれば以下のようなことです。水槽の水の中に台をおき、エサをおきます。透明な水であれば、それがすぐわかるので、ネズミはその場所をめがけて泳いでいき、エサを食べることができます。また、何度かやるうちに覚えてしまいます。本当でしょうか？それを確かめるにはどうすればいいのでしょうか。

たとえば、墨汁で水を黒くしてしまっって、エサ台を見えなくするという方法があります。ネズミはどうするのでしょうか？もし、記憶があれば、台が見えても見えなくても、その場所に泳いで行けるでしょう。実際、ネズミはエサの場所に泳いでいくことができるのです。このような手法によって、記憶を定義することができるなんてすごいと思いませんか？この、「記憶の定義」を考えたのは心理学者たちなのです。

記憶が定義された後にのみ、脳のどの部位が記憶を司っているかの研究が可能になります。この後の詳しい話は割愛しますが、脳の様々な部位の機能を破壊／停止してみて、記憶機能に影響が有るかどうかを調べるのがノックアウト・マウスという方法なのです。少し残酷ではありますが、私たちはこうした研究方法によって記憶と脳の関係について研究してきたのです。興味がある人はノックアウト・マウスという話題を調べてみてください。

第5節 第1章のまとめとつなぎの文章

最初の章では、心理学の概要のみをお話したので、中途半端な感じがするかもしれませ

んが、これからが本題です。心理学の幅広い領域とよく工夫された研究方法、そして、自分がどんな研究や実践をすることができるのか、という観点から本書を読んでいってほしいと思います。第2章では、まず、実践心理学をとりあげます。その中でもみなさんが最も興味をもっているだろう臨床心理学から始めていきます。第3章では、心理学の基本的な領域について解説してきます。先ほどの図とは逆に、発達心理学、社会心理学、認知心理学、の順番に説明していきます。第4章では、今後の心理学のあり方について、歴史と展望を見ていきます。

★エピローグ

今回の原稿は、特にアテもなく心理学の入門書を新書版で出したいと思って書いているものである。

目次は以下のようになっている。

第1章 心理学の概要

- 第1節 心理学への期待と失望
- 第2節 心理学の体系
- 第3節 臨床心理学を含む実践心理学の多様性
- 第4節 研究としての心理学の可能性
- 第5節 第1章のまとめとつなぎの文章

第2章 基幹心理学の諸相

第1節 認知心理学

- 第1項 イントロダクション
- 第2項 低次認知：感覚・知覚ネタ
- 第3項 高次認知：思考・記憶ネタ
- 第4項 生理心理・脳神経科学

第2節 社会心理学

- 第1項 自己
- 第2項 対人関係
- 第3項 集団・組織
- 第4項 文化

第3節 発達心理学

- 第1項 乳幼児期
- 第2項 思春期
- 第3項 青年期
- 第4項 成人期・老人期

第4節 新しい知識を作る基礎としての方法論

- 第1項 実験
- 第2項 調査・アンケート
- 第3項 面接・インタビュー

- 第4項 観察
- 第5節 第2章のまとめとつなぎの文章
- 第3章 実践心理学の諸相
 - 第1節 臨床心理学とカウンセリング
 - 第1項 学校とスクールカウンセリング
 - 第2項 震災と PTSD
 - 第3項 認知行動療法
 - 第4項 家族療法・芸術療法・動物療法などその他の臨床心理学
 - 第2節 医療・薬理・看護・病気と心理学 (ストレスと健康)
 - 第1項 ストレスと健康
 - 第2項 薬理心理学
 - 第3項 看護の心理学
 - 第4項 人生 with 病い
 - 第3節 法心理学と犯罪心理学
 - 第1項 法意識・道徳の心理学
 - 第2項 犯罪と被害の心理学
 - 第3項 裁判プロセスの心理学
 - 第4項 立ち直りと赦しの心理学
 - 第4節 その他：経済・政治・軍事・平和・環境・交通・エンタメ と 心理学
 - 第1項 政治・経済 行動経済学
 - 第2項 環境・交通
 - 第3項 軍事・平和
 - 第4項 エンタメと食
- 第5節 第3章のまとめとつなぎの文章
- 第4章 心理学の未来
 - 第1節 心理学の歴史とその意義
 - 第1項 進化論・精神物理学・民族心理学 1860年頃
 - 第2項 必須通過点としての心理学実験室 1880年頃
 - 第3項 心理学の確立と新しい領域への展開 1910年頃
 - 第4項 心理学ルネッサンス；意味への関心 1960年頃
 - 第5項 予言・大変革は2030年頃
 - 第2節 キャリア形成と／の心理学
 - 第3節 システム論的思考
 - 第4節 複線径路等至性モデル；未来への展望があなたを作る
- 第5章 付録
 - 第1節 心理学を学びたいあなたへ 心理学を学ぶ大学／大学院
 - 第2節 力をつけて社会に出る！ 心理学関連資格と新しい資格（心理調査士）と職場以上

ドラマセラピーの手法（5）

「隠れた物語を発見する――神話とお伽噺を使ったセラピー」

(The Story Within---myth and fairy tale in therapy)

尾上 明代

ドラマセラピーでは即興ドラマを創ることが多いが、既成の物語を使ったアプローチも、大切な手法の1つである。そこで今号では、カナダのドラマセラピスト、ユフディット・シルバーマン（Yehudit Silverman）の「隠れた物語を発見する」を紹介したい。

現実からの「距離」の効用

神話やお伽噺などの既成の物語をセラピーで使うことは、クライアントが現実から距離をとり、自分の問題を比喩的・象徴的に探索できることを意味している。現実を直接扱わないことはドラマセラピーの重要な概念の1つだ。その方が、実はより深く、しかしより安全に探究できるのである。もちろん、セッションを積み重ねる中で、個人とグループが「現実」そのものを扱う準備ができて、それが有効と思われる場合には、サイコドラマのような現実に起きたことを扱う手法を使うこともあるが、そのときに気を付けなければならない大事なポイントがある。それは、クライアント本人が、

自分が乗り越えるべき問題・課題をわかっているつもりでいても、実はそれは表面的に見えるものに過ぎず、その奥にまだ本人にもわかっていない課題が隠されている場合があるという点である。これに関してはドラマセラピスト、ルネ・エムナーも注意を促している。つまりセラピーの初めに、「この問題をやって下さい」という本人の希望で現実的な内容をドラマで扱った場合、それが本当の問題を本人が（無意識に）隠す（または邪魔をする）ことになるケースが多くあるのだ。しかし、セッション回数を重ねて深めていくと、本当の課題がわかってきたり、自分自身も忘れていたトラウマを思い出すことがよくおきる。そこで、神話やお伽噺という「距離」を使うと、少しずつ深い領域に、より安心して入ってもらい、時間をかけて「無意識」との間に橋を架けて到達すべき場所まで導いていけるのである。もともと世界中の神話やお伽噺に出て来る主人公たちは、その真剣な探究の旅の中で、自分自身についての重要な発見をするのであるが、クライアントたちも、それと同じような旅をするのだ。

この手法の特徴

ユフディットは、カナダのコンコーディア大学大学院・クリエイティブアートセラピー学科で教鞭をとりながら、モントリオールの臨床現場で芸術療法を行ってきたドラマセラピストである。対象者は、精神科の患者や自死者の遺族、個人とコミュニティーのトラウマに苦しむサバイバーなど多岐にわたる。彼女は、25年の臨床経験の中から「隠れた物語を発見する～神話とお伽噺を使ったセラピー」というアプローチを独自に開発した。この手法の特徴は、①既成の神話やお伽噺を使うこと、②ドラマ以外の多種のモダリティー（アート・音楽・詩歌・ダンスやムーブメントなど）も使っ

て深い探索すること、③特にマスクワーク（参加者各自がお面を作り、それを使ってドラマを行うワーク）に時間をかけることである。

しかしこの3つの特徴は、ドラマセラピー分野にとっては、特にめずらしいものではない。すべてのドラマセラピストが必修科目の中で学んでいることであり、それぞれ必要に応じて使われている内容だ。では、この手法のユニークな特徴は何であろうか。簡潔に紹介しつつ、その意義を考えたい。

彼女の手法では、まずクライアント本人に、自分を表現していると思う（または、「まだよくわからないけれど、自分の内面と触れ、何らかの意味をもっているように感じる」）神話やお伽噺、その中の登場人物、



場面を選んでもらう。決してセラピストがクライアントの代わりに選ぶことはしない。セラピストは導き手、器、証人になり、クライアント自身の発見を支え助け、場合によっては、相手役を演じる。

ドラマセラピーで既成の物語を使う場合には、クライアントたちの状況やセッションの目的に合ったものをセラピストが選び、グループ全体として一つの物語を演じることが多い。しかしこの手法では、1人ずつが自分のお伽噺を選んで、その登場人物を皆で同時に演じるのである。また連続セッションの中で、たった一つの役（登場人物）を何週間も（ときには何ヶ月も）演じてもらう。そのプロセスの中で、1つの特別な場面に深く入り込むことになるのだが、それがこのアプローチで最重要の治療的構成要素である。

お面（仮面）製作～監督へ

ところでドラマセラピーには、マスクワークという分野がある。これは、お面（仮面）を製作するワーク（石膏を使って本格的に自分自身の顔の型を作るもの、プラスチックや紙・布などを使って作品として製作するものなど）や、そのお面を使ったパフォーマンスなどを指す。

お面は世界中の文化に存在し、古代から多様な目的で使われてきた。マスクワークを多く実践しているドラマセラピスト、カルロス・ロドリゲスによると、その起源は、人間が動物などに変装して狩りをし、また狩りが儀式と関わりながら発展したであろうことを示していると言う。演劇でも、昔から役の小道具として、普遍的イメージを

伝える役も果たしてきた。ドラマセラピーの中では、現実から距離をとることの象徴ともなるし、自分を表現する手段にもなる。

ユフディットの手法の中でも、お面は重要な役を果たしている。物語と登場人物を選んだクライアントは、次にそのお面を製作する。自分ではなく「登場人物」のお面なので、アクセスしにくいテーマが隠れていたとしても、そこに距離ができる。さまざまな材質の材料を使って描いたりデコレーションして作るのだが、参加者たちの多くは童心に帰って創る過程そのものを楽しむ。

その後はお面を使いながら音楽・ムーブメント・ドラマなど多くの媒体を使うワークを通して、自分で選んだ登場人物を様々な試していく。この創造的なプロセスに浸って神話やお伽噺の中の人物と一体化することで、安全な構造と器ができると同時に、その役と自分との間の深い共鳴、共振がおきてくる。今まで表面化していなかった（抑圧されていた、隠されていた、意識していなかった）自分の問題やトラウマとなっている材料を取り扱うことができるようになる。ユフディットは、自分で選んだ人物・役の中にすっかり包まれてしまうと、自分自身の心配事、恐れ、切望が現れ出てくると主張する。

この手法の特徴は、物語の登場人物が直面している困難な事態に、自分自身の困難な事態がつながっていくことである。このようにして、自分の状況や問題を理解できる一方で、自分とは違う対処の仕方を「登場人物」に気づかせてもらうことも可能になる。例えば、自分だったら恐怖を体験するような場面で、物語中の人物は、ユーモアを体験するかもしれない、というふうに。

さらには、クライアントに「監督」をしてもらう段階がある。クライアントは、自分の選んだ登場人物を他のメンバー（また

はセラピスト)に演じてもらい、監督として場面の指示をするという機会を与えられるのだ。このようにして、場面は変えることができる、つまり自分の現実の困難な状況も変えることができる可能性を理解する。

要約すると、この手法は、それまで無意識的に影響を与えていた(またはアクセスすることが困難であった)心的状態に安全に触れて癒しを得るプロセスだと、彼女は説明している。

「ジャックと豆の木」を選んだ少年

ではここで、ユフディットの過去のセッションの中から事例を紹介する。

自分のきょうだいへの性虐待を含む、とても多くの重い罪を犯した非行少年におこなったセラピーである。(少年と言っても身長が6フィートもある、筋骨たくましい反抗的な18才の男子とのこと。)彼は、ラップが大変得意だったため、ユフディットはラップを使って個人セッションを進めた。彼は、「ジャックと豆の木」を選んだ。「ジャックがお金を儲ける話だから、この話がずっと好きだったのさ」、と最初は言っていたそうだ。プロセスとともに、彼は徐々にジャックという人物になることができ、ジャックの物語や「巨人」に対する恐怖などをラップで表現するようになった。あるとき、梯子を使って豆の木を登って巨人に直面しに行く場面をおこなったとき、彼は、急に止まって恐怖で震え出した。小さい頃、父親から屋根裏部屋で性虐待を受けていたことを思い出したのだという。父親は、彼が7才のときにいなくなってしまったとすることで、そのことを忘れていたが、「豆の木を登った」とき、屋根裏で待っている父の

ところへ行ったことが甦ったようだ。このことこそ、彼自身も意識の上ではわからなかった「ジャックと豆の木」を選んだ理由だったのがある。

このとき以降、彼は、自分の受けた虐待、そして自分がしてきた虐待や暴力、そして暴力に対する自分自身の恐怖に向き合い始めた。そしてついに家族とやり直し、暴力団グループからも離れて更正することができたという。最後のセッションのとき、「お伽噺だなんてさ、本当に騙されちゃったみたいだね、こんなアホみたいなものに。でもさ、豆の木を登ったとき、あいつのことを思い出したんだ・・・

全く大変なことだったよ。そう、このセラピーを受けて良かった。おかげで人生が変わったよ。」

と話した。セラピー終結後、彼はユフディットに、ラップシンガーになるオーディションテープを作っているという連絡をしてきたそうである。

この事例では、ラップ音楽が得意なクライアントだったため、セラピストが実際にそれを一緒に行うことで、ドラマへの道筋をつけていった。個々のクライアントにとって適合している表現方法を使うことの効果がよく理解できる。

また彼女が主張しているもう1つの特長は、ユングその他の枠組での解釈をする方法と違って、神話やお伽噺を、そのクライアントの個人的な体験の枠組で、理解・解釈していく点である。

映画

ユフディットは、芸術をセラピーだけでなく、社会変革の方法として積極的に使用しており、ドキュメンタリー映画の制作者という顔も持っている。自死遺族が苦しみを表現する必要性を描いた *The Hidden Face of Suicide* (2010) は、いくつかの国際映画祭に出展した結果、2つの賞を受賞した。

あるとき彼女は、古い新聞記事を見て、自分が生まれる前に伯父が自死していたことを偶然に知るのだが、そのことについて、家族の誰一人として話すことがなかったことに疑問を抱く。家族の沈黙の裏にはどんな意味があるのか理解したいと思ったユフディットは、多くの自死遺族たちに出会う。そして彼女は、話すことができないことを表現するユニークな手段（＝お面作り）を彼らに提供し、遺族たちがその中にどんな意味を見い出していくのかを描いている。それは彼らとユフディット自身の癒しにとって大変重要な変容の旅であった。遺族たちが教えてくれたのは、秘密にしておくことの危険。そこから、自分の家族の沈黙を破る勇気をもったユフディットは、50年前の悲劇について初めて両親に聞くことができた。その後3人は、伯父の魂を癒すために、お墓に向かう。お墓での3人の歌声が感動的なラストシーンを創っている。このドキュメンタリーは、大切な人を亡くした自死遺族の苦しみと、その苦しみを秘密にしておくことの苦しみ、そしてそれを表現することの重要性を描いているのだが、同時に制作者の彼女自身の旅となっていることもユニークである。



今年3月、ユフディットが来日した際、立命館大学・応用人間科学研究科でも招聘した。院生たちに「隠れた物語を発見する」のワークショップを体験してもらい、また上記の映画を紹介することができて大変有意義な時間となった。

文献（資料）

キャンベル、J、（平田武靖他 訳）千の顔をもつ英雄 人文書院 2004年

関則雄（編）、新しい芸術療法の流れ クリエイティブ・アーツセラピー フィルムアート社 2008年

Silverman, Y. (2004). The Story Within---myth and fairy tale in therapy. *The Arts in Psychotherapy*. Vol. 31

The Story Within-myth and fairy tale in therapy, 2004

Produced and directed by Yehudit Silverman

The Hidden Face of Suicide, March, 2010

Produced, written, and directed by Yehudit Silverman

日本のジェノグラム

早樫 一男

2

命名(名づけ)の話題から

家族に近づく

相談面接の場合、家族のご紹介をお願いした後、名前(命名)のことをよく話題にします。命名のいきさつ(決定)や思いを教えてください。

また、ワークショップの最初のアイスブレイクとして話題にすることがあります。自己紹介をする際に、「名前(命名)」から話始めるようにという課題を出すのです。

ところで、ジェノグラムの作成の際、家族を見立てる上でも、□○の横や下に家族メンバーの名前を記入しておくことは重要なことだと考えています。

また、面接の初期に、家族メンバーの命名を話題にするというのは、《家族情報の収集と仮説(見立て)へ》つながる作業ということができます。

例えば、子どもの名前(命名)を話題にするということは、命名にまつわる「家族

の決定」(家族システム)に関する情報につながります。父母だけでなく、祖父母など(拡大家族)の存在や関係性に関する情報も手に入れることができます。

具体的には、「どなたがつけられましたか?」「どのように決まったのですか?」といった質問から、「おじいちゃんやおばあちゃんはそのお名前をどのように思っておられますか?」といった質問も可能でしょう。

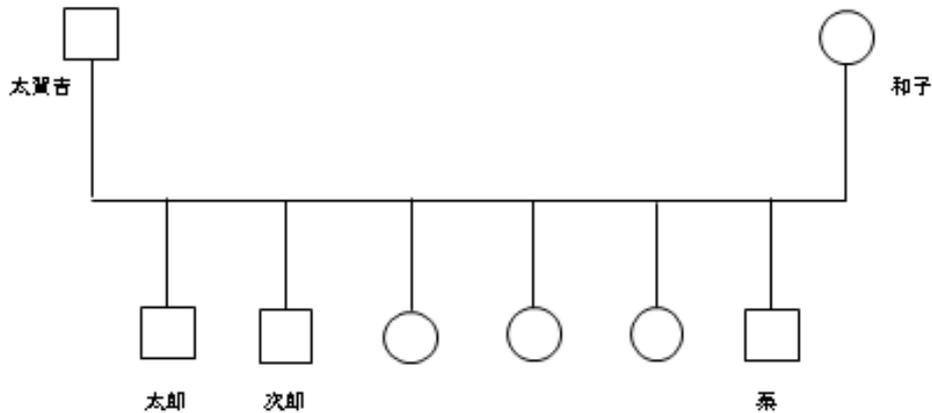
そして、会話の中で家族から話題にされたメンバーについては、引き続き、聴きこむことができるのです。「**の一字をもらっています」という場合は、「**」さんのことについて、確かめることも可能です。

聴き方が上手な場合、家族の歴史(結婚、誕生、転居、離婚・再婚 e t c)に関する情報へと話題が広がっていくことがあります。

名前(漢字)の意味から

「難産で生まれただけに子どもの顔を見

A家の場合



にと《歓喜》とつけました」「優しい子に育ててもらいので《優》の一字が入っています」等、名前には意味や思いが込められていることがあります。出産前後のエピソードや子どもへの期待等々、「子どもに対する思い」について、話題を広げることができます。もちろん、家族の見立てにもつながります。

また、時には、命名の話題の中に家族のドラマが隠されていることもあります。命名から、思いもかけない話題に展開することもありました。

いずれにせよ、「名前（命名：なづけ）」は家族や個人の理解の上で、さらに、相談の初期の段階で触れることができる話題としても貴重なものということができるでしょう。

日本の男性の場合

キラキラネームが流行る時代とはいえ、男性の場合、名前に漢数字がつく場合をよくみかけます。ちなみに、私は“一男”です。

「一」がつく名前（例：「一郎」）を始め、「太郎」などは「長男」「最初の男の子」ということが名前から自然に伺われることとなります。それは、単に順番を表すだけではなく、暗黙に、長男役割や最初の男の子ということ、跡継ぎを期待されるということの意味する場合があります。同じように「二」や「次」がつく名前（例：「二郎」「次郎」）は次男を表しています。

日本の政治家に見られる名前

(レギュラーとイレギュラー)

A家の場合 (ジェノグラム参照)、男性は「太郎」「次郎」と続いています。三男の場合、「三」が使われることもあります。しかし、A家の場合、三男はそのパターンからはなぜか異なっています。

K家の場合 (ジェノグラム参照)、「長男」「次男」という同胞位置につながる (表す) 「一」「太郎・次郎」だけではなく、名前 (漢字) の一字が伝承されている、少なくとも

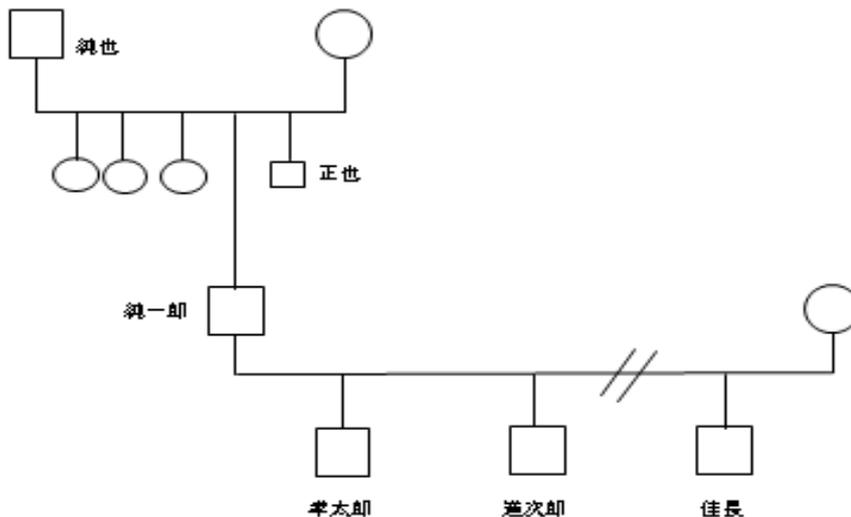
三世代にわたっているということも興味深いものです。

しかし、三男はそのパターンを受け継いでいません。彼が生まれる前に夫婦が離婚しているという背景が大きく影響したようです。

ところで、女性の場合には、このような特色が伺われる名前に出会ったことはありません。ジェンダーが名づけにも影響しているのでしょうか？

(つづく)

K家 (名前の伝承)



きもちは、 言葉を さがしている



第14話

水野 スウ

満30歳の「紅茶の時間」

このマガジン原稿を書いている2013年11月、「紅茶の時間」はちょうど30歳になりました。それに関しての特別なことは何もしないつもり、と前号に書いた通り、大きな行事的なことは何もせず、あいも変わらず週一回わが家をあけて、そこにやってくる人たちとの静かな、時たまにぎやかな時間を、共有し続けています。

それでもやっぱり、おもしろくて不思議なドラマがその折々の時間内に生まれてきて、私は毎回、その第一目撃者になれる。というわけで前号に引き続き今回も、毎週のふつう紅茶の、記憶アルバムからの何コマかをご紹介します。

お正月の紅茶

毎年、新年はじまってすぐの紅茶の時間は、紅茶が一杯もでてこない、「お薄の時間」へと変身します。

同じ町に住むEさんから、「スウさん、一つお

願いがあるんです。私、お抹茶が大好きで、家でも毎日のんでるんだけど、私の点てるお薄を紅茶のみなさんにも飲んでもらいたいので、年に一度でいいから、紅茶のお台所を私に貸してくれませんか」という申し出があったのは、今から18年前のこと。

翌年のお正月、紅茶に来た人みんなにYさんがお薄をふるまってくれて、それ以来、一度も欠かすことなく、新年の紅茶の時間が、お薄の時間になっているのです。お作法もとくになし、お代わり何杯でも、の実に気楽なお茶会です。

Eさんはフルタイムで働いているので、ふだんの紅茶に来れることはめったにありません。その日は前もってお休みをとり、お抹茶からお菓子から、お茶道具一式を用意してやって来て、午後いっぱい、わが家の台所でお薄を点ててくれます。時には人の出入りが多くて、紅茶の開店時間の5時間中、Eさん、台所にずっと立ちっぱなし、という年もありました。

私の紅茶における役割はだいたい3つあって、①紅茶のお変わり入れ係、②話を聴いてもらいたい人の、話を聴く係（紅茶がこみあっていて忙しい時をのぞく）、③ひとのいいところを見つけたら、それを言葉にしてその人に伝える係、だと思っているのだけど、この日は①の役割から完全にはずれさせてもらえるので、いつもならお客さんが見えるたび、新しい紅茶をいれにちょこちょこ席をたつところ、薪ストーブのまえにこっぴりと座ったまま、一年で一番、楽させてもらえる、私にとってはお正月休みのごほうびのような時間。その上、私の姉の遺したお抹茶碗も、この日は大活躍できる、といううれしいおまけつき。

お薄の時間が始まって何年目だったか、せめてお抹茶代だけでもお支払いした方がいいんじゃないか、と申し出たことがあったけど、即、彼女からこんな言葉が返ってきました。

「とんでもない。この日は年に一度の、とつてもしあわせなきもちを味わえる、私の特別に大切な日なんです。私にとっての日常茶飯事を、みなさんがこんなによろこんでくれる、しかも私一人に、これだけいっぱいありがとうを言ってもらえる日って、ふだんはないです。お金をいただくよりも、こっちのほうがずっとうれしいお礼です。なので、どうかこれからも続けさせてください、私がうれしくてうれしくて、勝手にしてる、紅茶のお台所占拠なんですから」

そう言われればたしかに、お薄の日は、彼女にむかって、ありがとうのシャワーの一年分が、新年の紅茶に来る誰かれから降り注ぐ日でもあるのでした。

そうかあ、一杯のお茶が、差し出された人のきもちをあたためると同時に、差し出す側のきもちをも、しあわせにあたためる。そんな行ったり来たりがそこにあるから、おたがいにきもちよく、長続きしているのだなあ。そして、そういう場を提供している、紅茶なのだなあ。

今はもう11月。そろそろEさんが仕事帰りの遅い夕方にならりと紅茶によって、スウさん、来年のお薄の時間はこの日でもいいでしょうか、と訊

いてくることです。

15年ぶりの紅茶

今はつくば市に住んでいるIちゃんから、ある日突然の電話。「もしもしスウさん、今度の水曜日って紅茶あいてる？私と、妹とその赤ちゃんと、つくばの友だちと、3人で紅茶に行こうと思ってるんだけど」

もちろんどうぞどうぞ。紅茶は元旦と大晦日以外の水曜なら、よほどのことがないかぎり、あいています。それを知ってる人は確かめることもせず、いきなり来たりします。でもIちゃんはさすがに15年ぶりくらいなので、いちおう確認せずにはいられなかったのでしょう。

Iちゃんとはじめて逢った時、彼女は高校2年か3年だったか。この連載の第10話に登場した、不登校経験のあるTくんが実行委員長になって開催したシンポジウム「学校って何？」—学校に行っている子と行かなかった経験を持つ10代の男女7人が、自分にとって学校って一体何だろう、と語りあったユニークなシンポジウムで、Iちゃんもその時のパネラーの一人でした。

その実行委員会のミーティング場所が私の家だったので、学校に行っているIちゃんたちの下校時間を待って、若い子たちがわが家に集まり、かんかんがくがく話しあってものごとを決めて行くのを、うしろから眺めている、というのが当時の私の立ち位置だったように記憶しています。

高校卒業後Iちゃんは、つくばにある大学に行き、介助の仕事につき、珈琲の焙煎を仕事にしているパートナーと出逢って結婚、現在に至る、というくらいしか、私は彼女のことを知りません。

一方、彼女は私の出しているのみら通信の、ずっと購読者なので、私サイドの情報はおおまかにつかんでいて、新しい本が出たと知れば何気にメールで本を注文してくれたりします。今年の春のクッキングハウスへのお話の出前では、Iちゃんがつくばから参加していて、久しぶりに再会しました。

妹さんは京都から、生後2ヶ月の赤ちゃんを連れての帰省、とのこと。それぞれ遠くに住んでいる姉妹が、そろっていつか石川にいるのは何でだろう、と思ったら、もともとは、100歳近いおばあちゃんのお誕生日をお祝いするためにみんなで集まろう、という計画だったもよう。けれどもおばあちゃんのお具合が今ちょっとよくないので、予定を早めて、ひい孫の顔も見せに、かつての家族が全員、金沢の家に来ることになった、そのタイミングのおつりで、紅茶にまで足を伸ばしてくれたのだとわかりました。

Iちゃんのつくばの友だち、静かなたたずまいのKさんは、彼女から私の本を借りて読んで、どうしてもこの目で一度、紅茶の時間を見てみたい、その場に身をおいてみたい、そう思って、今回の旅の計画に合流したのだそうです。

聴けば、夫さんの設計事務所の一角で、カフェをひらいていた時期もあったとか。でも彼女がこれからしたいと思っていることは、場をひらく、ということよりも、人の話を聴く、ということ、聴くことのできる人になりたい、ということ。そしていつかは、人の話を聴くことのできる場がつくれたらいいな、とも考えているようでした。

紅茶にはこれまで、ずいぶん遠くからもいろいろな知らない人が訪ねてきたけど、そんな一人一人が、紅茶から何をおみやげに持ち帰るのだろう、ということに私はいつもとても興味があります。

Kさんの願いは、場をひらくより先に、聴くということ、なのかあ。

紅茶はもともと、一緒に子育てする仲間と出逢いたい、からごく単純にスタートした場だったわけだけど、そのすぐあとから、聴く、ということがずつついてきて、それはものすごく奥が深いもので、私はいまだに修行中の身です。

けれども、いろいろな人の話を聴く、という一見地味に思える行為から、私はさまざまな人の人生の貴重なおすそわけや、大切な贈りものをたくさん受けとらせてもらっている、といつも感じているので、この日はじめて逢ったつくばのKさんが、

聴くということからはじめたい、とふともらした言葉に、こころが惹かれました。

もしも彼女の希望がそういうことなら、特別なことは何にもしていない、この日のようなふつう紅茶にたまたま来あわせてたこと自体が、彼女の何かしらのおみやげになるのかもしれないね。

ちょうどそこにやってきたのが、連載の第10話にも登場してた、近所のSちゃん。小学1年生の時からかかさず毎週、紅茶にきていた彼女も、今や高校3年生。部活もあって最近、台風で休校になった時か、試験の時以外、めったに紅茶にこれません。

この日の彼女は、進路のことで何だかちょっと話をしたくて紅茶にきたらしい。中学時代は、マッサージする人になるんだ、と言ってた彼女だけど、高2の時の進路希望は、作業療法士、になっていました。

その彼女が、「今は理学療法士になりたいと思ってるんだけどさ、作業療法士の人はけっこうまわりにいるけど、あたしのなりたい方の、そんな話聴かせてくれる人ってあんまりいないんだよねえ」。

彼女がそう言ったとたん、つくばのIちゃんが、「私ね、そういう学校出たんだよ」というので、15年ぶりのIちゃんと、ほぼ1年ぶりに来たSちゃんとの、紅茶でのシンクロニシティに、一堂びつくりしたのです。

早速、Sちゃんと、15歳余り年上のIちゃんの、二人の会話が始まる。「でもね、どこを出たからって、何を勉強したかって、それだけで人生は決まらんないもんだからね」というIちゃんの大人なアドバイスに、うんうん、確かにそうだよねえ、と私も幾度もうなずきながら、同時に、いろいろな人の卒業後の十人十色の生き方を思い浮かべて、ちょっぴり笑えたことでした。

聴くということからはじめたい、といったKさん、私をいつかつくばに呼びたい由。こういう願いは持ちつづけてるときとかなうものです。ささやかな願いを、その人が忘れさえなければね。

夏休みの紅茶

夏休みにはいつてすぐの紅茶の時間めがけて、滋賀県から親子3組、計9人が一台の車に乗り込んで、北陸道を走ってやってきました。

一昨年、去年、今年、これで3回目という、夏休み最初の水曜日の紅茶訪問ツアー。はじめて来た時は小学生だった最年長の男の子は、もう中学3年生になっていました。

小4から中3まで、6人の子たちは、去年と同じように子どもたちだけでかたまっ、紅茶の居間の床にねそべったり、トランプしたり、てんでんにしつつもなにやらとても楽しそうです。

今どきめずらしいくらい、誰も個々の指遊び（と私が呼んでる、携帯やスマホいじりのこと）はせずに、そこに一緒に居る時間、をあげわっている子どもたち。木に興味がありそうな男の子がいたので、さりげなくそこに夫がはいつていつて、手動の穴開けドリルやのこぎりの使い方を教えて、ミニ工作の時間もいつのまに始まったりしていました。

滋賀のお母さんの一人は、今はパートで働いているけれど、いつか家でカフェみたいなこと、というよりは、紅茶のようなことをはじめてみたい、とずっと思っているんだそう。一緒に活動してる仲間たちと、こうして何度も紅茶にくるのもそのためなのだと、この日、私も知りました。

実は滋賀の親子組がやって来た日には、この春から専門学校生になったMちゃんが先客で来ていました。彼女は高校生の時、学校に行きにくい一時期があつて、紅茶へはいつもお母さんと二人で、カウンセリングの帰りに来ていたのです。そのMちゃんが、一人でやってきたのは、この日がはじめてでした。

2年前の、紅茶に来始めたころのMちゃんには、彼女のまわりに、薄いけど固いついたてがある感じで、その中で必死に自分自身を保つて立っているように見えました。何ヶ月かたつうち、その緊張バリアが少しゆるんで、のびやかな笑顔をときおり見せたり、よくしゃべるようになって、私との距離もだいぶん近くなつていつたかな。

その後しばらく顔を見ないなあ、と思つていたら、次に会えたのは、彼女が高校を卒業する時でした。今までしよつていた重たいものを振り払うことができたのか、何か吹っ切れたみたい、スキッと軽やかな顔で、お母さんと二人してあいさつに来てくれました。

とはいえその時も、まだあんまり話らしい話は、何も語つてなかつたように思う。お母さんのこと、大好きなの、というMちゃん。親子でよく、いろんな話をいつもしてるといふ。話もよく聴いてもらえてるみたいだ。でもそれとは別に、一人で来てこそ話せることも、感じることも、きっとあるでしょう。

高校時代、生きることの意味に真剣に悩んで、もがき苦しんでいた日々のことを、一人でやってきたこの夏の日はずいぶんはっきりと言葉にしてくれて、そのほとんどが、私もはじめて聴く、彼女のきもちでした。

きもちはいつだつて、それを表現するのにぴつたりな言葉を探そう、見つけだそう、としてるんだと思う。Mちゃんの場合は、その感性が鋭ければ鋭い分、他の人は楽にスルーしてしまうことでも感じとつてしまうことがいっぱいありすぎて、余計にしんどかつたのかもしれない。感度のよすぎるアンテナを持つ子どものきもちに、たいいていの親はなかなかついでいけなないものだと思うから。

混沌ぐちゃぐちゃのきもちを自分の中で整理し直し、当時のきもちにフィットしそうな言葉探しの作業を、高校時代ずっとくりかえしてきたのだろうな、と想像できました。

そうやって見つけだした言葉を他者に語れるようになるまでには、そこからさらなる時間もきつと必要だつたのでしょう。

この日の紅茶はその意味で、今の時点での彼女のきもちを聴くのにちょうどいい、安心な受け皿になりました。ちつともはやっていない紅茶に感謝するのは、こんな時です。

そこに滋賀からの親子組が、9人でやってきたのでした。

3人のお母さんは、その日はじめて逢つた一人

の女の子が、自分のしんどく、苦しかった時のきもちを真剣に、でも不思議と目をきらきらさせながら語っている場面に、幸運にも遭遇した、というわけです。

特に私から何も言わなくても、お母さんたちが彼女のきもちをまっすぐに聴く時間を、その場で共有してくれたこと、とても有り難かった。聴こうとするきもちのない大人がそこに一人でもいたら、彼女はきっとそれ以上話を続けなかったでしょうから。

紅茶の時間の中にできた、二つの島。6人の子どもたちのいるかたまりと、6人の大人たちのいるかたまりとが、どちらも邪魔しあわず、それぞれ自分たちの島のできごとに集中していました。

おとなのうちわけは、40代の滋賀組3人と、60代の私たち夫婦、そして、おとなへと一歩踏み出した19歳の彼女。世代のちがうもの同士の、話す・聴く、の濃い時間。

Mちゃんの話、親のきもちになって聴く人もいれば、自分が子どもだった時のきもちになって耳を傾ける人もいました。こんな機会って、なかなかない。縦割り紅茶ならではの、人生のシェアリングの時間。

いつか紅茶みたいなことをはじめたいと思っている滋賀のお母さんが、こんな場所あるっていいよねえ、としみじみした口調で言うと、Mちゃんがざらりと、「うん。紅茶ってね、ずーっと深呼吸のできる場所なの、私にとって」。

この日の紅茶は、はじめからしまいまで、めずらしくこの人数の貸し切り状態が続いて、それがなお、神様からはからいようでした。蝉の声、ヒグラシの声、鳥たちのさえずりが、いかにも夏休みらしいこの日のBGMで。

こんなふういきもちを深いところでわかちあえること、ふつう紅茶の、シナリオのない一期一会ドラマの、最もすてきなところだと思います。

22年ぶりの紅茶

今年の7月の終わりの紅茶は、めずらしくこん

でいました。

おなじみの紅茶仲間の何人かにくわえて、はじめに来た人が2人、金沢でピースウォークをはじめ、憲法のことや原発再稼働問題など、さまざまな市民活動をしているピースの仲間たちが5人、隣の富山県からアーティストのライブのチラシを持って来た人が3人、そこへ、みどりのふるさと協力隊で一年間だけ白山麓の村に住んでいる高知出身の女の子がやってくる、といったふうで、話題も、ふるさと協力隊って何？ だったり、憲法だったり、原発だったり、ライブの宣伝だったり、とそれはもうにぎやかしい。

毎週こんなふうだと、とても人の話をゆったりとは聴けなくて、きもちが少々うつむき加減の人には勢いのありすぎる場でしょうが、うまくできたもので、幸い、この日の顔ぶれはエネルギーを外に出せる人たちだったようで。それぞれが興味を持った人のところについて、熱心に情報交換。憲法に関心ある人には、私から、こんな本がおすすめだよ、とか、これ読んでみる？ とか言いながら、その場で即席ミニミニ憲法講座の場面も。

そんなにぎわいのまっただ中にこんにちは～と入って来たカップル。彼女の笑顔に、かすかだけど確かに見覚えあり。「スウさん、私のことわかる？ 覚えてるかな、22年ぶりだよ～」

なんとなんと、まだ津幡に越す前、金沢に住んでいたころの紅茶に、たった一度だけ来たことのあるYさんと、そのパートナーでした！

夏休みで能登の方まで来たから、ちょうど水曜日なんできつと紅茶やってると思って、と。電話の一本もかけずにいきなり出現という、なんと大胆な紅茶の訪ね方。それも愛知県から。もちろんめっちゃうれしかったけど、それ以上に、びっくりくり！ でした。

22年前、Yさんは「生存の行進」という名前のグループに加わって、北海道から沖縄までを歩きとおす、という旅を続けていました。

その旅の過程で、生存の行進の彼らが、金沢に、そして紅茶にも、立ち寄ったのです。そのころの

紅茶はといえば、チェルノブイリ原発事故からまだ数年もたっていない時で、幼子をかかえたお母さんたちと、毎週、原発のことをいっぱい語り合っ
合って、脱原発を願ってのいろんな活動を仲間たちと必死に展開していた、熱い時代の真っ最中でした。

その時すでに歩くメンバーの一人だったYさんのパートナーと彼女は、山口県の祝島に向かう舟の上ではじめて出逢い、一緒に歩く旅の途中で、2人で一緒に生きて行くことを決意したそうです。

22年という歲月。紅茶という場が、それだけの時間がたっても、いまだ原発も憲法も平和のための活動も、自由に語りあえる場所で、本当によかった。Yさんたちの思いがけない登場で、そのことを再認識させられた、この日の紅茶でした。

なんでもない日なんでもない紅茶の、とくべつ

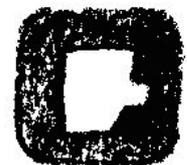
なにげない毎日、当たり前に見える日常だけど、そのなにげないことこそがとくべつなこと。震災のあとのこの国では、とりわけそう思えます。身近な人たちと日々、小さなしあわせや、小さなよかったをよろこびあえたら、それだけでもうとくべつな一日。そんな一瞬一会を生きている私と私たち、なのだと思えるように感じることが多くなりました。

紅茶がこれまで歩んできた30年は、前回と今回に登場してくれたような、年齢も性別も仕事も生き方もさまざまな、そういう一人ひとりによって支えられているし、こんな人たちとともにつくる時間の積み重ねによってできている、のだと思います。

そして紅茶は、誰よりも私にとって、そういった小さなうれしいや、よかったをはじめ、たくさん、小さな悲しみや怒りや涙や、世の不条理を感じとるためのアンテナと、ささやかでも行動する勇気を、長い時間かけて育ててくれている場所なのだ、そのことを、この文章を書きながらあらためて今、実感しています。長いこと、同じ一つのことを続けてくるといことは、きっとこうい

うきもちに気づかせてもらえることでもあるのですね。

2013.11.16



やくしまに 暮らして

ネイチャーガイド
大野 睦



第十四章 青年

このまちで暮らすこと

人口14000人足らずの屋久島。小さなまちでも様々な行事がある。むしろ小さなまちだからこそ、様々なイベントでいつもその準備をしたりする人は限られていて、そんな人たちによって島のイベントは支えられている。私は仕事柄、どうしても運動会などに参加することが出来ていない。屋久島に暮らして何年か過ぎた頃、島で一番大きなお祭りにいつも参加できないことになんとか後ろめたさを感じるようになっていた。そこまでして仕事をするべきなのか？そう思うようになっていた頃、お祭りの実行委員会のボランティアメンバーに入れてもらうことが出来た。初めて住民とし

て認められた気がして本当に嬉しかったのを覚えている。それからは毎年ボランティアスタッフだけで揃えた法被を羽織り、このお祭りの実行委員会メンバーの方々と準備や片付けの手伝いを少しだけさせてもらうようになる。もちろん、お祭りを見て楽しんでという参加の形もあるとは思いますが、私にとっては実行委員会の方々と一緒に何か出来ることが嬉しい。今でも他の行事などには殆ど関わることは出来ていないが、小さなまちの中で青年世代が関わっていくことで少しずつ世代交代してゆくことは大きな意味があるのだと思う。



青年会議所との出会い



2011年、屋久島に青年会議所を設立しようという動きが生まれた。それまでも今も屋久島の青年世代といえば商工会青年部に所属し、前述のお祭りなどでも活躍していた。若者の少ない小さなまちである。いくつもの組織が出来ることには懸念の声も上がったが、それでも明るい豊かな社会の実現を目指し、2011年7月に屋久島青年会議所が設立される。この時も声をかけていただき、私は設立メンバーに入れて

もらうことが出来た。屋久島青年会議所のメンバーの殆どは商工会青年部とのかけもちをしており、既に続いている行事やイベントではそちらでの活動となり、青年会議所では独自の活動を見出す必要があった。あまり目につくことはないかもしれないけれど、このまちにとって良いと思うことを少ない人数でもやってみることに意味があると信じての活動を続けて行こうと、少しずつ小さなことから活動が始まった。



40歳になり

青年会議所は世界中でその活動が行われているが、20歳から40歳までと限られており、それぞれの任務も単年度制となっている。今年40歳になった私は設立メンバーの中でも真っ先に卒業をひかえている。その最後の年に私は理事長という役職をいただいた。出来たばかりで何をしている組織なのか、その存在意義を他に知ってもらうためにはこれからという時であるが、それは残るメンバーに託して卒業を迎えるのである。この青年会議所活動は私にとって今という時を考える機会を与えてくれた。それまでは仕事に追われたりしているうちに日々が過ぎてゆくことに言い訳ばかりを探していた気がする。

思えば、そんな感覚は社会人になると忘れがちだということに気付かされた。そして、まさに大学を卒業して社会人になると

きに味わった緊張感を今抱いている。それはもう青年ではない、ということ。若さという言い訳がもう通用しない。これからが本当に社会に出るとのことなのかもしれない。

大野 睦 BLOG やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>



お寺の社会性

— 生奥坊主のつづやき —

拾参

竹中尚文

1. 研修会

先月、研修会で長島に行った。私たちがいろんな研修会がある。坊さんたちの研修会、一般の人達と坊さんと合同でする研修会や、坊さんとその家族の研修会などがある。形式はパネルディスカッションか講演会のどちらかが殆どだ。そのテーマもさまざまだ。去年は野中広務氏の講演があった。私は『差別と日本人』（野中広務、辛淑玉共著）をととても気に入っていたので、楽しみに出掛けた。野中氏の政治放談になってしまったのが残念だった。

今回の現地研修は、私たちの企画であった。私は、現地研修を気に入っている。だから、近隣の寺の住職やその家族対象の研修会に、長島に行こうと言った。

現地研修というのは、宗教的には巡礼とも言える。多くの宗教で巡礼と言うのは巧い手だと思っている。キリスト教の聖地巡礼、イスラム教のメッカ巡礼もあるが、仏教でも巡礼は盛んにおこなわれてきた。インドでもあったし、日本でも西国三十三所や四国八十八所にお参りをすることが古来より盛んにおこなわれてきた。「お遍路さん」という言葉でその姿がイメージできるのは、今も変わらない。このことで真言宗は信徒を多く獲得してきた。これによって多くの人々が真言の教えの入り口に立ったのである。巡礼という行為は入門者や初心者には有効な手立てである。

2. 長島愛生園

瀬戸内海は穏やかな海である。兵庫県を西に過ぎるあたりから、島々が多くなる。その多くは、名前を聞いても覚えきれないような島の数と平凡な姿である。そうした島々が穏やかな海にのんびりと浮かぶ。じつに平和な光景である。

長島はそれらの島の一つである。岡山県瀬戸内市にあって、現在は本土と短い橋でつながっているが、島である。この島には二つの国立ハンセン病療養所がある。長島愛生園(ながしまあいせいえん)と邑久光明園(おくこうみょうえん)である。ハンセン病療養所は全国に15ヶ所(国立13, 私立2)あるという。

私はこれまでハンセン病についてほとんど知らなかった。だから、現地研修をしようと言ったのである。近所の僧侶の一人が長島に何度も足を運んで知識を持ち合わせていたので、彼を講師にしてこの研修会をした。こんな企画を立てたら、他にも何人かの僧侶がここに関わり続けていた。

ハンセン病は「らい菌」によって発症する。らい菌は結核菌とよく似

た菌で、感染力も弱い。だから、これまでこの療養所で患者からスタッフへの感染は一度もなかったと言う。ハンセン病はこの菌の発見者の名前をとった。この病気は末梢神経がおかされ知覚麻痺がおこる。この知覚麻痺は身体の端っこの方からおこるので、手、足、鼻、耳などから感覚がなくなるそうだ。そうすると、怪我や火傷をしても感じないので気付かないままになって、感染症を起こすことが多い。そうして壊疽をおこして、手足等の変形や欠損がおこることも多い。ハンセン病は1940年代半ばに治療薬が発見されて、治療が容易な病気になった。従って、現在の日本には、ハンセン病患者は一人もいない。

ハンセン病患者の収容は、明治末期から始まったそうだ。1931年に「癩予防法」が制定されて、強制収容が始まった。これ以降、一般社会から急速にハンセン病患者が消えていく。また、これ以前、大正時代に断種も始まった。この話を聞いた時、統合失調症のことを思いだした。統合失調症も1930年代よりナチス

ドイツで施設に患者を押し込めて、民族浄化を進めた。多様性を認めず寛容性を持たない人々の作る社会が人々をはじき出してきた。私たちはその潮流から決別できたのだろうか。

第二次大戦後も、「らい予防法」が作られ、「優生保護法」の対象にハンセン病が入れられ、合法的に強制手術がおこなわれてきた。2001年の「らい予防法違憲訴訟」勝訴で流れが変わり、2008年に「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」が制定されて現在に至っているそうだ。

私たちは小型バスで長島愛生園を訪れた。バスが園内に入ると、震災の仮設住宅のような住居の中を抜ける。住居区域と非住居施設区域がある。その中で、私たちは「お寺」と呼ぶ施設に入った。この園内にはいくつかの宗教施設があって、彼らの信仰が保証されている。長島愛生園の場合、約40%の真宗信徒、約20%のキリスト教徒、40%程が真言宗や禅宗や日蓮宗やその他いろんな宗教の人達である。

お寺に集まってきてくれた人々はいずれもお年寄りである。現在の長島愛生園の入所者の平均年齢が83歳程である。ハンセン病の治療薬の発見が1940年代半ばであるから、戦後はハンセン病になってもすぐに治るので、療養所に入れられる人は激減した。また、断種によって園内で新しい世代の誕生はなかった。だからこの入所者は高齢者ばかりになった。

お寺に集まってくれた人々のうちで福島さんが、本名は福岡さんだと言う。本名を明かしたのは数年前だそうだ。もう60年ほど福島と名乗ってきたのだから、福岡さんと呼ばれてもピンとこないそうだ。名前を変えた人は多い。それは、入所が同時に故郷や家族との決別であった。ハンセン病に対する差別が家族に及ぶことを恐れてのことだ。今、本名を名乗ってもだいじょうぶだ、故郷に帰ってもいいと言われても、自分を知る人は故郷にいなくなってしまっている。何より、本当に差別は無くなったのだろうか。

次に訪れたのは、歴史館という歴

史資料を展示している建物である。元々は事務管理棟として建てられたものである。展示物の中に、二重構造になった湯飲みがあった。ステンレス製などの保温カップと同じ様の構造の商品があるが、ここで焼かれた陶器で現在も使われている。ハンセン病は抹消神経が侵されていって、熱さや痛みを感じるができなくなる。この湯飲みは、手の火傷を防ぐための湯飲みである。彼らは火傷や怪我が多かった。国家は彼らの強制収容を決めたが、長島の開発は彼らに課せられた。道を切り開き、建物を建てた。重機の無い時代のことである。彼らの手足は瞬間に、傷を負った。それに気付かないまま感染症になり、手足を切断した人や変形や癒着をしてしまった人も多い。

次に訪れたのは、納骨堂である。いろんな人々や団体の寄付もあって、この地で亡くなった方の納骨堂ができた。特に一定の宗教を表現しない納骨堂である。入所者や職員もここに納骨されている。国有地に立つ共同の納骨堂である。ここには靖

国神社のような問題はない。とってもシンプルで、私は好きだ、こんな納骨堂。

最後に案内されたのは、収容棧橋とそれに続く収容所である。収容棧橋というのは、この長島に上陸したならもう出ていくことのないことを意味した。私は、この棧橋と収容所をみて、規模は違うがニューヨークのエリス島を思い出した。ヨーロッパからアメリカに渡った移民が初めて上陸するのがエリス島である。太平洋を渡った移民はサンフランシスコ湾のエンジェル島に上陸した。検疫等のためにエリス島でしばらくの間、留め置かれるのである。エリス島の資料館には、当時の人々の不安に満ちた眼差しの写真があった。しかし、アメリカに渡った移民には明日があったし、アメリカンドリームを持てた。長島に上陸した彼らにはそれすらなかった。どんな眼差しで上陸したのだろう。

収容所は当時のまま残っている。外観はモルタル洋館風で、内部は木造であった。戦前の学校を思わせる建物である。中に入ると、すぐに消

毒剤の風呂に入れられて、現金などは取り上げられて持ち込み品の消毒があった。縦10メートル程で横が20メートル程の部屋があって、そこに数日間留め置かれて、どこの寮に入るかが決められたそうである。私たちを案内してくれた岡山さんがそう言って説明してくれた。彼が少年の頃にこの島に連れてこられた。「私の寝台は、ちょうどこのあたりだった」と部屋の中で手を広げて示してくれた。そして「右側の人は、入所してすぐに亡くなった」と言った。岡山少年の目には、この天井がどんな風に見えたのだろう。窓の外をどんな思いで見っていたのだろう。彼の眼差しには何が浮かんでいたのだろう。

3. つながりの向こうに

岡山さんの気持ちを想像して頂けたらどうか。私の拙い文章でも、少しでも岡山さんのことを思ってもらえたらありがたい。私は、岡山さんにも福島さんにも会った。これからも会い続けたい。その思いを先の項に書いたつもりである。

出逢い、ふれ合い、つながる。この文章を読んでくださった人達が、岡山さんの事を思ってくだされれば嬉しい。そこに少しでもつながりができる。何年か先には、彼らの多くは亡くなっていくだろう。彼らとつながる人々がいなければ、死んだ後に誰の記憶にも残らない。それは彼らの存在そのものが何もなかったかのように消えていく。

確かにハンセン病にかかった人の思いは、私の計り知れないものだろう。僅かでもその気持ちをくもうとする。その悲しさを想像する。人の痛みや苦しみを想像するところに共感がある。人の痛みや苦しみに寄り添うところに共感がある。

この共感こそが、人と人のつながりである。人生において、「体験して始めて分かる」ということがある。体験しなければ分からないのであれば、人生は全くつまらないものだ。自分の体験したことのみにはしか意味のない人生は、とても偏狭でさみしい。

神の存在を問うように、仏の存在を問うことはない。仏の存在を問う

ことは無意味である。私が仏とつながっていなければ、仏は存在しないに等しい。つながっていてこそ仏が存在するのである。

私の連載の第7回で仏について書いた。仏の三身説の法身仏を「生死を超越したまごころ」と書いた。この「まごころ」につながることによって仏の存在を感じるこ

とができる。私の存在を自覚するのである。つながる思いがなければ何の存在もない。仏につながる思いがなければ、仏教は始まらない。

仏教は、仏には成ったことはないが仏の気持ちを考えてみるところから始まる。仏とつながる思いを持つ人生は悪くない。

夫婦のディスコミュニケーションから考える男性援助

松本健輔 坊隆史

「先生、妻が離婚と言って家を出ていきました。どうしましょうか。弁護士さんに相談に行ったほうがいいのでしょうか。養育費とかはどうなるんでしょうか」

カウンセリングで夫婦関係を改善中の男性から突然このようなメールが届くことがよくある。妻は『離婚』という言葉で何を伝えたかったのか、夫は妻の『離婚』という言葉にどんな意味を受け取ったのか。このことは夫婦のディスコミュニケーションを象徴するような出来事といえる。今回は夫婦関係のディスコミュニケーションをラポールトークの視点で考えていきたい。

1、 ラポールトークとレポートトーク

当連載の4回目と重複するが、コミュニケーションにはレポートトークとラポールトークの二種類がある。柏木（2011）によると、ラポールトークは情を込めて、相手の関心や共感を喚起するような、詳細で具体的な話し方で、女性に多い。一方、レポートトークは簡潔明瞭で論理的な表現で、男性に多い。筆者の経験でも夫婦関係の危機に直面している男女はこの傾向が顕著であるように感じる。

分かりやすい例を挙げよう。夕食で夫は妻に「今日何があったの」と聞かれて、今日の仕事の内容を詳細に語る。これがレポートトーク。しかし妻は、具体的な内容より、そこで何を感じたのか、何を思ったのかが聞きたい。妻が求めている会話がラポールトークなのだ。ちなみに、この手の話は小さなすれ違

いから離婚の問題まで発展する根深い男女間の問題と言える。夫が何を考えているか分からないという主訴でカウンセリングに来る女性が多いが、その問題の背景には男性のレポートトークのみの会話スタイルがある場合が多い。

2、 ラポールトークとジェンダー

社会人にとって『ほうれんそう』は常識だといわれている。ほうれんそう、つまり報告、連絡、相談だ。それらは、感情や主観を排して、事実を伝えていくことが基盤となる。この場面で情緒的な会話を長くすることには意味がない。なぜなら、その会話は関係を深めるためのものではなく、情報を伝えることに主眼が置かれるからだ。「報告は事実を明確に」これも社会の中でよく問われる能力だが、これもまたレポートトークを求める社会のメッセージといえる。

夫婦関係を主訴とするカウンセリング場面で、よく男性が思ったことを言えずに困っている場面に遭遇する。それを見て妻は「この人病気じゃないですか？」と夫を批判する。事実、「この一週間何か楽しかったことはありますか？嫌だったことはありますか？」と訊ねても何も出てこない。本当に思い出せないのだ。しかし夫に「小さいとき今日こんなことがあって嫌だったとか、あれが美味しかったとか両親とお話ししませんでしたか」と訊ねる。そうすると多くの男性がそういう経験があるという。そこから昔はラポールトークができていたことが分かる。社会の中で男性に「論理的であれ」、「感情に流されるな」、「涙は見せるな」、「弱音は吐くな」というメッセージは今も存在する。それが内在化され、子どもの頃は出来ていたのに、大人になって思いを語れない、伝えられない男性が誕生する。つまり、男性ジェンダーが生み出す特徴なのだ。

子どもの頃、周りに「男の子は泣いたらいけないよ」と言われて感情を押し殺すことを学び、社会人になって「感情的に話すな、もっと論理的に事実だけを伝えろ」と言われて、自分の主観的な会話を改める。そんな努力をしてきた男性にとって、突然、家庭で妻に今まで学んできたコミュニケーションを否定される。「何を考えているか分からない」「人の気持ちがわからない人なのね」と言われ、当惑するのも当然ではないだろうか。

3、 男性の大きな誤解

冒頭で紹介したケースの話に戻りたい。「離婚する」という言葉はレポートトークだと、別れるという決定事項を伝えるコミュニケーションである。しかし、ラポールトークでこれを読み解くと、「離婚したいほどつらい」というコミュニケーションと言える場合がある。つまり、つらさをわかって欲しいというメッセージなのである。

「仕事と私どっちが大切なのよ」というのは、昔のドラマ等で使い古された台詞のように聞こえるが、未だに臨床現場でこの言葉をよく耳にする。それもラポールトークで受けるのかりレポートトークで受けるのかで意味が大きく異なる。妻は「私を大切にしてくれよ」という意味でこの言葉を使うが、夫はそれを言葉どおりに受け止め、本当に仕事を辞めようか、転職をしようかと考える。結果、本当に転職をしてしまい、喜んでもらえると思った夫が妻の落胆ぶりを見て驚くという結果を生む場合すらある。

不倫のケースもこの手の話が多い。夫が浮気をしてしまった場合、妻は離婚したいと主張する。しかし、夫は関係修復のためにカウンセリングに来ていることさえ忘れ、「本気で離婚したいんだ」と傷つき絶望する。それを見て妻は「やっぱりこの人の愛情ってこの程度のものなんだわ」とさらに怒りと悲しみを深める。まさに負のスパイラルである。

4、 ラポールトークの習得の一步先

男女のコミュニケーションのずれに関する議論は従来男性がラポールトークを使えず、結果妻が不満を感じているという図式で語られることが多かったように感じる。そして当然のように、男性がラポールトークを使えるようになることだという結論を想像してしまいがちである。しかし、本当にそうなのだろうか。ラポールトークの習得は本当に大切なことだ。だが、それだけでは足りない気がする。上記の例を思い出して欲しい。男性がラポールトークを使えないことが問題になっているのではない。女性がラポールトークで会話をするということの知識がないか、知っていても頭から消えていることが問題なのだ。その差は小さいように見えて大きい。たとえば、彼らにラポールトークは大切だからとスキルトレーニングをしたとしても、おそらく同じ結果になったのではないだろうか。人はどうしても自分が感じているように相手も感じ、自分が考えるように相手も考えると思ってしまう。

5、 男性援助という視点でラポールトークを考える

私は夫婦カウンセリングの場で、リアルタイムに夫婦間の翻訳活動を行っている。目の前で繰り返されるディスコミュニケーションを一つ一つ止めて、その真意を確認して、誤解をといている。夫婦カウンセリングの大きな意義の一つはまさにそこにあると思う。しかし、全ての夫婦に夫婦カウンセリングをする機会も環境もない。そこで男性援助という視点でこの男性とラポールトークの問題を考えたい。まず、ラポールトークを男性が身につけることを支援することだ。ここで、第三回で坊が紹介した市民講座の話に繋がり、また私、松本が行なっている婚活の男性向けの講座にも繋がる。また、著者二人が携わっている虐待をしてしまった男性向けのグループ『男親塾』でもこのラポールトークの練習を行なっている。それらの試みは、男性がレポートトークと併用して、状況に応じてラポールトークも使えるようになることを支援している。

ここではさらに1つ必須科目を付け加える提案をしたい。それは、女性がラポールトークで話すということ学ぶことだ。結局、ラポールトークを使えるようになって問題の半分は解決しない。相手と自分との違い、そして相手のことを理解して初めて問題は解決する。

上記の二つの学習を支援することは、今問題とされている多くの事柄の根底に存在する。たとえばDVは男性が上手く女性に気持ちを伝えられず、力で解決してしまうから起きることがある。この解決にはラポールトークの習得が必要だ。また、女性に感情をぶつけられ、全否定されたと感じてやり返しDVになるケースは、女性は否定しているのではなく、悲しい、寂しいなどをぶつけていると理解、つまり男女の差として理解できたら結果は自ずと変わってくる。虐待もレポートトークが上手くいかずに手が出てしまう場合が多く、ラポールトークが使えると、子どもとの関係がよくなり、子どもが言うことをきくようになり虐待は減少するかもしれない。少子化対策の婚活でも同じだ。ラポールトークを使えたら異性との関係が上手く作れる。男女の差を理解できたら、誤解なく話ができて、自分が何をしたら喜んでもらえるのか見えてくる。男性ジェンダーが関係する諸問題に共通しているのだ。脱DV、脱暴力の支援だろうと、婚活だろうと、日常のコミュニケーションアップだろうと男性にとってラポールトークというテーマを必ず通る。ただ、歯がゆいのは、現状問題が起こってからの回復プログラムやセミナーとしての支援が中心というところだ。今後、それを拡張することはもちろん、より啓発的な活動をし、予防という視点でラ

ポールトークの問題を男性支援に取り入れることが何より重要なのではないだろうか。

最後に

最近、夫婦関係が改善したというご夫婦のお話を聞いた。ある時病院で、夫がアスペルガー障害であるということを知り、お互いにアスペルガー障害の本を読みお互いのコミュニケーションの取り方の違いを学び関係が改善したという。このお話のようにお互いができることをして相互に理解を深めて行く。そんな試みも他方で必要な気がしている。

引用文献

柏木恵子 2011年 父親になる、父親をする 岩波書店



ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(11)

～第V章 克服期

～今、事故と向き合って～

中村周平

今回は、修士論文の作成の過程で、過去の自分に思いを巡らせていきながら、徐々に被害者としての自分から解放されていく「気持ちの変遷」について触れていきたいと思います。あらためて事故と向き合っていく中で、今までとは違う視点で

「スポーツ事故」を考える事の必要性に気付かされていきます。そして、かつての指導者の方々ともう一度向き合う必要性を強く感じるようになっていきました。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」で

交わされた会話の内容を手がかりに、当時の私の心境についても書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュー)=Iとする。

3 向き合うことで得た気づき

『『スポーツ事故』で修士論文をまとめていきたい』。決してすべての不安が払拭できたわけではありませんでしたが、このテーマをやりたいと思えるようになっていきました。しかし、論文を書き始めた当初は「学校における安全配慮の不備」「被害者だけが泣き寝入りしなければならない補償の問題」ばかりが論題にあがっていました。自ら「スポーツ事故」に加害者はいないと言いながらも、「被害者の感情」によるしがらみが私を支配していたのです。論文中でも自分の事故を「悲劇」と表現していました。事故からの時間の経過と共に私の心に染み込んでいった、この「被害者の感情」を振り払うことは容易ではありませんでした。その後、担当教員の方とのオフィスアワーの際、ある「出来事」がありました。

S:「団先生(担当教員の方)のオフィスアワーがあって、そのことを話したときに、すごく印象に残ってるのが『当事者目線や被害者感情で情報発信をしてしまうと、受け手は無抵抗な受身感覚になってしまって、すべての問題がスルーされてしまったり、深く議論されないまま表に出てしまったり、最悪の場合どんどん離れていってしまう』っていう話をしてくださって。それがすごい自分の中でストンときたというか…ずっとなんなんやろって。同志社の講演のときも自分なりに想いを伝えつもりやったんですけど、なかなか現役の子らに伝わらへんかったり。ずっと不安やったことが、そういう風に考えたらラグビーの問題だけじゃなくて、世の中にあるいろんなことが引きつけて考えることができて…」

I:「なるほどね」

S:「情報発信って大事やと思うんですけど、本当に事故を二度と起こしたくないと思ったときに、果

たしてその方法は正しかったのかなっていうか、もっといろんなことが考えられるんじゃないかなって。きっかけになったのが11月に試合を観に行ったことと、団先生のオフィスアワーと…でこのテーマをやろうと思った」

当事者やその家族から直接発信されるメッセージは、とてつもなく速いスピードで、しかも無条件に相手の心に伝わってしまいます。しかし、それは内容を深く理解されないまま伝わりこととなり、同時に伝えた相手側を蚊帳の外に追いやってしまいます。これでは対立が深まるばかりで、事故を二度と繰り返さないということとは、かけ離れた場所で議論がなされてしまい…。完全に対立してしまえば、議論すらできなくなってしまうのです。事実、私も事故に対して十分な「原因究明」も「再発防止策」も打たれなかったことに対して、強い憤りを感じていました。その感情を直接ぶつけてしまう時期もありました。しかし、それによって本当なら同じ「当事者」として事故に向き合って欲しかった、かつての監督やコーチとの間に大きな溝を生んでしまいました。私がこれまでおこなってきたことは必ずしも、事故を減らしていくことにはつながらなかったのではないかと、強く感じています。クラスターでの発表の際、自分の事故を「悲劇」から「出来事」という表現に変えたことも、「被害者感情」を剥き出しにしていた過去の行動から思うことがあったことでした。先生方のアドバイスや、自分の過去を振り返ることによって事故と正面から向き合い、そして、今までとは異なった視点で「スポーツ事故」をみることができるようになっていきました。

4 「当事者」として向き合う

そして、自分の事故と向き合う中でもう一つ、大きな変化がありました。それは「かつての指導者の方々ともう一度話し合いたい」と思う気持ちが芽生え始めたことです。

I: 「団さんが言うとおりの、これは周平くんの問題だけじゃなくて、すごいこう…こういう事故の再発を予防する、そんなシステムを作っていこうと思ったら、痛い思いをした周平くんだけではどうしても作れへんっていうことや。そこに関わった人たちが介さないと、どうしてもできへんと。でもそこに加害者、被害者みたいなそういう構造があったら、きっと話し合いにならへんわけや」

S: 「そうです、そこまでいけないですよね」

I: 「なんかこう、感情的にさっき言った違和感みたいなもの。それは君の方にもあるやろうし、彼らにもきっとあるんやろうな」

S: 「きっとそうですね」

I: 「溝があるよね。そこを越えていくようなことを何かしないといけないと、それを周平くんはどういう風に理解したかっていうと、やっぱり自分が情報発信していかなって思うに思ったわけよね。そういう自省的な態度っていうのはすごいなって思うよね。でも、確かにそうよね、自分から働きかけないと、彼らになんか期待しようと思っても、どっか後ろめたさみたいななんもあるかわからへんし、こうやって、こういう出で立ち出てきた段階で、そのことに直接関わってへんにしても、なんて言うのかな…なんかあるかもわからへんね、隔たりが。ただ、周平くんのほうからなにか情報発信せなあかんのかもしれへんね。でもそれはただ単に、被害者だとか、弱者だとか目線であってはいつまでもそういう溝は埋まらへんっていう話やな。そうかもわからへん。なるほどそう考えると大きいね。この問題は。それをどういうふうにしていったらいいのかな？ どういう目線が必要なんやろうな？」

S: 「僕は今まで、監督達、学校の人達に持ってきた姿勢っていうのは、どうしても反省を求めてしまう姿勢であるとか、その批判的な視点ですよ、なんでそうなったんですかっていう。でも、それをしてきたから、やっぱり変な違和感であるとか、お互いの人間関係の溝を開いてしまったという、やっとな今、自分の中でそういう気持ち芽生えてきているので、それに対してどうしたらいいのかって思った時に、一緒に事故の経験を活かせると

いうか、もう一度具体的などこを言えばもう一度監督らと、話がしたいですね。で、そこに自分の思いは伝えたいと思います。『僕はこう思ってたんです』っていう。今までやったら溝はなかなか縮まらないと思うんですけど、自分からそう全部話したり、こっちから歩み寄っていくことで向こうから歩み寄ってくれはる、そんな機会を考えたというか。もし考えてもらえたら、もしかしたら、もっと情報発信がしていけるっていうことを分かってもらいたい。(中略)僕の事故が起きたとき、補償のこともあったんですけど、事故が起きた高校が、次の年、当たり前のように全国大会を目指す強豪校っていう形だけでいってしまったので、そのことに関して事故が起きた高校なんやから、そのことに対して外に情報発信してくれへんのかなっていう。ただでさえ怪我の多いスポーツで、常に情報発信をしていかないとすごく記憶が薄れてしまったりするのに、事故が起きて…でもそれは不慮の事故やったってことで、なかなか見てもらえなかったっていう思いがあったので。一緒に学校側もこういう事故があったっていう、学校関係者の中で、学校の中で起きるスポーツだけじゃないすべての事故を話し合う場で情報発信していってもらえたら…。難しいかも知れないですけど、起きたって現実と一緒に考えてもらえることにつながるのかなって。そういうところに行って僕が発信するよりも、やっぱり学校の校長先生なり、教職員の方が発信してくださることの意味合いというか、周りの人に与える印象とか全部変わってくると思うんですよ」

I: 「そこらへん(監督やコーチ)の関係も修復したいって思いはあるの？」

S: 「あります。当時、自分の生活の忙しさとか、事故に対する不信感が芽生え始めたころに、もう少しお互いに話し合うことができたなら、何か方向性が変わっていたというか。自分が知らない部分があるんじゃないかなって、もしかしたらその人も保護者の対応であるとか事故の処理で大変やった時期に、いろいろ言われて…今となってはわからないことなので、もし今度話す機会があったときに自分の方から話してみようかな。『僕はこ

う思ってたんですけど、どうやったんですか』ってことがぶっちゃけて話したら一番いいなって思うんですけど」

事故直後は、自分のことで精神的に追い込まれてしまい、相手の立場や気持ちを察したり、考えたりする、精神的な面での余裕がありませんでした。「なぜしっかり事故を調べてくれないのか」「どうして正面から向きあってくれないのか」と。しかし、もしかしたら、相手も同じように大変だったかも知れない、事故と向き合いにくい何かがあったのかも知れない。自らの発言からもわかるように、今になってそのことを考えるようになりました。できることなら、事故当時の互いの気持ちや考えを話し合い、崩れてしまった関係を修繕していきたい。そして、これまでの私の経験と監督やコーチの方々の経験を共有し、そのことを外に対して情報発信していくことの必要性を分かってもらいたい。互いが歩み寄ること、それが事故を繰り返さないための取り組みへのスタート地点ではないか。事故から8年の歳月を要してしまいましたが、この取り組みは「私だからこそ」大きな意味があると考えました。

それでも「遍照金剛言う」 ことにします

第10回

脱精神科病院 「わが国の脱精神科病院③」

三野 宏治

はじめに

終戦直後、わが国は経済的にも社会的にも混乱していた。それは医療も同様である。精神科病院の数も戦前と比較して激減している。治療についても物資不足から十分や薬剤が確保できないためその方法が変わった。不足は医師や看護師といった人的資源にも及んだことも述べた。前回の結論は、そのような状況の中で制定された精神衛生法（1950年）の性質と精神病／障害者の処遇方針が戦前の法の精神を受け継いでいるという点である。つまり精神衛生法が精神病患者監護法の性質を受け継いでいるということであり、それが端的に表れたのが措置入院制度における「自傷他害のおそれ」のあるものを措置の対象とする点が治安維持の観点であることだ。これは行政の考え（答弁等）からも認められる。もちろん精神衛生法が精神科病院を治療の場ではなく「収容する施設である」と規定したわけではない。しかし公費を使い入院治療を行う目的

が、本人のためというより「公の安全のため」であったことは明白であることを前回述べた。同時に「精神衛生法」制定までの経過において金子私案や精神病院協会の主張から、病院経営の観点からも「措置入院」＝入院費の国庫負担が重要であったこと、家族の経済的負担からも「措置入院」（経済措置）が重宝されたことについてもふれた。

今回は1965年の精神衛生法改正に至る議論、特に公安当局と精神衛生当局の意向及び日本精神神経学会の会長であった秋元波留夫と日本精神病院協会の主張を紹介する。さらに後年の改正精神衛生法についての評価も同時に紹介する。その上で改正精神衛生法の性質とそれに関わった人物・団体の思惑について考察したい。

1965年改正までの経過

1950年に制定された「精神衛生法」は「覚せい剤等の慢性中毒者等を法の対象とす

る」といった改正（1954年）を経て、1965年改正に至る。改正の契機になったのは、前年におきたライシャワー駐日大使刺傷事件（以後、ライシャワー事件とする）だ。ライシャワー事件とは、1964年（昭和39年）に駐日大使であったエドウィン・O・ライシャワーがアメリカ大使館前で統合失調症患者の青年にナイフで大腿を刺され重傷を負ったという出来事を指す。ただ、1964年以前にも精神衛生法改正の動きはあった。1962年には法改正に向け精神病院協会と精神神経学会の連絡会がひらかれている。しかし連絡会において結論が出されるには至らなかった。1963年には「第2回精神衛生実態調査」、203地区11858世帯、44092名を対象に行われた¹⁾。調査から精神病／障害者（精神薄弱者を除く）の医療・指導状況は、精神科入院が15.6%、精神科通院が10.7%、他科通院が19.1%、指導を受けているが1.9%、その他が52.7%という結果であった。調査結果の「その他」というのは治療・指導を受けていないと考えてよい。そしてこれらの患者に必要な処遇と必要とする精神病／障害者（精神薄弱者を除く）は次のようなものである。精神科病院への入院28万3千人、その他の施設に収容1万5千人、在宅での精神科医・神経科医による治療指導27万4千人、在宅でその他の指導7万4千人となる。岡田（2002）はこの調査結果を「社会保障面の施策の必要性と、精神科通院施設の重要性をしめていた。こういったおおまかな結果は11月30日に発表された。その時の新聞見出しは“三分の二は野ばなし”というものであった」と述べている。さらにこの調査をもとにして1964年1月に厚生省の官僚と少数の精

神科医が「精神衛生行政研究会」をつくり法改正に向け研究を行っていたようである²⁾。

これら改正へ向けての様々な動きはあったがライシャワー事件によって状況が変わる。次にライシャワー事件発生後の政府の対応や警察・厚生省等の関係機関の反応と展開された主張を紹介する。

「精神病／障害者を取り締められ」との主張

1964年3月24日の昼に精神障害のある青年によって米国駐日大使が刺傷された。政府は即刻米国に陳謝する。24日午後の参議院予算委員会では警察庁長官の江口俊男が次のように述べている。「精神異常者はつねに警衛、警護の盲点になっている。突発的に事件をおこす危険性のある精神病者は、全国で三十万人ちかいといわれる。なんとか精神病者を治安取り締まりの対象にできないかと考えている」。さらに、同日の夕刊で事件が報じられ、翌25日の朝刊には「野放しの精神障害者・精神異常者」の見出しがならぶ。当時の新聞記事「朝日新聞朝刊掲載の座談会（1964年3月25日）」の内容を岡田の著作より紹介する。

3月25日朝日新聞朝刊にのった座談会では、林 麟（慶應義塾大学教授・生理学）が、“私はこの少年は精神病質者ではないかと思う。いわゆる変質者だ、〔中略〕家庭にまかせるのは危険だ。私はむしろ変質者の隔離をはかるべきだと思う”とのべたのにたいし、植松正（一橋大学教授・刑法）は、“私も林説に賛成だが、変質者を隔離することは人権の拘束という点で問題もある”と応じている。この座談会で、変質者隔離への根本的反論はされていない。林は、つねづ

ね“変質者島流し論”をとнаえていた。(岡田 2002)

このような報道の中、警備の不備を問われた国家公安委員長の早川崇が辞任させられるなど、治安当局に対する批判が集中する。批判を受け国家公安委員会は 28 日に臨時の委員会を開き「犯罪予防の強化」の方針を打ち出す。この方針を受け 4 月 4 日の第 3 回臨時国家公安委員会では「警察官の家庭訪問の徹底、患者リストの整備、保安処分の早急な実施、自傷他害の恐れのある者の警察への通報」という精神病／障害者の早期発見のための方策を決定する。

治安当局の動向

5 月 8 日、ライシャワー事件調査委員会(警視庁内に設置)は事件調査の結論を出す。そしてその結論は治安強化のための警察による具体的行動だけではなく、治安当局が厚生省などに協力を依頼するという「政治的な対応」という事態に発展する。つまり公安当局(業績機関)が精神衛生当局(行政機関)に治安維持のための協力を申し入れる事であり、個別の事例としては、警察によって東京都の精神衛生課や柏初石・両毛病院は患者リストを求められ、佐野市では入院患者の名簿の提出が要求されている。

参考としてライシャワー事件調査委員会の下した結論を広田の著作から紹介する。

警備に落度はなかったが、あと一歩押す熱意と積極性に欠け、事件の重大性の認識が足りなかった。……精神障害者に対しては防犯の立場から、犯罪を犯し易い異常者の実態を早く掴む必要がある。防犯課が中心となり厚生省などに対

し、現行法の許す範囲でできるだけ協力を求め、一方各警察署を通じて潜在異常者の確認につとめたい(広田 2004)

このライシャワー事件調査委員会の結論の十日ほど前の 4 月 28 日には警察庁長官名で厚生労働省に対し、精神衛生法改正に関して申し入れを行っている³⁾。この事件発生から四日後に厚生省に向けての法改正の申し入れは大変早いといえる。それは国家公安委員会が臨時の委員会を開催したのと申し入れを行ったが 4 月 28 日であることや、警視庁内に設置された「ライシャワー事件調査委員会」が調査結果を出したのが 5 月 8 日であることからわかる。

小林(1972)も「ライシャワー事件後の警察等の対応の素早さ」について、著作の中で「社会党 浅沼稲次郎委員長刺殺事件」を例に挙げ次のように述べている。

ライシャワー事件よりもすこし前ではあるが、一九六〇(昭和三五)年一〇月一二日、日比谷公会堂で行なわれた三党首立会演説会の壇上で山口二矢が、社会党の浅沼稲次郎委員長を日本刀で刺殺した事件があった。そのあとどのような対策がとられたかを、この I 連のす早い精神障害者対策と一般人の傷害事件の場合と比較してみるとよくわかると思う。要人の身の警備を一時的に厳重にするぐらいのことは実施されたが、すくなくとも法律を新設または改正したりすることはなかった。傷害事件が起こるたびに「他害の恐れある」一般大衆を全員登録したり監置したことがかつてあっただろうか。(小林 1972)

小林の記述からも安当局がかねてより精

精神病／障害者を監視・取締りの対象としたいと考えていたことがうかがえる。また「第2回精神衛生実態調査」の結果発表やライシャワー事件を報道した「精神障害者・異常者が野放し」という新聞の論調も素早い行動の積極的な動機として影響したと考えられる。

では、そのような新聞の報道や治安当局からの要請に対し精神衛生行政側はどう考え行動したのか。

精神衛生行政当局の動向

3月26日の参議院予算委員会での小林厚生大臣は「精神衛生法を改正し、家族・学校・医療機関等に精神異常者の報告義務を課すようにしたい」と述べている。また、池田首相も衆議院本会議で「精神衛生法改正」を行うと発言している。述べたように臨時国家公安委員会が招集され「犯罪予防の強化」という方針が打ち出されている。この時点で法改正の方向性は「犯罪予防強化実施に向けての報告義務」を法律に盛り込むというものであった。

他方、厚生省は3月29日に、「病床の増設を急ぐこと」と「一般医師の精神障害者報告を義務づける」という方向性を示す。4月2日には精神衛生審議会に対して諮問し、諮問を受けた審議会は厚生大臣に対して、①精神病床の拡充、②精神医療専門職の養成・確保、③地域社会における精神衛生活動と必要な期間の整備、④医療確保の充実という内容の意見具申を行っている。⁴⁾

治安担当当局は「犯罪予防の強化」の方向で法改正をすすめる、精神衛生行政当局は「精神医療・衛生体制の強化・充実」ということを改正法案の基盤とした。広田はこ

れらの対応について「治安当局と厚生省がそれぞれ別個の対応を提起している」と評している。では、治安当局と精神衛生行政当局(厚生省)が協議を始めたのはいつか。

5月1日の閣議で「今国会会期末に精神衛生法改正案を提出したい」と小林厚生大臣とのべ、赤松国家公安委員長は「精神障害者の犯罪防止のために、精神衛生法改正が必要との意見が国家公安委員かいでも強く要望された」と報告している。そして池田首相は「緊急に必要な部分のみの改正」に同意する。そして5月10日までに改正要綱案を厚生省、警察庁、法務省と協議のうえ作成することを命ずる。ここに至り精神衛生行政当局(厚生省)と治安当局(警察庁)がようやく同じテーブルに着き「精神衛生法改正」のに関する議論を行うことになった。

ではこれらの動きに対し精神科医師(たち)はどのような行動をとったのか。次に日本精神神経学会と日本精神病院協会の動向を紹介する。

日本精神神経学会と日本精神病院協会の思惑

ライシャワー事件の以前から、精神衛生法改正について日本精神神経学会と日本精神病院協会が連絡会を持つなどして議論を行っていることは述べた。そしてその中で学会側と協会側が共に(条件をつけがなかったにせよ)賛成した点が「精神病／障害者の入院は国庫が負担せよ」というものだった。後述するがこの主張はライシャワー事件後(7月25日付)の精神衛生審議会中間答申でも述べられている。

さてこのような「国庫負担による精神医療の補償を目指す」という主張を軸に学会

と協会の動向を追いそれぞれの思惑について考察したい。

ライシャワー事件直後、日本精神病院協会はどのような対応したのか。『社団法人日本精神病院協会 20 年史』から当該部分を引用する。

緊急常務理事会を招集し、石橋猛雄会長、森村茂樹副会長、式場隆三郎、松川金七、元吉功各常務理事らが中心となり、厚生省、国会はじめ関係当局と接術、法改正が警察当局による治安精神医学者が今日迄築きあげてきた本来あるべき精神衛生行政に逆行するものであるとの基本態度を確認し、精神衛生審議会場で、この方針を貫くことに精力を傾注し、一部に不満は残るにしても、ほぼその目的は達せられた。

併せて、長年すすめてきた医療費対策についても、ライシャワー事件は関係当局に広く認識を深めさせる好機である、との観点に立ち、早速に医療費問題の陳情も行なったのであった。

(協会 20 年記念誌編集委員会 編 1971)

病院協会の行った「医療費問題の陳情」は「人件費の上昇と諸物価の高騰によって精神病院の経営の苦境は土壇場にきています。既に経営不能のため精神病床の絶対的不足の現況にもかかわらず、閉院したものもあります。ライシャワー事件以来当協会所属の各精神病院は、精神障害者の世上にやかましくいわれた「野放し」を防止するために病床の整備拡充、看護要員の確保に努めてまいりましたが、極端な低入院費のため意の如くなりません。他科の病院では差額徴集により急場をしのいでいるかも知れませんが、精神病院では、たとえこれを望んでも事実上不可能であります。かくて

は病院経営の危機であるのみならず、患者に対するサービスの低下を招き、人道問題といっても過言ではありません。」というもので、病院経営という側面からの陳情であるといつてよい。

では日本精神神経学会の動きはどうであったか。ライシャワー事件後の学会の動向に関して山下(1985)は「日本精神神経学会は、事件後、精神衛生法改正反対委員会を設け、“一部改悪反対・全面改正促進”の運動を展開しようとしたようだが、学会首脳部が、この重要な時期に大挙して渡米するなど、真剣な取り組みがなされなかった」と批判している。山下の指摘する「学会首脳陣の渡米」とは1963年に日米合同精神医学会(1963年5月13-16日 東京)に対する返礼としてアメリカ精神医学会からの招待されたことを指す。

山下が「熱心ではない」と批判している学会首脳(会長)の一人に秋元波留夫がいる。秋元は日本精神病院協会の「医療費を公費で賄う」と同様の主張をしている。さらに秋元は精神科病床数の増加も訴えている。1970年の講演で秋元は「7月25日付の精神衛生審議会中間答申」にふれ、答申の「医療費保障」の部分について次のように解説している。

医学的に入院治療の必要があると判断されても、経済的負担に耐えなければ入院して治療を受けることができない。精神疾患が慢性に傾きやすく、またその疾患の性質からいっても看護上家人の重荷となりがちであり、精神障害者をもつ家族の経済上の負担は重いのが常である。そればかりでなく、精神障害による自傷、他害の予測ははなはだ困難で、自傷、他害のおそれなど

ありそうにもみえぬものが、周囲の状況によって自傷、他害のような行動に出ることは決して珍しいことではない。したがって公安上の見地からいっても自傷、他害のおそれのあるものだけを措置して足れりとするのはおかしい。それ故に、医療保障を拡大して、措置入院にとどまらず、経済上の負担に耐えない精神障害者の入院治療および外来通院治療におよぼすべきであるというのが答申の趣旨である。(秋元 1971)
6)

精神障害の治療（入院治療及び外来治療）については公費で賄うべきだというのが答申の趣旨であると秋元は述べている。これはライシャワー以前の日本精神神経学会と日本病院協会が行った「精神衛生法改正に関する協議」でも学会の方針として表明されており、その考えを踏襲したものである。病院協会同様にライシャワー事件を好機ととらえて「医療費問題」について答申したのは判断できないが、秋元が病院協会とはあきらかに違う立ち位置であったことは明らかだ。病院協会は私立精神科病院の集まりであり政府に対する「陳情」は病院経営という側面が存在する。他方、秋元は日本精神神経学会の会長であり東京大学医学部教授の教授であった。特に日本の精神科病床の多くが私立精神科病院にある状況を「良い状況である」とは考えていなかった。紹介したシンポジウムで秋元は精神科病床数について次のように述べている。

精神科医療施設の主要部分を占める精神病院は、量と質の両面で多くの問題を含んでいる。量の点では病床の不足が速やかに解消されなければならない。……精神科病床を計画的に増加して、入院を必要とする患者を収容することがで

きるようにするのは、精神障害者の野放しを解決する最低条件である。これを国の責任で行うように改めなくてはならない。(秋元 1971)

秋元は病床数の増加を国の責任で行う必要があると述べている。秋元の考えは病院協会の経営的視点とは別のところにあるが、「病床増加」という点では病院協会と変わらない。では秋元の「国の責任における治療費負担と病床数増大」をなぜ主張したのか。

秋元は「野放しの精神障害者」を治療対象として患者とすることが、精神病者監護法に抗した呉秀三より続く精神科医としての使命であるとシンポジウムで主張している。筆者は呉秀三が精神病院法制定に尽力し公立精神科病院の建設を主張したことについて次のように述べた。

「精神病は病であり治療に当たるのは精神科医である。そのための病院が必要だ」と主張するのは医師として当然の姿勢であろう。それは人間として「非人道的な処遇にさらされている精神病／障害者を見捨てておけない」という思いと同時に医師として「治療されず放置されている患者を見捨てられない」という職業倫理と精神科医師も医学者であり精神科も他の臨床科と同等であるという職業的野心があったのではないだろうかと筆者は考える。」(三野 2013)

呉と秋元が精神科医として過ごした時期は異なる。また精神科医を取り巻く状況も違う。しかし秋元は、同じ東京大学教授であり日本神経学会（現在医の日本精神神経学会）設立に尽力した呉を「同質の問題意識を持つ者」とし、共感・尊敬とともに支持したのではないか。シンポジウムにおけ

る秋元の主張は「医師として治療をおこなう」ことに対して大変なこだわりが見て取れる。

しかしその一方で、岡田（2002）の記述からでは次のように述べたとされている。

1965年5月17日衆議院社会労働委員会における参考人意見陳述のさいに、滝井義高委員（自由民主党）が、今回の改正案には公安立法的な色彩がひじょうにつよい、そういうなかで、自傷他害といった客観性のないもので、その疑いだけでやってよいのか、“先生方の考えが、私は率直に言って、むしろ甘いのではないかという感じがするのですよ”と質問した。これにたいし秋元参考人は、人権保護は口にしながらも、“早期発見、早期治療というたてまえから言えば、これはちょっと怪しいという位の程度のうちに処置することが必要なはず”といった答えをしていた（岡田 2002）

秋元の治療を行うという医師としての使命感は「治療されず野放しにされるという人権侵害を医師としてはし解決する。その方法が措置入院という人権侵害が生じても仕方がない」とも解釈できる。そして「精神科病床の増加させるべきだ」という主張は治療環境を整備し精神科医の活躍の場を広げるとも取れ、「精神科医としての職業的野心」の表れとも理解できる。

1965年改正は如何に評価されているか

1965年に精神衛生法は一部を改正した。主な改正点として次の8点が挙げられる。

- ① 道府県は精神衛生センターを設置できる。
- ② 精神衛生相談員（現在の精神保健福祉相

談員）の任用資格の規定。

- ③ 保健所の業務に精神障害者の相談指導を規定する。
- ④ 都道府県に地方精神衛生審議会を設置する。
- ⑤ 各都道府県に精神衛生診査協議会を設けた。
- ⑥ 措置入院制度の整備（警察官通報の要件の拡大、保護観察所長通報・精神病院管理者による届出の新設、緊急措置入院制度、入院措置の解除規定）
- ⑦ 精神障害者通院医療費公費負担制度の新設。
- ⑧ 保護拘束制度の廃止。

さて、この改正点を如何に評価すればよいか。全体的にライシャワー事件後に公安当局が求めた「保安的な色合い」は幾分薄らいだようにも取れる。他方、措置入院に関しての規定の強化など「保安的な色合い」の濃い部分も残っている。

広田は自身の著作の中で1965年改正を次のようにまとめている。

ここで視点を精神障害者の〔医療と保護〕に置けば、1965年の改正法の実態は（イ）治療構造としての入院・収容主義（hosohospital oriented principle）の重視と、地域内での社会復帰活動（community oriented principle）の軽視〔ハ）入院患者に対する人権擁護規定の欠落を骨格にしたものであった。かくて、入院治療のみで医療を完結しようとした結末は、入院患者の増大と過剰入院を生み、恣意的ともみえる行動制限と、これにまつわる信書発受の厳しい制約は、精神病院を一般社会から隔絶した陸の孤島”と化さしめ、1987年の法改正を余儀なくさせた精神病院スキャンダルを生み出したひとつの・要

因だったとみざるを得ない。」(広田 2007)

広田が指摘するように社会復帰活動に関しての改正点はない。精神衛生審議会の第一回答申では「社会復帰の促進」として医療機関とは別に中間施設の整備を求めている。この点からいえば広田の「社会復帰活動 (community oriented principle) の軽視」という評価は妥当であろう。では、「治療構造としての入院・収容主義 (hosoital oriented principle) の重視」という点はどうか。

広田の評価の真意を考えるにあたり、岡田 (2002) の改正精神衛生法に対する評価を援用する。

岡田は当該法改正で積極的に評価できるのは「精神障害者通院医療費公費負担制度の新設」だけとしている。通院費公費負担制度は医療費の軽減といった意味合いでは精神病／障害者やその家族たちにとっては、当座助けになるものであろう。筆者が精神保健福祉の現場で働いていたときもこの通院費公費負担制度する人は多かった。したがって筆者は岡田の積極的な評価が間違っていないと考える。では岡田の評価と広田の「治療構造としての入院・収容主義 (hosoital oriented principle) の重視」という評価のどちらが適当なのであろうか。通院費が公費によって負担されるのであれば通院患者つまり在宅患者増大につながるように思える。ただ、1965年以降も精神病床数は増え続けている。つまり通院費公費負担制度の新設が入院患者数の減少に優位に働いたということではない。公費負担制度といかなる関係があるかわからぬが病床数はその後も増加している。

小泉 (2013) は 1965 年改正法の提案理由の「向精神薬の著しい開発等精神医学の発達により、精神障害の程度のいかんによっては必ずしも入院治療を要せず、かえって通院による医療を施すことがきわめて効果的となった事情にかんがみ、精神障害者につき、新たにその通院に要する医療費の二分の一を公費負担とすることとした点と、在宅精神障害者に関する訪問指導体制の充実をはかった点。そして「在宅精神障害者の把握とその指導体制の整備」と「通院医療費の公費負担制度の新設」は精神衛生施策の展開をはかる上できわめて緊要かつ表裏一体の関係にある」と点に注目し次のように述べている。

その「今回の法改正の主要点」は、通院医療費の公費負担制度と在宅精神障害者の訪問指導に置かれている。すなわち、社会防衛の対象と精神医療の対象が、家族が「保護拘束」しているはずの在宅精神障害者にも及ぶことに置かれている。そして、精神医学の効果は、[社会復帰]にも求められている。(小泉 2013)

小泉は改正精神衛生法が「保健所の業務に精神障害者の相談指導の規定」と「精神衛生相談員 (現在の精神保健福祉相談員) の任用資格の規定」、「通院費用公費負担制度」などから社会防衛／精神医療の対象が在宅の精神病／障害者に及ぼせるものであるとしている。改正精神衛生法は精神病／障害者が社会防衛の対象でもあると位置づけていると考えてよいだろう。それは改正にいたる経緯から明らかである。法改正に際して当初公安当局と精神衛生当局がそれぞれ別に立案した。そしてそれぞれの思惑

が改正精神衛生法に規定された精神医療の性質となって生かされたともいえる。換言すれば、改正精神衛生法の中の精神科医療は社会防衛と表裏の関係にあるということだ。

ここに至って広田の「治療構造としての入院・収容主義（hosotal oriented principle）の重視」という分析の真意が理解できる。

「訪問指導」は管理の手段か

「訪問指導」については精神衛生法撤廃全国連絡会議（準）が次のように主張している。

精神衛生法「改正」の先取＝「訪問指導」の強化を許すな！

厚生省は、5月15日「保健所における精神衛生業務中の訪問指導について」という通達を各自治体や医師会に宛てて出しました。その内容は警察庁の要請を受け、『凶悪事件の再犯防止につながるから、入院管理を強化し、医療中断者を訪問して指導を強化せよ』というものです。訪問指導の了解は家族等を含むというものであり、同意入院＝強制入院をそのまま地域管理に広げるといえるものです。医療中断は現在の医療の方に問題があるからです。さらに週一回訪問せよと、医療に名をかりて「精神障害者」の地域での生活を管理・抑圧しようとする悪辣な内容で、65年精神衛生法「改正」以降の警察官通報による強制入院をそのまま保健所・医療関係者に拡大しようとするものです。（精神衛生法撤廃全国連絡会議（準）1986）

精神衛生法撤廃全国連絡会議（準）が1986年に「精神衛生法「改正」国会程阻

止！！」として出したアピール文である。アピール文にあるように、保健所の訪問指導が「医療に名をかりて「精神障害者」の地域での生活を管理・抑圧しようとする」ものであるのか。小泉のいう「社会防衛／精神医療の対象を在宅精神障害者に広げる手段」といえるのか。次にこの点について考えてみよう。

新設制度を透かして見る改正精神衛生法

1965年に精神衛生法が精神障害者の相談窓口が保健所に設置され、公務員としてPSW（精神科ソーシャルワーカー）が配置された。筆者は精神衛生（精神保健福祉）領域において保健所と精神衛生相談員（精神保健福祉相談員）の役割と仕事が精神障害者福祉増進に寄与したと考えている。ただ、改正に至る議論からは保健所と精神衛生相談員の訪問活動が、単に精神障害者福祉の増進だけを想定したものとはいえない。改正に至る議論からは精神衛生法撤廃全国連絡会議（準）のアピール文にある「地域での管理」を目的とする意図があったことがわかる。また、精神医療通院費公費負担制度についても法の性質からは、単に在宅精神病／障害者への経済的負担軽減のために新設されたのではないといえる。それは以下のような点による。

改正以前の精神衛生法では訪問指導の対象は「精神衛生鑑定医の診断医より、精神障害者であり、かつ自傷他害のおそれがあるにかかわらず知事命令による措置入院がとられなかった者、およびこの入院措置に附された者で、退院したもののなお精神障害が続いている者」とされていた。そして訪問指導についても「当該吏員又は知事が

指定した医師」であった。他方、改正精神衛生法ではどうか。訪問指導の対象は前掲した要件に加えて「その他精神障害者であって必要と認める者」となり、その対象が拡大されている。そして訪問指導の実施機関を保健所とした。さらに「保健所における精神衛生業務運営要綱（1966年2月第76号；衛発）」では「通院医療費の公費負担を受けている者」も訪問指導の対象に加えられた。同時に当該要綱では、「訪問指導の対象者ごとの精神衛生基礎票」を作成し整備し補完する規定も追加されている。ここで訪問指導と精神医療通院費公費負担制度の関係がわかる。訪問指導を行うことで精神病／障害者の状況を把握することが「地域での管理」であるという主張は、訪問指導を行った後、病状悪化（自傷他害のおそれがある）等の理由で病院に入院させる経路が整備されたという前提によるものであり、精神科に通院をしているは病状悪化（自傷他害のおそれがある）の可能性がありそれは入院すべき人間としたうえでの訪問指導であることを指摘しているのだろう。

では岡田の「積極的に評価できるのは精神医療通院費公費負担制度」であると記述を如何に考えればよいか。岡田のこの評価を分析することで、治療と管理について述べ今回の纏めとしたい。

小括

経済的余裕がなく精神科受診を望む人にとって、精神医療通院費公費負担制度は有難いものであろう。精神保健福祉領域の臨床場面で筆者が出あった精神病／障害のある人の多くは公費負担制度を利用していた。

精神科受診を望む人にとっては有益なものである。この点からも岡田の評価は妥当であろう。しかし同時に、法改正当初の通達等から「精神医療通院費公費負担制度」には「地域での管理」への梯子としての役割があったという分析も間違いはない。つまり法律の性質や起点が「管理的」であることと実効としての「本人の役に立っていること」は併存が可能である。これは「本人の役に立っていること」には「管理的」（本人にとって不都合な）も含まれていることでもある。「本人の役に立っていること」と「管理的」（本人にとって不都合な）な事象の併存は精神医療通院費公費負担制度に限ったことではない。精神科医療に関しても同様のことがいえ、そのことを精神科医（たち）も十分理解しているのであろう。

入院治療（時に通院治療）は精神病／障害者本人のための行いという側面と、本人以外のための防衛という側面があり、それらの性質は対になっている。そのことを承認したうえで時に精神科医（たち）は医療制度の充実を図ろうとする。紹介した精神衛生法改正における秋元の発言などはそのことを示している。医師の使命は患者を治療することであり方法として入院治療も必要であることを、精神科医の秋元は主張する。更に東京大学医学部教授であり日本精神神経学会の会長でもある秋元は「公の責任としての病床の増加」を訴える。これらの秋元の主張は1980年代に入るところから徐々に変化を見せる。それは病床数が増えたことや秋元自身の立場の変化など、要因は様々考えられるが医師としての姿勢に変化はない。これらのことは稿を改めることとする。

精神科病床数は 1965 年以降も増え続ける。投薬治療が有効とされ専門家による疾病管理が容易になったことと、法的な範囲が拡大されたことによる精神病／障害者の増加などが原因と考えられる。同じ時期に「生活臨床」といったような投薬とは違った治療（方法・考え方）が出現する。た

だ「生活臨床」や投薬治療以前から存在する「作業療法」などは入院治療時の専門家による管理等の手法として批判の対象となる。治療と管理の問題を精神科医たちはどのように考えたのかについては、次回述べたい。

参考・引用文献、引用URL

- 秋元波留夫 1971 『異常と正常』 東京大学出版
広田伊蘇夫 2004 『立法百年史—精神保健・医療・福祉関連法規の立法史』 批評社
小林司 1972 『精神医療と現代』 日本放送出版協会
小泉義之 2013 「精神衛生の体制の精神史——一九六九年をめぐって」 天田城介 櫻井悟史 角崎洋平 編著 『体制の歴史——時代の線を引きなおす』 洛北出版 pp205-262
協会 20 年記念誌編集委員会 編 1971 『社団法人日本精神病院協会 20 年史』 社団法人日本精神病院協会
三野宏治 2013 「脱精神科病院「わが国の脱精神科病院①」『対人援助学マガジン』Vol. 12, 対人援助学会, pp.174-85
精神衛生法撤廃全国連絡会議（準）1986 「精神衛生法「改正」国会上程阻止！！」
<http://www.arsvi.com/1900/860712.htm>
岡田靖雄 2002 『日本精神科医療史』 医学書院
山下剛利 1985 『精神衛生法批判』 日本評論社

注

- 1) 第 1 回の精神衛生実態調査は 1954 年に、100 地区 4895 世帯 23993 名を対象に実施されている。
- 2) これ以前にも精神衛生法改正の議論はあった。例として 1954 年の精神病院協会内でまとめられた「金子私案」や 1956 年東佐誉子事件をきっかけにした動きなどが挙げられる。しかしこれらは法改正には至らなかった。
- 3) 昭和三九年四月二八日
厚生省公衆衛生局長
若松栄一殿
警察庁保安局長
大津英男
精神衛生法の改定等について申入れ
最近精神障害者による重大な犯罪が発生し、治安上これを放置することができないので、その措置とし

て、次の点について早急に貴省の検討をわずらわしたく申し入れます。

記

第一 精神衛生法の改正について検討すること。

改正点は別添のとおり。

第二 精神障害者の収容体制を強化すること。

精神障害者のうち、治安上放置しがたい者が多く、また法第二四条に基づく通報について必ずしも完全に入院措置が実施されていないので、これらの収容について格段の配意をわずらわしたい。

第三 警察官の精神衛生法第二三条、第二四条による申請、通報に対する受理体制ことに土曜、日曜時の受理体制の整備について考慮されたい。

(別添)

精神衛生法に関する改正意見

第一 都道府県知事は、第四の届出を受理した場合および第二九条第一項の規定により入院させることのできる精神障害者について入院措置をとらなかった場合において、その者が他人に害を及ぼすおそれがあると認めるときは、すみやかにその旨を当該警察本部長（警視総監および道府県警察本部長をいう）に通知しなければならないものとする。こと。（第二九条）

第二 精神病院の長は、その治療に係る他人に害を及ぼすおそれのある精神障害者が無断で退去したときは、すみやかに、その旨を管轄警察署長に届出なければならないものとする。こと。（第三九条）

第三 仮退院（第四〇条第二項）の場合において、当該病院の長は、当該精神障害者が他人に害を及ぼすおそれがあるときは、必要な事項を管轄警察署長に届出なければならないものとする。こと。（第四〇条）

第四 医師（第二七条の精神鑑定医を除く。）が診療の結果精神障害者であると診断し、かつ、他人に害を及ぼすおそれがあると認めるときは、当該都道府県知事に、すみやかに、必要な事項を届出なければならないものとする。こと。（新設）

第五 警察官は、次の各号の一つに該当する場合には、当該精神障害者を警察署、病院、精神病者収容施設等の適当な場所において一時保護することができるものとする。こと。

(1) 第二の届出があったとき。

(2) 保護義務者が、その保護する精神障害者が他人に害を及ぼすおそれがあると認め、またはその保護する精神障害者が所在不明になったため当該精神障害者の保護を求めたとき。

2 前項の保護をした場合において、警察官は次の措置をとるものとする。こと。

(1) 前項第一号の届出に基づくときは、すみやかに、届出をした精神病院の長に当該精神障害者を引渡すこと。

(2) 前項第二号の求めに基づくときは、すみやかに、保護義務者に通知するとともに、第二四条に定める通報を行ない保護義務者または関係機関等に当該精神障害者を引渡すこと。（新設）

4) 意見書の前文を広田の著作から引用し紹介する

「向精神薬の開発、施策の発展とあいまって、(1) 早期発見、(2) 専門医による適格な医療、(3) 十分な後保護等の条件がみたされれば、精神障害は決して危険な疾病ではなく、社会復帰の可能性は極めて

たかくなった。従って、徒らに精神障害者を危険視することは患者・家族の心情を損ない、治療効果を減ずるのみならず、患者を秘匿して適正な医療保護を受ける機会を失わせる。……今回のライシャワー事件を機として、精神障害者への社会問題が注目されているが、なお政府施策が充分でないと考えられるので、精神障害者対策の重要性を思いいたされ、これらの者への適切な医療保護施策を速やかに実行されるよう要望する」

5) 岡田 (2002) は次のような『週刊朝日』(1964年5月11日号)の記事を紹介している。

「ヤン・デンマンは「精神科医百四十人の大挙渡米」の題で、“2, 3週間にわたって日本を留守にする人たちは、精神病医学界の頭脳を構成する人たちかもしれないし、そうだとれば、日本の精神病医学界は、その間、シンのない状態となる。これはおどろくべきことだ”とかいていた。」

6) 1965年開催の第58回関東精神神経学会シンポジウム「呉秀三と病院精神医学」における講演の内容であり『精神医学』第7巻第6号に掲載されている。筆者は秋元波留夫 1971 『異常と正常』 東京大学出版 を参照した。



男は 痛い !

國友万裕

第9回

HK／変態仮面

1. 善意の暴力

今、思い出しても、怖い経験がある。あれは不登校になって、1カ月くらいの頃だったと思う。

あの頃のぼくは、毎日、一日を乗り越えるのがやっとの生活をしてきた。学校にはどうしても行かれない。無理に行った日も、いたたまれなくて、鞆も自転車も学校に残したまま、休み時間に学校から逃げてしまった。ぼくが数日だけ通った高校は、田舎のほうにあって、近くには公衆電話もない。川べりの道をてくてく歩いた。1時間近くも歩いて、やっと公衆電話が見つかって、母に電話。「今、学校を抜け出してきた。先生に何も言わずに来たから、学校に電話しといて……」。母のつらい顔が目につかんだ。

当時の担任の先生には感謝している。30代後半くらいの男性で、理解してくれる人だった。苦手な体育の授業には出なくていいと言われた。カウンセラーの先生にもわざわざ会いに行ってくれた。飾り気はないけど、優しさをもった人だった。奥さんに早くに死なれて、男手一つで息子を育てていた。自分のことを、「僕は」とか「私は」ではなくて、「俺は」というところも好きだった。しかし、この先生でも、不登校のことは何もわからない。まだ不登校という言葉もない時代。精神科に行っても話にはならない。カウンセラーは公立の児童相談所だけ。他県まで、母と一緒に出向いたこともあったが、そこでも何の糸口も見出せないのである。

あの当時のぼくは、学校に行っても、女子から悪口を言われているのではないかと

妄想が広がって行って、座っていることすらできないような心理状態に陥っていた。でも、学校は行かなきゃいけない。日本は学歴社会。高校も出ていなかったら、一生惨めな思いをすることになる。当時は、大検なんていう制度があることすら知る人は少なかった。「明日、何か奇跡でも起きてくれて、心が変わっていたら」。藁をもすがる思いで、生きていた。しかし、ぼくの心はもはや完全に壊れてしまっていた。すぐに治るような病ではなかったのだった。

15歳の子が、平日の昼間に町を歩いていると補導される。近所の人からは白眼視される。外にも出ることができない。そんなある日のことだった。家の部屋に閉じこもっていると、「学校の人 coming いるよ」と母の声。外を見ると、ぼくのクラスメートたちが、ぼくをどうにか学校に来させてあげようと、大挙して訪れたのだった。男子は、わずか2人。女子はクラス全員だった。もちろん、彼女たちに悪気はない。ぼくは高校には3日くらいしか行ってないので、ぼくのことなんて彼女たちはほとんど覚えていないはずだ。まだぼくのことを好きだとか嫌いだとか言える段階ではない。

おそらく、これは、野球部のマネージャーをやっていた女の子の提案だったのだろう。3日しか高校に行っていないぼくにも、彼女の印象は残っていた。『キューポラのある街』の吉永小百合のようなタイプの子で、前向きで、健気な優等生。おそらく彼女が、「皆で行ってあげましょうよ」と提案して、こういうことになったのだろう。

女たちの群れ！ 怖い！！ ぼくは、裏口から外に出ると走りに走った。本屋さんのお

ぼちゃんにかくまってもらおうか。でも、あのおばちゃんでも、学校に行かれない気持ちは理解してくれないだろう。ぼくはタクシーを拾った。「おばあちゃんのところに行こう」。ぼくは小銭ももっていなかったのだが、おばあちゃんは家にいるだろうから、おばあちゃんに払ってもらえばいい。そう思った。30分くらい、おばあちゃんの家まで、タクシーに乗った。幸い、タクシーの運転手さんは親切な人で、ぼくがお金をおばあちゃんにもらいに行くのを待っていてくれた。

あの時のことを思い出すと、今でも心臓の鼓動が聞こえてくる。あの怖さをわかってくれる人はいるだろうか。女子たちが集団となって押し寄せる。おそらく男子たちは、他人事はどうでもいい。ぼくのことを知っているわけでもないし、学校に来ようが来なかろうが、どうでもいい。だから野球部の彼女が誘っても、のっかる子は2人しかいなかったのだろう。しかし、女子は、リーダー格の子が、「行ってあげましょうよ」と言いだすと、全員がそれに同調してしまうのだ。

もちろん、この時の彼女たちは善意。しかし、これは善意の暴力なのである。そして、善意がひっくり返って悪意になった時、具体的には、誰か1人の女子がぼくのことを「気持ち悪い」と言い始めた時、恐ろしい集団の悪意が始まっていくのである。

2. 女性の暴力性

ぼくは今だったら、間違いなく発達障害・自閉症スペクトラムと診断されるタイプの子だった。中学くらいからその傾向が顕著になり、クラスのなかで浮いていて、他の男の子

たちに同一化できなかつた。ぼくは中1の頃から、クラスの女子から気持ち悪いと陰口を言われ続けていた。中2になって、組み替えがあって、クラスのメンバーが代わっても、また新たな女子グループから気持ち悪いと言われ始めた。

ぼくは中学の2年生の秋に、クラス委員をやらされた。もちろん、友達もなく引きこもり、言葉も発することができないような子だったぼくに、クラス委員が向いているわけがない。当時のクラスの女子たちの集団の悪意による投票だった。気持ち悪いぼくをクラス委員にして、皆でからかって面白がるという作戦を彼女たちはたてたのだ。

この当時の担任の先生は、学年主任のベテランの男の先生。ぼくが選ばれたのは、彼女たちの嫌がらせのせいであることは、この先生にもわかっていた。先生はもう一度、選挙をやり直すことを生徒たちに強いた。しかし、彼女たちは言うことを聞かない。この先生は、決してなめられるタイプの先生ではなく、体罰を必要悪だと思っている先生だったので、時として男子には顔に手形の跡が残るくらいのビンタを5発くらいくらわせることだってあった。しかし、女子だとそれができない。彼女たちも女だから大して怒られないということはわかっている。また、「私たちは、國友君がクラス委員にふさわしいと思っているから選んだのに、先生は、ふさわしくないと思っていらっしゃるのですか」と、しらばっくられて、先生をやりこめることもできるとわかっている。そのことまで見抜いた上での悪質ないじめである。

女性の集団心理は、時としてすさまじいものとなっていく。昔から、魔女狩りなど、女

性が魔性の存在とみなされるのはそのせいなのだろう。時として、女性は男が制御できないような暴力性を発揮するのである。

3. 女の魔性

「時々、理屈とはあわないようなことで、怒ってしまうことがあります。それは私も女の問題として感じることもあるんです」。以前、関わっていたグループで、ある女性が自ら述懐していた。おそらく女性たちは、魔性に襲われて、時として理不尽なことをしてしまう。大人になった女性ならば、しばらくたった後、そういう自分に気づいて、恥じってしまうのだと思う。

あれは大学2年生の冬休みだった。ぼくはある人にノートを貸してもらうために学校のキャンパスにいた。すると、1年生の頃、ゼミでぼくと同じグループだった女の子が、ぼくの姿を見つけて話しかけてきた。

「授業ないのに、学校来てんの？」

ぼくの顔色を窺うような、話しかけ方だった。彼女らしくもない。大学の1年の秋、ゼミの発表の打ち合わせの時間に、教室に行った時のことだ。ぼくの発表グループは、女子は彼女ひとりで、男子がぼくをいれて3人だった。待ちあわせの教室に来ていたのは、彼女とぼくのみで、他の男子2人はさぼっていた。2人で話し合いをしなくてはならないのだが、彼女のほうは、何故か怒ったような様子で、ぼくとまともに向かい合おうともしない。結局、話し合いはできないままになってしまった。どうやら、彼女の友達の一部がぼくの悪口を言いだしたみたいで、それが彼女に伝染したようだった。ぼくはそれまでにも

何度も同じような経験をしているので、大学生になっても女は相変わらずだと思ったものだ。(やはり、女は怖い！)

しかし、それからしばらくたって振り返ってみて、彼女はおそらく自分の方が悪かったと気づいたのだろう。今にして思えば、あの時、ぼくは、彼女を無視して、意地悪してやったほうがよかったのかもしれないと思う。彼女が謝りでもしない限りは、口をきいてあげないと毅然とはねのけたほうがよかったのかもしれない。彼女がしたことを考えれば、それくらいのリベンジは許されるはずだ。しかし、あの当時のぼくは自尊心が極限まで落ちていて、当然の自己主張をすることもできなくなっていた。

「友達にノートを借りに来ているんだ」とぼくは答えた。

4. あえて女性を批判する理由

この原稿がアップされる頃には、対人援助学会の全国大会は終わっているはずだ。今回は、「傷ついた男性性からの回復」その②と題して、主として女性ぎらいを語ることになる。こんなことをして、女性の参加者に嫌われるだけのことなのかもしれない。しかし、ぼくは、一度は話さなくてはならないと思っていた。

誰が何と言おうと、ぼくには女性を批判する権利がある。少年の頃の1年は、大人になってからの5年に相当すると言われている。ぼくは少年の頃、ずっと引きこもっていたので、普通の人よりも軽く20年以上は遅れている。実際、ぼくが女性から傷つけられた体験を、こうやって語れるようになったのは、4

0代の半ばになってからなのである。

若い頃は、むしろ、少年時代の忌わしい経験は消してしまおうと思って生きていた。ないものとしてしまおうと。しかし、それはできないことがわかった。無理に女性と付き合いおうとしたこともあったが、若い頃のぼくはまだ自我がない子供のような状態だったため、むしろ女性への恐怖を深めてしまうことにもなった。自分の過去を消化し、自我を確立しなければ、女性とは付き合えないのだ。

思えば、ぼくの人生は孤独だった。女性どころか、男友達もいない青春時代だった。そんなぼくが徐々に男友達とスタンド・バイ・ミー的な関係を紡げるようになったのは、40くらいになってからである。本当に遅い。しかし、それも仕方がなかったのだ。ぼくは決して努力しなかったわけではない。むしろ、普通の人がしなくていい苦勞を山のようにしてきたという自負がある。そもそも、発達障害に生まれたのはぼくのせいじゃない。だけど、ぼくは心ない女子たちや教師たちから、理不尽に傷つけられてきた。いったん、心が壊れてしまうと、それを治すには膨大な時間がかかる。トラウマを治すためのマニュアルも存在していない。ぼくは試行錯誤を繰り返しながら、どうにか心の置き場を見つけ、一進一退にしか回復しない心と30年以上も闘ってきたのだった。

気がついてみたら、もう来年の2月で50歳になる。幸い、男友達はたくさんできた。闘いも最終段階まで来ているのだろう。しかし、女性への不信感はまだ消えていない。そして、このことを訴えても、大抵の人はわかってくれない。

「それは一部の女性のしたことですよ」

「そんなことばかり思い出していたら、憎しみが余計に大きくなって行っちゃいますよ」

「あなたが女に負けたくないという意識をもっているからじゃないの。男性優位主義思考を治せば、いいんじゃないの」

「男の人は見えない権力を握っているんですよ」

援助をしている人たちがこんなことを言うのである（怒）！！ こんなことを言われても、ぼくのトラウマが治るわけがない。むしろ感情を否定され、余計にぼくは傷つくことになる。

それは一部の女性のしたこと？ それを言うのだったら、セクハラだって、DVだって、一部の男のしたことには過ぎないのでは？ だけどフェミニストは、あたかも全ての男性のしたことであるかのように男を批判してきたのでは？ 痴漢だって一部の男がしているに過ぎないのを、男は全部、女性専用車両には乗せてもらえないのだ。ぼくを傷つけたのが1人や2人の女性だったら、一部の女性の問題と言われても仕方がない。しかし、ぼくは複数の女性集団からそういう目に合わされている。したがって、女性への恐怖というよりも、女性性への恐怖がぼくのなかには根付いているのだ。

そんなことを思い出していたら憎しみが大きくなる?? ぼくだって、憎しみを消そうと懸命に努力してきた。しかし、憎しみから目をそむけても憎しみは消えない。そうであるのならば、徹底して憎しみと向かい合うしかない。ぼくにとっては、いたし方のない選択だったのだ。

男性優位主義?? ぼくが、男性優位主

義と思っているの!? もし仮にぼくが男性優位主義の価値観をもっていたとしても、女は何をしても許されるということにはならないのでは? ぼくが女の子からいじめられていた頃、早くに親に相談していたら、不登校までにはならなかったはず。ぼくが言えなかったのは、男性優位主義ではなく、男性差別のせい。男は女よりも強くなくてはという価値観があるから、「男のくせに女にいじめられる奴があるか!」と言われることは目に見えている。余計に自尊心を傷つけられることはわかっているから、ぼくは誰にも言えなかったのだ。

男の人は権力を握っている???? ぼくはこれまで結婚もしていないし、仕事もずっと非常勤を貫いてきた。これからもおそらくそうなるだろう。女性に権力をふるったりできるような立場について一度もない。いつだって女性に気を遣って、小さくなって生きてきたぼくが、ただ生物学的に男だという理由で、権力者扱いされるのは筋違いである。

ぼくは辛酸をなめるような経験をした。女性によって心を壊された。それを女性にぶつけることで、ぼくは彼女たちに気づいて欲しいと思っている。15年ほど前にあるフェミニストから、「男の人は何気ない気持ちでしていることであっても、女にはセクハラと感じられることがあるのよ。」と言われたことがある。それを言うのならば、逆もまた真なり。女の人が無気ない気持ちでしていることが、男を深く傷つけることだって、絶対にあるはずなのだ。今回の発表は、女性に喧嘩を売るためではない。あくまでも女性に理解してもらうため、そして、もうぼくみたいな不幸な男を

生み出さないための女性批判である。

上手く行けばいいけどなあー。今、ぼくは不安1割に期待1割、そして、誰もわかってくれないのではないかというあきらめ8割の混じり合った気持ちの中にいる。おそらく誰もわかってくれないというのがぼくの偽らざる予想なのだ。ジェンダーの問題なんて言うのは一端囚われてしまった時点で負けだ。ジェンダーは理不尽な部分がたくさんあるにも関わらず、普通の人はそこまで深く考えずに生きているため、理解してもらうのがきわめて難しい。

ただ、大勢の人にぼくの傷つき体験を語ることで、少しでもぼくの心の中に新たな一筋の気づきが生まれてくれることを祈るのみだ。そして、女性へのわだかまりが多少でも消えてくれればと祈っている。そのかすかな光のような願いのために、ぼくはあえて発表するのだ。

5. 時には、何も考えずに『HK／変態仮面』

結局、ぼくはジェンダーに囚われ過ぎている。でも、それは仕方がなかった。

ぼくは子供の頃、スポーツや喧嘩ができず、女の子からも馬鹿にされるタイプの子だったので、ジェンダーに反発していた。時を同じくして、マスコミからはウーマンリブという言葉が盛んに流れて行き、男女平等だ、フェミニズムだと言われ始めた。ジェンダーに反発していたぼくは、当然のこのようにフェミニズムにとびついた。フェミニズムを勉強することで、ぼくのコンプレックスをどうにかしようと思った。

先日、ぼくのところにやってくるマッサー

ジの男性から、「國友さん、小説書いたらどうです。ぼくとの関係でもかまわないし、ぼくたちのやりとりだけでも、結構面白い話になりそうじゃないですか」と言われた。

ぼくの男友達のなかで、今一番頼りになるのは彼だ。何かあった時はすぐにかけてくれる。他にも親しい友達はあるが、皆、遠方に住んでいるので、すぐというわけにはいかない。彼は、スポーツクラブのインストラクターもしていたことがあって、身体はヘラクレスだが、性格的には優しいタイプだ。権力には関心がないと言っていた。ただ、身体を動かすのが好きだし、人の身体にマッサージしたり、トレーニングしたりする仕事は好きだと話していた。

この頃、マッチョという言葉は、身体に特化するものになってきた感がある。マチズモとは男らしさの誇示のことであり、必ずしも身体のことではなく、性格的マッチョ、社会的マッチョ、経済的マッチョ、性的マッチョの意味もあると思うのだが、この頃はもっぱら身体のことを意味することと知っている男性が多いみたいだ。

これは逆に言えば、身体的以外のマッチョが必ずしも肯定的ではなくなっているせいだろう。性格的に男らしい男といっても、今の若者にはピンとこない。ぼくが『マッチョになりたい！？ 世紀末ハリウッド映画の男性イメージ』を出した後、「これから身体をトレーニングしてマッチョになろうと思っています」と、出版の際にお世話になった女性にメールした。すると、彼女からは「性格までマッチョにはならないでくださいね」という返事が来た。

今となっては性格的なマッチョなんて、ネ

ガティブな意味でしかない。前にぼくの友人が、「マッチョとは、他人の都合よりも自分の都合を優先させる人のことだ」と定義していた。要するに、マッチョは自己中で他人の気持ちを考えないだけのことだ。

社会的・経済的マッチョにしても同じこと。昔みたいに終身雇用と年功序列、家族的な義理人情に支えられた社会だったら、そういう性格の人も頼りになる親分として受け入れられていたのだろう。しかし、今みたいに合理化で、人を物みたいにドライに切り捨てるのが当たり前の世の中になってくると、こんな男は困るのである。マッチョな人が権力を握ると、自分の都合で物事をすべて進めてしまい、権力のない人はドライに切り捨ててしまう。不況で失業者が増えて、理不尽な仕事でのプレッシャーや過労から自殺や精神病院に追い込まれる人が後を絶たない時代だ。一部のマッチョが世の中を牛耳っているから、下流の人たちが苦しまなくてはならないのだと考える人が増えているように思う。社会的マッチョは賞賛的ではなく悪者である。

また性的マッチョも、この頃は必ずしも歓迎されない。セクハラは基本的に女性の主観を基準にしているのだから、好色過ぎる男は、摘発されることになる。

むしろ、ジムやプールに通って、身体をマッチョにすることをエンジョイしているくらいの方が、罪がない。他人に危害を与えないからである。この頃、細マッチョという言葉が定着してきたが、これは男が女の好みをとりこんでいることを示している。一般に筋肉質の身体に憧れるのは女性よりも男性で、女性はむしろ、男の汗や臭いを感じさせない小ぎれいなボディを好む。男性的過ぎる身体

は、女性に恐怖心を与えるのである。マッチョな身体になりたい男と男性的過ぎるのは嫌いだと思う女、両者の妥協点が細マッチョなのだ。ほどほどにマッチョということか。

あー、いけねえー。俺は、こんなふうで、ジェンダーの問題と言うとあれこれ理論づけて考えてしまうので、逆に身動きができなくなってしまっている。ぼくは賃借対照表のように男と女を並べて、男にとって損得ゼロの男女関係にしたいという衝動をもっている。しかし、損得で考えてしまうとつまでもぼくの苛立ちはおさまらない。今でも日本の学校では武道の授業は男子のみ、マラソンの距離は男子の方が長い、というところが多いみたいだ。韓国などでは、男のみが強制的に徴兵される。男性は女性よりも生活能力が低いと見做されるため、女性の方に非がある場合でも、離婚したら子供は女のものだ。あー、イライラ。

普通の男はそこまで考えていない。どっちみち社会は不公平なもの。男同士の間でも格差はあるのだから、男女格差くらいは仕方がない。それを訴えても社会は、すぐには変わらない。そうであるのなら、考えないのが一番だ。どうにもならないことは何も考えずに、楽しいことを考えた方がいい。だけど、ぼくは運悪く考える悪循環に陥ってしまい、なかなかそこから抜け出すことができないのだ。

ある日、マッサージの彼がお面をかぶって、ぼくの部屋にやってきた。もちろん、ぼくたちは男の友情で結ばれているから、スタン・バイ・ミーのおふざけである。「あ、変態仮面だね」とぼくが言うと、「スパイダーマンですよ(笑)」と彼。そうか、変態仮面なんて

マイナーだから、お面なんかは売っていないよなあ。「こういう楽しいことを考えるのがいいですよ」と彼。

その彼がぼくに推薦してくれた映画が『HK/変態仮面』（福田雄一監督・2013）という映画だった。

少年ジャンプに掲載されていたマンガの映画化なのだそうで、彼に面白いと言われて借りてみた。確かに面白いのだが、とにかくこの連載で、詳細に分析するのがお恥ずかしいくらいのお下劣コメディ。これだけ男の裸がたくさん出てきて、股間やお尻や乳首を強調するような描き方をしたら、R指定になっても不思議ではないのだが、マンガチックだし、男の裸だからいいかと一般映画になったのだろう。これも差別だなあ。男の身体だって、性的なものなのに……あ、また俺の悪い癖がはじまった（笑）。前回に続いて、今回も紙数がついてきたので、映画の分析については割愛することにする。（そのうち、『テルマエロマエ』や『あしたのジョー』などと比べて、詳しく分析したいとは思っているが。）

その代わり、失敗談を披露したい。この映画をDVDで見た後、ぼくは彼に『変態仮面』見たよ。面白かったよ」とメールした。いや、メールしたつもりだった。ところが、間違っ、仕事関連のMLに送っていたことがわかった（汗、汗、汗。。。）。このMLには女性もたくさん登録しているので、皆にそれが流れてしまう。。。。。。どうしよう一、どうしよう一、とあたふた思っていたら、どうやら、返信したメールアドレスが、そのMLに登録していたアドレスとは違っていたらしく、流れていないということがわかった（爆）。

とはいうものの、一瞬、顔は真っ青、心臓

が凍りつくような思いだった。そもそも、『変態仮面』なんて、ほとんどの人は知らないだろうけど、タイトルがタイトルなので、いかがわしいものと思うだろう。女性からセクハラと摘発されるかなあー（男は、損！）。いや、男だから、そういうDVDを観るのは仕方がないかと思ってくれるかなあー（こういう面では、男は、得！）。こう考えると、またまた男は得なのか、損なのか、わからなくなる（笑）。

ただ、この『HK/変態仮面』、卑猥系コメディ映画だけど、小栗旬が脚本に絡んでいる。そのことを説明すれば、女性の偏見も解けるだろうなあと思って、心を休めた。やはり、得なのは、イケメン男（笑）。ぼくはイケメンではないので、男は痛い！

でも、男も女も、たまにはこういうものを見て、ガス抜きするのはいい。真面目な理屈ばかり考えていたのでは、心は壊れてしまう。何も考えない時間をもつこと。それがぼくのこれからの課題だ。でも、達成するには時間がかかりそう（笑）。

援助職のリカバリー

《 8 》

～人生いろいろ、看護もいろいろ～

袴田 洋子

専門職大学院の講義には、一般の人も受講できる公開講座というのがあり、11月23日の浴風会ケアスクール校長・服部安子先生の「アウトリーチの方法」という講義には、院生以外にも多くの援助職が受講していました。地域にいる、「支援を拒む人」にどうアプローチしたらよいかというテーマのもと、服部先生の「生きることが、素晴らしい」というブレない信念、理念を聴きながら、「役割モデル」という言葉を思い出しました。

「良い先輩がいる職場で働く」ということは、どんなに自分を成長させることに役立つか、組織から離れてしまった（しかも子育ても経験していない）私は、自分を成長させることに、何倍もの時間を要していることを認識しました。仕方がないので、そこを正面から認めた自分を認めればいいでしょう、と自分に言い聞かせています。

《地域の小さな病院こそ、何でも屋》

約半年の「引きこもり」を経て、自分がダメな人間なのは、一人っ子で我慢や忍耐を知らな

いからだ、だから、大学病院などカコクな病棟業務の病院ではなく、もっと小さな病院で働けばいいんだ、（甘さ丸出し、無知丸出し）と考えて、近隣の小さな公立病院に再就職しました。

当時、全体でわずか100床ほどのその病院は、大学病院のように「循環器内科」「循環器外科」「消化器内科」「消化器外科」などと専門に病棟が分かれているのではなく、「2階 主に小児科」「3階 その他」という状況で、配属となった3階病棟には、骨折、胃がん、大腸がん、乳がん、パーキンソン病、褥瘡ケア、痔、などなど、さまざまな病気の患者さんが入院していました。大学病院の救命救急病棟にもさまざまな疾患の患者さんが搬送されてきますが、ガンや神経内科の患者さんが救急病棟に入院してくることはほとんどありません（受診している担当科の病棟に直接入院するため）。地域の小さな病院ゆえ、多様な医療ニーズに応えなければならぬ役割があり、大学病院とはまた異なる大変さにぶちあたりました（どんな仕事でも大変じゃない仕事などないのですが）。

《「大学病院育ち」は、使えない!?!》

この時、もっとも「困難」を感じたものが、「点滴」と「剃毛」でした。点滴＝静脈に注射するという行為は、当時はまだ、法律上、看護師には認められておらず（看護師が静脈から採血するのは可）、大学病院では医師が行っていました。しかし、実態は、多くの病院では（「医師の指示のもと」を拡大解釈して）ほとんど看護師が静脈注射を行っていたようで、この病院でも私以外のナースたちは上手に点滴の針を刺していました。なので、自分が担当する部屋の患者さんが、輸液の指示が出ているかどうか、いつもドキドキしていました。また、「剃毛」も、大学病院では、院内の床屋さんが病棟まで来てくれて、オペ前の患者さんの手術部位を剃毛していました。なので、床屋さんが使うカミソリで毛を剃るという「技術」が無い私は、「大学病院から来たのに使えない看護師」と思われているだろうなと思い、肩身の狭い思いをしていました。

《看護師は、理容師のスキルも要る?》

今でも鮮明に覚えているのが、痔の手術をする患者さんの剃毛に直面した時のことです。その患者さんは体格が大きかったということもあり、どう考えても手が4つか5つ必要だろうと思いましたが、「使えない看護師」と思われるのがイヤで、最後まで他のナースに「手伝ってほしい」と言い出せませんでした。

準備を全て終えて、患者さんのベッドに行き、カーテンを閉め、手にカミソリを持ちながら、「とても一人で出来そうにない」と、逃げ出したい気持ち全開になったその瞬間、病棟師長さんがさっとカーテンを開けて入ってきて、「大丈夫?」と言いながら私からカミソリを受け取り、

代わりに剃毛をしてくれました。この病棟師長さんは、当時、栃木の自治医科大学から派遣されていた方で、毎日、新幹線で通っていらっしやいました。この時、私は「あの大きな患者さんの剃毛が出来るか自信ない」と、同僚には言っていたけれども、師長には直接言っていなかったもので、目の前に現れた師長を見た時、助かったと思ったと同時に、私が窮地に追い込まれていることを全て理解していたということに驚きました。そして、「温室育ち」の自分をまたまた情けなく思うようになっていきました。

《「郷に入りては郷に従え」ず…》

情けなくて肩身の狭い思いをしているなら、しているなりの言動をしていけばいいものを、勘違い未熟者ナースの自分は、「大学病院の病棟看護が教科書」という無意識を持っていたために、「郷に入りては郷に従え」という考えが長いこと続きませんでした。例えば、当時の大学病院の入院は、みな、〇月〇日の10時に予定入院。日勤が終わるような夕方の時間に予定入院などはありません。しかし、この病院では、足を骨折した患者さんを診察した医師が、「このまま患者さんが家に居るのは大変だろうと思ったから入院させてあげて。患者さんは一度家に帰って、荷物持ってくるから」と16時過ぎに病棟に言ってくる、というようなことが起こっていました。今の自分なら「親身に考えてくれる病院だなあ」などと思いますが、当時は、「こんな時間に入院なんてとんでもない。残業になってしまう。なんという指示を出す医者だろう」と批判的言動をすることがしばしばありました。その結果、たったの8ヶ月後に、病棟から外来へ異動させられてしまいました。

《医師の「指示」に従うなんて、まっぴらごめん! ?》

突然、外来への異動を命じられ、不本意に思った私は、市議会議員に相談にのってもらったりしましたが、「議員であっても人事には口出しできない」ということで、異動の取り消しは成されませんでした。そして、当時はまったく外来看護に興味を持てなかったため、怒りとともに退職を選びました。

引きこもった後、ようやく一步踏み出せて、ナースとして再び働けるところまでたどり着いたのに、「病棟には要らない」と(また)言われ、悲しさと悔しさとで再び強く自己嫌悪しました。しかしこの時は、恐らく「こんな病院、こっちから願い下げだ」という気持ちが勝っていたために、ひどく落ち込み過ぎることなく、次に働ける場所を探す行動がとれました。そして、「地域の小さな病院だと、こんな理不尽な業務をやらされてしまう。大学病院では看護師の方が医師を動かしていたくらいだったのに。医師と看護師は対等なはずなのに。地域の小さな病院というのは、こんな世界なのか。だったら、医師が近くにいない訪問看護だ!」と考えて、常に「看護師募集!」と張り紙をしてある地域の訪問看護ステーションに「雇ってください」と突然訪ねていきました。

そうして、平成10年4月、訪問看護師として、私の「地域・在宅」の援助実践が始まりました。

周旋家日記⑧「対人援助学会 第5回年次大会 企画ワークショップ (WS) 開催報告」-その1-

1. はじめに

今回は、連載していた菩提寺の周旋報告をお休みし、11月9日に行なわれた対人援助学会第5回年次大会において、筆者が企画したワークショップ「広報・ホームページ推進委員会企画パネルディスカッション『対人援助学会におけるWEBコミュニケーションについて考える』」(以下WS)について報告する(ただし、紙面の関係上、2回に分けて報告する)。

なお、本WSは、筆者が、対人援助学会の広報・ホームページ推進委員会の委員長に任命されたことにより企画したものである。

2. 実施概要

(1) WSの形態と登壇者

本WSは、パネルディスカッション(ミニシンポジウム)の形態で実施し、報告者の氏名・所属・報告タイトルならびに指定討論者は以下のとおりである。

<報告者>

①東山純也(株式会社美文化計画)

「ウェブコミュニケーションの最先端」

②渡辺修宏(水戸総合福祉専門学校)

「学会ホームページへの期待」

③揚佳樹(株式会社アグニット)

「対人援助×デザイン - デザイナーの立場から - 」

<指定討論>

①小幡知史(障害者支援事業所ライフステーション樹林)

②尾西洋平(立命館大学)

(2) 開催趣旨

対人援助学会は、「対人援助学」(Science for Human Services)という新しい学範の創造と見直しという学術的な目的だけでなく、「対人援助職についている方々の『連携』や情報交換のプラットフォームを提供」も目的として設立された。複雑化する社会問題に対応するためには、様々な対人援助職者の連携や融合が必要不可欠になっており、そのための基盤づくりは、この学会の重要なミッションと言える。

このような目的を達成するために、年次大会や研究会の開催、対人援助マガジンや学会誌の発刊などをおこなってきたが、本学会が先駆的に行ってきたことは、WEB発刊であろう。WEBにおける情報発信は、「検索」によって多くの人の目に触れることができること、リンクによって様々な関連付けができること、ビジュアル表現の幅が広がること、発刊コストが安価であるなどの利点がある。また、近年はSNS(ソーシャルネットワーキングサービス)が急速に普及し、国内ネットユーザーの52%の4,965万人が利用(株式会社ICT総研,2013)¹しているが、このSNSの利点を含めると、紐帯の強化やつながりの可視化、相互コミュニケーションの速さなどが、WEBの利点としてあげられる。

この企画ワークショップでは、大会5周

¹<http://www.ictr.co.jp/report/20130530000039.html> (2013年11月25日閲覧)

年を契機として、対人援助学会のWEBコミュニケーションを見つめ直し、今後のあり方について検討していく。

(3) 第1報告「ウェブコミュニケーションの最先端」(東山氏報告)の概要

①青少年のWEB使用状況

2013年9月3日付『総務省青少年ネットリテラシー実態調査²』によれば、「全体の99%が、ネット接続のための機器を保有」、「スマートフォン(以下スマホ)の利用率は59%⇒84%」、「利用時間、2時間以上が56%」である。

また、2013年10月25日付『ITと人権研究委員会 携帯電話・インターネットに関するアンケート集計中間報告』によれば、「ネットへのアクセス(スマホ)⇒44.9%」、「ネット利用におけるサービスはソーシャルネットワークワーキングサービス(以下、SNS)、SNSの主流はLINE⇒74.0%」、「友人・知人の個人サイト(ブログ)を見るか?⇒ほとんど見ない(29.1%)全く見ない(33.4%)」、「ネットでゲームをしますか?⇒しない(42.7%)」、「いつ頃、携帯をもつか?⇒小学校4年~6年(35.3%)、中学校時代(35.2%)」、「携帯電話でよく利用するのは?⇒SNS(72.3%)、ゲーム(33.6%)」、「自分が受信したメール、コメント、メッセージに対して、何分(何時間以内)に返事を送らなければ不安(不満)か?⇒その日のうち(33.3%)」である。

2

http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01kiban08_02000120.html

これらのことから、我が国の青少年のウェブコミュニケーションの傾向は、「携帯を保有する時期は、小学校高学年から」、「スマホ利用の目的は、ゲームではなく、SNS」、「SNSは、メールの代替的な役割」、「SNSの主役は、Facebook、Twitterではなく、LINE」であることがわかる。

また、スマホの普及により、「金融業や風俗に手を染める若者が急増(背景「地元企業の雇用縮小」、「家庭環境の変化」)、「出会い系サイト(X)⇒SNS(△)」という問題も生じている。

②ネット機器の主役の交代

スマホの存在により、ネット機器の主役は、「PC⇒スマホ」となり、「デジカメ、オーディオは、アイコンに変わった」。また、「LTE(4G)³による高速ユビキタス時代の到来」し、「携帯保有の初期費用はなく、誰でも手が出せるビジネスモデル」(0円携帯、月額通話料金に分割して上乗せ)であるため、青少年にも普及した。

③インターネットは、SNSという「小島化」現象とコミュニティという名のムラ社会 2.0

「匿名<実名(Facebook)」、「誰とでも⇒誰かと繋がる(LINE)」、「グループ機能という特定少数との繋がり(「既読」機能)」が傾向であり、ソーシャルネットワークといえないほどの小さいコミュニティ(「小

³現在主流となっている第3世代携帯の通信規格(3G)をさらに高速化したもので、LTEの理論上の最高通信速度は、ダウンロードで100Mbps以上、アップロードで50Mbps以上と言われている(参考：<http://service.ocn.ne.jp/plan/special/lte/>)。

島) となっている。

「Twitter と Line の使い分け」、「不特定多数と特定少数」、「『既読』『いいね』は誰からか興味を持って欲しい。」これが、SNS (LINE) 疲れや Twitter の画像投稿事件に繋がっていると考えられる。

このように、SNS では、コミュニティが沈殿化し、「『中学 2 年生』から止まった状態」や「似たもの同士との繋がりを求める傾向」も見られ、「同じ世代、同じ趣味、同じ学校、同じ地元、同じ境遇 (環境)」によるコミュニティという名の小さな「ムラ社会」を構成している。

④メディアリテラシーの重要性

ネットや SNS 利用時のトラブルから回避するためにも次の視点でサービスを理解することが大切である。「サービス提供者の意図を見抜く」、「コンプガチャ⁴ (グリー)、ビジネスモデルの理解」、「『無料』はない (お金を提供するか、情報を提供するか)」、「広告モデルから、お金の流れを理解する」。

また、「ネット世界でも現実社会と同じ規範が求められる」、「匿名 < 実名 (Google ハミングバード)⁵」、「相手の SNS で自分はどうのように映っているのかを理解する」、「スマホを使わない統一ルール (共有ルール) を決める → 返信の加速化 (SNS 疲れ) を制限できる」、「歩きながらの禁止、時間

帯の制限、土日祝日は一旦、中止など」など行動の見直しも大切である。

⑤オンライン学習の潮流

アメリカの高等教育では、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学 (以下 MIT) が、「無料オンライン授業の拡大」をおこなっており、ハーバード大学と MIT が協働で設立した連携した「edX⁶ と Google とが連携 (2013 年 9 月 10 日発表)」し、さらなる拡大を目指している。

このような動きは、大学が、「Education (教育課程に基づく学び)」だけでなく、生涯学習時代の「Learning (学びたいものを学ぶ)」を意識したものといえる。これらの動きがさらに拡大すると、日本では、「6334 教育の再定義」が必要になるであろうし、「開発途上国の子供たちの学ぶ機会の拡大」に期待がもてる。

一方、この「無料オンライン授業の拡大」は、「優秀な人材をグローバルで獲得合戦」であり、さらに、「Google と edX 連携の意味」は、「教育の主役が学校 ⇒ 企業」への動きである可能性もあることは見逃せない。

なお、「オンライン教育の弊害」としては、「対面授業より習熟効果が低い」、「飽きやすい」、「断片的な知識」、「情報のつまみ食い」、「時流に踊った知識 > 知恵」などがあるとされている。

⁴ コンプリートガチャの略。SNS 上のゲーム (ソーシャルゲーム) におけるアイテムを販売 (課金) する仕組み。この課金の仕組みは、消費者庁が景品表示法違反であるとした。

⁵ Google の新しい検索アルゴリズム。講演では、信頼性によって検索結果が変わることが紹介された。

⁶ ハーバード大学と MIT が共同で設立した「無料オンライン授業」のプラットフォームを提供するコンソーシアム。
<http://service.ocn.ne.jp/plan/special/ite/>

⑥対人援助学会のWEB戦略についての提案

以上のような現状を踏まえ5つの提案をおこなう。①スマホやタブレットでの閲覧が増加しているので、「Responsive Design」によって、表示された機器や画面に最適化するようにページを制作する。②「価値のある情報」を「Blog」で提供する。③「1分以内の動画コンテンツ」を提供し、活動を映像で伝える。④「コンテンツルール（Creative Commons⁷）の明確化」をおこない著作物の利用条件を明らかにする。⑤「サイトとSNSとの連携」をおこない、近年利用者を増やしている「Google+」⁸と連携するのもよいだろう。

（4）第2報告「学会ホームページへの期待」（渡辺氏報告）の概要

渡辺氏からは、一学会員の立場から、学会ホームページへの期待が語られた。

①学会ホームページに求める機能

学会員がホームページ（以下HP）をどのように活用するかを想定した場合に、以下の6つの理由が考えられる。

- ①援助について知りたい、勉強したい
- ②援助者や被援助者などにむけて発信したい
- ③援助者を探したい。
- ④援助者や関係者と交流したい

⁷ Creative Commons (CC) は、著作物の利用条件をわかりやすく意思表示するためのプロジェクト。

参考：<http://creativecommons.jp/>

⁸ Google が提供する SNS。

⑤備忘録

⑥その他

これらの「情報交換」・「連携」・「融合」のニーズに対して、学会HPを確認すると、一部準備中はあるものの情報を得ることができるようなコンテンツ（リンク先の情報や大会などの事業含む）が準備されている。

今後、HPの見直しを行う場合は、「情報交換」・「連携」・「融合」に必要な情報を「スピーディ」・「ローコスト」・「ユビキタス」の3点を同時に実現しながら提供する必要があるだろう。

②デザイン・ブログ・Facebook

対人援助関連団体のHPもデザイン性が優れているものがある。例えば、!-style（エクスクラメーション・スタイル）⁹、NPO法人スウィング¹⁰、NPO法人クリエイトサポートレッツ¹¹などは、デザインを重視したHPとなっている。

また、HPにブログを開設する場合に参考になると思われるのが、アクセス数の多い「日本科学未来館」の「科学コミュニケーターブログ」¹²である。

学会のFacebook利用について調べたところ、日本マーケティング学会、日本情報

⁹ <http://www.ex-style.jp/index.html>

¹⁰ <http://www.swing-npo.com/>

¹¹ <http://cslets.net/>

¹² 日本科学未来館は、最新の科学技術の紹介や社会一般へ科学技術者の研究成果等を発信することなどを目的に運営されている。約50名の科学コミュニケーターが更新するブログは、開設後約2年で100万ページビューを超えた。

<http://blog.miraikan.jst.go.jp/other/20>

社会学会、日本マテリアルライフ学会、日本菌学会、日本患者学会、日本水産工学会などがすでに利用しており、日本FACEBOOK学会なるものも存在した。

Facebookには、「HPより高いアクセシビリティ」、「MLやマガジンとしての機能」、「掲示板としての機能」、「備忘録としての機能（画像、動画、ドキュメント）」を有しており、また、「複数指定管理者の仕組み」があることや「(基本的に) 実名であることの『信頼性』と『レスポンスの良さ』」も利点としてあげられ、当学会としても利用を検討してはどうだろうか。

③SNS利用上の課題

しかしながら、SNSを利用する場合に「情報管理のリスク・個人情報の漏えい防止」に留意する必要があると思われる。「エンドユーザーにまかせていいのか?」、「誰がどこまでやれる?やるべき?」なのかについては、事前に取り決めをする必要がある。

また、「運用ルールとデジタルデバイトの問題」がある。「知っている人は大丈夫」であるが、「知らない人は知らないうちに不利益を被る」ことになり兼ねない。このことについても配慮する必要がある。

これらのリスクについては、他学会のSNSポリシーなども参考にしながら検討していく必要がある。(つづく)

トランスジェンダー をいきる (7)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

小学生(4)男性性崩壊の危機——「男らしく耐える」という課題

1 始めに

ちょうど、「9、10歳の壁」と言われる小学校4年生から5年生にかけて、立て続けに2つの出来事が起こった。この2つの出来事は、両者とも私を「男性性崩壊の危機」へと直面させた。まず、2つのエピソードを記述した上で、その体験が現在、どのように現れているかを分析する。

2 Aとの突然の別れ

①「俺を男にしてくれる女っぽい男の子はもういない」

小学校4年生の2学期後半辺りから、Aが学校に来なくなった。前述したように、高い女性性を利用した彼の行動様式によって、男性性を強化してきた私にとって、この出来事はショックであった。では、なぜそれほどまでに「ショック」だったのだろうか。

私にとってAは、「自分を『男』にしてくれる、女っぽい男の子」であった。彼が私を「男」にしてくれたときというのは、寡黙ながらも冗談を言って彼を笑わせたことや、彼の苦手の算数や点字を教えたことである。この「教える」という行為に至っては、自己の男性性をフルに発揮することができたので、当に「天にも昇りたいような心境」であった。そのような彼の前では安心して「男の子」になることが許されたし、また彼の高い女性性が私をよりいっそう「男」へと駆り立てた。しかし、彼が学校に来なくなったことで、私を男へと駆り立てる女性性の高い人物がいなくなったことがショックとして立ち表れ、自己の

男性性崩壊の危機を迎えることになった。

では、彼以外に女性性の高い男の子はいなかったのだろうか。ここで、当時の盲学校の男子児童の大まかなジェンダー傾向について説明する。

私が通っていた当時の盲学校には、比較的女性性の高い男児が多かった。「視覚障碍のある人たちは無性である」とか、「性別を感じさせない視覚障碍のある人たち」などと表象されることが多いが、実際の盲学校の教育現場や私生活では、障碍のない児童よりジェンダー化された要求や扱いによって、自らの感情を抑圧したり、行動や思考を規定させられていた。「男の子だったら、、、」、「女の子だったら、、、」と、わざわざジェンダーを利用して、個々人の行動や思考性を規制したり規定したりする背景には、「この子達は視覚に障碍はあっても、将来、社会に出しても恥ずかしくない大人にしなければならない」という、盲学校教師や保護者たちの視覚障碍のある児童たちへの強迫的な関わりを垣間見ることができる。つまり、盲学校の教育現場でも私生活においても、個々人が社会の中で生きていく権利保障のための「権利としての社会化」ではなく、視覚中心の「社会適応のための社会化」を個々人に意識化させるためにジェンダーを利用して「一人前の社会人」を生産するための戦略的方法が取られた。

だから、盲学校の教師や保護者から女性性の高い男児たちに対して、「男の子らしくしなさい」と注意されているところを目撃した。しかし、当時の私は、そのような彼等に対して、自己の男性性を強化していったかといえばそうではなかった。このときすでに A に初恋していたので、彼が特別女性性の高い男の子であったというよりは、そのような彼への恋愛感情によって、男性性が鼓舞され、強化されていった結果であろう。

②「男らしく耐えること」による感情の封印

小学校 5 年生になって、担任が再び年配の女性教師になっても、A は学校に来なかった。そこで私はある決心をすることになる。それは、この局面を「男らしく耐えること」、つまり、A がなぜ突然学校に来なくなったのかを、当時の担任の女性教師に聞かない、たとえふとしたことで A の話が話題になったとしても、自分からは絶対にしないし、聞いても聞かなかったことにする、ということであった。それでこそ、男の忍耐、すなわち、男は本当につらいことがあったとき、口数が少なくなる、ということ自身に言い聞かせた上で、A の話それ自体をタブー視していた。そのような感情封印を繰り返した体験の結果、現在でも、自己にとって本当に大事な人であればあるほど、例えば病気の容態や災害時での安否を気遣うことを「男らしくない」とタブー視して感情を封印し、その話題からの逃走を図っているのである。

3 気まぐれな祖母の言動

A が学校に来なくなったことと軌を一にして、「男性性崩壊の危機」に関わったもう 1 つ

の出来事が、「気まぐれな祖母の言動」であった。

①男の子にしてくれた気まぐれな祖母

祖母は、その日の気分や状況で態度をころころと変える人であった。よく言えば気前はよいが、悪く言えば一貫性がなく、思い込みの激しい部分もあった。

当時、私の家では、祖母が最年長であった。「年長者を大事にする」という家訓に従い、祖母のどんな無理難題にも、家族総出で従わなければならなかった。にも関わらず、実際には祖母と両親との間のいざごさは絶えなかった。そのようなとき、祖母はいつでも「最年長者」を楯に、その気まぐれさをいっそう発揮させ、家族の中を混乱させては、しばらくの間家出をすることを繰り返していた。その家出の際、時々私がターゲットとして付き合わされ、しばしば両親と2歳年上の兄と離れなければならなかった。

小学校1年生から3年生の途中まで、実家から盲学校までの道のりが遠いことを理由に、祖母と2人で盲学校の近くにアパートを借りて通学していた。祖母との生活の中では、事あるごとに「女の子としての要求」はされていたものの、そのつど「男の子としての要求」へと代入したことによって、ますます男性性を強化していった。だから、そのような祖母に対しては、何のためらいもなく「男の子」になれたのである。

また、家訓に従い、祖母のいうことは何でも素直に聞いていたので、祖母にとっては「自慢の子」として人前で誉めそやされる存在になり、同時にそのことは、子どもであることを理由とした無理難題や弱音を吐くことを許されなかった。そのような厳格さを背景に、自らも祖母に対して、子どもであることを理由とした無理難題や弱音を吐くこと＝「男の子」から「女の子」へと転落する恐れを感じ取っていた。

要するに、私の男性性は、身体が女の子であっても、人前に出たときだけ「自慢の孝行息子」として、祖母からうまく利用された。そのことを「男の子としての喜び」として存分に味わいたかったので、そのような祖母からの戦略的な利用のされ方とは無関係に、とにかく「男の子にしてくれる」というメリットによって、その無理難題をどこまでも引き受けたというのが、当時の私の心境であった。

②短期間の祖母の家出

小学校5年生のことである。当時、盲学校の寄宿舎に入舎していたので、週末になると実家に帰省していた。その帰省していた土曜日の夜、例によって、両親と祖母の間で言い争いになった。その原因はどうやら私のことのようにあったが、言い争いの詳細についてはなにも聞かされていなかった。

翌日の日曜日の朝、朝食を取っている私を前に、祖母が家出をすと言い出した。祖母は、いったん言い出すと利く耳を持たない人であったことは子供心に知っていたので、そのまま聞いているしかなかった。

これは、後年亡くなった母から聞いた話であるが、祖母が家出をする際、私に「言ってはならないことを言った」と言う。私が記憶していたのは、祖母が泣きながら何かを言っていたのだが、その「何か」を記憶していない。その記憶していない「何か」は、生前母が言っていた「言ってはならないこと」に繋がるのかもしれない。しかし、母はその「言ってはならないこと」について口にしなかった。ということは、どのようなことが考えられるだろう。前項で述べたように、Aが突然学校に来なくなったことのショックやつらいことなどを、両親や友達や担任の年配の女性教師に吐露することなく、男らしく感情封印してきた。しかも、その感情封印は、Aの件だけではなく、他に自己にとってつらいことや悲しいことにも適用された可能性が高く、その「言ってはならないこと」も、自己の記憶から抹殺しなければならなかったほど、残酷な言葉であったことが考えられる。

③再び「男らしく覚悟する」が

しかし、祖母の涙ながらの次のフレーズだけは、今でも記憶に新しい。それは、「たとえば家族や学校の教師や友達がいたとしても、あんたは独立独歩で生きていく覚悟をしなあかん」であった。そこで私の決心は、石のように固まった。すなわち、どうせAもいなくなったし、これからはどんなにつらいことがあっても、「男らしく覚悟して」生きていく」という自身への宣言であった。

しかし、今から考えると、祖母のフレーズは、幼いころから聞かされていたこととはいえ、この日の私にとっては当に「男らしく覚悟する」という意味で、苦言を呈する内容であった。すでにAがいなくなったこともあって、その覚悟の仕方に中途半端は許されないという厳格さをも伴っていた。

自己を「男にしてくれる人物」が、一気に2人もいなくなったことによって、これからの男性性の維持・構築をどのようにしていくか。私は事故を鼓舞するように、小学校5年生の自己の心身に重い課題を突きつけた。だが、思ったより、この課題は重すぎて、ほとんどこなすことはできなかった。たとえば、音楽の時間に歌いながらふっと泣き出しそうになったり、座学では教科書を忘れ、授業も上の空だったので、担任の女性教師から叱られ、成績も低空飛行だった。そのような中でも、つらいことを誰にも吐露しなかったことだけが、唯一男性性を堅持していた側面であった。

④「裏切られた決心」は感情の封印へ

しかし、「男らしく覚悟する」決心は、ものの見事に裏切られた。

家出から約2週間後、突然祖母が戻ってきた。土曜日、盲学校の寄宿舎に平然とした面持ちで迎えに来た祖母に対し、びっくりしたのと同時に、「なんで今頃俺の前に来やがった」という怒りの感情が沸き上がってきた。では、戻ってきた祖母への「怒り」とはいったいどのようなものであったのか。前述したように、家出する際、涙ながらに私との決別の言葉を発したり、どんなことがあっても誰にも頼らずに独立して生きていくようにと苦言を

呈した上で、不十分ではあったものの「男らしく覚悟すること」を決心させられた。にも関わらず、その決心がたった 2 週間でもの見事に裏切られたことへの怒りであった。しかし、その怒りを決して言葉にすることはなかった。そのときに唯一許されたのは、自己の感情を凍りつかせること、つまり、怒りの感情を感じなくさせることだけであった。また、怒りの感情を言語化するすべを見出せなかったこともあるが、その怒りの感情を言語化することは、即座に女の子へと転落してしまう危険性を意味した。したがって、この場合でも、戻ってきた祖母を黙って受け入れることで、感情を封印した。くしくもこの体験が、「女性の口は、むやみに人の同情を買おうとする道具、女性の決心は決心ではなくてただの気まぐれ」というように、祖母を代表して、自己の女性イメージをいっそう悪いものにしていったのである。

4 感情の封印は、そのまま外傷体験に

上記 2 つのエピソードを通じて考えなくてはならないことは、感情を封印した体験が、そのまま外傷体験として残存し、ことあるごとに出現していることである。なぜ、上記 2 つのエピソードが、未だに外傷体験として残存しているのか。

前者のケースでは、社会人になって A と再会した。そのとき、彼が突然学校に来なくなったことへのショックに対する自己の心理状態や行動様式に関する話をした。彼に対するこのような話は、彼との間での「過去の清算」はなされたものの、この体験がもたらしたもう 1 つの「過去の清算」、すなわち、彼が学校に来なくなったことによるショックやつらいことを誰にも吐露することなく、「忍耐を持って男らしく耐えた」という体験がもたらした「内面の過去の清算」がまったくなされていなかったことに気づかされた。この体験が、そのまま現在にまで持ち込まれた結果、本当に大事な人であればあるほど、その人の消息を確かめようとしなない。そればかりか、消息を確かめること＝男らしくないという図式を内面化していることである。

後者のケースでは、しばしば両親との間でいざこざを起こしていた祖母の家出によって引き起こされたつらい体験を誰にも吐露しなかった部分、つまり、「内面の過去の清算」がなされていなかったところは前者と共通しているが、その気まぐれな祖母との「過去の清算」もなされなかったところが、前者との大きな相違点である。しかも、後者のケースでは、家出をする際の不必要な「決心を促す言葉」に対する謝罪の言葉がなかったことが、外傷体験の重度化を引き起こし、いっそう女性イメージを悪くしていった。

したがって、A との「過去の清算」がなされたのは、ジェンダーレベルでの男性同士のホモソーシャルな関係性の下で行われた相互行為であったから、「内面の過去の清算」がなされていなくても、外傷体験の重度化は最小限に留まっている。しかし、祖母との「過去の清算」がなされなかったのは、気まぐれな祖母を代表していっそう悪くなった自己の女性イメージによって、祖母に対してもそれ以上の「過去の清算」を望まなかった。その代わ

りに、外傷体験の重度化を自己の中に「男らしく」引き受けた結果、現在にまで至っている。

5 終わりに

「たかが小学生時代に貸した課題」、「されど小学生時代に貸した課題」。外傷体験は残っているものの、私はそのような自己に拍手と栄誉賞を送りたい。実現不可能な重い課題ではあったが、苦しかった中にも、自らサバイブしようとしていたからである。この時期に流行した歌やテレビ番組など、今ではいとしい思い出として残っている。

うしわか こうじ（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

役場の対人援助論

(7)

岡崎 正明

(広島市)

役割コミュニケーションに ついての考察 その2

前回「その1」では、職業的な立場で行うコミュニケーションには、役割に応じた一定の特徴＝「役割コミュニケーション」があり、そのひとつを学校のクラス内の関係性を例に「先生ポジション」と勝手に命名した。法律や科学的根拠などを背景に、指示命令の要素が濃いコミュニケーションのことである。

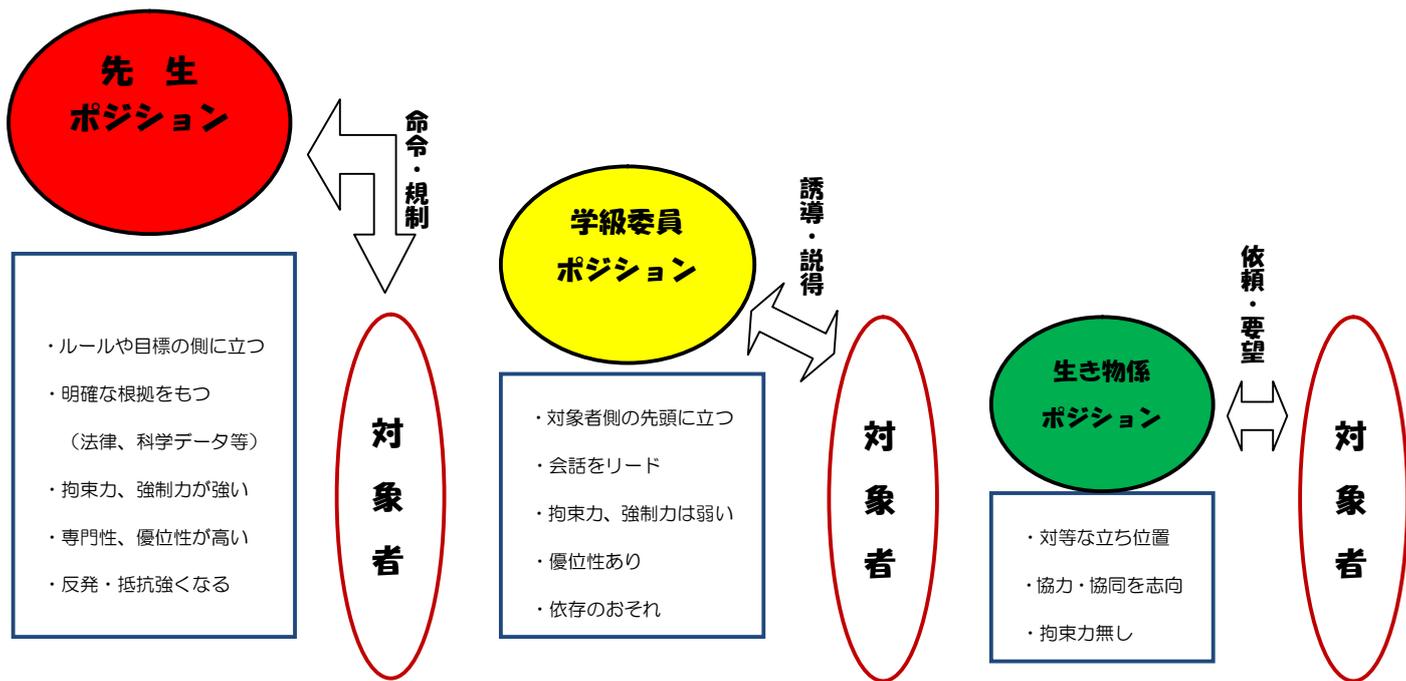
先生ポジションになりやすい職業としては、医師・弁護士・教師など、いわゆる“先生”と呼ばれる職業のほか、警察官・裁判官・公務員など、法的拘束力や強制力を持った仕事該当するが、その他にもワンマン経営者やスパルタコーチなど、対象者に対して圧倒的な優位性や専門性を持つようとする人々も含まれる。

先生ポジションのコミュニケーション自体は、別に「良い」「悪い」というものではない。ときにそれが必要になる場面も世の中には存在する

し、使い方を誤らなければ非常に有効に作用する手法でもある。

ただ気をつけなければならないのは、この手法は劇薬のようなところがあり、効果は大きいですが、副作用も強い。相手の言い分を無視して言うことを聞かせようとすれば、中学生でなくても反発したくなるのが人情というもの。そして1度このやり方に慣れてしまうと、なかなかそこから抜け出せなくなってしまう「依存性」も持っている。ある意味シンプルで、とても分かりやすいコミュニケーションだからだ。その結果、目的を達成するためより強く出る→さらなる反発を招く→さらに強く迫る、という悪循環に陥りやすい。なんだか体罰に似ている。

そこで別の選択肢として提示したいのが、「学級委員ポジション」「生き物係ポジション」である。またもや勝手に名付けたが、以下にその名前の理由も含めて説明したい。ちなみにイメージにすると下図のようになる。



まず「学級委員ポジション」のコミュニケーションとは、その名の通り、クラスの学級委員のような役割で行われやすいコミュニケーションのことをいう。

学級委員の主な役割は、みんなの先頭に立ち、望ましい方向に誘導していくことである。ときにはクラスメイトを注意することもあるが、先生ほどの拘束力は持っていない。宿題を増やしたり、グラウンドを走らせたりすることはしない。

目標に向かっていく時も、先生のように「スポーツ大会までに長なわとび100回！できるまで練習するぞ！」などと強制はできない。「みんな、100回目指してがんばろうよ！」と説得し、率先して練習するくらいだ。

学級委員ポジションになりやすい典型的な立場・職業としては、会社の上司や先輩、部活やサークルのキャプテン。カウンセラーなども該当するだろう。経営者や医師などと比べれば優位性は高くないが、相手をリードし、引っ張っていく存在である。

お役所での例をあげれば、福祉窓口での知的

障害者や認知症高齢者の方などとの相談場面が当てはまるかもしれない。

通常一般的な市民対応では、制度の説明は行うものの、「この手続きはするべきですよ」といったおせっかいはあまり好ましくないとされる。それはお役所の申請主義（本人の自発的申請から物事がスタートする）もあるが、近年の自己決定・自己選択を尊重する考え方も影響している。良かれと思って制度のご案内をしたら、「人様の世話にはなりたくない！」と怒られたなんて話もある。大抵の人が使いたいと思う制度でも、中にはそう思わない人だっている。本人が自分で考えて決めることを大事にするのは、当然のことであるべきだ。

ただこれが例外なく適用されると、変な自己責任論に繋がってしまう危うさがある。非正規雇用の問題や遭難事故にしても、「あなたがまた種でしょ」という論調ですべてを語るのは、筋が通っているようで、実は想像力を欠いた理屈に思えてならない。

特に認知能力や判断力に難しさを持っている対象者に、「お客様のお好きなようにどうぞ～」

だけで対応してしまうと、客観的に見て明らかに本人や周囲の不利益な決定になりかねない。

そんな時は、対象者の意思を尊重しつつも「この手続きをしておく、負担が減るのでしておきましょうかね」などと会話をリードし、的確な助言で本人の利益に繋がる決定へと促していく。不適切な決定になりそうな場合には説得するなど、こちらの専門性と優位性を活かし、相手の一步前に立って望ましい方向へと道案内する。

お役所のみならず、様々な福祉の現場でよく見られる手法ではないだろうか。最近増えてきた成年後見人なども、まさしくこの学級委員ポジションが活かされる職種だろう。

ただこの手法も先生ポジション同様、一長一短がある。どんな場面でも必ず有効なんていう方法は、ありはしない。

例えば、あまり度が過ぎると「おしつけ」や「操作」になってしまうというおそれがある。それを防ぐためには、対象者の意思・ニーズを尊重する姿勢を常に意識することと、「誰にとって望ましい方向に導いているのか？」という自問を忘れないことだろう。

もうひとつは、対象者の依存的な態度を招きやすいということ。

なんでもやってくれる学級委員がいると、クラスメイトが「あいつに任せとけばいいや」となるパターンがある。同じように対人援助場面でも、支援者があまりにきめ細かなサービスを提供してしまうと、本人は頭を預けて自分で考えることを止めてしまう。すぐれた専門家に任せられた方が、自分であれこれ悩むより格段に楽だからだ。結果、その支援者がいないと生きていけない人を作り出すことになる。これでは本当の意味での対人援助に繋がらない。

学級委員ポジションのコミュニケーションでは、そうした「支援の先回り」と、潜在的なニ

ーズの掘り起こしのバランスが大切になる。対象者の力を信じて、ときには「待つ」という能力も必要だろう。自戒を込めて。

次に「生き物係ポジション」のコミュニケーションについて。これはなにも生き物係に限ったものでなく、保健係とか図書係とか、べつになんでもよいのだが。ようはクラスのみんなで分担して受け持つ、「係」の立場で行われやすいコミュニケーションのことだ。そういえば私の頃にはベルマーク係なんていうのがあった。年がばれそうだ。

この係というやつは、別にリーダーでもなければ先生的な立場でもない。あくまでクラスメイトと対等で、たまたまその役回りをしているだけだ。そのためコミュニケーションは「依頼」や「要望」といった形になる。

「ザリガニを飼うので、エサを集めるのを手伝ってください」

「ベルマークがあったら持って来てください」

普段の友人関係ならタメ口だが、係というオフィシャルな役割を担ってのコミュニケーションになるため、お願い事をするに当たってはワンダウンポジションにもなる。

このやりとりだと反発や抵抗は少ない。対象者の自己決定に委ねられるため、考えることを人任せにもできない。その代り依頼に興味や魅力が無いと、不参加や非協力といったことは当然起こるが。

生き物係ポジションの典型的な職業としては、サービス業などが思い浮かぶ。しかしそれ以上に、この対等なやりとりこそが、すべての役割を担って行われるコミュニケーションの、ベース・基本になるものといえる。

「なぜなら人はみな平等だから・・・」などと言つまらないことは言いたくない。もちろん選挙

権は1人1票だし、1年で1つ歳をとらない人間がないのも事実。ただ、そんな当然のことを語る以前に、先生ポジションや学級委員ポジションというのは、これまでも述べてきたように、ある限定的な場面と立場でのみ有効となる、特別なものということだ。つまり条件付きのコミュニケーション法。それ以外では必然的に、対等なコミュニケーションになるしかない。警察官だって、犯人以外には「捜査にご協力ください」というのではない。

生き物係ポジションのコミュニケーションで目的を達成しようとする、様々な工夫が必要となる。なにせこちらの声かけとしては「お願いします」の域を出ないわけで、やるかやらないかは相手次第。だからいかに対象者をその気にさせられるか。知恵と技術が試される。対人援助職でいえば援助スキルや〇〇アプローチ。サービス業でいえばセールストークやポイントカード？といったところか。

この、工夫の余地があり、その幅がとても広いということこそが、生き物係ポジションの悩みのタネにして、実は最大の武器でもあるのではなからうか。

会社、お役所、対人援助の現場。今日も街中のあらゆるところで、社会的な役割を担ったコミュニケーションが行われている。基本は対等・ワンダウannaな生き物係ポジション。そして時と場合によっては、先生ポジションや学級委員ポジションに変化して。

児童相談所の職員で例えるならば、「お母さんのお力になりたいんです」という生き物係ポジションで子育ての悩みを聞いていくのが基本。ときには学級委員ポジションで、非行問題や養育力の弱い家庭を助言や指導でリードし、適切な方向に導く役割もいるだろう。そして緊急度の高いケースには、子どもの命を守るため、先生ポジションで強い強制力を持って対応しな

ればならないこともある。いつも同じ役割コミュニケーションでいられる、なんてことはないのだ。

自分の今行っているコミュニケーションが、どのポジションでなされるべきものか。自分はどのポジションからそれをしているのか。抵抗が強いのは、より上位のポジションになっているためではないのか。やりとりが上手くいかないのは、ひょっとしてそのポジションが場面にフィットしていないのではないか。問題がこう着したときには、相手が予測するポジションを外すのもひとつかもしれない。

先生・学級委員・生き物係という3つのポジションでコミュニケーションを考えてみると、普段の対応が、ちょっと違った視点から再検討できるかもしれない。

発達検査でわかること②									
新版K式発達検査をめぐって							その6		
							大谷多加志		

今回は連載の初回に取り上げた「発達検査でわかること」を再びテーマにします。

第10号で、友人に“発達検査に関わる仕事をしている”と話したら白衣を着て脳波測定をしていると思われた、というエピソードを書きました。このエピソードはいささか極端でしたが、発達検査がどのようなものなのかということは、検査に関わる人以外にはやはり実感しにくいかもしれません。

先日、福祉領域で働く友人と話す中で、発達検査のことが話題になりました。その友人は発達検査を実施してはならず、知的障害を持つ方の直接的な支援に携わっています。利用者の方が児童相談所などで受けられた発達検査の結果などを資料として目にすることがあり、彼は「支援を考える中で1つの基準としていた」と言います。発達検査の結果と言っても、発達年齢や発達指数など、ごく限られた情報だけだったようですが、それでも利用者の方の発達段階を考慮する一つの軸となり、それによって“ここはもう一歩粘ってやってみよう”とか“環境設定を整えて乗り切ろう”と判断することもあったそうです。その一方で“発達指数ってどのようなものなのか？”“発達検査の有効性や限界って何なのか”という素朴な疑問もあったと言います。この時の会話が、初回のテーマをもう一度取

り上げてみようと思ったきっかけです。

IQって何？

発達検査の結果として求められるものに、発達年齢 (Developmental Age : DA) と発達指数 (Developmental Quotient : DQ) があります。DQ という言葉は聞き馴染みがないかもしれませんが、IQ (Intelligence Quotient) と言われると、今度はピンとくるのではないのでしょうか。知能検査の結果を表す IQ という言葉自体は、一般に広く知られたものだと思います。インターネットで検索すると、色々な人物、キャラクターの IQ に関する記述が発見できます。キャラクターが高度な知能を持っていることを示す指標として用いられており、アニメや漫画では IQ が 200、300 などというキャラクターも登場します。

大学で初めて知能検査について学んだ時、講師の先生から次のように問われました。「IQ200とかIQ300の人が、実際にいると思いますか？」最初は簡単に答えられる気がしましたが、考え始めると思いがけず答えに窮しました。IQの平均が100であるということは知っていましたから、200とか300とかはいささか現実離れた数字のように思えました。しかし、何万人、何十万人に一人とい

う天才なら、そのくらいの数字になってもおかしくないのではという思いも浮かんできました。

答えを先に言うと、「そのような人はまずいない」です。理由は、IQがどのように算出されるか、ということと関係しています。IQは以下の式から求められます。

$$\text{精神年齢} \div \text{実際の年齢} \times 100 = \text{IQ (比IQ)}$$

10歳の子どもが知能検査を受けたとしましょう。知能検査の結果求められた精神年齢(Mental Age)が12歳だった場合は、 $12 \div 10 \times 100$ という計算で、IQ120となるわけです。IQ200とか300という数字を出すためには、実際の年齢が20歳の人だと精神年齢で40歳とか60歳という結果を出す必要があります。しかし、知能検査で算出される精神年齢の上限はそこまで高くありません。検査法上の限界として、そもそもIQ200とか300という数字は出ないということです。もちろん、3歳の子どもの精神年齢が6歳とか9歳であれば計算上あり得るのですが、現実的にはほとんどありえず、例外的と考えてよいでしょう。この方法によって算出されるIQは、比IQと呼ばれます。精神年齢と、実際の年齢の比率を示したものだからです。

IQには先に挙げた比IQとは別の方法で算出されるものがあります。偏差IQと呼ばれるもので、最近の知能検査では偏差IQが主流になってきています。偏差IQは学校の成績表で馴染みのある「偏差値」と同様のものです。比IQとは違い、同一年齢の集団の中でのその人の位置を数値化したものです。偏差IQの考え方を示したものが図1です。

正規分布とは、一言で言えば、平均付近ほ

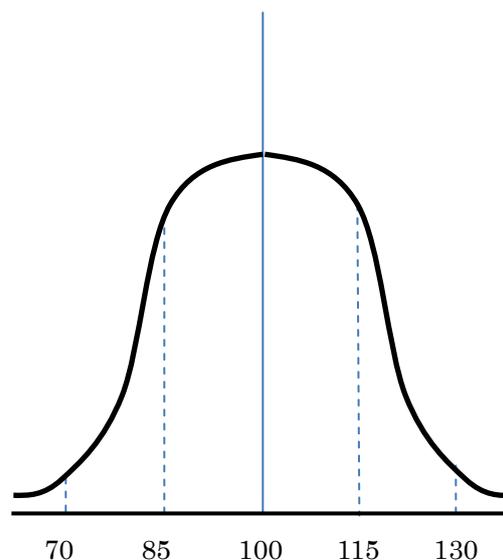


図1. 正規分布と偏差IQ

ど人数が多く平均から離れるほど人数が少なくなっていく分布のことです。偏差IQも平均は100になります。しかし、比IQが精神年齢と実際の年齢の比率を表しているのに対して、偏差IQは同一年齢集団の中での位置を示しています。細かな解説は省きますが、同一年齢の集団の中での上位約2%がIQ130以上に、下位約2%がIQ70以下になっています。

比IQと偏差IQは性質が全く異なります。検査法によって比IQを用いるものと偏差IQを用いるものがありますので、IQの数字を見る時にこの点には注意が必要です。

IQが示すもの

では知能検査の結果として算出されたIQをどのように扱えばよいのでしょうか。検査法によっては、知能指数と知的水準の関係を明示しているものもあります。決められた数字を基準にして知的水準を、平均域、境界域、軽度知的障害というように区分するわけです。

新版K式発達検査は、発達指数と知的水準について検査法上の基準は設けていません。

しかし、療育手帳の判定業務など、障害程度の判断を求められる現場で用いられる場合には、自治体等が設けた基準となる数値のもと、障害程度が判断される場合もあります。

一般に、障害程度の判断においては、知能検査などフォーマルなアセスメントで求められる結果だけでなく、日常生活の能力、行動上の問題の程度も併せて総合的に判断することになっています。しかし、「個々の生活状況を考慮し始めるとキリがなく、基本的には検査の結果を根拠に判断せざるを得ない」という現場の声も聞きます。

数値は絶対か

数値に依る判断にはリスクもあります。特定の数値を基準とした場合、その数値の前後で判断が分かれるわけですが、検査の数値はそこまで精密なものではありません。新版 K 式発達検査の場合、1つの項目の通過・不通過の評価が違えば、指数が 2~3 程度変化する場合があります。第 11 号で述べたように、通過・不通過の判断に迷う反応に出会う場面は決して少なくありません。通過・不通過のいずれと判断するかで例えば障害程度の区分が変わる可能性がある場合、判断はより難しいものになっていきます。

また、測定誤差を考慮した信頼区間を示す知能検査もあります。その人の IQ がどの範囲に収まるかを示したもので、例えば結果として IQ90 と出たとしても信頼区間では 85~98 のようにある程度幅を持って示されます。当然、信頼区間が障害程度を区分する数値をまたぐ形になることもあります。

知能検査にせよ発達検査にせよ、結果として求められた数値は、その人の知能や発達の水準を理解する 1つの目安になります。客観的な指標として一定の信頼を置きつつ、しか

し決して数値だけにとらわれない姿勢が、検査を利用する全ての人に求められると思います。

「発達検査の持つイメージ」

ここまで、主に知能検査・発達検査の数値的な結果に注目してきました。今回この部分に焦点を当てたのは、「数値」や「区分」という検査に関連する要素が、検査のイメージを形成していると感じているからです。

発達検査を用いて仕事をする人たちの悩みの 1つに、発達検査を受けることを勧めたものの保護者にやんわりと拒否されたり、承諾してもらえた場合でも保護者が不安そうな表情をされたりすることが挙げられます。

支援者は「発達検査は子どもを理解し、支援するためのもの」と考えていますので、「どうしたら保護者に安心して受け入れてもらえるか」とよい説明がないかと思案します。しかし、支援者の心情もわかるのですが、「保護者がそう思うのも無理はないこと」という思いがまず先に立ちます。このことは、「数値」と「区分」に代表されるように、発達検査がどのように用いられてきたかということと無関係ではないと思います。

次号はこの点について引き続き考えていきたいと思います。

バックナンバー

- 第 10 号 [発達検査でわかること](#)
- 第 11 号 [通過・不通過](#)
- 第 12 号 [解釈・見立て・所見](#)
- 第 13 号 [検査手続き](#)
- 第 14 号 [導入](#)

10代の母という 生き方 ⑤

大川 聡子

★まえがき

前号（マガジン14号）から若年母親へのインタビューを基に、若年母親が出産を主体的に選択していく過程と、その背景にある社会的特徴について分析しています。対象者の概要、研究の背景につきましては前号をご参照ください。今号では、出産後の母親たちがどのような状況におかれていたかを中心に、若年母親のインタビューを分析していきます。

2. 生きづらさの自覚

(1) 【社会的不利の顕在化】

① 《困難な生活実態》

〈経済的困難〉

出産後、妻は仕事を辞め専業主婦となったため、夫の収入で家計を捻出しています。夫も就労につながる資格を持っていないこともあり、収入は高くはありません。貯金ができないために父親は資格取得ができず、母親は乳幼児を抱えて働くこともできず、貯金ができないという悪循環に陥っています。

Bさんの夫は荷物運搬業に従事していますが、自動車運転免許がないために運転手になれず、収入が少ない状況にありました。運転免許を取得することも金銭的に難しく、生後2ヵ月の子どもを抱え、Bさん自身が働くことも難しい状況にあります。Bさんは必要な支援として、金銭的支援と保育サービスを希望していました。

Bさん (必要な支援は)お金の補助ですかね。主人も車の免許もってないんで、だから収入も11万くらいしか。月11万でやりくりしてるんでね。この子産まれたから、余計にちょっとお金かかるし、ちょっとねえ。まあ児童手当入ってくるんでね、5000(円)は入ってくるんですけど、そんなんしとったら、貯金もできないしね、車の免許も取る、取ろうとしても取れないしね、貯めれないんでね。だから、私も働きたいんですけど、この子まだ早いじゃないですか、保育園とか入れるの。だから、ねえ。お金の補助と、あと(子ども)みてくれるっていうのがねえ、あったらちょっと助かるかなあっていう感じですかね。

〈住環境の不備〉

経済的な問題から、住居面においても4階に住んでいてエレベーターがなかったり、風呂が屋内にないなど、子育てをしていく上では困難な構造の家に住んでいる人もいました。また子どもができたため、これまでの住居から引っ越しをせざるを得なくなった人もいます。

〈選べない仕事〉

夫は、ほとんどが出産後も出産前と同じ仕事をしていました。妻も経済的な理由から仕事をしようとするのですが、乳幼児がいることで、アルバイトさえもままならない状況です。現在仕事をしている人の内訳は、アルコール販売を主とした飲食店の接客業、家業手伝い、保険外交員です。現在は保育所等の空きがないため仕事はできないが、いずれしたいと答えた人も多くいました。

Kさんは、乳幼児を抱える母親は、病気の際の急な欠勤が危惧されるため、アルバイトでも採用されることは少ないと言います。家計に貢献したいと働きたい意欲はあるのに、採用されないことに対して不満を持っていました。

Kさん 子どもがいるおかげでバイトできひんかったりするの、ムカつく。(子どもが)まだちっさいし、とかいって言うて。断られるし(略)。バイトもないよなあ。めっちゃ落ちた、面接。

Hさん 私もめっちゃ落ちた。

妊娠する前に持っていたデザイナーや美容師になりたいなどの夢は、今でもなりたいたいと思っている人もいれば、もう無理だろうと考えている人もいました。仕事については生活を支えるためのものと割り切って考えている人が多かったです。

Eさんは、妊娠前に美容室に勤めていて、スタイリストにあこがれていましたが、美容学校を出ていないため難しいと考えていました。子どもが大きくなってからも、自分の興味の近い仕事というよりは、「パチンコ屋」等、Eさん自身が考える、採用される可能性が高

い仕事に就きたいと考えています。

Eさん 美容学っていうか、スタイリストっていうのには(なりたかった)。美容室1回1年間くらい勤めとって、ヘアメイクさんになりたいと。人のお化粧したり、髪の毛やったりするのはやりたいなっていうのはあった。で、子ども産まれたとき学校も出てないから、今からはちょっと無理かなって思うけど、もし学校出てたら、子ども産んどって子どもがある程度大きくなったら美容師さんやってたかなあと。

筆者 今後、お仕事されるんだったら美容師さんとか、コーディネート系に近い所に行こうかなと思います？

Eさん うーん。この子が大きくなって仕事するとしても、パチンコ屋とか。

(1)【若年母親特有の生きづらさ】

①《後悔》

〈若者らしい生活ができない〉

若くして結婚したゆえに、もう恋愛できなくなってしまった、と残念に思う声も聞かれました。また、他の友人は親に保護され自由にふるまえる年齢であるのに、自分は家族に縛られ、遊べないことを淋しく思う声もありました。それでも遊びたいという気持ちを抑えて、母親たちは日々育児をしています。

Fさん (F)なんかまだ周りに友達おらんけ、あれだと思わんけど、ちょっとなんかやっぱ自由になりたいなっていうのは。(F)はもうダンナとかおるけど、なんかもっと？家庭じゃなくて外で、遊びたかったなとかって思う。

②《子育てへのプレッシャー》

〈子どもとの関わり方がわからない〉

家族から虐待を受けた、または親と十分に関われなかった人は、自分のような思いを子どもにはさせまい、と親とは違った方法で育児を行うよう努力しています。その反面、自分がそのような育児方法で育ち、母親として適切な関わり方が分からないため、自分もいつかそうした思いを子どもにさせるのではないかという危機感も併せ持っていました。

Eさん この子産む時に、正直うちは小さい時にけっこうお母さんに殴られたりとかして育てるから、もしかして自分も殴るんちゃうかなって不安はすごいあったけど、でも、今のところそんなんは、叩いたりとかいっても手とか足とか。もういい加減にしいやって言って、あんまりにも聞かへん時とか、危ないもんさわったりとかした時は叩くけど、それ以外で別に、こんなちっちゃい赤ちゃんに言ったってわからんやろ、みた

いな。

〈世代間連鎖からの離脱〉

若年母親達は、母親として子どもに様々な期待をしており、「いい子に育てて欲しい」、「子どもは早く産ませない」と言い、若年出産の世代間連鎖から離脱させたいと考えている母親が多くみられました。

Eさんは、父母が離婚し父方に引き取られました。その後父親が再婚し、継母と父と生活することとなりますが、継母による身体的虐待を受けます。継母により母子手帳や幼少時の写真も捨てられたことから、自分の子どもにはそのような思いをさせたくない、妊娠中の様子をノートに記録し、その時の思いも詳細に記載しています。その記録を、子どもが妊娠した時に見せてあげたいと語っていました。

Eさん (子ども)が子ども妊娠した時、見せてあげようと思って。うちね、育てのお母さんが産みのお母さんからもらった母子手帳、うちのやつ、破って捨てたんですよ、怒って。だから、うちが妊娠した時、母子手帳自分のやつ見たかったのに、見られへんかったのがすごいイヤやったから、で、うちのちっちゃい時の写真もないんですよ。お母さんと写ってるやつ全部捨てたから。ないから、そんなんがすごいイヤやから。

Gさんは、月々の保育料以上の金額を子ども向け英会話教室に費やしており、3歳の子どもが英語を話す姿を見るのがとても楽しいと言います。Gさんは、Gさんと夫の修学年数が短いことにより、子どもが「やっぱり」頭が悪いと他人から思われる事を恐れ、子どもの教育に大変熱意を持っていました。また、若年出産しても子どもに不自由な生活をさせるために、大学に行かせるまで仕事を続けるという決意も語っていました。

同席者 子どもを、英語とか習わせようとか、そんな思うのはやっぱり、自分のちっちゃい時の経験とかも関係あるか？あんまりそんなの関係ないか？

Gさん あのなあ、あたし高卒出やん、夫、高中退やん、中卒やん。
だからな、その子どもを、もうそういう、頭悪かったりとかしてたら、やっぱりこの子らの子どもやなあって思われるのがイヤやねん。だから、頭良くさせて、しようかなーって。

③ 《周囲との軋轢》

〈若年母親同士の反発〉

若年母親の中でもその背景は様々であり、置かれている環境も違うことから、同世代というのみで誰とでも親しい交流をもつのではなく、自分と違う点を見つけて反発し合うこともあります。

筆者 同じような年の人が集まったらまだ？

Fさん いけるけどー、そういうところ行ってもね、言ったら悪いけんね、なんか、バカそうな子が多いけんね。なんか、けっこう。じゃけ、ちょっとなかなか合う子おらんなんて思ってるね。

また、同世代でも育児を親任せにしている母親に対しては、非難する声が多く聞かれました。さらに、自分自身よりも年下で妊娠した女性に対しては非常に興味を持つのですが、「絶対無理、分かってないなー」、「いかにも遊んでるって感じ」など、否定的な発言も聞かれました。

〈年長の母親集団からの孤立〉

多くの方が述べていたのが、年長の母親集団からの孤立でした。若年母親達は、初めは母親同士の仲間づくりを考え、保健センター等で行われている様々な教室に参加していますが、参加者のほとんどは年上で、他の参加者から話しかけられることはなかったと言います。

Eさん マタニティスクールってあるじゃないですか、産む前の。あれに行ったんですけど、年齢がすごい高いんですよ。市役所とかそういうの。で18ってうちしかおらんくて。周りみんな26とかそんなんばかりやって。仲良くなって言うか、話しかけてもけえへんし、話しかけづらいし、って感じ。

Dさんも、年上の母親達の中で、その輪の中に入っていくことを「気まずい」と感じ、母親学級に行っても、講義を聴くことなく途中退席したことが何度かあったと言います。Dさんは、年上の母親達は若い母親に対して「抵抗」を持っていると感じていました。

Dさん 保健センターでお腹でかい時、母子教室行ったけど、全然仲良くなられへんかって、途中で帰った。気まずいから。

筆者 どんなのですか？

Dさん 料理とか。妊娠中の料理。あん時とか行ったけど、全然私知らん人で、みんな何回か来てはるから、友達で固まって喋ってはってんけど、私だけ気まずかったから、授業も聞かずに「帰ります」って、帰って来たことは何回かあった。

筆者 周り、友達同士で結構固まっちゃって？

Dさん なんかやっぱり、若い…見た感じ若いというのがあって、なんかちょっと抵抗があるみたいで。その人達にとって。

〈10代での出産は早くない〉

Fさんは、自分自身は19歳での出産を「若い」とは思っておらず、19歳で出産するのは「普通」のことであると認識していました。しかし15歳未満は難しいと感じており、自分自身は、夫の年齢が10歳以上離れていて、なおかつ夫がカバーしてくれるから関係が続けることができていると認識していました。

Fさん いや、若いって自分で思わないですもん。19だし。19っていったらけっこう普通でしょ？19っていったらもう普通じゃけん、若いお母さんって自分で思わないですもん。

〈アウトサイダーであるという自己認識〉

若年母親は、マスコミなどに作られた若年母親像に反発しながらも、自分達は他の母親とは違う存在である、という思いを持っているということが言葉の端々から感じられました。他の若年母親の家族構成を聞く時に「片親ですか？」と聞いたり、学校に行かなくなったことを「できちゃった結婚の一番代表的なパターン」と言ったり、「うちらだって、ふつうに育ててる人達だって」と同世代の母親とそれ以外の母親を区別し、自らは「普通の母親」ではないといった自己認識を持っていました。

④ 《問題視される若年母親》

〈児童虐待問題と関連付けられる〉

若年で出産したことに対し、周囲は母親に対して憶測も含めた意見を述べる場合があります。例えば、「子どもが子どもを産んだ」や、子どもが熱を出して仕事を休んだ時に、「これだから若いお母さんはあかんねや」と言われたり、「XXちゃん(本人)にははおもちゃみたいなものやなあ」、「おままごとちやうぞ」、「絶対無理や」等周囲から言われています。こうしたこともあって、若年出産と児童虐待を絡めて自発的に発言するなど、作られた若年母親像に対して、母親達は強く反発しています。

Jさん なんか死なせちゃった？とか言う事件出てきてるけどー、それもたまたま、その人10代だったとか、20代だったって言うだけで、それで結構みんな若い人は、じゃあそういうことするんじゃないかとか思われるから。うちらだって、普通に育ててる人達だって、そんなの見れば、何て言うんだろう、あー、何で殺しちゃったんだろうとか、思うのみんな同じだし、知ってる人だって考え方みんな同じだから、決めつけないで欲しいなっていうの思うし。

〈トラブルが若年母親特有の問題とみなされる〉

Kさんは子どもの急な発熱で欠勤した時に、若い母親だから子どもの管理ができていないと言われたそうです。子どもの急な発熱など、やむを得ない理由で欠勤せざるを得ないことはどの母親にでも起こりうるのですが、若年母親の場合、若い故に「自己管理ができていない」とされ、批判の対象となってしまいます。

Kさん 仕事やったら、子どもが熱出て、急に休みますとか言ったら、なんか、それでもやっぱ、子どもいはらへん人ってわからないじゃないですか、そういうのが、だから、いつもの自己管理ができてへんからって、やっぱりそれで、若いお母さんはそれやし、あかんねやみみたいな言われた時はむかついた。

〈妊娠したから結婚したとみなされる〉

Fさんは、夫は結婚しようと言っていたのですが、本人にもともと結婚する気はなく、出産をきっかけに結婚することになりました。Fさんは、別に結婚しなくても相手と一緒にいればそれで良かった、と述べています。

Fさん できちゃった結婚とかって言われるのやだなー、なんか。そうなんじゃけどー、別に、Fはねー、結婚はせんでいいって思ってて、なんか、そうじゃないですか、結婚って紙でしよただの。でもし、けんかして別れたら、離婚って言うのがつくでしょ、別に結婚せんでも、もう一度結婚したいって、一緒におったらそれで良くないですか？

第3項 行き渡らない支援

(1)【受けられる支援に生じる個人差】

① 《インフォーマルサポートの有無》

〈子どもに関わる父親、関われない父親〉

夫の多くが育児に協力的でした。夫の育児分担は、子どもの入浴、保育園の送迎、休日の育児などです。夫が育児に協力しやすい背景としては、交代勤務、日勤中に休憩がある、休日は出勤する必要がないなど、職場の環境要因も大きいようです。子どもと3人の暮らしには、夫婦2人とは違った楽しみがあると答え、妻以上に出産を喜んでいる父親もいました。母親達は父親であり一家の中心となり支えている夫に対し、感謝の思いを持っていました。

Jさん ダンナはもう、影で頑張ってくださいって感じ。ほんとによくやってくれると思ってから。そんな口に出しては言わないけど。言えないけど恥ずかしくて。でもほんとに頑張ってくれてると思う。ダンナも、よく面倒見てくれるし、不満はない。

原家族において親像を築けず育児を不安に思っていたのは、母親だけでなく父親である夫も同様です。Eさんの夫は、原家族における父親不在から、義家族との関係構築に困難な面がみられました。しかし、育児は積極的に取り組もうと努力している様子がかえりません。

Eさん ダンナさん自身は正直、父親って言うのがね、高校生くらいからおらんかったら、そっからの父親との付き合いが分からんから、うちのお父さんに会った時はすごい戸惑って、なんて接したらいいのか分からへんみたいな。だから、甘え方も分からんって感じや。だから、もっと甘えていいんやでって言ったら、その甘えるの意味が分からんくて、言うたら利用するみたいな感じに考えたりとか。ややこしかった。こんなんで親になれるのかなって、自分自身そういう不安はあったみたい。それが子どもなんか育てられるのかなあみたいな。でもすごい、かわいがってくれてる。

しかし、育児に協力的な夫ばかりではありません。Kさんの夫は、Kさんに対し殴る蹴るの暴力がひどく、夫婦喧嘩で家に穴が多数空いていたと言います。Kさん自身も尾てい骨を骨折し、救急車で病院に運ばれたことがあります。あまりの暴力のひどさに警察に通報し、夫が拘置所に収容されたこともあったそうです。Kさんは夫のこうした暴力を、一緒に生活することで治したいという思いを持っていたのですが、親の強い勧めにより離婚することになりました。Kさんの夫は家にいることはほとんどなく、同居中に子どもをみることはなかったと言います。

Kさん 夫は(子ども)みることもなかった。

筆者 小さい時にお風呂入れてくれたりとか、そんなもない？

Kさん なーい。別れてからのほうが、(子ども)は一とか言ってきたり。

〈家族の誰かが支える育児〉

若年母親の育児には両親の役割も大きいです。出産に賛成していたか反対していたかは関係なく、経済的にも育児の面でも彼女達を援助しています。そのため妻方の実家の近くに住んでいる人が多くみられました。また両親の離婚により母親と離別している場合も、出産時は実の母親が大きく関わっています。

GさんとKさんは実家が近く、保育所の送り迎えや食事の支度などの支援を頻繁に受けています。Gさんはこうした状況を「楽」とであると語っていました。

Gさん お母さんいる時はお母さんみてくれるし、弟がけっこうみてくれて、遊んでくれる

し、で、保育所の、G が送り迎えとか行けへん時で、ダンナも行けへん時は、おばあちゃんとかも行ってくれるし、なんかみんな、みてくれて、楽。ご飯、夜ご飯つくるのめんどかったら、ダンナが子ども連れて、自分の実家行って、ご飯食べに行ってくれるし、私むっちゃ楽。

Eさんは、両親が離婚したため実母と離れて生活していましたが、出産後は、実の親が生活用品や育児用品を買ってくれるなどの支援をしてくれたそうです。

Eさん もう病院代がなくて、その病院代ないからって言うんでお父さんに何回か借りたことはあるけど。それ以外でお父さんにお金もらったりとかは一切なくて、産みのお母さんはたまに会った時に子ども用品、赤ちゃんのほ乳瓶とか。あんなんをいっぱい買ってくれたりとか、家に、引っ越して来た時に何もなかったから、コンロと、布団とーとか、そういうの買ってもらったりとか。すごい助かったみたいな感じで。

また、故郷から遠く離れ、両親とはほとんど連絡を取っていない Fさんは、父方のおばが面倒を見てくれていると言います。他にも、一度故郷に帰った時は兄がベビーカーやベビーベッドをレンタルして用意してくれていたそうです。このように、親と離別していても出産を機会に支援を提供してもらったり、親との関係が希薄な場合、親族や兄弟が支援を提供していることがあります。

〈友人の応援〉

同世代の友人も、若年母親の育児を応援しています。Bさんは既に子どもがいる友人に勇気づけられ、出産を決意しています。それ以外にも、育児の情報交換や、子どもを連れてバーベキューや海に出かけたりなど、友人達と子どもを含めた付き合いをしていました。子どもがいない友人も、彼女達の立場を応援し、妊娠中に本人を励まし、出産時に子どもの洋服などをプレゼントしています。

Dさん 一番仲いい子は、あのその、手術終わって出てきて速攻に、「生まれたでっ」で電話したらすぐ学校飛び出して、定時制の学校さぼって、お見舞いにきてくれて、ほんでベビー服プレゼントしてくれて。で、今度もう一人の友達は、なかなか接触…仲はよかったけど、遊ぶ接触がなかったけど、子ども生まれたって聞いて家に来て、退院してから家に来て、でまあ、よだれかけとベビー服とプレゼントしてくれた。

② 《社会的支援とのつながりと断絶》

〈信頼できる専門職との出会い〉

若年母親の多くは保健所・保健センターで行われる健診等は受診しており、健診時に行

われる指導も、自分の興味がある部分は聞いて守っています。また保育園で入園前の子ども達に園庭を開放し、様々な遊びを母親と一緒に言う園庭開放にも積極的に参加し、その様子で保育園入園を決意する人もいました。

妊娠、出産を通じて専門職との関わりが深い人は、出産後も専門職をとて頼りにしています。妊娠を「誰も喜んでくれなかった」という F さんは、妊娠後期になっても出産できる病院が見つからずに困っていました。そこで母子手帳を取りに行くことを思いつき、保健センターに母子手帳を取りに行きます。その時に出会った Z さんに病院を紹介してもらい、無事出産することができました。Z さんは地域の産科病院についての情報を多く持っており、この病院であれば、妊娠 8 ヶ月まで未受診だった F さんを受け入れてもらえるだろうといった目星をつけて、病院と交渉していました。

筆者 出産の時に一番いろいろやってくれた人って、

F さん (同席者 Z さんを指さす) ほんま。

Z さん 私何にもしてないよ。先生(産婦人科医)のところ連れて行っただけやがな。

F さん ほんま、F 赤ちゃんね、産むとどこも紹介してもらえんってか、断られて。(妊娠)8 ヶ月まで病院行ってなくて。4 ヶ月の時 1 回妊娠してますって行って確認してもらっただけで、あと全然行ってなくて病院。やっぱ親おらんけ、産ませてくれんから、保護者おらんとだめですって言って、その時 Z さんとこ、母子手帳とりあえず取りに行かないといけんと思って、母子手帳取りに行ったら Z さんおって、色々相談して、したら産婦人科教えてくれて、一緒に病院までついてきてくれた。で病院行って、お腹大きかったけ、女の子とかもその日に分かって、でちゃんとしてもらった。

Z さん 先生親切にしてくれたな。

F さん うん。良かった。

〈初対面では心を開けない〉

若年母親は、どんな支援でも積極的に受け入れるというわけではありません。H さんは、病院で体重を測った直後に訪問した保健師に対して訪問を拒否しており、自分にとって必要でないと考えた支援は受け入れていません。また J さんは、子どもが乳幼児健診で発達の経過観察が必要であると判断され、保健師が家庭訪問を行っています。その際に夫の暴力により開いていた壁の穴に対して、保健師は状況のみを聞いて「すぐ帰った」と語っていました。

筆者 産んだ時、保健婦さんが訪問来てくれたりとかありました？

H さん 来た、1 回だけ。私もういらんって言った、病院で(体重)測ってから来はるんやもん、いつも。

J さん 積み木何個積めるかとか、そんなんを。それがいけへんかったんかなあ。私。で、来

はった。

筆者 その時に何か相談に乗ってくれたりとか、ありましたか？

Jさん 相談できる人はいますかーとか、そんなん聞いてはって。んで、家が、家の壁すっごい穴開いてたから、どうしたんですかーとか聞かれて。でもすぐ帰らはった。なんか書いたりして。

〈保育所に預けることへの抵抗〉

8ヵ月の子どもを育てているLさんは、育児を負担に感じ「毎日しんどい」と話していました。同居の祖母が子どもをみてることもあるのですが、ほとんどの育児や家事はLさんが行っています。家計のやりくりが難しいことから、子どもを保育所に入れて働きたいと思ったこともありますが、保育所の空きがないと言います。Lさん自身も、6ヵ月の乳児を保育所に預けて働くことには抵抗を持っています。

Lさん ああー。家で子育てしてる方が大変。仕事に行きたい(笑)。

筆者 仕事してる方が楽だった？

Lさん 男の人は家にいてるだけでぼけーとしてるだけでいいねえって思うかもしれへんけど、そんな甘いものじゃない。子育てはそんなしんどいもんかと思わへんかったしねえ。もっと楽できるかと思ったけどもう、全然。自分の時間がないし、もう全部子ども中心になるし。もうグロッキー。もうしんどい。毎日毎日。

〈職場の理解〉

Gさんは出産後パン屋でバイトを始めたのですが、子どもが病気の際の欠勤が重なり、1ヵ月で解雇されました。その後保育所の母親3人と同時期に保険外交員を始めます。保険のノルマを達成するのは大変で、仕事を初めて1年4ヵ月で、同時期に始めた母親2人は辞めてしまいました。一方Gさんは、自由な時間が作れ子どもの病気のための欠勤があっても周囲の人が協力してくれるために、仕事を続けることができていると語っていました。

Gさん (前職の)パン屋辞めたんが、なんか(子どもが)4回くらい入院して、ちっちゃい時に。いっぱい休まなあかんくなって、辞めさせられて、で、保険の外交は、こんな(自由な)時間作れるから、(仕事)してからも2回くらい入院したんやけど、営業やから、辞めささらへん、ちゃんと。周りの人も、ちっちゃい子おるの知ってはって、Gを誘わはったから、協力してくれはる。だからそういう時は、仕事いいからついといてあげ、とかそういうのがあったから、続けられて。

*プライバシー保護のため、データを一部改変しています

電腦援助

浅田 英輔

Ver. 5

今回の電腦援助はSNSについて。

子どもの問題、特に中高生に関わっている方は悩んでいらっしゃると思います。統計によると、10代の7割がなんらかのSNSを利用しているとのこと。また、半数以上が複数のSNSを利用しているようです。そもそも、それってなに？何が問題なの？ってところを考えます。

SNSってなんなの？

Social Networking Serviceの略。日本語にすると、「社会的網状サービス」？？ カタカナ語が一般的に使われているので、日本語にすると余計わからなくなりますね。

☆広義には、「ネット上でやりとりできる仕組み」全体を指します。コメントできるホームページ、ブログ、掲示板なども含みます。コメント欄がないブログなどは当てはまらないです。

☆狭義には、「なんらかの個人情報を登録して、(実名でなくとも)ユーザーが特定されるネット上のサービス」といえ、やりとりすることが主な目的のものをSNSと呼ぶ事が多いですね。TwitterやFacebook、Mixi、LINEなどが有名ですが、本当にたくさんの種類があります。匿名掲示板は、誰が書いているのかわからないのでこの場合は定義から外れます。ブログへのコメントも、投稿者名が変更できるのでこの場合からは外れます。

あれ？そもそも、インターネットってなんだ？

大雑把にいうと、相互接続によるコンピュータ間ネットワーク。世界中のコンピュータがつながっている状態、ということ。インターネットとは、「これがそれです」というみえるものはないのです。でも、現代においては、すでに重要インフラのひとつになっていますね。

インフラの代表的なものは、水道、電気。これらは「作っているところ」「出発点」がありますね。浄水場、発電所なんかです。そこから「網目状」の通り道を通って利用者「到着点」のところまで届きますね。作る人と使う人がいる、ということもわかりやすいです。

これに対して、インターネットは「作っているところ」がないです。作る人と使う人の区別がかなり曖昧なのです。いちユーザーが出発点であり、到着点なのです。出発した情報はどこまで届くかわからず、アクセスした人すべてがそれを見ることができ。しかもその通り道は有線のみならず無線電波も当たり前で、ますます見えないものになっているといえます。

出発点がはっきりしないので、災害のときなどもつながっていられるのかもしれないね。

つまり、インターネットは網目上にコンピューターがつながっていることを指し、SNSはその中でやりとりをしやすくする仕組みということになります。「SNSは悪くない！悪いのはインターネットだ！」ということになります。

なぜ文通はよくてSNSはだめなのか

実は私は文通経験あります。中学校のときです。いま思うといいもんですね。

文通とSNSは、やっている中身は大した違いはありません。ただ、文通は「みえる」のが大きいでしょう。また、昔は好きな子と電話するのも、家族の目が気になりましたね。書いていることや話していることは見えませんが、行為がみえることが大きいかもしれません。携帯電話では話している様子が見えず、PCやスマートフォンではなおさら何をしているのかわからないですね。一昔前の非行児童の親御さんは「電話代が何万円にもなる」とか「ケータイ代がひどい」といった悩みがありました。今はそれはほとんどありません。通信し放題のプランがあるので、一定の料金以上はかからないのです。

インターネットの世界でやりとりするものは、文章だろうが画像だろうが基本的にデータであり、発することも受け取ることも非常に簡単。「情報を発信した」「情報を受信した」実感にも乏しいです。手紙などは物理的にみえるし、書いたり読んだり話したりしていることがみえるのも大きいでしょう。

加えて、自分で保存する文章も、インターネット上に公開する文章も、扱いは同じ。「自分のパソコンに保存する」と、「自分のホームページにアップする」という作業は大して違いがないのです。相手に送るのに、封筒を選んだり、ペンを選んだり、速達にしたりといったことは必要なく、「送信」ボタンを1回押すだけでいいのです。「この文書を破棄する」のも「保存する」のも、左のボタンか右のボタンかをクリックするだけの違いでしかありません。

スマートフォンの登場で、さらにそれは簡単に。パソコンの前に座る必要さえなくなりました。1行日記を書くことと、ネット上にTweetすることの差が非常に小さいのです。「バイト先で店長いないときにアイス食っちゃった！」と友だちに自慢気に言うのと、Twitterに「店長不在、やりたい放題」と冷蔵庫に入った写真をアップする、というのとは実は行為の差はほとんどないのです。むしろ、友達がそこになくても話せる分、後者のほうが即時的で手軽かと思います。どの事件か忘れましたが、「かんけーねーやつが勝手にリツイートしてんじゃねえよ」と当事者が怒っていたという話がありました。Twitterでの「リツイート」は、いい意味でも悪い意味でも「言いふらすこと」「みんなに教えること」になりますが、これは誰でもできるのです。勝手にやっていい仕様なのです。この人も、ネットって、Twitterって、どういうものかわかっていなかったのだらうと思います。本人にしたら、「ちょっとした悪ふざけを友だちに話した」という意識なのかと思います。

物事をすすめる手続きは簡単なほうがいいし、手間がかからないほうが助かります。でも、手間がかからないことはいいことばかりではないみたいです。

というようなことを考えた上で、インターネットやSNSと付き合っていく必要があります。自分自身が使わなくとも、相談にくる人は大人でも子どもでもこれらを使っているのです。完全に理解していなくとも、「そういう特性をもつメディアだ」という部分はわかっていることが大事だと思います。「いんたーねつとにそんな写真を流すなんて信じられない！」「現実と空想の区別がついていないのではないか！」と書いていても話は進まないのです。もうネットの世界は「現実」の一部です。そういうことを言う人こそ「現実がみえていない」のではないかと思います。

そこで、いくつかのSNSがどんなものなのか簡単にご紹介いたします。

Facebook

大雑把にいうと、公開日記帳。「今日こんなことがありました！」ということを書き込んでおく人も、今朝は寒いね」と一行書く人も、出来事に関係なく、思ったことを書いておく人も、毎日書く人、一日に何回も書く人、月一回書く人、自分は書かないで他の人のものを見ている人など様々。公開の範囲(自分が書いたものを誰がみることができるか)の設定ができるので、「友だちのみ」などに設定できます。

友人知人のネットワークを作るときにぴったり。「友だち」を増やしてネットワークを作る。「友だち申請」をして、OKの場合はつながる。つまり、相互に認め合ったネットワークなのです。「友だちの友だちにどんな人がいるか」を見ることが出来るので、友だちの友だちと友だちになる、なんてのが簡単です。(もちろん、相手の承諾が必要です)



Facebookを開くとこんなかんじ。私のFacebookトップページです。

真ん中の大きな枠のところはスクロールでき、時系列で「友だち」の書き込みをみることができます。おもしろいなとおもったら「いいね！」ボタンを押すし、何か言いたかったら「コメント」すればいいのです。自分の記事にコメントがつくとお知らせメールがきたりするので、すぐ気づくわけです。

オンラインになっている友だちとは、1対1の「メッセージ」のやりとりもできます。

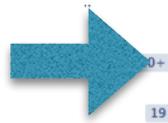
パソコンからでもスマートフォンからでもみることができます。スマートフォンの場合、外出先で写真をとって、「こんなのがあったよ！」などをすぐに投稿できるわけです。



私のお友達の一人です。
 この方はニュース記事を投稿しています。ニュースについてあれこれいいあったりすることもあります。
 あとでじっくり読みたい記事などをクリップしておくという役目も。



こちらは別のお友達です。
 豪華なデザートを投稿しています。「おいしそう!」とか「ふとる!」とかコメントするのです。
 その地に行ったら食べてみるのもいいかもしれません。
 この方はいつもおいしそうなものを食べています。



研修会で会って仲良くなった方など、今後もお付き合いしたいのだが結局はフェードアウトしてしまう、というパターンが普通かもしれません。そこでFacebookでつながっておくのです。
 「フェードアウトするならそれで仕方ないじゃないか」という考えもあるかもしれませんが、実際その後も会うという可能性は高くないのですが、各方面で活躍してらっしゃる方の近況を目にするのは意外と刺激になるものです。



こちらは「ホームページ」みたいに使っている方々ですね上の人はWebのツールの記事、下の方はゲームの紹介をしています。「ブログ」として使うこともできる例です。

また、有名な方々は「友人申請」に寛容な場合があります、申請を承諾してくれたりします。直接知らない方と実名のやりとりをするのも楽しいです。実名ということもあり、恥ずかしくないようにTwitterよりも「考えて書き込み」している気がします。

これが爆発的に広がったのは、大人も「つながり」を求めている、つながりを楽しんでいるからなのではないかなーと思います。

Twitter

大雑把にいうと匿名一言日記。もちろん実名の人もありますが、匿名の人が多いですね。140文字までなので、短文のやりとりになります。基本的に誰からもみられます。一日に何十回も書く人もいれば、自分ではほとんど書かないで、他の人の投稿を眺めて楽しむ人もいます。

Facebookと違い、相手を「フォロー」するのは基本的に自由で、相手の了解はいりません。フォローすると、相手の発言がみえるようになります(フォローしていなくてもみることはできる)。だから、知らない人にも自分の発言がみられるのが「当たり前」のものです。

ということで、これは「いろいろな人の1行日記が次々と表示されるもの」ということになります。自分が選択した「フォローしている人」の一言が次々と時間で流れてくる(これを「自分のタイムライン」という)のです。面白い一言もあれば、どうでもいい一言も多い。「他人の日記の垂れ流し」といえます。

ほとんど隠れていてなんだかわかりませんが、これが私のTwitter画面です。



見えている範囲で6つのツイートがあるのがわかります。

右側の四角で囲んだところが「タイムライン」です。右端に「1分」と書いてあるのがみえますが、「1分前に投稿されました」という意味です。一番上に赤字で表示されていますが、写真をとっているうちにもう「3件の新しいツイート」がされたようです。このように、どんどんこ更新されていきます。

Twitterの面白さは、「フォローする人を増やしていくと、自分の好みのタイムラインになる」ということでしょう。私も様々な人をフォローしていますが、やはり「心理系」の人が多いです。パソコンやiPhone関連の人も多いですね。上の画面をみると、私は累計7,887回ツイートしていますね。私がフォローしている人は431人いて、私をフォローしている人は425人いることになります。必ず「相互フォロー」しているわけではないので、これは必ずしも一致しません。

そういうフォロー相手を増やしたり減らしたりして「自分好みのタイムライン」になっていくのが楽しいのかもしれませんが、Facebookは「知人」とつながっているものなので、「フレンドリスト」はそのまま友だちリストになります。Twitterは「自分好みのタイムライン」になっているので、「フォローリスト」は自分好みリストということになるので、こちらをみられるほうがちょっとはずかしいです。

私はTwitterは匿名でやっていますが、「正体」を知っている人も多いのでそうそうバカなことはつぶやけません。

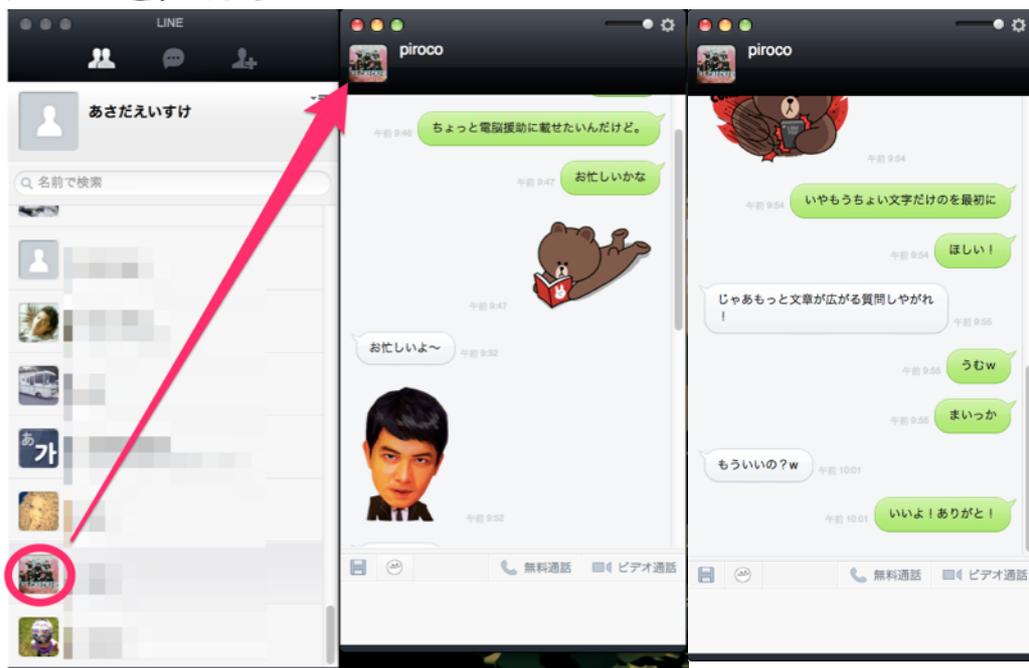
LINE

大雑把にいうと、高機能即時メールソフト。携帯電話の番号さえあれば、誰でも無料で登録できます。携帯番号が必要なので、完全に匿名というよりは、「匿名でもできるけど、ユニーク特定が可能なもの」といえますね。Twitterは無料メールを使えばいくらでもアカウントを作れますが、LINEは基本的に一つの電話番号に一つのアカウント。(工夫すれば複数アカウントも可能と思われる。)

そのため、知っている人同士のつながりがメインです。ただ、知人の知人とつながるのも簡単だし、「知人と思われる人」にコンタクトを取ることも簡単です。

中高生の間でLINEが問題のひとつになっていますが、これは「LINEが悪い」のではないです。中高生にも使いやすい、楽しいソフトがたまたまLINEただただですね。LINEがなくなると、別のソフトが使われるようになるだけでしょう。

インターフェイスもわかりやすいし、かわいいスタンプがすぐ使える素晴らしいコミュニケーションツールといえます。



左側が「友だちリスト」です。一人選んでチャットのようにメールのやりとりができます。真ん中と右側がやりとりです。右側の緑色のほうが私の発言で、左側の白いところが[piroco]さんの発言です。メールと同じようなものですが、かなり気軽さが高いですね。しかも、複数でグループチャットもできます。

画面の下の方に薄い字で「無料通話」「ビデオ通話」とあります。インターネット回線さえあれば、電話もテレビ電話も無料でできてしまうのです。

これも、パソコン、スマートフォンどれでも無料で利用できます。(上記はパソコン画面です)

ブログ

Weblogの略語。WeblogとはWeb(インターネット上の)-log(ログ、記録、日誌)という意味。日記的に使われ始めたようですが、様々な自分の考えを述べたりする人もいるので、コメントする機能が充実している場合が多いです。

皆さんがみている「ホームページ」はブログサービスのものかもしれませんが。ブログは特別なものではなく、かなり一般的にあるものです。Facebookもブログの一種ともいえます。

知らない人のもも見ることもできるし、コメントすることもできます。「炎上」(書いた意見に対し、反対意見や誹謗中傷などが数多く書かれて收拾つかなくなる状態)すると大変です。

アメーバというサービスの中のブログサービスが「アメブロ」、ライブドアブログ、はてなダイアリー、Yahoo!ブログ、So-netブログ、挙げてもきりが無いほど、ブログを簡単に作る環境は無料でたくさんあります。

ブログを書く人を「ブロガー」と呼んだりしますが、人気のあるブロガーのサイトは毎日数千から数万の人が見に来たりしているようです。そうなると広告媒体としての価値もあがり、「アフィリエイト」と呼ばれる広告プログラムで収入を得られたりもします。ブログがもとで仕事の依頼があったり、講演会に呼ばれたりといったことも起きているようです。

TwitterやFacebook、ブログを組み合わせることで、「自分のやっていることを世間一般に知ってもらおう」「その内容についてのフィードバックをもらう」ということが非常にやりやすくなっているのです。

上手に使えばいい

形は様々ですが、「ネット上に何か書いて、それに対するコメントのやりとりをする」ものがSNSと言って良いと思います。今回紹介した4つだけでなく、非常に多種多様なサービスがあります。また、それらは若者だけの世界ではありあません。実名で政治論争をしている場所もあれば、無名のイラストレーターの絵が気に入れば絵の依頼をすることができるし、「臨床心理士国家資格化の是非」なんかネット上のほうが活発なのではないか、と思うくらいです。

私も、知らない人とのつながりができたり(上で紹介したFacebookの「友だち」はまだお会いしたことがない方たちです)、意外な情報を得たりと、楽しく使えています。LINEも無料のコミュニケーションツールとして活用していて、携帯電話の通話料金はほとんどかかっていない

状態です。ただ、どれもこれも、周囲に使っている人が全くいない、という状態であれば最初は楽しく感じられないかもしれませんね。

もちろん、中高生の親や先生が心配する、「いじめの原因になるのではないか」「他校とのつながりができて不良交友になるのではないか」「犯罪被害者になる原因となるのではないか」といった問題は、実際に起きているだろうし、これからも増えると思います。

だからといって、「全面禁止」でいいのでしょうか。「SNS禁止の中学校」というのは、本気でそれらをすべて排除できているのでしょうか。「禁止というけれど、上手にやっているヤツは黙認」なののでしょうか。そもそも、どうやって使用者の発見をするのでしょうか。使い方は問題ないけど校則違反だから、という生徒を探すことにどれだけの労力をかけるのでしょうか。これまでと同様に「守る人のいないどうでもいい校則」を作り続けるのでしょうか。

私は、問題のもととなっているツールを禁止するのはどうも納得出来ません。しかも、それは大人になると上手に使いこなさなければならなくなるのです。今の高校生はLINEで連絡を取り合うのが当たり前であるようです。別に、「周りができることは必ずやらなければならない」とは思いません。「高校生は全員スマホに長けていなければならない」と言っているわけでもありません。「中学生までは全面的に禁止」「でも高校生になった途端に上手に使い」という姿勢が気に食わないのです。「問題が起きそうなものを排除する」のもどうかと思います。だったら、誰も車に乗らなければいいし、家にこもっているのが一番安全です(別の問題はおきますが)。「昔はインターネットなんかなかったし、それでなにも困らなかった」なんていうのも、意味のある意見とは思えません。

最初から全面禁止するのではなく、使ってみて、少し理解して、使い方を教える、生活に支障がでる場合には禁止する、といった段階が必要なのではないのでしょうか。多少、失敗はするかもしれませんが。間違っただけでもするかもしれません。大きな失敗をする前に、小さな失敗を重ねてうまく使えるようになるほうが、リアリティがあるのではないのでしょうか。

どちらにしても、先に自分が、大人が使ってみるのが理解の近道かと思います。今回紹介したものは、すべて無料で始めることができます。まずはやってみましょう。

たまには失敗するかも！レッツトライ！



疑問・感想は dennouenzyo@gmail.com まで!

日曜寺子屋家族塾 の取り組み 4

古川 秀明

仲間が集まる・・・中井哲郎

親と子が一緒に勉強する意味を学び、親子で勉強の意味を考えられる場を私が提供したら何か良い変化が起こるかもしれない。

この仮説を形にするにはどうしたら良いのだろう。

私ひとりの力で学校のような大きな施設を作るのは無理。

この時に私の頭の中に「塾」という形が浮かび上がった。

勉強を教える前に「なぜ勉強をするのか」を教える塾。

いや、なぜ勉強するのかを学びながら教科学習を平行して行う塾のほうが良いのではないだろうか・・・。

あれやこれやと考え調べていると、「寺子屋」という日本の中世から明治にかけて広く庶民に浸透し、識字や算術などのレベルを世界トップレベルにまで引き上げていた教育システムにたどり着いた。

それから私は勉強に関する持論や寺子屋を応用した「私塾」という形の教育システムについて、ことあるごとにいろんな人に語った。

私の話を聞いた人の反応は様々だったが、中井哲郎という現役の中学教師（理科担当）の反応は他の人とは違っていた。

中井は私と同じことをずっと考えていたという。

中井も寺子屋という教育システムに強い関心を持っていた。

意気投合した私と中井は時間も忘れ、寺子屋の構想について話し続けた。

中井は勉強の意味や意欲の重要性について、以下のような論文をまとめている。

◆ 今の学校教育のイメージは「暗い」？「明るい」？

今の学校教育のあなたのイメージは、「暗い」ですか？「明るい」ですか？

仮説実験授業を提唱された板倉聖宣さんは「教育の未来は明るい」と断言されています。

板倉聖宣さんは、「**教育が生まれ変わるために**」という本の〈はしがき〉に〈教育の内容と方法を全面的に改革すれば、「子供たちは素晴らしく意欲的に勉強するし、人間的なあたたかさを示しもする」ということを見てきています〉と書いておられます。

仮説実験授業は提唱されてから、今年で50年が経ちました。でも、50年たってもなかなか仮説実験授業は広まりません。それは、教育を全面的に改革しようとしているからなのです。

「第一部 教育の現状」には「自分の判断で行動する人の時代」

— 登校拒否児の増加は明るい社会の前ぶれ

という論文が載っています。

「不登校になることは悪いことなのでしょうか？」

このことについて、板倉聖宣さんは教育の歴史の視点から、今の教育の現状を紐解いておられます。

◆ 教育の未来を語る

1872年＝明治5年以来、近代学校制度が始まって、就学率はどんどん上がっていきました。明治維新以降、日本は近代国家を目指すために、「欧米の文化を全面的に模倣吸収しよう」と高い学歴を得た人材の育成に力を注いできました。その学歴主義によって日本は支えられてきました。そして、子供たちの学習意欲も高められてきたというわけです。その甲斐があって、日本は高度成長を経て、先進国の仲間入りを果たしました。その背景には、学歴社会の構造がありました。（いい高校に入って、いい大学に行って、いい会社に就職して、高い給料をもらう—エリート意識）

ところが、進学率は100%にはなりません。高校進学率は94%くらいで止まり、中退者も増えてきました。高校卒業率は88%、大学進学率は35%くらいで止まっています。（大学の進学率は1976年の40.9%がピークでした。この年はちょうど私（中井）が大学に入学した年です。）

そして、高度成長は1975年でストップしました。高度成長がストップしたのと期を一にして進学率もストップしたのです。

では、どうして進学率がストップしたのでしょうか。それは、高度成長を果たした日本には、もう外国から模倣する知識が必要なくなったからです。高学歴の人材がそれほど必要なくなったのです。高い学歴さえあれば、いい会社に入れて、高い給料がもらえるということは、もはや幻想になってしまいました。いい会社どころか、就職することもとても難しい時代になってきているのです。

そして、逆に増えてきたのが登校拒否＝不登校です。また、社会問題ともなっているニートと言われる若者も増えてきています。

◆ 明るい話〈不登校〉

では、1975年で高校、大学の進学率が止まったのは悪いことなのでしょうか？

高校には行った方がいいのでしょうか？大学には行った方がいいのでしょうか？

進学率が止まったのは、「行かなくてもいい」と思ったり、たとえ行っても退学してしまう若者が増えたからです。そして、学校に行かない不登校の子供たちが増えているのです。

みなさんは、勉強が役に立ったという知識はどれくらいありますか？

不登校の子供たちは無言で〈何とか教育のやり方を転換してほしい〉と要求しているのです。そして、今の子供たちは昔の子供たちと違って、嫌いなものは〈嫌いだ〉という能力が出てきたのだとも考えられます。

子どもの要求にあう勉強とは何なのか。それは子供たちが「たのしい」と感じる〈たのしい授業〉なのです。

そして、自分で判断して、自分自身の興味、自分自身の考えで行動する人間を作っていくことが大切なのではないのでしょうか？

「教育が生まれ変わるために」 板倉聖宣（1999） P14~27 より

（補足・加筆 中井）

◆ 「学力低下」が叫ばれています

そもそも〈学力〉とは何でしょうか？

「子どもの学力、教師の学力」という本の

「子どもにとって学力とは」〈学力と意欲の関係について—学力か意欲か〉の中で、板倉聖宣さんは次のように書いています。

$$(1) \quad \langle \text{学校教育の成果} \rangle = \langle \text{学力} \rangle + \langle \text{意欲} \rangle$$

$$(2) \quad \langle \text{学校教育の成果} \rangle = \langle \text{学力} \rangle \times \langle \text{意欲} \rangle$$

〈学力〉と〈意欲〉の関係については、(1)と(2)の関係が考えられますが、あなたはどちらが正しいと思われますか？

(1) は意欲が0でも学力があれば、成果が上がったことにはなりますが、(2) なら意欲が0なら成果も0です。板倉聖宣さんは、(2) が正しいと言われています。「いかに〈学力〉があっても、その〈学力〉を活かそうとする〈意欲〉がないことには、その学力は無用の長物となると思うからです。」と言われています。

今の学校教育は、「学力よりも意欲が大切だ」と〈ゆとり教育〉が導入されたかと思えば、数年後には、その反動で「学力低下は危機的状況である」と〈ゆとり教育〉から一転して、授業時間数の確保に躍起になっています。明治以降の日本の教育の歴史をみれば、昔から〈意欲重視の時代〉と〈学力重視の時代〉が交互にやっています。

でも、その繰り返しばかりでは教育の発展は全く望めません。

◆ 子どもにとって学力とは

もともと、教育というものは「学習の条件が厳しい時ほど〈先駆者効果〉が期待できる」という傾向があります。「そのことを学んでいる人が少なければ少ないほど、希少価値が生じて、先駆者になりうる」のです。明治時代の大学生は、「日本を背負って学ぶ」という側面がありました。しかし、今はそういう〈先駆者効果、エリート効果〉は期待できません。「自分が勉強しなくても、他のたくさんの人が勉強している」ということになったら、学習意欲が低下しても当然ではありませんか。しかし、「学問や芸術そのものの素晴らしさに引き込まれる」ということなら、他人との関係はほとんど問題になりません。〈たのしい授業〉というのは、そういう一人ひとりの内面的な好奇心、興味に訴える授業として成立するのです。

「学力というものは、私たちにとって、子供たちにとってどのようなものが必要かを考え直さなければなりません。」そのことを考え直す時に、どこから考え直せばいいのでしょうか。

私は「明治以前に戻れ」と言いたい。

たとえば、みなさんが江戸時代の寺子屋の教師になったとします。そのときに、何をほんとうに情熱をもって教えることができるだろうか」と考える必要があると思います。

「子どもの学力、教師の学力」板倉聖宣（2007） P11、P108 より

◆ 「大人の学び」について

日本では、「学ぶ」というと子供がするものと決まっているようでした。しかし、学ぶという行為は子供だけのものではない。明治以降の日本では、「学ぶということは大人になるための苦しみごと」というイメージが定着してしまったが、お稽古ごとは「たのしみごと」としてやるものだから、大人になっても続くのである。日本でも江戸時代には「学問」はお稽古ことのひとつであった。何かのためでなく、純粋な「たのしみごと」として大人も学び、本当の学ぶ楽しさを教えるものであって欲しいと思う。科学・芸術を学ぶと世界や人生が見えてくる。今、時代が変わりつつある。大人たちこそ「たのしみごと」としての学びの豊かさを若者に示してやれないものでしょうか。

「子どもの学力、教師の学力」 板倉聖宣（2007） P112 より

◆ いまなぜ〈たのしい授業〉か

「たのしい授業」という雑誌が1983年に増刊されて、今年で30年になります。それまでは、〈たのしい授業〉より〈わかる授業〉と言われることが一般的でした。

「たのしい授業の思想」という本は、「たのしい授業」という雑誌の考え方をまとめた本ですが、その中の〈いまなぜ「たのしい授業」か〉と〈「たのしい授業」の思想—〈わかる授業〉と〈たのしい授業〉〉という論文は、「たのしい授業」0号に載っています。

◆ いまなぜ〈たのしい授業〉か

人類が長い年月の間に築き上げてきた文化、それは人類が大きな感動をもって自分たちのものとしてきたものばかりです。そういう文化を子どもたちに伝えようという授業、そ

それは本来たのしいものになるはずですが。その授業が楽しいものになりえないとしたら、そのような授業はどこか間違っているのです。子供たちが自らの手で新しい社会と自然をつくっていく、そういう創造の力を育てようというのなら、なおさら、その授業はたのしいものでなければならないはずですが。だから、私たちは、「今なによりも大切なのは、〈たのしい授業〉を実現するよう、あらゆる知恵と経験と力を寄せ集めることだ」と考えるのです。

◆ 自ら新しい未来を切り開く喜びを

明治以後の日本の学校教育は、〈後進国型〉だったので、国をあげて外国を見習うことに情熱を注いできたのが、今ではいつの間にか多くの面で世界の先進国並みになったので、その目標を失うことになった、といってもいいのです。

〈外国に追いつく教育〉は、決められた一本道をつっぱしる教育でいいのですが、その時には、〈わかる授業〉だけでもすみます。しかし、〈外国を追いこしてしまった後の教育〉は自ら道を切り開くための教育なので、道を開く楽しみを教える〈たのしい授業〉以外にはありえないのです。

「たのしい授業の思想」板倉聖宣（1988）P10~23

以上中井哲郎の論文（2013年8月）

このように、私は学ぶ意味を、中井は学ぶ楽しさを語り合った。

私と中井が出した結論は、勉強する意味と楽しさを家族と一緒に学べる私塾を作ろう、そしてその形態は「寺子屋」という日本の伝統ある教育形式を踏襲しようということになった。

塾の名前は「日曜寺子屋家族塾」に決定。

私が勉強する意味を教える「道徳」を担当し、中井が「科学」を担当することになった。

その時中井の作った案内文が以下である。

◆ 日曜寺子屋家族塾に参加しませんか？

日曜寺子屋家族塾は、今までの塾の概念とは全く違います。今までの塾は、進学するため、または、学校教育の補習をするための塾でした。

そうではなくて、明治以前の江戸時代の寺子屋のように、「学問」をお稽古ごとのように純粹に「たのしみごと」として体験してほしいのです。しかも、子供も大人も含めた家族一緒にです。そして、科学・芸術を学ぶことで、新しい世界や人生が見えてくるようになれば、人生をより豊かに過ごすことができないだろうかと考えているのです。また、それにより家族の変化もみられるのではないかと仮説を立て、検証しようとしています。

このようにして、私の考えに賛同してくれる仲間がまずひとりできた。

Journey to my PhD@York in イギリス Vol. 3

浅野 貴博

University of York

Social Policy and Social Work

はじめに

私は2011年からヨーク大学 (University of York) のSocial Policy and Social Work学部の博士課程 (PhD: Doctor of Philosophyの略) に在籍しており、この10月から3年目に入りました。海外の大学の博士課程がどのようなものであるか、なかなか分からない部分も多いかと思しますので、今号では、ヨーク大学のPhDプログラムについて説明したいと思います。

なお、ヨーク大学と表記すると、カナダのトロントにあるヨーク大学 (York University) と混同されることがありますが、両者には何の関係もありません。

イギリスのPhDプログラム

最初にお断りしておきますが、これから説明することは各大学によってそのシステムも異なるため、大学間で共通している部分もあれば、ヨーク大学独自のプログラムもあります。また、用語に関して、英語表記の方が適当であると判断したものについては、無理にカタカナ表記をしたり、日本語に訳さずにそのままの表記にします。

イギリスの大学のPhDプログラムは、基本的にFull-timeの学生で3年、Part-timeで6年が修業年限で、それに加えてFull-timeの場合は1年、Part-timeの場合は2年の猶予期間が与えられ、その期間内に

博士論文 (Thesis) を提出することが求められます。以前は、留学生でもPart-timeの学生として登録することが可能だったのですが、イギリスの学生ビザである'Tier 4'の規則が厳しくなり、現在ではEU圏以外の留学生は、Full-timeでしか登録ができないシステムになりました。つまり、EU圏以外の留学生は4年以内に博士論文を提出する必要があります。ただし、様々な事情により4年以内に提出できない場合でも、学生ビザの延長 (※半年~1年という短期間のケースが多い) が認定されれば、引き続き研究を続けることも可能です。



ヨーク大学のメインキャンパスの中心部に位置する池。付近にはカモをはじめ、様々な水鳥が生息している。

イギリスとアメリカの違い

イギリスの大学と、アメリカやカナダの大学のPhDプログラムの大きな違いとして挙げられるのは、Coursework（授業）の有無です。アメリカの大学では、通常2～3年のCourseworkがあり、所定の単位 (Credit)を取得する必要があります。例えば、私がMSW (Master of Social Work)を取得したワシントン大学 (Washington University in St. Louis)のソーシャルワークのPhDプログラムでは、以下のようなCourseworkが組みられています（※一部です）。

- Introduction to Advanced Research
- Introduction to Social Measurement
- The Role and Use of Theory in Applied Social Research
- Foundations of Data Analysis
- Computer Applications for Data Analysis
- Multivariate Statistics

これらの授業を終えると、大学によってその呼び方は異なりますが、Qualifying examinationやComprehension examinationなどと呼ばれる試験を受け、博士論文を執筆するにあたり当該分野に関する十分な知識があることが認められれば、Doctoral Candidateとして博士論文に取り組むことができるというのが大まかな流れです。

一方、イギリスの大学のPhDプログラムでは、Courseworkを取る必要がありません。ヨーク大学では、Courseworkの代わりに全学部のPhDの学生を対象に様々なプログラムを提供しています。これらのプログラムは、PhDの学生や研究者の支援をする全国規模の組織である、'Vitae' (<http://www.vitae.ac.uk/researchers>)が作成した、'Research Development Framework (RDF)'という枠組みをベースにして提供されています。RDFは、以下の4つの領域 (domain)から構成され、各領域ごとに様々なプログラムが組み合わさっていて、その中から各自受講したいものを選択するというシステムになっています。

a) Knowledge and intellectual abilities

文献研究の方法、'Word'や'Access'、その他、文献管理ソフトの'EndNote'等の使い方など、研究を進める上での基本的な知識や技術を学ぶためのコースがあります。

b) Personal effectiveness

PhD取得後の就職に向けて、履歴書 (CV)の書き方や面接の受け方、研究者としてのキャリアの構築方法などについて学べます。

c) Research governance and organisation

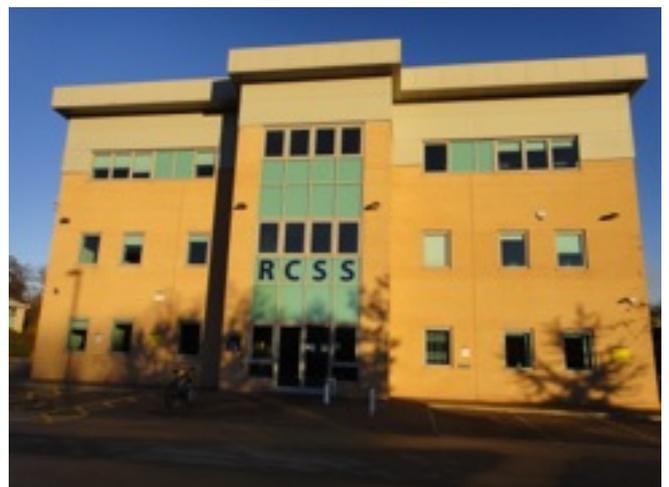
研究倫理やデータの管理、研究プロジェクトの進め方などについて学べます。

d) Engagement, influence and impact

研究成果をどのように社会に還元していくかという点に関して、プレゼンテーションの方法、他の研究者との共同研究の方法、研究資金 (Grant)の獲得方法、さらにブログやTwitter等のソーシャルメディアの使い方などについても学べます。

さらに、上記のプログラムに加え、学部にもよりますが、修士課程 (Master)のための授業を聴講することも可能で、私も1年目に以下の授業を聴講しました。

- Introduction to Social Research Methods
- Advanced Qualitative Methods
- Domains of Social Work Research
- Evidence, Understanding and Justice



筆者の研究室のある建物 (RCSSはResearch Centre for Social Scienceの略)

先述のアメリカの大学のシステムと比較すると、イギリスの大学のシステムの方がより柔軟で、学生の選択の自由度が高いといえます。逆に、研究者の養成という点では、アメリカのシステムの方が、より系統立ったシステムが確立されていると思います。

Supervision

次に、PhDの研究を進めていく上で、最も重要な要素の一つと思われるSupervisionについて説明します。私の場合は、前号でも触れましたが、正式な入学申込みをする前に、現在のSupervisorであるIan Shaw先生 (<http://www.york.ac.uk/spsw/staff/ian-shaw/>)に、自分の研究を指導してもらえる可能性があるかをメールで問い合わせた結果、私の研究内容に興味を持ってもらい、縁があつて指導を受けています。大学によっては、学生が自分でSupervisorを選べないところもありますが、その場合でも発表されている研究論文等を調べて、事前にコンタクトを取ることは不可欠なステップです。仮に、その研究者が様々な事情で指導することが難しい場合でも、他の研究者を紹介してもらえることもあります。

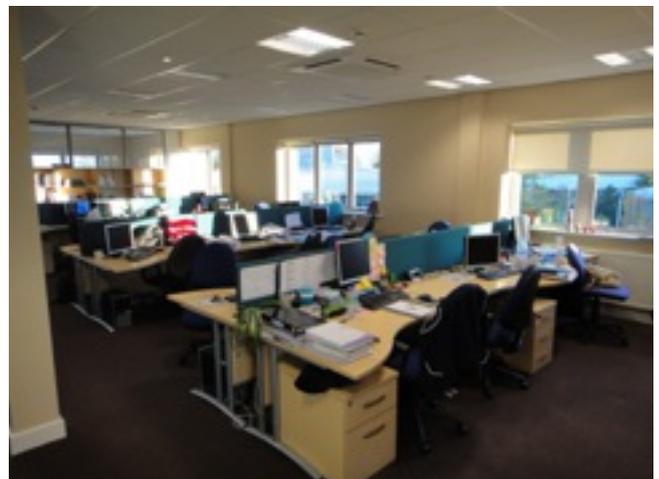
現在、私は上記のIan Shaw先生に加えて、Second supervisorとしてJuliet Koprowska先生 (<http://www.york.ac.uk/spsw/staff/juliet-koprowska/>)にも指導を受けています。しかし、同じ学部のPhDの同僚でも、私のように2名のsupervisorがいるケースもあれば、1名のケースもあります。Supervisionは定期的に実施することが求められていて、私の場合は毎回2名のSupervisorの同席のもと、約1ヶ月に1回のペースでSupervisionがあります。Supervisionの実施の間隔については、研究の進捗状況に応じて、Supervisorと学生の間で取り決められ、また、Supervisionがきちんと実施されているかを大学が確認するために、毎回のSupervisionの内容をSupervisorと学生の双方が記録するためのシステムがあります。

Supervisorと学生の関係は、基本的に対等であ

り、学生と言えども研究者のCommunityの仲間として見ているように思います。お互いにFirst nameで呼び合うのですが、Supervisorに対して敬称を付けずにFirst nameで呼ぶのは、始めはかなり抵抗がありました。Supervisorと学生の関係に関して、Supervisorから指導を'受ける'という側面はもちろんありますが、研究者としては未熟であったとしても、自分の考えや意見をきちんと伝えることを求められているのを、Supervisionを受ける度に感じます。一概には言えませんが、特に日本や韓国のように、年長者を敬うなどのPaternalisticな側面が強い関係の中で、指導を'受ける'、そして指導を'求める'という関係性に慣れている学生にとっては、厳しい関係とも言えるかもしれません。私の東アジア出身の同僚の中には、こうした関係性に戸惑い、彼らが望む十分な指導を受けられないことに対して不満を持つ学生もいます。

TAP (Thesis Advisory Panels)

ヨーク大学では、上記のSupervisionに加えて、各学生に1名のThesis advisorが割り当てられ、大体半年に1回の目安でThesis Advisory Panel (TAP)を開く機会が設けられます。このTAPは、Supervisorも同席のもと、当該学生の研究についてアドバイスを受けることができるシステムです。このシステムは、普段指導を受けるSupervisorとは違った、第3者の立場からの視点でのフィードバックを得られるという点で、非常に有効なシステムだと思います。また、研究内容だけでなく、普段の



筆者の共同研究室

Supervisionが適切に実施されているかのモニタリングの役割も果たしています。例えば、Supervisorとの関係に満足していないケースなどは、このThesis advisorが相談の窓口になり、Supervisorとの間に立って解決にあたります。場合によっては、Supervisorの変更というケースもあります。

Confirmation of PhD registration / Upgrade

PhDの学生は、定期的にsupervisorからの指導を受け、さらに先述のプログラム等を適宜受講しながら、各々の研究を進めていくわけですが、最初の大きな関門として、Full-timeの学生の場合は18ヶ月以内、Part-timeの場合は3年以内、つまり修業年限の半分の期間内に、'Confirmation of PhD registration'と呼ばれる試験に合格する必要があります（※ヨーク大学では、呼び方を数年前に変更しましたが、'Upgrade'の方が一般的です）。このConfirmation of PhD registrationでは、それまでの研究成果をもとに、期限内に博士論文を完成させる上で現実的な研究プランであるかどうか審査され、無事認定されれば、'PhD candidate'として引き続き研究を進めることができます。合格できなかった場合は、通常6ヶ月以内に再度受けることができますが、そこでも合格できなかった場合は、PhDではなく、MPhilという学位に切り替えるように勧められます。このMPhilは、いわば博士号(PhD)と修士号(Master)の中間に位置づけられるイギリス独自の学位です。MPhilの論文は、PhDの論文と比べて、求められる水準に差があります。実際には、このConfirmation of PhD registrationに合格できないというケースはまれですが、私の留学生の同僚で、合格できずにMPhilへの切り替えを勧められたのですが、それを受け入れられずに退学を選択した人がいました。

Ethical Committee

先のConfirmation of PhD registrationと前後して、博士論文のための調査を実施するために、各学部が組織している倫理委員会(Ethical Committee)に具体的な調査プランを提出して、その審査に通る

必要があります。この倫理委員会は、博士論文のための調査だけではなく、学部のResearch staffによって実施される調査も含めた全ての調査に関して、その実施前に倫理的な問題がないかどうかを判断するための組織です。私の所属するSocial Policy and Social Work学部の倫理委員会は、計8名のスタッフで構成され、うち2名は大学外部の他分野の研究者が委員になっています。

Social Policy and Social Work学部では、何らかの支援を必要とする子ども、障がい児・者や高齢者等のいわゆるVulnerableと呼ばれる人たちを対象にした調査を実施することも多いため、研究目的や研究方法はもちろんのこと、サーベイ調査の場合はその質問用紙、インタビューを実施する際はその質問項目、さらに、研究倫理上の具体的な手続き等についての詳細な説明が求められます。審査は、倫理委員会でその研究内容をもとに匿名の2名のスタッフを選び、その2名それぞれからの承認を受ける必要があります。私のケースでは、それぞれから疑問点や修正点のフィードバックがあり、それらについての手直しをし、再提出後に承認されました。

Viva

最後の関門が、博士論文を提出した後に実施される'Viva'と呼ばれる口述試験です。Vivaは、博士論文の提出後、通常数ヶ月以内に実施されます。審査官(Examiner)は2名で構成され、1名はInternal examinerで、所属大学の指導教授(Supervisor)以外のスタッフが担当し、もう1名はExternal examinerで、所属大学以外の大学の研究者が担当します。Vivaは、原則的に上記の2名の審査官とPhD candidateで実施されます。ただし、審査官2名とPhD candidateの全員が認めた場合にのみ、指導教授の同席も可能ですが、審査に参加することはできません。Vivaの所要時間に決まりはありませんが、途中休憩を入れて1時間半～2時間程度が平均

です。長い場合は、数時間に及ぶこともあります。また、ヨーク大学では、Vivaの録音をすることが義務づけられています。これはVivaの様子を記録することで、PhD candidateがVivaの結果に納得できずに異議申し立てをした際の客観的な資料にするためです。

このVivaで、PhD candidateに求められることは、'To defend your thesis'です。つまり、提出した博士論文に関してなされる様々な質問に対して、審査官を納得させるに足る答えをしなくてはなりません。研究分野に関わらず、Vivaで問われる基本的な質問は以下のようなことです。

- 本研究のoriginalな点は？
- 本研究のstrengthsは？
- 本研究のcontributionは？
- 本研究のweaknessesは？
- 本研究を再度実施するとしたら、どのように実施するか？ (What would you do differently if you were starting again?)

しかしながら、Vivaの特徴としては、試験というよりも、研究者の一員として審査官と議論するという性格が強いかもかもしれません。そのため、審査官の意見に納得できる場合は柔軟に受け入れる姿勢を示し、納得できない場合は、きちんと反論することが求められます。

Vivaの結果はその場で本人に伝えられるのですが、その結果は次の3つに大別されます。

1) *Successful examination* (無条件合格)：Vivaの終了時に、博士論文が受理され合格となるケースですが、実際にはほとんどありません。

2) *Successful subject to minor revisions of thesis* (条件付き合格)：1~2ヶ月以内に加筆修正の上、再提出をした後に合格となるケースで、合格の大半がこのケースにあたります。

3) *Thesis referred* (差し戻し)：期限以内に加筆修正の上、再提出し、再度Vivaを受ける必要があります。上記2)のケースよりも重大な修正を求められ

るケースです。

おわりに

以上、ヨーク大学のPhDプログラムについて概観しました。私は、現在3年目で折り返し地点を過ぎたところです。日本でのフィールドワークで得られた様々な質的データと向き合いながら、何とか意味のある論文にまとめるべく、分析に取り組んでいます。

次回以降は、こちらでの生活の様子について紹介していく予定です。



前掲の池の付近で、gooseやduckにエサをあげる筆者と娘(4歳)。



養育里親

～もうひとつの家族～

3

坂口 伊都

はじめに

この連載も 3 回目を迎えました。執筆者の一人として 11 月に行われた対人援助学会の理事企画ワークショップ「対人援助マガジンを考える～書き手として、読み手として～」に参加してきました。そこでは、原稿枚数の規定も原稿料もないのにも関わらず、締切を守る執筆者の思いに触れることができました。長く連載を続けている方は、発信し続けることでの変化が起きていました。どの執筆者にも締切日は、重くのしかかっている様子もよくわかりました。私も、この連載を大切に書き続けていきたいと思っています。

今回は、児童相談所の家庭訪問を受けた事を中心に書いていきます。養育里親になりたいと

意志表明をし、書類を提出し、家庭訪問の日を迎えました。子どもの話も聞かせてほしいということもあり、夕方から始まりました。

お父さんとお母さんは、どんな人？

児童相談所の方が来るというので、我が家は緊張に包まれていました。何人来るの？何するの？と子どもが尋ねてきますが、こちらも初めての経験なので、どれくらい時間をかけて聞き取りをしていくのかわからないでいました。

現れたのは 2 人。里親担当のなじみの方と本庁で里親業務の担当をしている方でした。さあ、何が始まるのでしょうか。まずは、お茶を出し

て、挨拶。緊張の面持ちで挨拶をする息子と娘。にこやかに対応してくれる児童相談所のワーカーから、「では、まず子どもさんに質問しましょうか」という言葉で始まりました。

最初の質問は、「お父さんとお母さんは、どんな人？」でした。いきなり、核心部分です。何を言ってくれるのだろうと待っていると、はにかみながら出た言葉は、「怒ると怖い」でした。それも、2人とも。第一声が、それなのと仰げ反りそうでした。里親認定につながる家庭訪問で、第一声が怒るとこわいでは印象が悪過ぎるでしょう。ワーカーは、「怒るとどんな風に怖いの？」「叩かれたりする？」「お父さんとお母さんとどっちが怖い？」と質問を続けます。針のむしろとは、こういう場面を言うのでしょうか。何を言い出すのか、気が気ではありません。

話していく内に、「いつもは、やさしい」という言葉が出てきて一安心しました。子どもが親のことを親の目の前で改めて語る場面は、あまりありません。そんな風に見えるのかと教えてもらう場面になりました。

ただ、第一声が怒ると怖いとは、ショックでした。日常的に怒りまくっている認識はなく、和やかに対応している時間の方が、夫も私も圧倒的に多いだろうと感じていました。また、怒ると私よりも夫の方が怖いというのも発見でした。夫は、いつもふざけ半分でにこやかに接している分、怒るとその変化が大きく子どもに映るのかもしれませんが。どちらにしても、子どもにとって叱られるという体験は、大人が思っている以上に子どもに影響している事柄なのでしょう。

児童養護施設京都聖嬰会の元施設長、井上新二氏は、『児童養護施設の子どもたちの思いと願い-京都聖嬰会の子どもたちと、ともに生き、ともに歩む』（明石書店）の中で、「小声で叱る」ことの意味について書いています。

児童養護施設でも、様々な場面で子どもたち

を指導しなければならないですし、集団で生活をしている背景もあるので、つい大声で指導してしまいがちになります。ただ、その方法では子どもたちの心に届かないといいます。体罰はもちろん、怒鳴ったり、激しく声を張り上げて指導したりしないで、「厳しいけれど、怖くない指導」「優しいけれど、甘くない指導」を求めてきたそうです。

井上氏が施設長に就任し、小声で叱ることを掲げた時、多くの職員はできるわけがないと思っていたようですが、それでも言い続けたそうです。そんなある時、万引きを辞めない子どもにこれ以上何をしたらいいのかわからなくなった職員が、井上氏に子どもを託しました。その際に井上氏は、子どもに小声で語りかけ、子どもの声に耳を傾け、小声で叱ると、子ども自身がいろいろな想いをポツリポツリと語り始めたそうです。その様子を見て職員が、この子がこんなに冷静に話す子どもだったのかと驚き、これが「小声で叱る」という意味なのですねと井上氏に語ったというエピソードを伺いました。

また、井上氏は小声で叱るという考え方の背景には、子どもたちを「力」や「恐怖心」によってコントロールしようとする限り、常に児童虐待の「芽」や「牙」を孕んでいると感じ、虐待を受けてきた多くの子どもをたちはこれ以上傷つけたくないという思いがあると語っています。

よく、甘やかすと子どもはつけあがる、子どもには厳しく接するべきだという言葉が耳にします。何でもかんでも、子どもの言いなりということは、私も賛成しませんが、感情的に怒鳴りつけたり、力で抑え込もうとするのは、あまり効果的ではないと感じています。それは仕事で、小学校高学年や中学生になった子どもが言うことをきかない、暴れて抑えられないという相談をよく受けるのですが、今までの叱り方を聞いていると、力で子どもを抑えつけ、小さい

頃はおとなしく従っていたが、身体が大きくなると、子どもの方が力で親を抑え込もうとしている状況によく出会うからです。

子どもは、大人からしてもらった事を再現します。暴力を受ければ、他者に暴力をふるいますし、ありがとうと言われていれば、他者にも感謝の気持ちを伝える行動を見せます。子どもに対して、どのように叱っていくのかは、子どもにとって大きく影響することを実感したので、これを自分の戒めにしていこうと思っています。

家庭の事情

冷や冷やした子どもへの面談が終わり、子どもは自分の部屋に行き、大人の面談に切り替わりました。家庭訪問の前に一通りの書類を提出するのですが、その書類内容にそって質問されていきます。その書類は、我が家の個人情報を開示しましたという内容です。履歴、収入、借金、健康状態、住宅の見取り図、子育て観、自分の育ちについての記入欄もありました。ここまで、自分たちの事をさらけ出さなければならぬのだなと感じました。

その中でも、答えにくかったのは自分の育ち方についての部分でした。それほど大きな欄もないのですが、いろいろと感じる事が多い自分の育ちについて、この枠の中にどのように誤解されないように表現するべきかと、最後まで悩みました。

一方の夫は、7人家族という大所帯の中で育ち、伸び伸びそだったという思いがあるので、さらさら書き込んでいきます。どこの家庭でも、いろいろな事情はあるものですが、夫の家族は自分たちの事を明るく語ります。これは、大きな力だと思います。その中で、聞き込んでいくと、大所帯ならではの悩みや葛藤が見えてきますが、書類の中の欄で語るには、大所帯での育

ちは十分な役割を果たしていました。

私の方は、母一人子一人の母子家庭での育ちから始まります。私の小学校時代は、各クラスの名簿が出され保護者名も出ていました。その中で女性の保護者名は、クラスに一人いるかないか程度でした。父親と暮らしたことのない私は、子どもの頃から父親を知らず、母親の言いなりにしか動けない自分に苛立ち、いつも身体にポッカリと穴があいた感覚をずっと抱えていました。

社会福祉の道に進む時も、葛藤を感じていました。その葛藤と向き合うために、家庭訪問が終わってからになりますが、京都国際社会福祉センターの対人援助職のための自己覚知「原家族と向き合う」という3日間の短期集中講座を受講しました。

自己覚知とは、己自身を知ることです。対人援助職として己の生育歴や思考パターンを理解し、利用者に対して感情移入や、攻撃的になってしまったりすることを防ぐ意味合いがあります。

里親は、子どもと生活を共にします。自分の家庭に子どもを引き受けるので、子どもに与える影響はとても大きく、養育者との関係が上手く築けない不調状態になった時、施設養護よりも里親養護の方が、子どもの傷が深いと言われています。子どもに辛い思いをさせないためにも、里親が自己覚知を行う必要があると感じています。

自己覚知の講座では、父親との関係について取り上げました。母親との関係については、物心ついた時から、自問自答を繰り返し、社会福祉での学び、家族を持ったこと、そしていろいろな方との出会いの中で、自分の中に整理をつけていました。父親との関係の方は、日常生活の中にいない人で、過ごした時間も短く、何を考えているのか見当がつかない存在です。父親という一番近い血縁ですが、一番遠くにいる存

在でした。講座では、早樫先生がこの対人援助学マガジンで連載していた家族造形法をします。私の時の登場人物は、父と母と私の3人だけ。小学校時代をイメージして作りました。母と私は、すぐに形を作れましたが、父親をどこに置いたらいいかわかりません。悩んで遠くに置き、母と私の方をチラッとみるように作りました。

その造形法で、父と私の関係は、私が思っているほど悪くないのではという意見をいただきました。驚きでした。私は、父親にとっていない存在、迷惑な存在だと思っていたので、父親と年に1回程度会うようになってからも、心を閉ざし続けていたのだらうと気づかされました。だから、いつも父と会うときは、義務感から重たい気持ちを引きずり続けたのだと思います。

今思えば、あの時の父の取った行動は、父親なりの精一杯の子どもに向けた気持ちだったかもしれないと思う出来事を思い出しましたが、父は不愛想な方で愛情一杯の表現ができない人でした。仮に父が愛情一杯の表現をしてくれても、子どもの私は決して満足することはなかったのではないかと思います。確信はありませんが、もしかしたら父は、私を少しはかわいいと思ってくれていたのかもしれない。

しかし、現在の父は認知症です。私のことをどこまで理解しているのかもわかりません。もう、父を通して確かめる術はありません。ひにくなものだなと感じる一方で、確かめても父からはっきりとした答えが返って来るとも思えません。そんなコミュニケーションができていれば、悩む必要はなかったでしょうから。

家族の形はそれぞれで、家族間の距離の取り方もまたそれぞれあり、その形を受け入れることから子どもは前に進むことができるように感じています。

家庭訪問では、自分の生い立ちについて誤解がないように必死に語りました。書類の全項目

に答え、家の中を見てもらって終わったのは3時間後でした。私たち家族もへとへとですが、児童相談所のワーカーさんも相当に疲れたことでしょう。

過去は変えられない

里親になる過程には、自分の過去と向き合う場面が出てきます。夫のように愛されて育ったと感じている人はいいいですが、何か育ちに感じるところがある人にはしんどい作業になるかもしれません。誰もが、親になると自分が子ども時代にされたことを繰り返そうとします。子どもを通して、自分の子ども時代が蘇ってくることもあります。目の前の子どもを傷つけないためにも、自分の生い立ちや思考パターンを自分自身で理解する必要があると思っています。自分の生い立ちに振り回される必要はありません。

自己覚知の講座で、「自分の過去は変えられない。子どもであれば、なおさら子ども自身の力で状況を変えることは不可能だ。ただ、これから何を選んで生きていくかはできる」と言われました。このような言葉を今まで誰からも聞いたことがありませんでした。この言葉をかけていただいた経験は、私の大きな支えになっています。子どもの時に気づくのは難しいかもしれませんが、次は私が子どもに伝え続けていく大人でありたいと思っています。

周辺からの記憶

1. 東日本・家族応援プロジェクト立ち上がる

村本邦子（立命館大学）

東日本・家族応援プロジェクトが立ち上がってから、三度目の東北巡業を終えようとしている。時間は少しずつ動いている。今月は岩手に行ったが、花巻から遠野、釜石、大船渡と車を走らせていると、あちこちで津波浸水を示す標識を見かけ、3.11 が過去のものになりつつあることを感じる。古いナビに頼りながら走っていると、復興道路の工事が進んで、どうやら震災前より便利になっているところもある。三陸鉄道は「あまちゃん」ブームで活気づき、北リアス線（久慈・宮古間）、南リアス線（釜石・盛間）ともに復旧し、駅員さんたちは誇らしげに働いていた。

その一方で、鉄橋が流された JR 山田線の宮古・釜石間はまったく復旧の見通しが立たないという。三陸鉄道の北リアス線と南リアス線をつなぐ線だ。赤字路線だったこと、黒字企業の JR 東日本に国が補助金を出せないというのが理由らしい。「たぶんずっと無理でしょう」と地元の人たちは肩を落としていた。今後、ますます、表から見える復興とその陰に隠れた部分のギャップは大きくなっていくことだろう。ある支援者が、「復興に向かって行動することが、自分たちをさらに苦しめる結果にならないかと懸念している」と言われたことが耳に残っている。

早くも忘却の波が大きく押し寄せている。繰り返されていることの大半は、ほとぼりが冷めると忘れ去られてしまうものである。1964 年と 2010 年はどこか違うのだろうか。同じ過ちを繰り返さないために出来ることのひとつが忘れないことだ。そのために、周辺からの記憶を記録する。（2013 年 11 月）

2011年3月 衝撃

2011年3月11日、衣笠のキャンパス内を歩いていて、軽い眩暈を感じた。過酷なスケジュールが続いており、海外出張から帰ったばかりで、もうひとつの海外出張が控えていた。要注意だと思った。間もなくして、それが地震で、東北が大変なことになっているらしいというニュースが耳に飛び込んできた。私たちは確かに同じ大地の上にいる。翌日には立命館で日本集団精神療学会の大会が開催され、震災の影響で来られなかった講師があり、その影響を乗り越えて何とか京都までたどり着いたという参加者があった。大会長の藤信子先生より「歴史のトラウマ」をテーマにした招待ワークショップを頼まれていたので、新たな「歴史のトラウマ」が生まれようとしていることに圧倒される思いで、何とか役割を果たした。誰もが起こっていることをうまく呑み込めず、ある種の昂奮状態にあった。おそらく日本全国がそんな感じだったろう。

翌朝、成田経由でニューヨークへ飛ぶことになっていたが、飛行機が飛ぶのかどうかも覚束ない状況だった。欠航となれば、それはそれで仕方あるまいと、とりあえず成田まで行ったが、成田では激しい余震と同時に地震警報が飛び込んできた。いったいこれから日本はどうなってしまうのだろう。足元がグラグラ揺れ、世界にひびが入ってしまいそうな予感を胸に、それでも飛行機は飛び、日本を後にした。長いフライ

ト中、眠れぬままに何本か映画を観た。そのなかには、生々しくショッキングな「ヒアアフター」も含まれていた。日本では2月中旬から公開していたが、大津波のシーンが震災を連想させるということで、3月14日に上映中止になったものだ。

ニューヨークから列車に乗ってニューヘブンへ。イエール大学の先生方に暖かく迎えられたが、みな眼に涙を浮かべながらお見舞いの言葉を述べ、被害状況を尋ねてくれる。海外の友人たちからも安否を確かめるメールが入り続けていた。日本にいれば関西と東北は遠いが、小さな島国をひとたび遠く離れてしまえば、距離などないに等しい。自分や身近な者に直接的被害はなくても、アメリカではあたかも被災者であるかのように扱われた。口々に見舞いの言葉をかけられ、戸惑いつつ「私は大丈夫だったんです」と応えながらも、「ありがとう」と感謝を表する役割を取るようになった。

被害状況を十分に理解できないまま旅立ったが、あちこちで衝撃的な映像の断片が眼に飛び込んでくる。日に日に、そんな大変な状態にある「祖国」を捨て置いて、こんなところで仕事をしている場合だろうかという罪悪感に苛まれ始めた。自分の語彙に「祖国」という語が生まれて初めて加わった瞬間だった。多かれ少なかれ、国外にいる日本人は似たような状況にあったのではないだろうか。3月16日、東海岸から西海岸へ飛び、サンフランシスコにある協定校 CIIS を訪れると、日本人留学生たちが大変な状態だからセルフヘルプグループを立ち上げるというので、行ってみることにした。

彼女たちは、日本の惨状が報じられてか

ら、テレビの前にくぎ付けで、飲まず食わずに近い状態で、「今すぐにも東北にボランティアに行くべきではないか」と思い詰めていた。心理的には、あきらかに被災状況にあった。国外に暮らしていた日本人についての状況を聞くと、この時期、たとえば関西や九州に暮らす人たちよりも、国外に暮らす日本人の方が、心情的にはずっと東北に近かったと言えるかもしれないと思う。一方的に入ってくる情報に圧倒され、家族や友人、大切な人々を置いて遠くに出てしまった自分を責め、無力感や孤立感もある。「今すぐ被災地に飛び込むこともできるが、今回は長期戦になる。よく考えてから動くこともできる」と助言しながら、自分自身のことを考えていた。

人をボランティアに駆り立てるのは、その問題と自分との距離感であろう。他人事だと思えなければ、人は動かざるを得ない気分になるものである。災害との距離は、物理的距離だけで測れるものではない。自分の暮らす土地で災害が起きれば、当然、距離は近くなるが、たとえその地に暮らしていなかったとしても、自分の故郷であったり、自分にとって大切な人が暮らしていたりすれば、心理的距離はぐっと近くなる。もっとも、事件や災害が起こるたびに、誰もが繰り返しマスメディアを通じてその悲惨な映像に晒されることになる昨今、報じられる出来事が大きければ大きいほど、その出来事との距離は近づいていくだろう。その一方で、時間経過に伴い報道に触れる機会が減っていけば、あっという間に忘却の彼方に沈んでいくことになる。

ふだん西日本で仕事をする事の多い私にとって、東日本は、それほど近い土地で

はなかったが、災害の前後ひと月、ほとんど日本にいなかった私は、遠く海外から日本を思い、いたたまれないほどの罪悪感とともに距離感覚は限りなく近づいていった。加えて、あろうことか、この時期、私は休暇を取ってハワイで過ごしていたのだ。3月21日にサンフランシスコから帰国し、22日に大学の卒業式に出席して、23日から家族で息子の留学先を訪ねる予定になっていた。キャンセルすることを何度も考えてみた。どう考えても、結論は見えていた。旅行を1週間キャンセルして自分が現地へ行ったとして、この状況では何の足しにもならないことはわかりきっていた。

私には、阪神淡路大震災の時の経験がある。あの時は、震災1週間後から半年間、毎週、現地に通ったが、自分の生活は半年で日常に戻った。被災の中核にいた人々にとっては、いつまで経っても拭い去ることのできないものが残るのに、周囲の者たちにとっては、いつしか遠い過去の出来事になり、次々と新たに起こる大きな事件や災害に関心が移っていくのだ。今回は自省の念をこめ、「衝動に流されて動くのはやめよう。責任を持って、細くとも長く自分のこととして関わり続けることのできる方法を考えよう」と思った。二十数年にわたってトラウマに関わってきた経験からも、災害直後のこの時期、心理面でできることはまったく限られている、わずかながら経験と年齢を重ねた者として、少しは賢明に動きたいと思った。

災害の中心部にいれば、選択の余地なく大きなエネルギーの渦に巻き込まれてしまう。災害との間に距離があれば、選択肢が増える。それは基本的に偶然によるが、意

図的選択によって変化もしていく。今回は遠いけれど、次回は真っ只中にいるかもしれない。選択肢があるのなら、自分に与えられた条件を最大限活かすことのできる選択をする方がいい。自ら中核に飛び込めば、否応なく距離感のないところに自分を置き、渦に呑み込まれてしまうだろう。そういう人たちも必要だ。現地に飛び込んで無我夢中で行動し、その場に漂う空気を全身で感じた若者たちのエネルギーは尊く、未来の力になっていくことだろう。でも、自分は今もうそれほど若くない。

ハワイ行きの飛行機に乗った人々は、みな明らかに言葉少なく、身を縮めていた。空港へ降り立って初めて、全体が「フー」と大きく息を吐き出した感じがした。いろんなことが自粛されていた時期である。ほとんどの人は、震災前に旅行を計画し、一度はやめるべきかどうか迷ったことだろう。楽しみに計画していたのに、選択の余地なく行くことができなかった人々、ひよっとすると永遠に不可能になってしまった人だっていたかもしれない。避難する人もいたようだし、あまりの重荷に早く逃げ出したかった人もいたかもしれない。

ハワイへ着くと、中学時代からラッパーをしていた息子が、初めて英語のラップ”Pray for Japan”を書き、現地の友人たちと、キャンパスやら街中のバーやらラジオにまで出て、チャリティーライブをしていた。素直に自分のいるところで自分にできることをするというシンプルな姿に、少し救われる思いがした。私にもきっと何かやれることがあるだろう。

2011年5月 閃き

ラファエル（1995）によれば、地域社会を災害が襲うのは、池のなかに石を投げ込むようなものである。その波紋が地域社会全体に広がって、さまざまところに時間的にずれて到着し、影響を及ぼす。この波紋はすでに影響を受けている部分をさらに揺さぶり、中心に近くてその力がまだ衰えていない場合には、大きな衝撃を生むことになる。地域社会という池の大きさ、それに投げ込まれた石の大きさとその衝撃の度合いによって、池のなかの状況は最終的に変化したり、しななかったりする。今回の災害の場合、投げ込まれた石は巨大であり、しかも投げ込まれた場所は1ヶ所だけではない。時間差をもって、あちこちに大きな石が投げ込まれ、ひよっとするとこれからもまだ投げ込まれないとは言い切れない。あちこちの中心から広がった波紋が互いに影響を及ぼし合い、増長し複雑化し続けている。

東日本大震災の特徴は、地震、津波、原発という三種類の複合的な災害がもたらされ、その影響は空間的にも時間的にも途方もなく大きな広がりを持ち、予測不能性を含んでいることにある。とくに原発に関わって、日本というシステムは、根源的なところで問い直しの必要を迫られている。戦後の復興が経済効率に照準を合わせてきたことの過ちは、バブル経済の崩壊で露呈し、今回の震災で完全に底をついた。ここから先は、単なる復興ではなく、長期的視点をもって、私たちの社会がこのシステムをど

のように立て直していくのかが問われている。被害規模から言って、どれだけ多くのボランティアが長期に渡って支援に入ったところで、一人ひとりにケアが行き届くことは不可能である。大きな喪失と混乱を抱えながら、生き延びた人々は生き続けなければならない。家族は生活を営み、子どもは成長していくだろう。それぞれがそれぞれの場でできることをやっていくしかない。

そんなことを同僚の団士郎さんと話していたら、むつ市の児童相談所の杉浦裕子さんから、むつ市図書館で漫画展をやってももらえないだろうかというメールが届いたという。そうそう、確か、前に、むつ市図書館のギャラリーが素晴らしくて、「こんなところで漫画展ができたらいいなあ」と話していたと聞いたことがある。むつ市では津波の影響はほとんどなく、震災後も変わらない生活を送っているように見えるが、海上自衛隊で働くお父さんが多く、被災地に派遣されて、余震が続くなか、心細い日々を送った家族が多かったという。また、出稼ぎなど県外就労している家族も多く、東京電力福島第一原子力発電所で死亡が確認された社員2人のうちの1人はむつ市出身だったそうだ。下北半島には、東通り原発や建設中の大間原発、六ヶ所村の日本原燃再処理工場がある。マスコミに登場しはしないが、こんなところにも、すでに大きな波紋が複雑に影響を及ぼしあっているのではないか。

「それ、グッドアイデア！青森から東北を1県ずつ南下していこう。漫画展にちょっとプラスして、団さんや私がこれまであちこちで続けてきた支援者向けワークショップや子どもたちのための遊びワークシ

ョップなんかもやってみたらいいかも」と話が盛り上がり（というか、私が勝手に話を盛り上げ）、結局、この企画を立命館大学大学院応用人間科学研究科のプロジェクトにすることにした。今回の大きな災害に対して、多くの大学が自分たちの果たすべき役割や使命について考えていた。立命館大学はもちろん、私たちの所属している応用人間科学研究科は、「対人援助学の創造」を掲げて十年前にスタートした専門職大学院であり、「研究科として何かすべきではないか」という声が上がっていた。私はたまたま副研究科長をしており、中心になってお世話すべき立場にあった。研究科の理念である「連携と融合」にもばっちりフィットするではないか。

早速、同僚の中村正さんに持ちかけると、「いいじゃないですか。私も何かやりましょう」と賛同してくれ、研究科長の荒木穂積さんも「それはいい」と言ってくれた。他の先生方は「いいけど、どうもよくわからないなあ」という反応だったが、少なくとも反対の声はなかった。そして登場するのが、もう一人の重要人物、クレオテックの平田さなえさんである。イベントをやるなら誰か専門にやってくれる人が必要ではないかと考えた時、突然、頭に浮かんだのが、8年ほど前、コミュニティ心理学会を立命館でやった時にお手伝い頂いて、素晴らしいプロの仕事を見せてもらった人だった。その後、接点はなく、「さなえさん」しか覚えていなかったのだが、応用の事務を担当してくれていた長谷川敏子さんに聞いてみたら、「それなら、平田さなえさんでしょう。ちょうど今日来ますよ」ということで、とんとん拍子に平田さんと結びつ

き、「是非、お手伝いさせてください」という運びになった。

これまでいろんな企画を立てて実行してきたが、企画がうまく進む時というのは、面白いように不思議な偶然が重なるものである。私はこれを「天の導き」と呼んでいるが、これはきっと集合的無意識の次元で（単に社会的次元で言えば良いのかもしれないが）大きく何か動いていることを表しているのだと思う。ここでも災害の影響が大きな波紋となって呼び合い、重なりあったのだ。きつとうまく行くだらう。後は、企画の具体的な詰めと予算だ。まあ、なんとかなるだろう。いや、なんとかするしかない。やるならば十年である。団さんと中村さんには、「万が一、予算がなくなったら、私たち3人で割り勘して、最低限の企画を十年続ける覚悟じゃないとダメだけど、いい？」と念のための確認をして、動き始めた。

2011年7月 準備

企画を詰めるにあたって、まずは、自分たちの持つ力を見定めることが重要だろう。今回の災害では、複数の機関が「こころのケア・チーム」を結成して、体系立てた危機介入を行っていた。玉石混交であったことは間違いないが、それでも、暗中模索するしかなかった阪神淡路大震災の時と比べると、格段に洗練された方法で介入が行われたと思う。でも、私たちのやろうとするプロジェクトは、「こころのケア」とはちよ

っと違う。距離や時間的条件を考慮すれば、細く長く関わりながら、遠くにいる私たちが何かをするのでなく、コミュニティに本来ある力を活性化できるようなきっかけを作るようなことができるといい。

私たちの弱みは遠方であることと、多忙な日常を送っていること。頻繁に長期で現地滞在することはできない。強みとしては、私たちの研究科は、心理、教育、福祉など対人援助に関わるさまざまな領域の専門家たちから成り立っており、支援対象は多岐にわたる。このリソースを活かして、情報提供や研修、コンサルテーションなど行えるかもしれない。大学ということで信頼を得やすいだろうし、研究費や実践プロジェクトに対する資金も得やすく、組織としてのネットワークもある。まずは、イベントという形で、定期的に東北を巡る舞台セットを作ることだ。その中心は団さんの漫画展。これは、今回、一番強力なリソースとなる。そこに週末のプログラムをセットし、毎年、定例でやってくるサーカスカメリーゴーランドのような地域のお楽しみにする。

これまでの実践から学んできたことは、コミュニティに働きかけようとする時、何か仕掛けを作るのがよいということだ。90年代、「子育て支援」という言葉がなかった頃、子育て支援の企画でよくご一緒していた人に、東京おもちゃ美術館の館長多田千尋さんがいる。多田さんは心理学者でも何でもないが、おもちゃや遊び、芸術教育を通じて、実にスマートに子育て支援の場を拓いていた。「子育て支援をしますから集まってください」と呼びかけるよりも、「おもちゃの修理をしますよ。壊れたおもちゃを持ってきてね」と呼びかける方が親子は集

まってくる。そうやって人と人との関わりが生まれる場があるとコミュニティは活気づく。

阪神淡路大震災の時もそうだった。震災直後より神戸に入り、あれこれ試して最終的に行き着いたのは、YMCAの子どもの遊びボランティアだった。避難所で子どもたちと遊び、スタッフミーティングに参加していたが、これはとても自分が機能するやり方だった。基本的には子どもと楽しく遊ぶのだが、子どもたちの何気ない遊びのなかに、時折「あれ？」と思うトラウマ反応や表現がある。必要に応じて専門的対応ができるし、ミーティングでボランティアの困惑に助言できる時、心理の専門家であることもまんざら無駄ではないなと思ったものだ。日常、専門家としての枠組みのなかで人と関わる時、どこか自分を切り売りしている気分になることがある。こんなふうに、一人の人としての自分と専門家としての自分が統合されたあり方で人と出会う方が好きだ。今回もそんな出会いができるといい。こういった出会い方は、その後、DV被害に遭った母子支援プログラムなどにも活かされてきた(村本、2008)。

多田さんのところでおもちゃや遊びのアイデアをもらおうと連絡を取ったところ、さすが東京おもちゃ美術館は、2週間で1万個のおもちゃを集め、4月7日から、陸前高田、気仙沼、宮古など被災地70か所に遊び支援隊を派遣し、遊びプログラムと遊び環境セットの寄贈を実施していた。救援物資のようにおもちゃを送るのではなく、おもちゃコンサルタントが遊びのコンテンツと環境を届ける活動をしているという。その多田さんからは、「私を知る限り、十年も

の長期スパンで被災地支援を打ち出しているのは、村本さんだけだと思います。さすが！」と誉めてもらい、遊びの環境セットのアイデアを頂いた。遊びの環境セットとは、4畳半分の硬質段ボールで作った床材と赤いプラスチック段ボールの箱に入った50個ほどのおもちゃを合わせたもので、一流デザイナーによるものだという。夢は膨らむ。ところが大学の助成金申請結果が思うように行かず、遊びの環境セットを購入する予算がなくなってしまった。7月に出会ってすっかりしょげている私を見て、多田さんが「お金はいいよ、村本さんに2セットあげましょう」と言ってくれた。

次は、各地の受け入れ機関を探すことだ。地域としては、もっとも被害の大きいところ、被災状況の深刻なところよりは、むしろ、逆に、イベントができるだけのコミュニティの機能が残っているところで、イベントに参加してみようかなとやってくる力の残っている人々のいるところを考えてみる。企画の趣旨自体が、人々やコミュニティのレジリエンスを高める予防的働きかけにある。イベントに参加してくれた人々が、ほんの少し元気になって、周囲の人たちをほんの少し力づけてもらえたら、コミュニティ全体がほんの少し元気になるはずだ。協力機関には負担もかけるが、それによって元気になるような企画にしたい。現地の支援者たちと絆を作り、そこを基軸に情報や応援のメッセージを送り続けることができるだろう。いわゆる後方支援である。これは、西日本を中心にした複数の地で婦人相談員の継続的支援を行ってきた体験に基づく(村本、2010)。

とは言うものの、私たちが被災地に入っ

てやるのが結果として支援的に働けば幸いだが、それは何の保証もない。ただひとつできるはずのこと、つまり私たちのミッションは、被災と復興の証人 (witness) として存在することである。長くトラウマ・セラピストとして働いてきたが、他者にできることなど無力に等しいことを知っている。できることと言えば、不運や苦境を生き抜いてきた人の証人 (witness) として存在することに尽きると思ってきた。

都会で便利な生活を営みながら、いつの間にか 54 基もの原発が作られていたことを認識していなかった自分は、無関心という形で加害者側にいた。たとえば、これまで研究してきたホロコーストを例にとると、犠牲になった人々の存在を忘れ去ることは犯罪者の意図に加担することを意味する。逆に、その存在を心に刻み、歴史の証人となることは抵抗を意味するのだ。距離があるから見えないこともあれば、距離があるからこそ見えることもある。時間が経っても忘れ去ることなく、コンスタントに関心を持ち続け、被災地の人々が、それぞれなりの復興の物語を創っていく過程を歴史の証人として見守ることができたら、遠くにいる私たちも私たちなりの復興の物語を創っていけそうな気がする。

夏休みをはさんで、9 月、いよいよむつでのプロジェクトがスタートする。

～続く～

文献

村本邦子 (2008) 「DV 被害を受けた母子への二次予防的介入」『コミュニティ心理学ハンドブック』(日本コミュニティ心理学会編) 東京大学出版

村本邦子 (2010) 「支援者支援という対人援助の可能性～女性支援構築のための婦人相談員研修の実践から」『対人援助学の可能性—「助ける科学」の創造と展開』(望月昭、中村正、武藤崇、サトウタツヤ編) 福村出版

村本邦子 (2012) 「東日本・家族応援プロジェクトを立ち上げて」『コミュニティ心理学研究』第 15 卷 2 号 55-65 頁

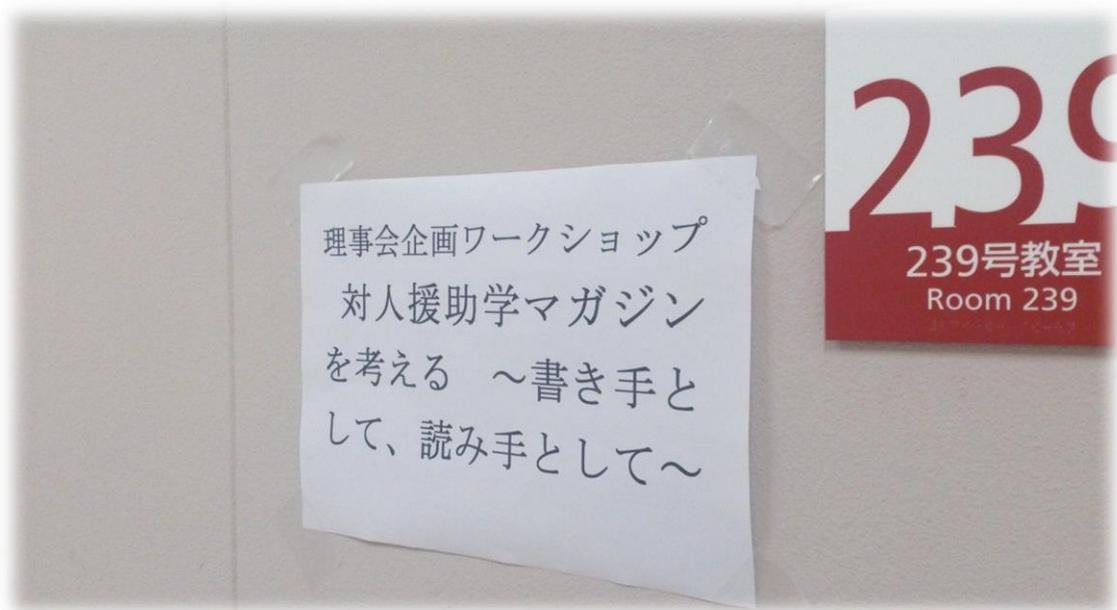
ラファエル, B. (1995) 『災害の襲うとき』(石丸正訳) みすず書房

ワークショップ「対人援助学マガジンを考える」

～書き手として、読み手として～

誌上で再現！！

対人援助学会 第5回年次大会 二日目 企画ワークショップ（2013年11月10日）



平成25年11月9日10日の二日間、立命館大学敬学館にて、対人援助学会第5回年次大会が行われました。大会2日目には、毎年恒例となっている、「対人援助学マガジンを考える」ワークショップも、参加者と共に和やかに行うことができました。今回は、執筆者・読者の参加から成るワークショップを誌上再現と言う形で、対人援助学マガジンの持つ機能・役割・影響についてお伝えいたします。

編集長不在の中で、ワークショップを担う！！キーワードは、「新しくも古臭い?!」

今年度の大会に、編集長が参加できないということがわかり、千葉副編集長、連載執筆者木村、坂口が共にワークショップを担うこととなりました。

そもそも、千葉と木村は、マガジン連載が縁での出会いであり、千葉と坂口は、京都での勉強会や仕事を通しての知り合いでもありました。そここの縁がつながり、年齢の近い3人が力を会わせる初めてのワークショップです。

千葉・坂口はまだしも、木村は北海道。3人揃っての打ち合わせは、ワークショップ前日の夜に居酒屋で、と、なんとまあ、気楽な打ち合わせとなりました。気楽過ぎて、この日

の打ち合わせでのキーワードは、「対人援助学マガジンは、WEB を使った新しい発刊スタイルにも関わらず、どこか古臭いよね。」というものでした。

さて、どんなワークショップ当日を迎えたのでしょうか？



ワークショップを担当するのは、副編集長千葉晃央・執筆者木村晃子・坂口伊都

6対1 ワークショップ開始

ワークショップに集まったのは、書き手6人、読み手1人という面々。それぞれの自己紹介からスタートしました。前半30分は、担当している3人がマガジンについて感じていることを話ながら、後半1時間は参加者とのディスカッションで活発に時間が流れました。

対人援助学マガジンの振り返り

千葉)ほな、ちょっとマガジンの振り返りですけど、今までは14号まで出ていて、年四回発行、創刊号は70ページあったんですけど、今は、212ページ。連載限定でやっています。そういうところから、出版物、本になったりとか、木村さんの原稿は応用化学人間研究科、立命館の入学試験に使われるというようなことが起こったりとか、あと、現場で講師とかやっている人も多いので、自分の執筆が教科書になって対人援助の次の養成のために、直接役立っているようなこととか、あとは執筆している人が講師とか講演とか、ほんとに活躍されることが多いなという印象があります。

編集会議では何をしているの?! 編集会議の70%は…???

千葉)編集会議っていうのを、一応締切日がだいたい25(日)ですよね。その次の週か、次の、次の週かに、私とそれからもう一人の編集員大谷多加志さんがいますので、編集長のところに集まって話をしているんですけども。その時によく話をするのは、「最近頑張っている?」っていう話が一番で、それが全体の70%ぐらいかな。全体の70%ぐらいっていうのは、私とか大谷さんが、普段の仕事プラス、こういうことをずっとやっているということに関する、エンパワメント、カ水みたいなのを注いでくださっていて、心理的支援、っていうのを編集長がやってくさっている感じがします。

その残りで、目次の確認とかデザインの話とか、もうちょっとこうしたいほうがいいんちゃ

うか、という意見が届いているよ、みたいなのを確認するっていうのが、あります。

ページも執筆陣も増殖型。編集は大変？

Q: 木村)編集作業について、当初から団編集長は、「簡単なんだ」みたいな言い方をされていたんですが、これだけ、執筆陣が増えるにあたって、本当に簡単なのだろうか、という、あの本当にたくさんのかたが期日にメールなんかで、原稿を寄せる、ということで、それをまた編集部の中で割り振りをして、最終的に形づけていくというところで、**本当に、簡単に編集しているのだろうか？**というのを書きながら考えているんですけども、そのあたりは、いかがなんでしょうかね？ぶっちゃけ、というところで・・・

A: 千葉)あの、普通本が出るにあたっては、執筆者が締切日に原稿を届けない、原稿は締切迫ってからやるのがステイタスやないけど、そんなようなのもあったりとかしますけど、そんなことが（マガジンでは）起こっていないですよ。締切にほぼ揃っている。原稿料なしであるとか、あと、発刊日も遅れたりほぼしていない。あと、ページが何ページになっても大丈夫、印刷代関係ないとか。何でこんなんでいいのかについては、「**編集作業をいかに抑えるか、は大事や**」と、「**それが継続の秘訣や**」と団編集長は言っていたりします。

締切を厳守する執筆者たち。対人援助学マガジンは、書き手の自由度が大きい。

Q: 木村)最近坂口さんが、執筆を開始されて、2回連載された中で、編集のことだったり、自分が入稿するっていうところや、**編集部とのやりとりの中で感じること**とかって、どうですか？

A: 坂口)私、養育里親のことを書かせてもらっているんですけど、最初書くというのにあたっては、**別にこれと言って指示もなく、締切日だけがなんとなく教えられ**、で、書式もわからなくて、書式も別に、あの、「こういう風にしてください」とか「字数こうですよ」というのもないので、みんなどんな形でしてはるのかなと思いつつ、最初書き始めた、というのを今思い出しました。で、2回出したんですけど、私、何を勘違いしたのか、**次の締め切りを間違えて、一か月も早く出した**と言う。なんで、私1か月前の締め切りを・・・

千葉)書きたかったんだ。(笑)

坂口)団編集長から、(原稿を出してから)「早いのはいいけど、1か月前です。」っていう返信メールがきて、で、今月始めて、団編集長の「原稿を書いてくださいね！」メールを初めて見て「これが噂のメールだったんだ。」と、一人で感激をして、やっと連載3回目にしてちょっとシステムがわかったかな、と。だから、こう、**自由だからこそ、すごく心配したりとか、いいのかな、とか、一人で焦ってえらい早く出したり**とか、そんなことが起きています。執筆をしての感想です。

木村)自由っていうところ言うと、私は小学校2年生の時から作家になりたい、という思いがあって、当時の作文、ていうか、日記なんですけど、それに書いているんですね。だからと言って何かに向き合ってきたかというところではないんですけど、例えば、作家

を目指すとか言っても**何も枠組みがないところで、永遠に自分が書き続ける、定期的**に書き続ける**というのは非常に難しい**というなかで、きちっと区切りもって締切があって、そこにエントリーできるという仕組みがあることで、この14号まで、っていう蓄積されたものが自分の宝です。



*坂口) こういう (机上のマガジンの冊子を指して) 紙ベースで読めるっていうのは、ちょっと憧れがあって、私はもうこういう製本が終わってから初めて連載をしたので、こういうものがある、というのは、なんかちょっと羨ましいなと思ったりするところもあるのはあります。

対人援助学マガジンは大きな育成プログラム！！マガジンは本屋さん？

木村) ああ、昨日、「対人援助学会におけるWEBコミュニケーションについて考える」というワークショップに参加させていただきました。内容としては、今はパソコンよりどちらかというスマホで、ネットにつながる、WEBにつながるっていう方が数が多いのが現実だそうです。対人援助学会のホームページも、スマホユーザーがリンクというかアクセスできるような作り方をした方がいいとか、或いは情報を求めてくる人がすみやかに、その必要な情報に直結できるようなWEBの、ネットの技術を工夫したほうがいいとか。それともう一つはコミュニティとしてのホームページ。そこにやりとり、コミュニケーションが

発生するようなことを求めてつながる人もいるので、コミュニケーションみたいなのところの狙いをよく整理したうえで、ユーザーの現状もよく見極めて、ホームページなんかを作っていたらいいんじゃないか、というようなお話がされていたワークショップです。IT技術ということで考えると、かなりユーザーにとって便利な仕組みにはどんどんできる、技術的にできる、というようなお話を伺ったんですけど、例えば千葉晃央さんをクリックすると、1号から14号までワンクリックで読めるっていうのは、ユーザーにとっては便利なんですけど、**便利になることで削ぎ落とされる部分がすごくあるんだらうな、不便の中に含まれる色々な人を育てる機能、やりとり、そこで生じるコミュニケーションみたいなものが、インターネットをベースに世の中が進んでいくと、削ぎ落とされる部分がたくさんあるな**と思います。でも、マガジンはどこか古臭い。新しいのだけれど、WEBで誰にでも公開しているんだけど、どこか古臭いなっていうものを感じました。で、何かになって思った時に、**対人援助学マガジンは、本屋さんなんだ**、って私は感じていて、その、今やっぱり本やさんがつぶれていたりとかネットで本も買えるような時代なので、なかなか本屋さんが経営が難しくなって閉ざされていくというのも多いと思うのですが、マガジンの場合はそこが本屋さんで、従来本屋さんで自分が何か本を探そうと思った時に、店主に尋ねるとか、或いは自分の目でそれらしき場所に行って、2、3出してみても、その本探していたんだけど、なんとなくその辺にいたら、違う本に目が言って、その本手にとったらおもしろそうで購入しちゃった、みたいな、その、偶発的な出会いもあったりすることもあると思うんですが、対人援助学マガジンも、千葉さんのところに見に行きたかったんだけど、なんとなく目をやっていると、他の執筆陣の名前が、いつもサブリミナル的に自分の中に入っていて、(笑)執筆者の名前であったりとかタイトルがあって、ある時にどこそこをクリックしてみて、偶発的に出会ったとか、こっちを書いてあるところを、ちょっと見てみようかな、とか。その、手間暇みたいなのところがまだ残っているところが、**インターネットの技術とは裏腹な、その従来のアナログ的なものが残っているな**という臭いを非常に感じて、それは**自分で探す力であったりとか、興味関心が刺激されるっていうものが、すごくアナログな感じで残っている**っていう、本屋さんかなと。

坂口) この中が、**マガジンの中が本屋さん**かな、という感じ。私が実際にしたのは、早樫先生の家族造形法の連載を、児童養護施設の先生たちに、こんなやり方ありますよ、という研修をしましょう、っていうことになった時に、全部出そうと思って必死になって、けっこうな数があるので、私何号までやったんだらうってわからなくなりながら、全部打ち出して造形法だけを一つにまとめて先生たちに渡す資料みたいにまとめて、持っていったりとか、自分が参考にしたりとか、実際にしたことがあって。確かにその時に、そういうことをしながら手間暇かけながらやりながら、ちょっと気になる人のも見始めたりとか、自分がやっている作業とか、忘れていた、みたいな、感じになったな、というところは、実際に読み手の立場からあったなということが思って、本当に、便利そうなんだけど、けっこう面倒くさいし、振り返ろうとすると、何番目まで戻って、え？みたいな、わかんない

なくなっちゃった、みたいな、ところも一生懸命しながら、それに向かっていくというか、意識を向かわせて調べようとするところでは、そういう手間暇感というのは大きいのかなと感じています。

千葉) マガジンって、本当に大きい育成プログラムだなと思って。編集に関しては、興味を持ってもらう、というところで、敢えて、その人のところをクリックしたらその人のところだけの一覧が出ないというようにはしていたりします。あの、例えば、坂口伊都さんというのをクリックしたら、今までの全部の連載が、そのページからアップできる、というのはわざとしない。

あの、そうそう、だから本屋さんに行ったら自分の領域の隣の領域がなんの領域か、というのが本屋の棚でわかるんだけども、アマゾンやと狙い撃ちで、押さないとこを知らないというよく言う、専門バカ、にならないようにっていうことが起こる仕掛けみたいなことで。さっきも、今日の発表の中でプロセス自体が支援である、っていう話と一緒に、特にこう探すことでこう隣が見えてくるよ、っていうところにも、専門バカにならないように、他のところにも知恵を借りることができる人になるように、とかっていうことで仕組みができていくのかと思う。

ところで、執筆者短信って？

Q:牛若) そもそも執筆者短信というのは、どういう役割を果たしているのか？

A: 千葉) 短信の位置づけ。短信の位置づけは、まず、執筆している人がどんな人かというのを更に深く知って欲しいというのと、あと二百なんページ全部読むと言う人はいないだろう、っていう時に、あの、木村さんだけ読んでもらってたらええのか、じゃなくて、やっぱりいろんな人のことも知って欲しいという想いで、そのためにも少なくとも短信だけは読めると、だから短信ではみんなに出会えると。あ、ちょっと〇〇さん、こんなことやっているの？じゃ連載どんなんやっているの？っていう仕掛けですね。そういう風なところからやっています。

書き手として・・・書くときに気をつけていることは？

～書き手と読み手が同じ土俵で理解できることを意識～

西川) みんなすごい難しいこと考えてはる人達の集まりやのに、私こんなの書いていいんやろか、と思いがらいつも書いているところが少しあるんですけど、ま、こういうのもあってもいい、っていう、いろんなのがあるからいいんだって、無理やり自分に言い聞かせて。先ほど、坂口さんがおっしゃっていた自由だから心配やねん、心配やけれど、自分で、なんていうかな、責任が気持ちいい感じですね。2、3回は本当にこれでいいの、とか、もやもやしていたけれど、あ、これはもう私がしっかり決めて、これでいこうと思ったら、それに関して、編集の方々は何にも仰らない、もう好きに、ほんまに好きに自由なんやと思って、じゃもう好きにやろう、って。好きにやるってことは、例えば、学会とか

で何か発表します、授業で何かを言います、っていうのも責任がありますけれども、インターネットの責任って何だろう？っていうのが、まだちょっと慣れていないところがあって。インターネットで公開されて、言ってみれば世界中に出ちゃうじゃないですか。環境さえあれば。その時の、こういう対人援助学会が出している対人援助学マガジンというパッケージはされているけれども、その中の個々人の責任というのがものすごく強くて、で、それが不思議な形で面白いなって、思うんです。で、さきほど木村さんが仰ったみたいなの、背筋が伸びるといふか、責任をすごく感じさせてくれる、で、自分勝手な理由だけではあかんねんな、っていうのを思いながら書いたり、あと、書く時に、坂口さんも先ほど、養育里親というのをしっかり言わなきゃ、というのを仰った形で、私は、**だれが、どんな人が読むかわからへん**、対人援助学に興味っていうか知識が全然ないけれど、なんかマガジンゆうて面白そう、って見はる方とか、が、見た時に、例えば、社会福祉士養成校って何なんだ、とか、**私が知っている言葉をやわらかい言葉に言いかえたら何になるんだろうか**、そんな感じでできるだけ説明をいれたらいいのかな、でも入れすぎたら、もう説明だけで面倒くさくなっちゃうんで、それをそう説明しようか、説明したほうが、しないほうがいいのかと、思いながら**全然関係ない人が、その分野にね、関係ない人が読む時に、どれくらい説明したらいいのかなと、匙加減を考えたり、**することはあるかなと。

千葉) そのあたり、中島さんも、匙加減は・・・

中島) いつも苦しんでおります。皆さんみたいに、書くときにそんなに深く考えていなかったなと思って、だんだん、ちっちゃくなっています。(笑) ただ、**心がけていることは、専門用語はできるだけ使わない。**

Q:木村) 中島さんが、今、仰った専門用語をあまり使わないようにっていうのは、読み手が専門職ばかりではないとか、そういう専門職以外の人に届いて欲しいとか、みたいな何か狙いっておありなんですか。

A:中島) 例えば、学会とかに来ると、まず言葉で圧倒されてしまうことがあるんですよ・・・英語や専門用語が飛んできて、あれ？と思う。そういうところでエネルギーは使いたくないな、と思うので。普通のことばできっと皆さん感じてもらえるところがあると思う。**同じ土俵に乗れない、ということがあってはいけないので、**話すような感じで、っていうことを意識していると思います。

余談？脱線？

Q:マガジンを売る手段はないのだろうか？

木村) 執筆者が自ら編集を考え、締め切りを守り、内容も構成も考え、かつ、経営も考える？！

一同) 笑

西川) あ、でも、面白いと思う。その言葉で思い出したんだけど、それこそ、全然畑違いかな、と思うけど、ドラッカーなんかは、そんなこと言うじゃないですか。組織ってい

うか、人の集まりがあったらまず、末端の人が一番中心のことを考えている、っていう。本当に末端の人までが、中心のことを考えていることによって、一人ひとりが「じゃあ、私どう動いたらいいねんな。」ということがあって、色々考えている人が集まるから面白い集団になるんだよ、ということを書いていたような、解釈が違うかもしれないですけど。そんな感じですよ。経営のことまで、一人ひとりが、執筆者が、大丈夫かな、と。

読み手から書き手への質問！！～自分を律する原動力は？

連載をしての影響は？～

宍戸) もう答えられた部分もあるかもしれないんですけども、ま、さっきから、**締め切りを守るとか、年4回やるとか、永遠に書き続けるとか**、それ書こう、原稿を書く、ということの、自分を律する、締切を守るとか、逆に原動力って、何なんだろうって。ま最初からだったのか、それともやり始めて、こうだんだんそういうのが出てきたのか。あと、読み手からの反響とか、これを書いて、書き始めたことで何かこういうことにつながっている、現実の世界からいろんなことがあったとか、そういうことあったら、教えて欲しいなと思います。

千葉) 障害者の現場で10何年も働いていて、現実を伝えたい、みたいのがありますね。ま、自分の現場が良くなるし、ひいては利用者が、充実した生活を送る。で、知的障害者の人が働いている現場の本とあって、本屋に行ってもほぼないんですよ。なので、ここは、一段「知的障害者の労働現場」ってもらっているんで、そういうことを発信していくっていうのは、ずっと現場で利用者の人にお世話になっていることへのお礼じゃないけど、ま、私にとってのソーシャルアクションかな、外に出していくっていうのが。・・・原動力はそれかな。あと、なんやったっけ？反響、ね。反響はね、でもやっぱり、この人講師に呼ぼうか、じゃないけど、あ、なんかいやらしい話かな？ものを頼む時に、こういうところで、こうやって文章も書いてる人やっていうのは、わざわざ言わへんけど、ま、あの調べてくれはるからね。チバアキオって誰？って。そんなら、これを書く前と書いたあとは、私の名前前のヒット件数が断然違うし、そういう、たぶんそういうのって、はっきりこう、じゃないかもしれないけど、また、効果があるのが10年後とかっていうことも可能性も、この原稿を元に本になるとか言うのも、とか思ったら、後のこともあるかなと思って。けど、書いてんのはメリットの方が多いですね。こんぐらい書いて、「こんだけのものが返ってくるんやったら、っていうのは。

坂口) あ、**締切守るっていうのは、もう、締切守るって聞いているから、聞いているので、**受けた時からその緊張感が走ったところが。原動力っていうところでは、さっきも言ったんですけど、養育里親というものが、ものすごく揺れ動いているけど、それはごく一部の人しか知らなくて、里親 VS 施設、とかね。なんか、そんなお互いに批判し合うとかいうような、部分の構造が現実にあたりして、っていうところでは、やっぱり子どもをどう囲んで、そのためになんとかしたい、という人達がなんで対立せなあかんねんな？って

うところは思っていて、そのメリット、デメリット、それぞれあるという中での、私の立場とか、考えとか、私は実際にやってみたいと思っていたりとか、そんなところは、伝えていきたいけど、それこそ、難しくではなくて、もっと身近に、あ、そんな考え方もあるねんな、って、ちょっと、感じてもらえたらいいな、というような、なんかすごく**大切に、変な誤解を生まないように、大切に伝えようと育てているような感覚で書いている**かなっていうところがあって。で、まだ2回なので、何が変わったっていうのは顕著なことはないんですけど、ただ、養育里親しています、とか言うときに、なんで？とか返ってくるので、「詳しくはWEBで」って、ネットで書いていますっていうような、感じのことが言えるので、**短い会話の中で、誤解を生むとかではなく、心を込めて書いたものを読んでもらって、その方が何を感じていただけるのか、**というような**ところの媒体**にはなっているのかなと。ただ、また、家族のこととか、すごいいっぱい出てくるので、けっこうそのへんは、すごく気を使っている。その、社会的養護とかいうところで、暮らしている子ども達の立場とか、それを支援している人のこととかも、それぞれに気持ちは込めて書いているつもりではあります。

木村) 私、創刊号からエントリーしているんですね。で、一応これ、WEBだし、お金も発生していないってことで、特に、締め切りを過ぎてとというか、載れなくても影響ありません、みたいな団編集長からのメッセージを最初の頃に見たことがあるんですね。あ、最初の頃って、一番最初の時だったか、「**締め切りに間に合わなければ、その回に載らないだけです**から」みたいな。逆に、創刊号からエントリーしている人間が、途中で抜けるっていうのが、自分の中でなんとなく、嫌で、全部自分の名前がちゃんと載っていたい、という、**継続の中の自分の位置ど**りっていうか、あるんですね。なので、あの、どんなにひどいことになっても、ひどいっていうのは、自分の文章があれでも、絶対、ここには登場しておこうっていう意識が、自分を律している、という原動力になっています。反響、影響としては、今年の、立命館の大学院の試験問題に使われたということですね。私の父と母のことを書いた内容のものが試験に使われたんですが、そのことを事の他喜んだのが母だったんですね。なんと名誉なことを、と。(笑)でも、父と母のあまりよからぬことを書いたにも関わらず、喜んでもらったのは、意外な反響だったかなと思います。

西川) たぶん、他の執筆者の方は、けっこう団先生とかから、書きなさいとか書いてみたらと言われてたりっていうことやと思うんですけど、**私は自分から無理やり、書かしてください、って言ったんです。だから、やめられないんです。**

一同) 爆笑

千葉) 自己決定！

西川) だから、その分、すごい人たちがいっぱいいる中で、私が無理やり入らしてもらったのに、やめますなんて言えないや、と思って。だからそれ、自分自身に課しているところあるんですけど、いまだに一月位から、わ、もう一月後や、とかってね、どうしようって、思って。書くのにすごく時間がかかって、何回も書き直して、泣きながら書いてい

んですけど。ほんで、書きあげたら、もう書く事ない、もうない、って14回も書いたらもうないわって、思うのに、また出てくる。

一同) 笑

西川) なんでや? って思うんですけど。あの、何かないかなと思ってみたら、あ、これもこれもこれも、って、テーマが連なったものが日常生活にすいっと出てくるんですよ。何だこれ? って思って。そして、書ける。もうそんな感じで書いているっていうのがありますね。それが、締め切っているとか、しんどいなと思いつつも、書けているというか、書かねばならぬと思っている部分。私は元々、専門学校の教員になる前に、専門学校だから、専門知識を右から左へ流すみたいなのが教育なのかなと思ったんです。小中学校でなくて、専門学校は専門職を作るための学校やから、その知識とか技術とかスキルとかマインドっていうものを、こう右から左に流すっていうだけのことやと思つたら、いやいやいや、これソーシャルワークだ、って感じのことがいっぱいあって、こんなに生々しいと言うか、躍動感のあるというか、専門職になる直前の人達に出てくる葛藤みたいなもの、学生の動きとそれに対応する教員と、このダイナミックさっていうもの、面白いのに、そんなん書いている文章ないよね、ってちょっとこれ書こうかなと思つたっていうのが、一番、書く、でおもしろいところ。あとは、さっき、牛若さんが見てくれて、ハッと思つたんですけど、顔もみたことがないとか、お話もしたことがない人が、あの、それを読んだんですけど、っていわはった時って、誰かが私の文章をどっかで見ているっていうのは、どう処理したらよいかかわからない。わっていう気持ちがある。どう考えたらいいんでしょう、これって、という気持ちがあります。はい、そんな感じです。

牛若) 僕も、実は、団先生に書きなさいっていわれたんじゃなくて、自分から書くって言って、首を突っ込んでいった方です。6回目になるんですけれども、首を突っ込んだ以上は、絶対に締め切り守らなアカン、という。その時ぼくは、修士論文を書いた、まあ、書く勢がっていうのが、あの自分史、自己物語を書いているんですけれども、自分のことでありながら、僕は作家になって書いていました。で、このマガジンを書くのにも、あの、作家が締め切りを守るっていうそういうスタイルで書いているんです。それで、だいたい、4、5ページのをペースにして書いているんですけれども、例えば小学生だったら、小学生の、なにになについて、今回は書くっていうちょっと完結したような感じで書いているんです。その方が、読み手としても読みやすいんだろうし、そこだけ読みたいって思っている人の、読みやすいんじゃないかなって言うところに気をつけて、だいたい4、5ページに収まる位で、書いていまして、そういう風に書いてみると、やはりその自然発生的に、責任というものが伴うというのが自分の中でだんだん、わかってきたような気がします。で、ま、あの、僕は割と自分を売り込みたいという性格なもんでして、だからこそ、ま、今は続いているのかなって言う感じがあって、研究発表なり、なんなりでも、とにかく自分を売るということが、まず第一として書いています。自分を売ることで、人からどう思われるか、じゃなくて、自分が何を思って、ここで発表しているかっていうことを、まず

第一に考えて、あの、マガジンの執筆をしています。で、その結果、ま、あの2週間前に、ある研究会で知り合った方から、あ、マガジン読みましたよ、っていきなりメールがきて、そんで、けっこう、深い考察されているんですね、って、言われて、いやあ、考察をしている訳ではないんやけれど、マガジンやからもうちょっと、修士論文をちょっと柔らかくしたつもりで書いているんですけど、やっぱり、ちょっとカタブツさが見えてきたんかなと。ちょっと、なんかそんなことを考えながら、また書こうと思っています。

中島) 締切のお知らせメールがくると、「うわあ、きた～」と、まるで定期試験。続けるとかやめるとか選択の余地はない(一同笑)、こういう風に、みなさんと話をしているとそういう想いで書いてらっしゃるんだ、とわかって心強い。他の方とお顔会わせできるといいなと思って今日はこのワークショップにきました。

(*一通り執筆者の回答を終えて・・・)

千葉) こんな感じでよろしいですか？

穴戸) はい

木村) だんだん、書きたくなりました？

穴戸) いやいや・・・さっきの木村さんの、団先生の言葉。「遅れたらただ載らないだけ」って、これ現実をただ言っているだけだけど、なんか、恐い。(笑)

マガジン自体が対人援助？

木村) このマガジンの仕組みとか、今日のみなさんのお話が合わさったもの自体が、対人援助だなんていう気がしていて、あの、私は高齢者の部分を支援している、ケアマネジャーとして、要介護の方の支援を、ケアマネジメントをしているんですが、何かしてあげる人、ではないんですよね。やはり、その方の、高齢者であろうが、要介護であろうが、その方が、自分で自分の問題に立ち向かっていくところを支援していくっていう、あくまでも、添え物、私が添え物にすぎなくて、そういう意味では、**ご本人が自分の問題に立ち向かうよ、とかそういうこと、自分で自分の問題を編集する、みたいなのところにいるんだな、**っていう、この**マガジンの仕組みと、対人援助の実践現場との、形がちょっと共通する**ところがあるかなっていうことを最近時々感じます。

千葉) あの、近江商人が三方良しとか言ったりしますけど、そんな感じのところがあ。書き手もいいし、読み手は勿論、知りたい事知れたりとか、今まで、触れて来られなかったところの人の話が触れられたりするし、で、結果として、その執筆者の人がいる現場を多くの人を知る、感じていることを知る、ということができるので、そのソーシャルアクションっていうか、そこに焦点があたるスポットライトが当たるきっかけになるので、あの、三方良し？(笑)現場もよし、当事者もよし、書き手も読み手もよし、みたいな、感じでは思っているの。で、また、ここでこういう風にして、知り合いができるじゃないですか。ここに、こうお名前が並んでいるから、話かけられたり、あの、こういうことについてちょっと知りたい時に、この人にちょっと聞いてみようとか、できていたりするので、

あの、だから新しい関わりなんですよね。ここに、共同執筆できるから。しかもこれ、連載やし。ただ、短編ぱつと、一回一緒のところに載るだけやったらそんなんで、わざわざ一緒にしてます、みたいな言わないし。新しい装置ですよ。プラットホームですよ。

西川) でも、そういや、他のところで、あ、連載しているんです。ああ、連載しています、っていう、そんな言いあいっこってないですね。

千葉) ない！

西川) 連載しています、って面白い自己紹介。

坂口) ね、読んでます、とかね。

西川) 読んでます～って。

千葉) ね、ここで、共有体験がね。

坂口) あの、勝手にイメージするじゃないですか。その、この方の文章とかレイアウトとか見て、こんな人かなとかね。で、イメージと全然違ったとか。(一同爆笑) なんか、そんなんも、面白いなって。

牛若) さっき木村さんが仰っていましたが、どうしても視覚障害なので、援助される方に回らされるっていうような感じがあるんですけど、ここでは、おれは援助ばかりされてないよ、みたいな、そういう色を出したいというようなことでずっと書いているんですよ、で、おれも誰かを援助しているぜ、ってそういうことが、マガジンを含めてこの学会で、どれだけ出していけるんだらうかっていう、ちょっと挑戦の意味もあって、書いていることがあります。

1 時間半のワークショップの感想！！

坂口) 私、去年横浜に行ったんです。学会で。で、団先生がやっているワークショップに、出て、もう訳がわからずに。その時は訳がわからなくて、ただ、読み手として。マガジンのわからないことを去年はぶつけてきて、去年は。で、今年はまた団先生ではない、ヴァージョンで初めてのワークショップと言う中で、これだけ、執筆者が揃う。自分でやっているから思うんですけど、その中での、それぞれの想いとか、こうしんどさとか、なんか、ね、みんながすらっと書いてはるのかなと勝手に思ってしまうところがあるじゃないですか。でも、こう、みんなそれぞれ一生けん命、同士が、この11月に入った同士がまだいるんやなと思って、

一同) 笑・・・

千葉) 締切前やね。

坂口) みんな、まだやっていない人もいるんだ、と。それだけでも心強いと。なんか、この新たな形も面白いかなと、また違うものが、なんか今日は体験できたなと思って楽しみました。ありがとうございます。

千葉) よかったら、最後、一言づつでもいただけたら、ね。

西川) いや、あの、すごく楽しかったです。このワークショップすごく楽しかったです。

今、坂口さんが仰ったみたいに、すごく、同士っていう感じがしたのと、あとは、こんなつながりってすごく、気持ちがいいのに、あんまりないなと思って。先程も申しましたけど、あの、馴れ合いじゃないけど、仲良しで。で、負担じゃないけど、つながっている感じで。変な感じ。で、嬉しいっていう感じがしました。はい、以上です。

牛若) また、これからも書き続けると思いますので、あの、特に執筆者短信はかなり硬いことを書くと思います。今日、このようなワークショップに参加できて、本当に、良かったです。また2週間、もう、あの、また締切がくるんやなど。

一同) 爆笑

牛若) そこで、憂鬱にならないというところが、またいいところだと思います。ありがとうございます。

宍戸) はい。ええ、こういうの書いてはるかたの言葉とか初めて聞いて、知っている人がいたので、身近には思ったんですけど、みなさん、こう、それぞれの想いで締切を守るっていうのも、いろいろな想いがあってやってはるって、自分だったらできるのか、とちょっとわからないんですけど、ちょっと、いい機会、いい場に出させてもらったなど、思います。ありがとうございました。

木村) 本当に楽しかったです。そしてやっぱり、まあ、編集長も書かれておられていましたけれど、本当に書かれているかたが、自分の現場を楽しかったりとか、そういう目でみて、ネタにするっていうと、ちょっと言葉が下品かもしれませんが、そういうふうにもまた見直ししながら、自分を見直ししながら、世の中にエントリーできる場があって良かったなと思っています。で、副編集長に代わって、編集長に代わって、15号の締切は、11月25日です。

一同) 笑

千葉) よろしくお願ひします。私もとても楽しかったです。今後共、よろしくお願ひいたします。新しい企画とか、なんでもご意見等いつでも受付中ですので、みなさんと一緒に活動できればと思っております。じゃ、ありがとうございました。

一同) ありがとうございました。

参加者

(書き手) 千葉晃央 木村晃子 坂口伊都 西川友理 牛若孝治 中島弘美

(読み手) 宍戸俊一



ミニ編集後記

編集作業は難しいです。でも、面白い！また、ひとつ世の中に楽しみを見つけてしまいました。また、機会があれば編集に挑戦してみたいです。もっと、おもしろおかしく編集ができるようになりたいです。日々の仕事を、人生を編集しながら楽しんでやっていきます。ワークショップの面白さ、100%は誌上再現とはなりませんでした。モヤモヤ感が残る方は、来年のワークショップでお会いしましょう！！（まとめ きむらあきこ）

マガジン

印刷版の作り方

団士郎 流

WEB版のマガジンではありますが、印刷して製本しておく、書棚にも並べられます。こうすればバラバラの↓この状態よりスマートでしょう。



私の作業手順をお知らせします。

- ① まず、両面カラー印刷で全頁をプリントします。少し気を配るなら表紙(裏は目次ページになります)だけは少し厚手の紙が準備できると良いです。専用紙ならイラストの発色もよくなります。
- ② 次にこれを一冊にまとめてしまわなければなりません。ホッチキスの針の長い厚手用が準備できると簡単です。
大型クリップで挟んでみたりもしましたが、具合よくありませんでした。事業所などで大きなホッチキス(ステープラ)を借りてください。一年に数回しか使用しないモノを購入するのも無駄な気がしますから。針の長さがぎりぎりの場合、裏からも留めて更に、針先を押さえつけておきます。



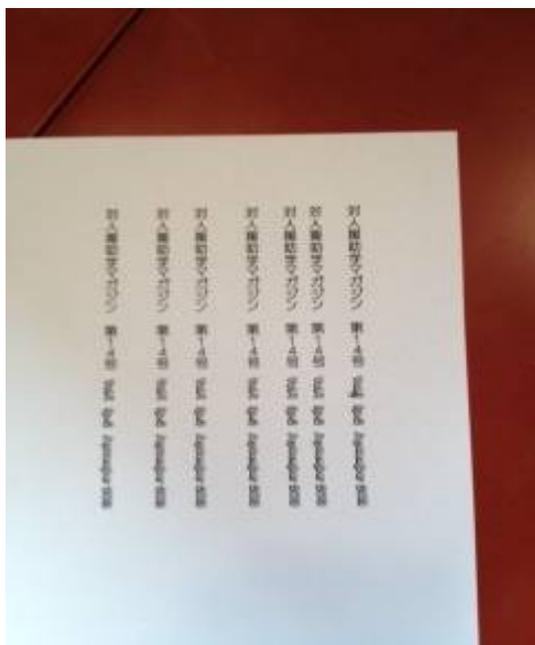
③こんな風に止められたら、次の作業に入ります。



④ 文具店で製本テープ(幅の広い方 50 mm)を買ってきます。これを貼っておくと、仕上がりが綺麗です。



⑤次に背文字用のタイトルをPCで作ってください。
縦書きで 写真のような文字ラベルを作ります。
背文字の入っていない冊子は、本棚に入れたとたん迷子になります。抜き出してみない限り、分からなくなるからです。



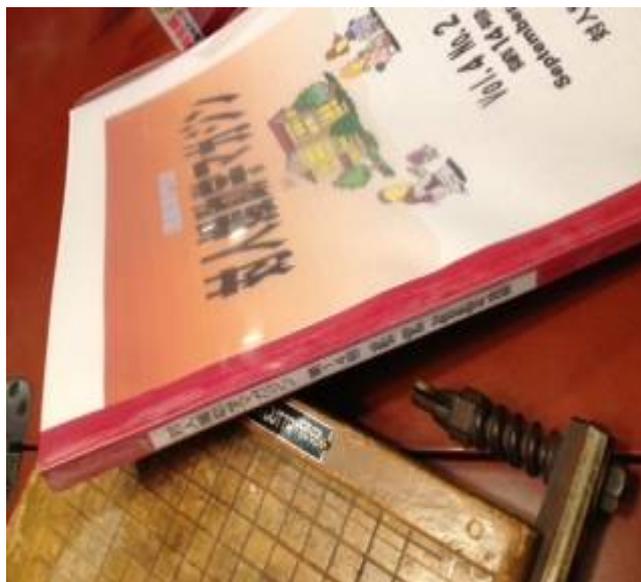
⑤ れを切り取って、背表紙の適当な位置に貼ります。基本的にはこれで完成です。



⑦マガジンを補強するために、クリアファイルを一枚準備します。それをサイズに合わせてカットし、ペラット開く一枚物にします。そこにマガジンの厚さに合わせて折り曲げ線をもう一本作ります。



⑧両面テープを用意して、マガジンの背に貼り付けます。テープは透明ですので、背文字シールは隠れません。そこにクリアファイルを貼りかぶせて完成です。





編集長(ダン シロウ)

■学会員200人ほどのちいさな組織ながら、『学会誌』、『対人援助学マガジン』、年次大会、定例研修会と、いろんな事が小さく継続実施できている。

会員のスタンスも様々だが、継続というところで連携できているからこそその事態なのだろう。会員拡大にあまり積極的ではないのも、大きくなるのが良いことだとは思っていないからかもしれない。(基本的に入会希望は大歓迎です。事務局にお知らせ下さい。)

「学会誌」もこの「マガジン」も、会員以外の人たちにも無料で読んでいただけるスタイルをとっている。

学会員であることの特権はこれらに執筆する権利と学会で発表する権利くらいである。ならば書く気や発表する気のない人は学会員にならなくてもいい。学会費を払うメリットがないじゃないかとおっしゃればそうかも知れない。

しかし、そこが対人援助学の理念、「融合と連携」を考えたときには違っている。

学会員になると、対人援助学会の維持継続や、更には対人援助学フィールドの継続発展に、ささやかながらも経済的貢献をしていることになる。

利用者や消費者ではなく、参加者、構成員になってこの世の中とコンタクトできる事になる。そのエントリー料が学会費である。

私達は今、安いほど良い、タダならもっと良いという世界ではなく、意味あることに賛同の一票としてお札を出す習慣を持たなければならない。

誰かがやってくれるだろうと思っている内に、崩れて消えてしまう世界にしないために、維持構成員として出費を引き受けなければならない。これが良きお金の使い方というものだろう。

編集員(チバ アキオ)

支援において、「プロセス」が大事なのか？「結果」が大事なのか？こんな問いが頭をよぎる。

ソーシャルワークでは、プロセスが重要と言われてきた。困っている現状から、支援の実施に至る段階で、すでに困っていたところから、次に進んでいる。それが一歩である。その上で本人が納得をして、思いを実現していくことが大切にされる。先日の対人援助学会の大会でも「プロセスが目的である」という言葉で話題になった。

支援で「結果」を出す。対人援助では結果がわかりにくい。そこへの批判も常にあった。結果を問われないこともあった。「現状維持」もあるのがよくあるとされている。「付き合うのが仕事」「いっしょに歩むのが仕事」「伴走」という言い方もよくある。

突然、組み合わせてみる。(←なんで?)

プロセスがよくて結果が悪い。これは良くあることかもしれない。しかし、結果がでないと…というのも事実である。

逆に、結果は出ているけれどもプロセスがよくない。これはパターンリズムに代表される。主体が誰か？将来に依存を引き起こすかもしれないし、自分たちのことを自分たちのこととして扱える自信を奪っているかもしれない。

(あえていう必要があるんかといわれると困るけれども、)あえていうなら、結果が出ることが重要な～と脳裏によぎる。結果が良ければプロセスは置いておくということもある。これはシステム論に近い。プロセスにこだわりすぎることの結果が伴わないこともよくある。

プロセスが目的であり、結果を出すことも目的である。場面によっては二律背反することもあるように思う。

対人援助学マガジンの「プロセス」は何だろう？書く、共著者と場と時間を共有する、社会にエントリーする、原稿が蓄積されていく。

「結果」は何だろう？たまった原稿がある。連載から広がった活動もよく聞く。

とにかく、何もしなければ始まらない。動くことがプロセスとなり、そして結果がでる。

よいプロセスには結果が伴うことも多いし、よい結果にはよいプロセスがあることも多い。このぐらいの理解がちょうどいいのではないかと考えてみた。

(結果というよりも 成果と言った方が整理できたかも…とかいううちに初冬の夜は更けていく…)

編集員(オオタニタカシ)

遅ればせながら宮崎駿監督作品の「風立ちぬ」を観ました。才能と夢を持ち、努力を惜しまず、成功を得た人であっても、必ずしもハッピーエンドという結果を得られるわけではない。結果は思うようになるものではない、できるのは自分の持ち場で力を尽くすことだけ。そんな言葉が何度も頭に浮かびました。

「老後を考えると貯蓄はこれくらいはしておかないと…」とかいう話に胡散臭さを感じてしまうのは、結果から逆算しようとしているからなのだろうなど、改めて気がつきました。しかし、たとえ逆算をしても、結果は確実に保障されるわけではなく、希望しない結末を迎えた時、人はそのプロセスをどのように振り返るのだろう、と思いました。

このマガジンは、そんな結果からの逆算とは無縁です。今、この人が書くことで意味が生まれる、そんな原稿ばかりです。これらの原稿が何年後かにどんな意味や影響力を持つかはわかりませんが、それぞれの持ち場に力を尽くしていることを形にしたものがこの「対人援助学マガジン」なのだと思えます。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

第十六号は2014年3月15日

発刊の予定です。

原稿締切2014年2月25日!

新規連載者を募っています。
編集部まで執筆企画をお知らせ下さい。

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランブラス二条御幸町402
仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻15号

第四巻 第三号

2013年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FA

対人援助学会事務担当

X:075-465-8364

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

表紙のイラストは季刊「発達」(ミネルヴァ書房)に長期間連載していた頃、その一回の挿絵として描いたものです。その後、文春新書「家族力×相談力」の扉としても使用したことがあります。

思春期の女の子の考えていることや成長が、男である私には実感的に分かりません。母娘間の葛藤などまいちピンときません。この年頃の少女の鋭い感受性は、私には謎です。